

## 第2部 各都道府県別の植物自然史研究の現状

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 植物地理・分類学会員 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/48413">http://hdl.handle.net/2297/48413</a>

## 第2部 各都道府県別の植物自然史研究の現状

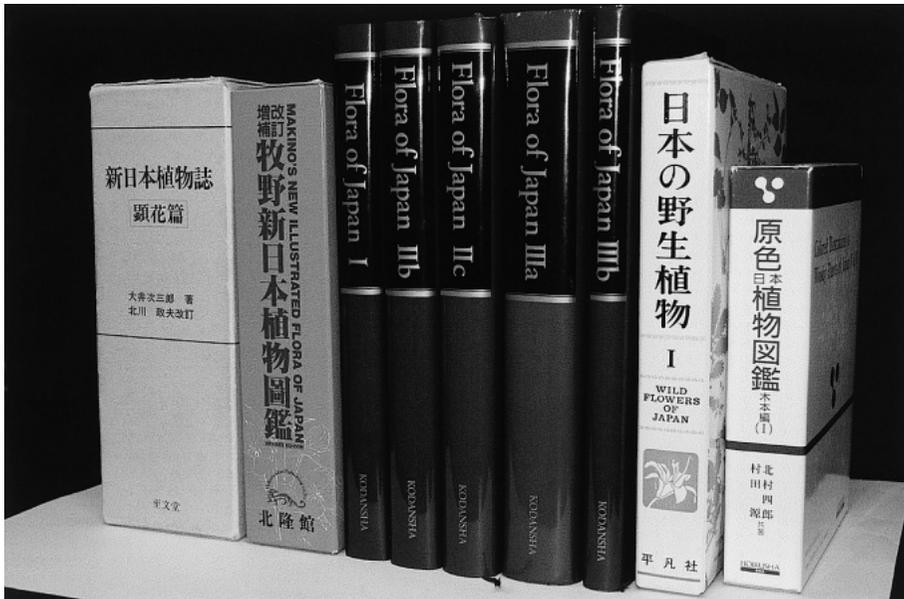


図 44. 日本の植物自然史研究によく利用される書籍

## はじめに

現在、急激に我々を取り巻く自然が変化している。フローラの仕事も 10 年経つと古くなって、新しいものに作り替えないといけないという状況である。湿地や河川など、これまで手を着けられることがなかったような場所まで、変化し、貴重な植物が激減している。

県別植物誌は、1968 年に『滋賀県植物誌』が刊行され、この種の植物誌の一つの型を作ったと言える。その後立て続けに『熊本県植物誌』、『岩手県植物誌』、『山口県植物誌』が出版された。1980 年以降は 1 年に 1 県ぐらいの割合で県別植物誌が世に送り出されてきた。なかでも 1988 年に出版された『神奈川県植物誌』は画期的なものであった。同本が 2001 年に改訂され、その内容はこの県のフローラ研究の量と質の高さを示している。

また『我が国における保護上重要な植物種の現状』が 1989 年に出版されて以降、県別のレッドデータブックが次々と出版されている。47 都道府県の内、現時点で 36 県がなんらかの形でレッドデータブックを作成し、まだ作成されていない県は 11 県であるが、それらの県でも今後数年の間に出版されることであろう。こうした状況の中で、“それぞれどの県がいかなる植物誌を出し、また、どの県がレッドデータブックを出しているのか、それらの名称や出版年はいつなのか、について一覧されたものがあれば…”という声が出てきた。「植物地理・分類学会」として、雑誌創刊の 50 周年にあたり、この企画が編集委員会で取り上げられた。

2002 年 5 月に、各県一人ずつ有志の方を選んで、原稿の依頼を行った。受理した原稿は編集部で、全体の形式を揃えるために、いくつかの形式上の点を変更させていただいた。以下は「各都道府県の植物自然史研究の現状」の執筆要項である。

県名

### (A) 植物誌

県の植物誌は一番最近の一番信頼できるものをあげる（著者、出版元、頁数を書く）。古いものがあれば、それらをできるだけあげる。市町村のものがあれば、それらもあげる（その場合は、市町村につき最近のものを 1 つだけ、多数ある場合は重要なもののみでよい）。県別植物誌の無い場合は、現在進行中か、あれば植物誌編纂の計画も書く。

植物誌に関する情報：関連する書籍、雑誌、小冊子、会報、ニュースなどをあげる。有用と思えば、アマチュアのものでもよい。

### (B) 研究機関

植物に関する研究会、調査会、同好会、趣味の会などあれば書く。

植物を研究している大学の講座、各種研究機関、私設植物研究所、博物館、ハーバリウム、植物園、樹木園、植物公園などについて書く。

### (C) 標本庫

ここで、標本庫のあるところは、それについて書く。その場合、どこの機関の管理する標本庫か、所蔵標本のおおよその点数、できれば主な採集者の氏名や標本の特徴も書く。また、閲覧の可、不可やローンの可、不可についても書く。

### (D) レッドデータブック

県別レッドデータブックはどうなっているのか、出版されたもの、計画中、未定のものなど（著者、出版元、頁数を書く）。

### (E) 植物群落

植物群落調査はどうなっているのか。県別現存植生図、環境庁の特定植物群落調査、天然物調査報告書、などをとりあげる。

（最後に、執筆者名と連絡先；自宅か勤務先、可能であればメールアドレスかファックス番号を書く）

なお、県別の原稿を 2 人で執筆された場合はご両人の御名前を、そしてそれぞれの分担がはっきりしている時は、担当された項目を明示した。また、それぞれの県で出版されている一番最近の、もしくは資料的価値が大きいと思われる植物誌の表紙や本を写真で示すように努めた。

執筆いただいた 47 都道府県の概要を通して読んでいただくと、地域植物史研究の現状とその抱える問題点がかなり明らかになってくると思える。本企画が、県別の植物誌やレッドデータブックが未だ作成されていない県に対して、それらの出版の契機やその内容のさらなる充実にいささかなりとも貢献できることを期待する。

（編集部）

## 1. 北海道

高橋英樹

### (A) 植物誌

1987年から1994年にかけて伊藤浩司・日野間 彰・中井秀樹により『北海道高等植物目録 I-IV』（たくぎん総研）が発行され、種リスト、シノニムリストと支庁単位での分布が記述されている。この一部は日野間 彰氏のホームページ上でも公開されている。最近出版された滝田謙讓『北海道植物図譜』（自費出版 2001年）には全種ではないが大多数の北海道産維管束植物の図が掲載されており、有用である。道内の地域フロラとして比較的新しいもののみ挙げると、原 松次（編）『札幌の植物』（北大図書刊行会 1992年）、中居正雄『苫小牧地方植物誌』（苫小牧郷土文化研究会 1994年）、三浦忠雄『新版えりもの植物』（出版実行委員会・えりも町教育委員会 1999年）、高橋 誼『門別町の植物』（門別町教育委員会 2001年）などがある。

一般向けに書かれた北海道の植物に関する図書としては、原 松次『北海道植物図鑑上・中・下』（噴火湾社 1981, 1983, 1985年）、鮫島淳一郎・辻井達一・梅沢 俊『新版北海道の花増補版』（北大図書刊行会 1993年）、辻井達一・梅沢 俊・佐藤孝夫『新版北海道の樹』（北大図書刊行会 1992年）、佐藤孝夫『新版北海道樹木図鑑』（亜璃西社 2002年）、梅沢 俊『北海道の高山植物』（北海道新聞社 1986年）などがある。また、梅沢 俊氏により大雪山、利尻・礼文、夕張岳、アポイ岳等の高山植物写真集が発行されている。特に原氏や梅沢氏の著書には独自の観察記録が載っており有用である。

### (B) 研究機関

北海道大学総合博物館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園にハーバリウムや分類関係の研究室がある。北大植物園では北海道産植物を紹介する雑誌『Miyabea』を不定期に発行し、既に第1号エンレイソウ属(1991年)、第2号サクラソウ属(1994年)、第3号春植物(1997年)、第4号ミズゴケ属(1999年)が出されている。今後は地域のフロラや群落調査などを中心とした雑誌として発行が続けられる予定という。

アマチュアの植物同好会としては「北海道植物友の会」があり、年数回の野外観察会や講演会のほか、会誌『菩多尼訶』が発行されている。北方山草会の会誌『北方山草』にも観察記録が出ている。道東の滝田謙讓氏が主催する植物分布調査会が最近立ち上がっている。「北海道絶滅危惧植物調査研究グループ」は、環境省による絶滅危惧調査に対応して設立したものである。

### (C) 標本庫

北海道大学総合博物館（SAPS）に20万点の標本があり、宮部金吾、館脇 操らの戦前から戦後のコレクションの中

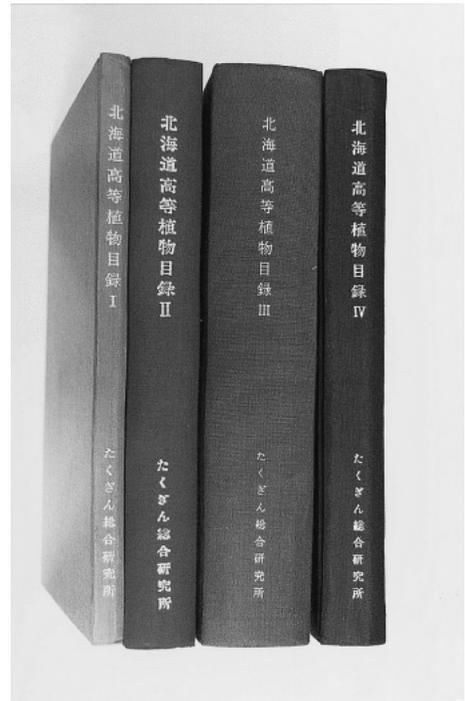


図 45. 北海道高等植物目録 I, II, III, IV

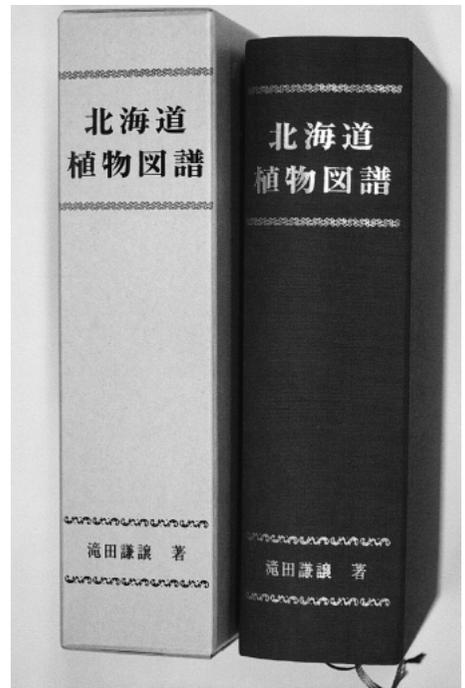


図 46. 北海道植物図譜

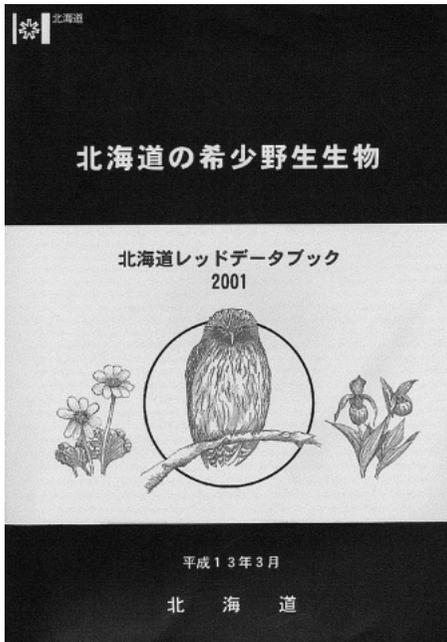


図 47. 北海道の希少野生生物

心に北海道、千島列島、サハリンの植物標本が充実している。タイプ標本がおよそ 300 点ある。北海道大学植物園には約 5 万点の標本があり、菅原繁蔵氏のコレクションと、ここ 20 年ほどに採集された比較的新しい標本や滝田謙讓氏採集のミズゴケ属標本がある。将来的には総合博物館標本と植物園標本との間で整合性をとる必要がある。以上の標本庫は研究者の閲覧が可能であり、研究機関に対しては貸し出しもおこなっている。その他、地方博物館にも植物標本庫がある。市立函館博物館には 1 万点近くの標本があり、菅原繁蔵氏の標本を含む。北網圏北見文化センターには道東植物を中心に 2 万点近くの標本があり、目録 (1994, 1995 年) が出版されている。美幌博物館からも標本目録 (2001 年) が発行されている。釧路市立博物館の標本も比較的良好に整理されている。北海学園大学には佐藤 謙氏採取の高山植物標本庫がある。以上の標本庫の閲覧については承知していない。事前に管理者と連絡をとることを勧める。菌類標本 (SAPA) は SAPS とともに北大総合博物館内に保管されており、閲覧、貸し出しともに可能である。

#### (D) レッドデータブック

2001 年に北海道環境生活部から『北海道の希少野生生物北海道レッドデータブック 2001』が発行され、北海道のホームページでも公開されている。植物の掲載種は 512 種であり、

主に既存文献の整理による。現状調査に関しては、北海道絶滅危惧植物調査研究グループが『北海道の絶滅危惧植物の現状—道東を中心として—』(1996 年)、『北海道の絶滅危惧植物の現状 2』(1997 年) を発行している。また「さっぽろ自然調査館」が種生態の研究調査の報告を含む、『調査館通信』や『ひがし大雪自然誌研究—希少植物・高山植物・帰化植物』(1999 年) を出し、活発な基礎調査をおこなっている。

#### (E) 植物群落

北海道全体の概要については、伊藤浩司・清水雅男・古賀眞綱の『北海道植生図』(60 万分の 1) が 1982 年に日本造船振興財団から、宮脇 昭 (編) の『日本植生誌 北海道』が 1988 年に発行されている。『自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告』が、1978, 1988, 1997 年に発行され、道内の重要な植物群落の記載や定期的な状況把握がおこなわれている。地域的な植物群落把握の調査としては、伊藤浩司・佐藤 謙による『大雪山系現存植生図』(5 万分の 1) が 1981 年に北海道より、鮫島淳一郎・佐藤 謙他による『日高山脈自然生態系総合調査報告書 (総説・植物篇)』(1979 年)、『知床半島自然生態系総合調査報告書 (総説・植物篇)』(1981 年) が北海道より発行された。これらには種リストも載っている。最近の地域的な植生報告としては、『「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書』が 1992, 1993, 1994, 1995, 1996 年に、北海道あるいは北海道環境科学研究センターから発行されている。湿原群落については、北海道湿原研究グループが『北海道の湿原の変遷と現状の解析—湿原の保護を進めるために』(1997 年 自然保護助成基金) をまとめている。(高橋英樹：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 北海道大学総合博物館 TEL：011-706-4508 FAX：011-706-4508)

## 2. 青森県

細井幸兵衛

### (A) 植物誌

『三陸植物誌』(柏木吾市 1935年 青森営林局 B6判 730頁 絶版)は青森・岩手・宮城三県分の植物について用途・方言を含めた解説がありこの時代の優れた植物誌である。種の同定には盛岡出身の村井三郎が専門分類学者に鑑定を依頼しており、当時としては高水準の記録である。村井三郎は昭和9年(1934年)和田千蔵らと「青森博物研究会」を創設し、会報を出し、昭和14年(1939年)と16年(1941年)に「青森県博物総目録」の中で、前者(1939年)には双子葉植物編、後者(1941年)には単子葉・毬果・羊歯植物編を纏めた。和名と簡単な生育地・方言・用途が記されて便利である。細井幸兵衛『青森県野生植物目録』(1994年 自費出版 A4判 84頁 絶版)は、それから半世紀も経たので必要に迫られて作ったもので、更なる増補改訂版を計画しているが、近いうちに完成の予定である。目下青森県では「青森県史自然編」が平成15年3月完成を目途に作業が進められている。その生物部門で植物も数人が分担して県内各地のこともおよそ分かるように構成しているが担当者の表現方法が一様でない嫌いがある。筆者はかねがね植物誌の準備をしていたので協力して書いてある。

県内の一地域を記録したものに『十和田湖・八甲田山の植物』(村井三郎 1930年 青森営林局 B5判 絶版)がある。1986年、『A list of vascular plants of Hakkoda Mountains』には791分類単位が記録され、これは東北大学八甲田植物実験所で作られた。筆者は村井三郎の生前に許可を得て『十和田湖・八甲田山の植物』の増補改訂版を作る準備をしているが、こちらは東北大学の米倉浩司が独自に調査をしているので、共同でより優れたものにするため、米倉が担当の予定である。1955年には資源科学研究所の「下北半島の開発に関する総合研究」が始まり、高等植物は水島正美が担当し、1956年に『田名部周辺泥炭地の高等植物相』を発表した。後に杉山泰一も樹木を担当し、これらを総合し Masami Mizushima and Osamu Mori『A check-list of vascular plants of Shimokita Peninsula, Aomori Prefecture』(1958年)に纏められた。地元の森 治は、案内と標本を提供して調査を助けたが、内容や解説は総て水島正美が書いたのも本来の共著ではない。これは県内で行なわれた分類学者による唯一の調査記録で、その後更に水島は、追加種を整理し完成を期していたが、果たせぬまま他界した。筆者は水島から事情を聞いているので、半世紀近くなる今でも、残された目録に追加してより完成した目録を作成する準備をしている。

根市益三『三八地方の植物』(1968年 A4判 67頁 謄写刷)は数少ない太平洋側の記録である。弘前大学教育学部に石川茂雄が教授として赴任して、津軽半島の日本海側に広がる、所謂、屏風山一帯の湿原の植生調査と植物種子の発芽生理を研究するために、学生の協力を得て、植物調査が始められた。そこで学んだ卒業生はその後も植物を趣味に続け、地域別の植物を紹介したものがある。石川茂雄『青森県の自然』(1977年 北方新社 A5判 167頁 絶版)には植物のことが多く書かれているが、個々の詳しい説明は少ない。石川茂雄『ふるさとの植物 津軽編』(1972年 津軽書房 B6判 226頁)は、あとがきによれば、昭和45年から46年の1年8ヶ月間、陸奥新報に70回連載したものをベースに纏めたものである。石川茂雄『津軽西海岸の植物』(1975年 津軽書房 A4判 103頁)には津軽半島の日本海側の砂丘と湿原及び湖沼の植生も紹介されている。西津軽の植物編集委員会(編)『西津軽の植物』(1982年 西津軽郡教職員組合)は独自の調査と文献からの引用で作られた目録があるが、記録数は計算されていない。岩崎村植物調査委員会(編)『岩崎村の植物』(1986年 岩崎村教育委員会 B5判)は植物目録が主体であるが、記録総数は計算されていない。教えると凡そ680種ある。明らかな誤りもあるが、何であるかの見当がつくものと推測できないもの(例えばチャセンシダ、ミズキンバイが本当であれば一大ニュースである)が含まれている。同じ地域で、筆者が機会ある度に調査して見つけた追加種は、120種ほどある。長尾キヨ『中里町今泉の植物』(1978年 青森県

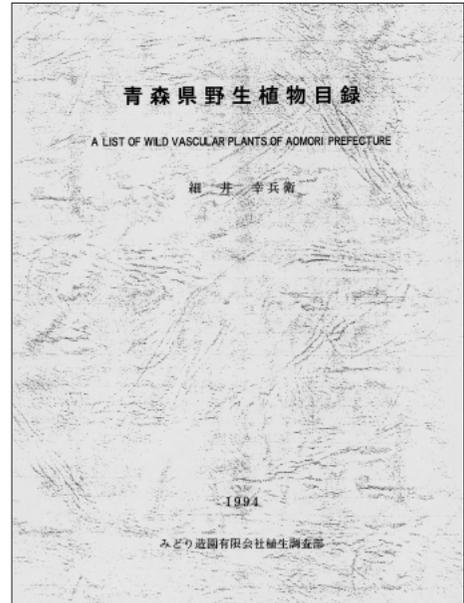


図 48. 青森県野生植物目録

植物研究振興会 代表木村 啓 62 頁), 原田敏弘『十二湖の植物』(1979 年 青森県植物研究振興会 56 頁), 井上 守『津軽半島の植物群』(1972 年 中里町理科研究部会 非売品) 等々もある。またランの写真集が 2 部でており, 沼田俊三『青森県のラン』(1989 年 A4 判 195 頁 自費出版 絶版) には八甲田山のミスズランや六ヶ所村と田子町のイシヅチラン, 岩崎村のベニシユスラン, 東通村のクシロチドリ, 平賀町のムカゴソウもあり, 県内の山のガイドもある。兼平瑞夫『野生ランに魅せられて』(1996 年 A4 判 161 頁 自費出版) には前著と同じ位の種を取り上げていて, モイワランもある。モイワランは 1981 年に撮影しており, 新種記載の 1999 年よりずっと早い。漏れているのはガッサンチドリだけである。このほか, 八甲田山や岩木山, 青森市や下北半島等の花を写材にした写真集のガイドブックが, 数冊発行されている。

### (B) 研究機関

東北大学八甲田山植物実験所は 1929 年(昭和 4 年)に創設し機関誌『生態学研究』が出され, 後に『Ecological Review』となり数は少ないが植物分類学的論文も出ている。戦前に, 「青森博物研究会」があったが戦後は, 1956 年(昭和 31 年)に弘前大学が中心となって「青森県生物学会」が発足し, 県を代表する動植物合同の『青森県生物学会誌』を発刊した。類似の内容で, 「青森県自然史研究会」が, 1996 年から『青森自然誌研究』を出しているが, 植物関係の記事は少ない。青森県立郷土館は『調査研究年報』や各地域毎の特集を出しており, 青森県では自然保護課が地域毎の環境調査報告を出した。

アマチュアの愛好会は, 代表的なものに「津軽植物の会」(五所川原市 木村 啓会長)と「青森草と木の会」(青森市 原子一男会長)がある。

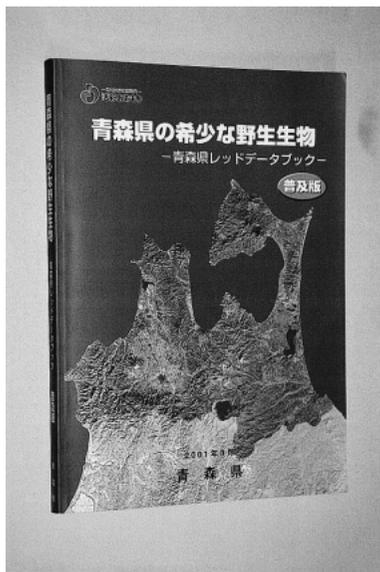


図 49. 青森県レッドデータブック普及版

### (C) 標本庫

青森県立郷土館と青森市森林博物館がある。どちらも弘前大学教育学部の学生実習で集めたものが入っているが, 普通種の重複標本も多い。郷土館の方が幾分充実しつつあり, 収蔵資料目録も出ている。同定は必ずしも適正でなく, 県内記録の貴重種はまだ整っていないが, どちらも閲覧可能である。

### (D) レッドデータブック

2000 年に青森県自然保護課の委嘱を受けた委員会が独自の基準で制定し, 2001 年には写真入りの普及版をだし市販している。県の自然保護課では CD に入れて貸し出している。

### (E) 植物群落

『むつ小川原地域現存植生図』(宮脇 昭他 1974 年 東北地方建設局)もあるが現況が変わってきている。『青森県自然環境保全基礎調査報告書』(1976 年 青森県 A4 判 192 頁 非売品)には「青森県現存植生図・すぐれた自然区域図・植生自然度図」(1:200,000)も含まれている。『特定植物群落調査報告書』(環境庁委託 1978 年 青森県 219 頁 非売品)もある。植生図は 20 余年以上経っているのでかなりの変動がある。

(細井幸兵衛: 〒038-0004 青森市富田 5 丁目 29-2)

### 3. 岩手県

大森鉄雄

#### (A) 植物誌

岩手県に自生する植物について、大きくまとめる発表を見るようになったのは、昭和5年になってからのことで、村井三郎による『岩手植物誌』が1930年（昭和5年）に盛岡高等農林学校から発刊されたのが最初である。次いで、1935年（昭和10年）には、村井三郎編集により、岩手県の全域にわたる『岩手県基準帯植物目録』が1935年（昭和10年）に、青森営林局によって刊行された。1950年（昭和25年）には、笹村祥二により、太平洋沿岸を中心とした『岩手県沿岸帯植物誌』が自費出版された。これらの植物誌や植物目録は、域内に自生する植物について、産地や分布状況などを簡単に説明するものであった。

菊地政雄（岩手大学学芸学部生物学教室）は、1953年に、「八幡平の植物」と題して、岩手生活博物館より刊行された『八幡平調査研究』第1報、115～151頁にわたり、詳しい研究成果を、証拠標本に基づいて発表している。蛇紋岩から成る早池峰山をはじめとする連峰の植物について、菊地政雄及び遠野市の小水内長太郎によってまとめられ、1961年、上西科学教育研究会によって『陸中早池峯の植物』と題して刊行された。菊地政雄は、「北上山系の植物相とその植物地理学的考察 I, II, III」と題して、1964～1967年に、『岩手大学研究年報』に発表した。長年の調査研究の成果をまとめた労作であるが、惜しいことに、全編の完成を待たずに急逝されたため、未完に終わった。しかし、これらの記述は、全て証拠標本に基づいて詳述されたもので、すでに植物誌としての意義を十分に備えるものであった。岩手県の植物研究においては、特にこの菊地政雄のこれらの記述をはじめとする多大な功績の上に成り立っているといても過言ではない。

「岩手植物の会」では、岩手国体が1970年（昭和45年）に開催されるのに際して、ご来県される植物学者でもあられた裕仁天皇陛下に献上することを期して、会長で岩手大学学芸学部生物学教授でもあった菊地政雄が中心となり、岩手県植物誌の刊行に向けての取り組みが開始された。しかし、菊地の急逝により、2代目会長となった農学博士の村井三郎が中心となってその後を引き継ぎ、岩手大学の菊地や村井等の標本を主力標本として考察が進められ、奥羽山脈に出現する日本海沿岸要素の植物や北上高地に遺存する植物等の意義や特質を捕らえた研究成果などがまとめられて、1970年（昭和45年）に、『岩手県植物誌』を刊行することができた。B5判、703頁に及ぶ植物誌である。

岩手県立博物館では、「岩手の植物展」と題して企画展の一環として、博物館内に所蔵する植物標本に基づいたB5判、87頁の『岩手県産高等植物目録』が、1984年（昭和59年）に刊行された。所蔵標本の産地、採集者等が記録された目録である。

岩手県生活環境部自然保護課では、岩手県版レッド・データ・ブック（RDB）の取りまとめに合わせて、県内に生息する全生物についてもその取りまとめに着手し、RDB検討委員会及び調査委員会の活動で、2001年にA4判、492頁の『岩手県野生生物目録』を作成、刊行した。植物編では、11～60頁にわたって、2,225種類が記載されている。

県内では、1970年以降、各地で植物誌取りまとめの機運が生まれた。1972年には、千田善喜・松岡洋一によって、『一関市植物誌』が刊行された。1977年には、小水内長太郎によってB5判、199頁の『東和町植物誌』が、東和町教育委員会により刊行された。1987年には、小水内長太郎によって、B5判、586頁に及ぶ『遠野市植物誌』が遠野市博物館により刊行された。

鈴木 實は、金ヶ崎町六原の植物相等についてまとめた。『六原の植物』は、1980年に、金ヶ崎町教育委員会より刊行された。大森鉄雄らは花巻市の植物相や植生等の考察をまとめて発表した。『花巻の植物 I, II』と題して、1983年、1986年に、花巻市教育研究所より刊行された。畠山茂雄は、『岩手県下閉伊川流域の植物』と題して、1973年に刊行した。また、畠山茂雄は『宮古市の自然』に、1980年に「宮古市の植物相」と題して刊行した。

1986年には、日本教育会の第41回全国大会が岩手県で開催され、その際、記念誌として『岩手の生物』が

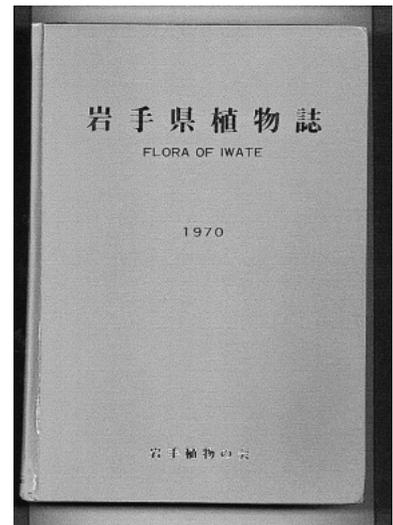


図 50. 岩手県植物誌

刊行された。植物については、15～85 頁に、岩手の植生、北上高地や奥羽山脈、海岸植物などの植物相についてまとめられている。

1993 年には、岩手植物の会創立 30 周年に当り、記念誌『なんぶそう』を刊行した。これには県内の岩手山、早池峰山、焼石岳、粟駒岳、真昼岳、和賀岳等の主な山岳や海岸をはじめとする植物相についてまとめられている。

山岳等の植物相をまとめたものでは、安家森(高橋政利 1965, 1966 年)、六角牛山(小水内長太郎 1965 年)、宮守村(大森鉄雄 1967 年)、御箱崎半島(笹村祥二 1969 年)、陸前高田市沿岸部(吉田 繁 1975 年)、釜石市三貫島(井上幸三 1991 年)、葛丸川流域(玉川七郎 1974 年)、和賀岳(須川直義・熊谷明彦 北上市立博物館 1975, 1977 年)、砥森山(小水内長太郎 1975 年)、毒ヶ森山塊(大森鉄雄 1976 年)、尻平川源流地帯(大森鉄雄 花巻市教育委員会 1980, 1982 年)、大峰山(小水内長太郎 1982 年)、真昼岳(大森鉄雄 1982 年)、滝沢村春子谷地(北上弥逸 1983 年)、湯田町湯川沼(井上幸三 1983 年)、釜石市洞泉石灰山(小水内長太郎・鈴木弘文 1985 年)、種山高原(小水内長太郎・高野祐晃 江刺市教育委員会 1986 年)、遠島山(関根清正 1985 年)、南本内岳(大森鉄雄・高橋 久 1985, 1994 年)、高下岳(大森鉄雄・高橋 久 1987 年)、ツブ沼・鞍掛沼(井上幸三・吉田 稔・千葉愛子 1988 年)、安代町(戸澤順子 1988 年)、胡四王山(大森鉄雄 1989 年)、安代町御月山の風穴(北上弥逸 1989 年)、久慈平岳(関根清正 1989, 2002 年)、自鏡山(松岡洋一 1990 年)、牛形山(大森鉄雄・高橋 久 1993 年)、鮎山・鮎ヶ崎(小水内長太郎 1994 年)、女神岳(大森鉄雄 1996 年)、種差海岸(関根清正 1998 年)、衣川村月山神社境内(大森鉄雄 1999 年)、名久井岳(関根清正 2000 年)、五葉山(吉田 繁『五葉山』五葉山刊行委員会 住田町 2002 年)などがある。これらの多くは、『岩手植物の会会報』(第 1 号～39 号)に報告されている。

## (B) 研究機関

「岩手生物教育研究会」は、会長は鳥羽 彊で、研究発表会や生物実地研究会を年に 1 回開催し、『RHACOPHORUS』を年に 1 回発行している。事務局は、盛岡市加賀野 2-6-1 岩手大学附属小学校内にある。

「東北森林科学会」は、会長は由井正敏で、講演会・研究発表会・見学視察等の実施、機関誌(年 2 号)・図書の刊行、表彰等の事業を推進している。事務局は山形大学と岩手大学が交替し合って担当している。

「(財)東北地域環境計画研究会」は、会長が村井 宏で、年 2 回の公開行事、年 4 回の研究懇話会、ニュース発行、国際交流事業、受託調査、研究費の助成等を実施している。2000 年度は、「早池峰地域自然環境調査」と「緑のランドデザイン基本構想策定」等の調査研究を行った(毎年数件)。事務局は、盛岡市大通り 3-1-6 金沢ビル 4F にある。

「いわてレッドデータブック検討委員会(植物部門)」は現在は解散したが、絶滅の危機に瀕している岩手の植物を調査して、『いわてレッドデータブック』、岩手県に自生する全植物を網羅した『岩手県自生生物目録(植物)』をまとめた。岩手県環境生活部自然保護課により、2001 年に刊行された。

「岩手植物の会」は、創立は 1963 年、初代会長は菊地政雄、現会長は猪苗代正憲で、毎月 1 回現地観察会を実施している。研究誌『岩手植物の会会報』は年 1 回発行し、第 39 号まで刊行した。『岩手県植物誌』(1970 年)、創立 30 周年記念誌『なんぶそう』(1993 年 岩手県の主な山岳等の植物を記録)を刊行した。2002 年は創立 40 周年を記念して、岩手県で絶滅が危惧される植物の写真展を開催した。会員数は 300 名。事務局は、盛岡市内丸 1 県立図書館内。

「岩手生態研究会」は、会長は菅原亀悦で、植物の生態の研究を深めるため年数回の現地研修会を開催し、毎年 1 回、研究誌『うすゆきそう』を発行している。スイスやフランス、ニュージーランド等の海外研修などにも取り組んでいる。『岩手の樹木百科』を、1993 年に刊行した。会員数 40 名。事務局は、盛岡市上厨川字幅 73-9 千葉高男宅。

「岩手県立博物館友の会」は、会長が沼宮内耕作で、自然観察会、談話会、会報発行などの事業を精力的に展開している。事務局は、盛岡市上田松屋敷 34 岩手県立博物館内に設置されている。

「岩手の植物を語る会」は、代表世話人が多田友夫で、毎月 1 回、県内各地に出かけての観察会を開いている。畠山茂雄(編)による『北東北の希産植物』を、2002 年に刊行した。事務局は、紫波郡紫波町片寄字川原 67-2 畠山茂雄宅に設置されている。

「釜石植物研究会」は、会長が鈴木弘文で、随時、釜石市を中心に観察会を開催している。事務局は、釜石市大町 1-3-17 酔月荘の鈴木弘文宅に設置されている。

昭和初期では、岩渕初郎、村井三郎らによる「岩手植物研究会」があり、『岩手植物研究』が刊行された。

また、福田 裕による「岩手郷土研究会」では、植物研究誌『こけもも』が発行された。終戦後では、岩手大学教官の菊地政雄・永井政次・坂本義彦・岡野磨嵯郎らにより「盛岡生物学会」の発会をみ、『東北植物研究』が刊行された。

### (C) 植物標本庫

岩手県では、現在のところ残念ながら本格的な自然史系の博物館や植物標本館がなく、標本記号番号の付与される固有記号の有する国際登録された博物館や標本館が一つもないことから、それらの機能を備えた本格的な標本館の設置が強く求められるところである。

岩手大学には、教育学部と農学部で腊葉標本庫が設置され、合わせて整理済み標本は 120,000 点、未整理標本は 10,000 点ある。固有記号は IUM であるが、現在は国際登録はなされていない。標本記号番号の付与は、現在は行われていない。標本の閲覧は可能であるが、事前に管理者 (TEL: 019-621-6830) への連絡が必要である。

岩手大学教育学部の標本庫には、岩手県全域にわたる標本があり、大半は菊地政雄の採集した同定標本である。この菊地の標本が中心的なよりどころとなって、1970 年に『岩手県植物誌』が刊行された。現在は、岩手大学の教育学部において、植物分類学の講座及び教官が存在しないため、同標本庫は、ほとんど機能していない。しかし、北東北の国立大学の再編がらみで、教育学部の標本庫の標本は、農学部の標本庫の標本とともに一体的にまとめられて、岩手大学ミュージアムの一環として保管管理されることになった。農学部標本庫の所在地は、盛岡市上田 3-18-33 である。

岩手県立博物館植物標本庫には、整理済標本は 20,000 点、未整理標本は 7,000 点あり、村井三郎、笹村祥二、井上幸三、大森鉄雄、須川直義、玉川七郎の標本が主力である。岩手県内の標本が主体で、村井と笹村の植物標本目録が出版されている。標本の閲覧は、可能である。所在地は、盛岡市上田字松屋敷 34 である。

遠野市ふるさと村自然資料館には、整理済標本 60,000 点、未整理標本 10,000 点あり、閲覧は可能である。しかし、遠野市立図書館博物館 (TEL: 0198-64-2300) に予約が必要。小水内長太郎の早池峰山、遠野地方等の北上高地を中心とした標本が収められている。所在地は、遠野市附馬牛 4-34-2 である。

大船渡市立博物館には、整理済標本は 10,000 点あり、岩手県県南、太平洋沿岸の標本。千葉金作、吉田繁の標本が収められている。所在地は、大船渡市末崎町字大浜 221-86 である。

陸前高田市立博物館には、整理済標本は 30,000 点あり、岩手県全県にわたる標本が中心で、鳥羽源蔵の標本が収められている。所在地は、陸前高田市高田字砂畑 61-1 である。

北上市立総合博物館には、整理済標本は 10,000 点あり、岩手県全県の標本で、須川直義の標本が収められている。所在地は、北上市立花 14-59 である。

### (D) レッドデータブック

1998 年に岩手県自然保護課が、いわてレッドデータブック検討委員会及び調査委員会を設置し、3 年がかりで『いわてレッドデータブック 岩手県の希少な野生生物』がまとめられた。基準は、レッドデータブックの全国版を参考にして岩手県独自に定め、植物については、554 種類が絶滅が危惧される植物として選定され、2001 年に印刷物として刊行された。インターネット上でも、公開されている。ホームページアドレスは、<http://www.pref.iwate.jp/~hp0316/>で、「県版 RDB の完成・配布について」をクリックすること。また、『岩手県野生生物目録』についても合わせてまとめられ、自然保護課によって同時に刊行された。

### (E) 植物群落

植物群落については、文化庁や環境庁よりの指導で、岩手県では、自然保護課が中心となって現地調査が進められて現在に至っている。1970 年には天然記念物緊急調査、植生図・主要動植物地図の作成、1973 年には自然環境保全調査 (基礎調査)、1979、1987 年には自然環境保全調査として植生調査、1997~1998 年には特定群落調査が実施され、それぞれ報告書が作成された。

また、岩手大学人文科学部環境科学課程 (環境科学環境生物学) や岩手生態研究会、東北地域環境計画研究会などによる植生調査・研究なども盛んに行われており、岩手県内の全容も次第に明らかになってきている。(大森鉄雄: 〒025-0097 岩手県花巻市若葉町 1-5-6 TEL: 0198-22-2558)

## 4. 宮城県

上野雄規

### (A) 植物誌

2001年に宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会(代表:木村中外)の共編で『宮城県植物目録2000』が発行された。A4判,378頁で,コケ植物631種,シダ植物以上2,401種が収録されている。宮城県を奥羽山脈区,仙台平野区,北上区,阿武隈区そして島嶼区の五つに地域区分をし,各種について各区からの標本産地

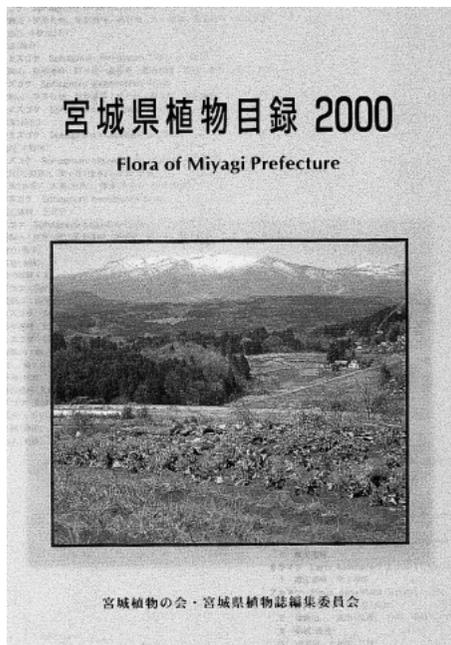


図 51. 宮城県植物目録 2000

を挙げたことが特徴で,村井三郎(編)『宮城県植物目録』(1935年 青森営林局)以来の全県的な植物誌となる。産地は東北大学の後述する二標本室所蔵標本と編集委員の個人所蔵標本より引用された。県内の地域フローラとしては白石市植物誌編集委員会(編)『白石市植物誌』(1983年 B5判 256頁 白石市植物誌刊行会),大橋広好(編)『仙台城址の自然—仙台城址およびその周辺地域の植物—』(1990年 仙台市教育委員会),立石庸一・黒沢高秀・梶田 忠『東北大学理学部附属植物園自生植物目録 第4版』(1993年 A6判 57頁),内藤俊彦(編)『仙台市史—特別編1 自然資料1 高等植物目録—』(1996年 仙台市)がある。このうち,『東北大学理学部附属植物園自生植物目録』は一種一種が標本に基づいて収録されると共に,各種について園内における分布や生育の状況,標本採集年などが記録されたもので,地方植物誌の望ましい内容となっている。高橋和吉・斎藤宗夫・森 俊『斗蔵山周辺自然環境調査報告書斗蔵山と周辺地域の植物』(1999年 角田市教育委員会)も標本に基づいた目録である。

普及書では,宮城植物の会(編)『宮城の自然をたずねて—野山の植物—』(1980年 第一法規),宮城植物の会(編)『続宮城の自然をたずねて—海浜・湖沼の植物—』(1981年 第一法規)がある。市町村発行のものには『やまとの植物』(1995年)と『角田市の自然—植物編—』(2002年)がある。また,村上孝夫『蔵王の花』(1993年 金港堂)はじめ樹木,草本,高山植物や蔵王山,栗駒山の植物に関する写真集も河北新報社などから発行されている。

### (B) 研究機関

東北大学理学部生物学科(1923年植物分類学講座設置,1925年植物生態学講座設置)および理学部附属植物園(1958年開園)で分類・形態・生態学の研究がなされてきた。近年の組織の改編に伴い,それぞれは大学院生命科学研究科,大学院理学研究科附属植物園となっている。

アマチュアの植物同好会としては「宮城植物の会」,「東北植物研究会」などがある。宮城植物の会は観察会,講演会・発表会および会誌発行(年1回)などを行っている。会誌『宮城の植物』には県内の植物を対象とした会員の研究・観察記録や活動内容が掲載され,2002年には第27号が発行された。東北植物研究会は東北の植物に関する情報の発信・受信と講演会・発表会などを行い,会誌『東北植物研究』を第10号まで発行している。また,会員の調査活動のまとめとして1991年に上野雄規(編)『本州産高等植物チェックリスト』(B5判 365頁)を発行し,現在,その最新版が編集されている。

宮城県環境生活部は,県の自然環境保全地域や緑地環境保全地域,県立自然公園などの学術調査を長年に渡って行い,1972年以降,30数冊の報告書を発行してきた。近年は市町村でも調査を行うようになり,材木岩・虎岩(白石市 1979年),薬菜山・田谷地湖沼群(小野田町 1989年),仙台城址(仙台市 前出),斗蔵山(角田市 前出)などの報告書が発行されている。

### (C) 標本庫

東北大学には理学部生物学科(TUS)と理学部附属植物園(TUSG)に標本室があり,それぞれで管理・運営されてきた。現在では組織の改編に伴い,大学院理学研究科附属植物園が管理・運営している。TUSは植

物園記念館（津田記念館）に置かれており、世界のマメ科、ヤナギ科標本並びに台湾、中国、ヒマラヤ、チベットそして本州（特に東北地方）の標本を多数所蔵していることが特徴である。木村有香、菅谷貞男、大橋広好ら歴代の教授と学生・大学院生のコレクションを土台として工藤祐舜、遠藤隆次、鈴木貞次郎、鈴木長治、岩淵初郎、吉川純幹、鈴木貞雄、岡 国夫、御江久夫、池田登志男、里見信生、岩野俊逸、山中二男、樋口利雄らのコレクションも含めて約 50 万点の標本が研究に活用されている。このうち、木村有香のヤナギ科標本は 1997 年から TUS-K として独立に保存されている。TUSw として所蔵されている現生材や材化石等の標本は教授の鈴木三男と学生・大学院生のコレクションで、約 15 万点ある。一方、TUSG には約 20 万点の標本が所蔵され、東北地方、特に宮城県と仙台市青葉山の標本が充実している。これらの標本は閲覧が可能である。

#### (D) レッドデータブック

宮城県環境生活部自然保護課は、環境省のカテゴリーに準じたカテゴリーへ要注目種（隔離分布種、分布北限・南限種、基準産地種、その他）を加え、1996 年より希少野生動植物の調査を行った。その結果は 2001 年に『宮城県の希少な野生動植物—宮城県レッドデータブック—』（A4判 442頁）として、また 2002 年にはその普及版が発行された。植物（コケ植物以上）は 547 種が収録され、その内訳は絶滅 20 種、野生絶滅 0 種、絶滅危惧Ⅰ類 188 種、絶滅危惧Ⅱ類 135 種、準絶滅危惧 67 種、情報不足 32 種、要注目種 112 種となっている。市町村段階での絶滅危惧植物の調査はまだ着手されていない。

#### (E) 植物群落

1973 年、吉岡邦二（代表者）らの調査による『宮城県現存植生図』が宮城県から発行されている。1979、1988、1998 年に環境省が行った自然環境保全基礎調査の結果が『特定植物群落調査報告書』として発行され、県内の重要な植物群落とその経年変化が記録されている。また、1979 年の自然環境保全基礎調査の植生調査（宮城県調査者代表：飯泉 茂）の結果は、5 万分の一地形図の『現存植生図』（1981 年）として発行された。

植生は、菅原亀悦・飯泉 茂「V 地域植生誌 3 宮城県の植生」（宮脇 昭（編）『日本植生誌 東北』1987 年 至文堂）および菅原亀悦「宮城県の植生の概観」（日本生物教育会宮城大会実行委員会記念誌編集部会（編）『みやぎの自然』1997 年 日本生物教育会宮城大会実行委員会）にまとめられている。1990 年以降、地域の植生については、宮城県の学術調査報告書シリーズで御獄山（1990 年）、魚取沼（1991 年）、南三陸金華山（1992 年）、伊豆沼・内沼（1992 年）、県民の森（1993 年）、加護坊・箕岳山（1994 年）、荒沢（1995 年）、斗蔵山（1998 年）などが取り上げられている。この調査シリーズは現在も継続されている。

（上野雄規：〒982-0843 宮城県仙台市太白区茂ヶ崎 2-1-1 仙台市野草園 TEL：022-222-2324 FAX：022-222-9155）

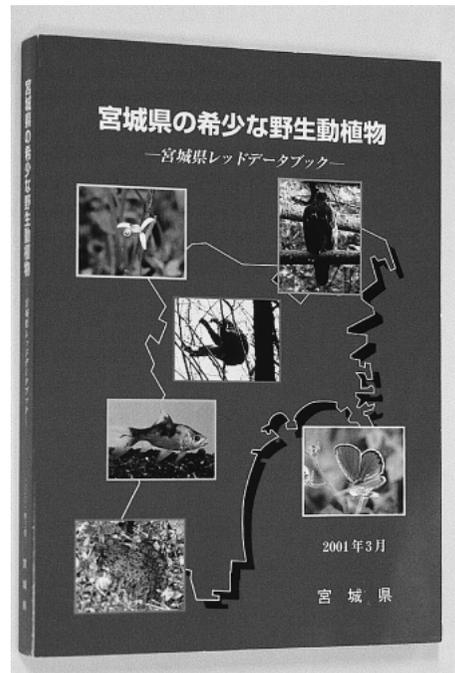


図 52. 宮城県の希少な野生動植物

## 5. 秋田県

松田義徳

## (A) 植物誌

秋田県全域にわたる著書には、1932年に刊行された村松七郎『秋田縣植物誌』（秋田縣師範學校郷土室）があり、本県のフロラ研究の先覚となった。1934年には秋田營林局から、牧野富太郎が植物の調査と指導に当たった『管内國有林植物目録』が出版された。

1972年に望月陸夫『秋田県植物目録』（北陸の植物の会）が刊行され、県内に所産する維管束植物 1,783 種、ミズゴケ属 16 種を掲載している（B5判 64頁）。本書は版を重ね、2000年発行の『第9版』（秋田植生研究会）からは藤原陸夫のほか松田義徳、阿部裕紀子が著者として参画している。A4判、143頁（分類系順、学名ABC順、和名五十音順の3部構成）で、維管束植物の種以下 2,610 分類群が掲載されている。標本、野帳記録、植生調査票の記録、文献等を利用した約 34 万件のデータをもとに、自生する植物について県内の分布密度を 10 段階で評価し、自生植物以外の生育起源、秋田県版レッドリストカテゴリーを付記している。

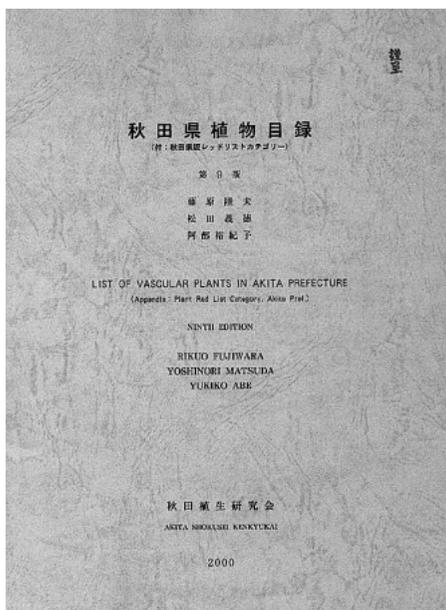


図 53. 秋田県植物目録 第 9 版

植物誌に準ずるものとして、高田 順『秋田県植物分布図集 I シダ植物・裸子植物 秋田県植物文献目録』（1980年 秋田自然史研究会）がある。県内を 2 万 5 千分の 1 地形図に区切り、著者と秋田県立博物館の収蔵標本をもとに、県内に所産するシダ植物と裸子植物 166 種の分布図を掲載している（B5判 69頁）。

1997年に藤原陸夫『秋田県植物分布図』（秋田県）が刊行された。著者がそれまで集積した 32 万件のデータをもとに、県内に野生状態で生育する維管束植物全種について、水平および垂直分布を金井のメッシュ法により示したものである。帰化植物を含めた全種の分布を詳細に記録した全国的にも他に例を見ない労著であり、地方誌として高く評価されている。『第2版』（2000年 秋田県環境と文化のむら協会）は、データ数と登載種を追加し、種以下 2,346 分類群の分布図を掲載している（A4判 1,196頁）。

郡市単位では、雄勝野草の会（編）『秋田県雄勝地方植物誌』（1982年 雄勝野草の会）が、ユキグニミツバツツジ、オゼコウホネを含む 1,223 種を記録している。米田 博『秋田県鹿角地方植物誌』（1986年 鹿角植物の会）が、本県では近年生育が確認されていないフシグロセンノウ、ソクシンランを含む

1,275 種を記録している。松田義徳『秋田県平鹿地方植物誌』（1988年 秋田植生研究会）が、ユキツバキを含む 933 種を記録している。工藤茂美『秋田県山本地方植物誌』（1989年 秋田植生研究会）が、カラスザンショウ、イワヤシダを含む 1,365 種を記録している。また市町村史において、地域の植物相をまとめているものもある。

特徴のある地域として、望月陸夫『秋田県男鹿半島の植物』（1966年 北陸の植物の会）は、新種オガタチイチゴツナギを記載し、953 種を記録している。大曲山彦会植物誌編集委員会（編）『秋田県大曲市姫神山・松山の植物』（1979年 大曲山彦会）は、アズマレイジンソウ、アサザを含む種以下 584 分類群を記録している。畠山益穂『鷹巣地方植物誌』（1988年 無明舎出版）は、サンインヒキオコシ、オオシラヒゲソウを含む 1,258 種を記録している。藤原陸夫『白神山地（秋田県側）の高等植物相』（1995年 国立公園協会）は、白神山地世界遺産地域（秋田県側）及びその周辺地域の植物について種以下 870 分類群を記録している。和賀山塊自然学術調査会（編）『和賀山塊の自然—和賀山塊学術調査報告書—』（1999年 和賀山塊学術調査会）は、和賀山塊およびその周辺域について 9 年間にわたる実地調査をもとに、植生（50 群集・群落）、植物相（種以下 900 分類群）、特徴ある種の種生態についてまとめたものである。藤原陸夫『和賀山塊自然環境調査報告書（植物調査）』（2001年 秋田県自然保護課）は、和賀岳と朝日岳の山頂域を主体に、植生（36 群落）、植物相（種以下 618 分類群）を記録している。

## (B) 研究機関

秋田大学教育文化学部自然環境講座生物学研究室は、地衣類の分類と極限環境下の生態、草本の繁殖生態、乾燥地植物の生態を研究している。「秋田生物学会」の事務局があり会誌『生物秋田』の発行が行われ、これまでに 39 号を数える。

秋田県立大学生物資源学部は、森林動態、ササ類やラン科植物などの種生態、地衣類の生理学的・生化学的な性質を研究している。

アマチュアの同好会としては「秋田自然史研究会」があり、会誌『秋田自然史研究』は 2002 年までに 44 号になり、県内の植物に関する研究報告や新知見が掲載されている。

ほかに地域レベルでのサークルもあり、観察会や調査を実施し会報や報告書を発行している。

## (C) 標本庫

秋田県立博物館に約 9 万点（内整理済み約 4 万点）のさく葉標本がある。主に県内の研究者によって採集された、県内所産の植物を中心にした標本が納められている。本県が基準産地となっているデワノタツナミソウ、トガヒゴタイ、ツルワサビ等のアイソタイプ標本を含む。整理済みの標本は、閲覧、貸し出しが可能であり、『収蔵資料目録 自然 II』（1987 年）、『自然 III』（1989 年）、『自然 IV』（1992 年）にまとめられている。

秋田県立大学生物資源学部にはササ類のさく葉標本、ラン科植物の種子、冷凍地衣標本があり、閲覧可能である。

## (D) レッドデータブック

1999 年に秋田県は県版レッドリスト（環境庁（1997 年）のカテゴリーを準用、一部変更）を作成し、これを受けて、県版レッドデータブックは、2002 年『秋田県の絶滅のおそれのある野生生物 2002 秋田県版レッドデータブック 植物編』（<http://www.pref.akita.jp/sizenhog/RDBHP.html>）として出版され、維管束植物の種以下 1,235 分類群が掲載されている。

## (E) 植物群落

特徴ある地域における植物群落は、次の著書にまとめられている。宮脇 昭他『男鹿半島自然公園学術調査報告』（1973 年 日本自然保護協会）：39 群集・群落。高田 順他『秋田市金足女潟の植生』（1974 年 秋田自然史研究会）：8 群集・群落。望月陸夫『秋田県羽後町五輪坂周辺の植生と植物相』（1979 年 秋田植生研究会）：54 群集・群落。望月陸夫他『秋田県真木溪谷の植生と植物相』（1982 年 秋田県自然保護協会・秋田県自然保護課）：24 群落。芝谷地湿原植物群落保存調査会（編）『国指定天然記念物芝谷地湿原植物群落調査報告書』（1991 年 大館市教育委員会）：16 群落。長走風穴高山植物群落調査会（編）『国指定天然記念物長走風穴高山植物群落調査報告書』（1993 年 大館市教育委員会）：13 群落。横手市生物分布調査会（編）『横手市生物分布調査報告書』（2000 年 横手自然研究会）：48 群集・群落。

環境庁が 1978、1988、1997 年に実施した自然環境保全基礎調査・特定植物群落調査の結果、県内の自然性の高い重要な植物群落 223 を選定した。秋田県自然保護課では、1971 年から県内の自然公園で、1975 年から自然環境保全地域等で植生調査を実施し報告書を作成している。

1979、1983、1984 年に環境庁が実施した自然環境保全基礎調査・植生調査によって、県全域の植生図（5 万分の 1 地形図 45 枚分）が作成された（植生凡例数 78）。総括的にみて正確さと詳細さにおいて他の追随を許さないと評価され、全国的にも信頼されている植生図の一つである。1995 年には植生改変による修正が加えられた。

我が国における保護上重要な植物種および植物群落研究委員会植物群落分科会（編）『植物群落レッドデー



図 54. 秋田県版レッドデータブック 植物編

タ・ブック』(1996 年 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会)には、秋田県関係分として単一群落のデータベースに 289 件をリストアップし、都道府県別の件数で最多となっている。これはおもに越前谷康、藤原陸夫による調査の成果である。

秋田県の植生誌はまだ作成されていないが、宮脇 昭(編)『日本植生誌 東北』(1987 年 至文堂)では、東北地方の特色のある地域の植生として白神山地、男鹿半島、鳥海山をとりあげ、県内の 13 地域とあわせて詳細な群落記載をしている。

(松田義徳：〒012-0804 秋田県湯沢市杉沢字森道上 239 FAX：0183-72-3468)

## 6. 山形県

土門尚三

### (A) 植物誌

本県の植物研究に先駆的役割を果たされた故結城嘉美は『山形県植物誌』（1934年）、『山形県の植物誌』（1972年）、『新版山形県の植物誌』（1992年）と3回にもわたってまとめられた。新版は487頁で、山形県の地形、気候、植物区系、森林植生、高山帯の植物分布、天然記念物、自生植物目録、植物方言、植物研究先覚者列伝からなっており、目録ではシダ植物以上2,302種類がリストアップされているが、もうすでに絶版になっている。県内の地域フローラとしては、県内の諸高山を中心に調査研究された、山形県総合学術調査会の『朝日連峰』（1964年）、『吾妻連峰』（1966年）、『飯豊連峰』（1970年）、『鳥海山・飛鳥』（1972年）、『出羽三山（月山・羽黒山・湯殿山）・葉山』（1975年）、『神室山・加無山』（1978年）、『最上川』（1982年）、『蔵王連峰』（1985年）、『御所山』（1989年）、『摩耶山』（1992年）があり、いずれも絶版になっている。その他、『月山朝日山系総合調査報告書』（1956年 山形県）、加藤信英『山形県産シダ植物目録』（1960年）、吉野智雄『小国の植物』（1962年）、『山形市の生物的自然』（1976年 山形市）、若松多八郎『鶴岡の植物』（1984年）、佐川 昇『山形県内陸地方産シダ図集』（1986年）、土門尚三『山形県北庄内の植物誌』（1999年）などがある。写真を主体としたものでは、布施 隆『原色月山の植物』（1976年）、加藤久一『蔵王の自然と植物』（1975年）などがある。ほとんどが自費出版で、残念ながら絶版になっている。

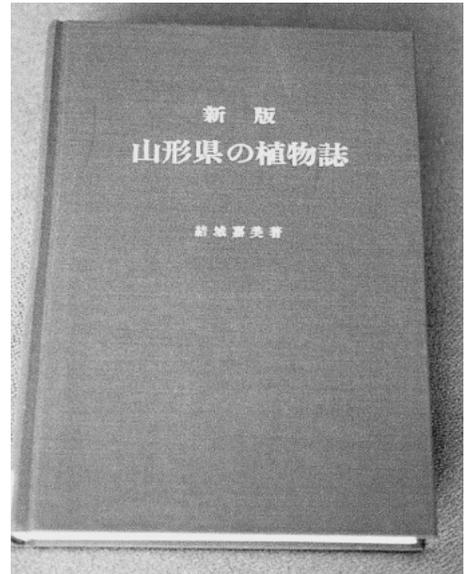


図 55. 新版 山形県の植物誌

### (B) 研究機関

山形大学理学部生物学科と山形大学農学部では、それぞれ昭和25年より大学紀要に年1回「自然科学編」「農学編」に研究成果を発表している。山形県立博物館では各種講座や調査研究を進め、その成果を紀要に発表している。また、故結城嘉美を中心に設立された、アマチュアの「フロラ山形」があり、全県のフローラを主とした調査研究がなされている。また、会誌『フロラ山形』は57号を数え、事務局は県立博物館にある。さらに、山形県レッドデータブックを編纂するために22名で編成された、「山形県稀少野生植物調査研究会」があり、事務局は山形県環境保護課内にある。

その他アマチュアの植物同好会は、「鶴岡自然調査会」や「長井植物愛好会」などがあり、野外観察会や展示会、講演会などを行い、それらをまとめた会誌を発行している。

主な植物園として、西川町の月山中腹にブナの森を中心とした「山形県立自然博物館」、蔵王の山麓に「山形市野草園」、寒河江市の山形県林業試験場に「薬草園」がある。いずれも冬季閉鎖される。

### (C) 標本庫

山形県内の標本は主に山形県立博物館に集結されており、その数約13万点。内訳は結城嘉美コレクション約3万8千点、山下一夫コレクション、一般コレクション5万2千点その他4万点となっている。

### (D) レッドデータブック

平成14年度内に出版される予定で、植物編は目下491種類が選定されている。

### (E) 植物群落

『山形県現存植生図』が1975年に、山形県から発行され、当時山形大学の故石塚和雄、斉藤員郎他が担当している。また、『山形県植生調査報告書』（1979年 山形県）がある。一方、地域の調査としては、『山形市の生物的自然』（1976年 山形市）があり、植物としては、本文に目録があり、その他に植生自然度図、現存

植生図 2 枚, 主要植物地図が添付されている。『酒田市の植生と植物相』(1981 年 酒田市) は故石塚和雄, 故結城嘉美などが担当し, 植生・植物相などの分布の概要を示すとともに, 自然環境保全上の問題点についてもふれ, また, 現存植生図, 植生自然度図, 貴重植物分布図 5 枚が添付されている。その後, 宮脇 昭他による『酒田市の潜在自然植生』(1983 年 酒田市) が発刊され, 本文のほかに潜在自然植生図が 1 枚添付されている。『庄内川の植生』(1975 年 建設省), 齊藤昌宏『梅花皮沢植生調査報告書(飯豊山系)』(1980 年), 『特定植物群落調査報告書(山形県)追加・追跡調査』(1988 年 山形県) があり, いずれも絶版になっている。

(土門尚三: 〒999-8317 山形県飽海郡遊佐町大字小松字長田 29)

## 7. 福島県

黒沢高秀

### (A) 植物誌

1952年に小林 勝が『福島大学学芸学部理科報告』に「福島県植物誌 其一」としてシダ植物のリストをまとめた。その後1953～1956年に鈴木貞次郎とともに「福島県植物誌 其二～其五」（裸子植物、双子葉植物）がまとめられたが、残念ながら植物誌全体としては完結にいたらず、活字印刷されて出版されることもなかった。1980年に福島県の植物誌作成に向けて準備・調査が始まり、翌年には斎藤 慧、湯沢陽一らを中心に福島県植物誌編纂委員会が発足した。1982年には福島県植物誌編纂委員会により『フロラ福島』が創刊され、県内の植物の知見の集積のための努力がなされ、1987年に福島県植物誌編纂委員会の編集による『福島県植物誌』（福島県植物誌編さん委員会 現在は絶版）が刊行され、ここで初めて県内の植物の全容が掴めるに至った。この植物誌はB5判、481頁で、20人が分担して執筆し、植物目録としては、コケ類746種類、シダ類205種類、裸子植物32種類、単子葉植物774種類、双子葉植物1,651種類が、会津・中通り・浜通りの地域ごとの産地、県内の主観的頻度（ごく普、普、やや普、ややまれ、まれ、ごくまれ）とともに一覧されている。植物研究史、植物区系（北限、南限植物一覧を含む）および植生の総説、さらに地名、市町村の花と木、天然記念物、植物名方言、文献の目録や一覧のほか、専門家が寄稿した気候、地形と地質に関する総説も含み、当時の都道府県の植物誌の一つの到達点ともいえる出来となっている。2000年に新たに組織された福島県植物誌編さん委員会（湯沢陽一事務局長）が、標本の引用や分布図も含めた新版の植物誌の作成を現在進めている。

県内の地域フローラとしては30カ所余りで植物相調査が行われ、リストが発表されている。しかし、地域としては会津地方が多く、立地として高山、湿原、風穴がよく調べられているものの、浜通り地方中北部、中通り地方南部や、低地や中標高地の森林、原野、海岸でほとんど調べられていない等、偏りが著しい。また、市町村レベルのような広い範囲のフローラはほとんど見られない。例外として歌川義男『私の南会津植物誌』（1998年 朝日新聞出版サービス＝自費出版）がある。分類群では、活発に活動している専門家のいる蘚類、苔類、水生植物が他都道府県と較べて比較的研究が進んでいると思われる。残念ながら、これまでに行われた地域フローラ研究の多くは標本の引用がなく、後に疑問ができて再検討ができない。標本引用をともなった研究の蓄積と、引用した標本をおさめる標本庫の整備が今後の課題である。

一般向けに書かれた福島県の植物に関する最近の書籍としては、歴史春秋社の「歴春ふくしま文庫シリーズ」の『魅力あるコケの世界』（樋口利雄・湯沢陽一 2002年）、『シダ植物の世界』（山田恒人 2002年）、『スゲ類の世界』（斎藤 慧 2001年）、『ふくしまの水生植物』（薄葉 満 2002年）がある。古いものとしては小林 勝・蜂谷 剛（監修）『ふくしま動物・植物誌』（1974年 福島民報社 絶版）、斎藤 慧『ふくしまの高山植物』（1979年 福島民報社 絶版）がある。

### (B) 研究機関

豊かな自然を持ち、「うつくしまふくしま」のキャッチフレーズを掲げ、県をあげてこれを売りにしながら、自然史系の博物館、大学学部、研究所が県内に全くないことが、福島県の一つの残念な特徴である。公的研究機関で少しでも野生植物に関係のある部署は福島大学教育学部の生物学教室と理科教育教室にある2研究室（教官2名）のみである。県内の博物館に野生植物の専門家は1人もいない。雑誌、図書、マイクロフィルム等の文献も個人蔵が中心で、公的研究機関の所蔵は極めて貧弱である。

都道府県で最低レベルの貧弱な公的研究機関を補っているのが、活発な同好会活動である。上述の旧「福島

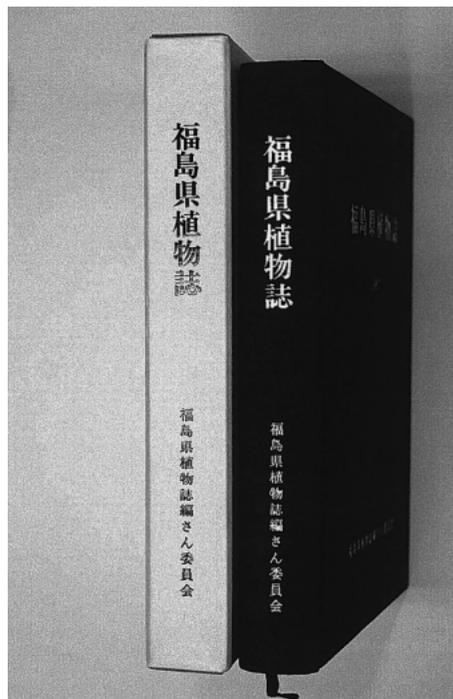


図 56. 福島県植物誌

県植物誌編さん委員会」が母体となって 1988 年に発足した「福島県植物研究会」(樋口利雄会長)は、『フロラ福島』(年 1 回発行 現在第 19 号)の発行の他、年 2 回の観察会・研究発表会を行っている。1957 年に吉岡邦二、小林 勝らを中心に発足した「福島生物同好会」(五十嵐彰会長)は、福島大学学芸学部(現教育学部)の生物学教室の卒業生を中心とする同好会で、『福島生物』(年 1 回発行 現在第 44 号)を発行している。折笠常弘、馬場 篤、斎藤 慧らによって 1959 年に発足した「会津生物同好会」(折笠常弘会長)は会津地方を拠点とする同好会で、『会津生物同好会誌』(年 1 回発行 現在第 40 号)を発行するほか、年 1, 2 回の研究発表、採集会、写真展を開催している。

### (C) 標本庫

公的な研究機関の貧弱さを反映して、県内の公的な標本室の状況も芳しくない。現在県内に“Index Herbariorum”に登録されている標本室はない。福島県立博物館に根本莞爾、小林 勝らによるとと思われる 1900~1960 年頃の福島師範学校・福島大学学芸学部標本が数千点保管されているが、一般には公開されていない。唯一一般の閲覧が可能な公的な標本庫は福島大学教育学部理科教育教室のもので、1970 年代以降に採集された猪苗代湖、中通り地方北部産植物など県内産 2,000 点ほど、県外産 2,000 点ほどの整理済標本と、4,000 点ほどの未整理標本がある。しかし、昨年度まで使用していた部屋の立ち退きを余儀なくされ、現在使用している部屋も間借りで、年度ごとに学部で使用許可申請を出さなければならない状態で、先行きが不安定である。他に、恐らく数十万点にのぼる貴重な標本が上記の同好会メンバーらによって個人所蔵されている。県内の公的標本室が整備されなければ、これらはいずれ散逸、他県へ流失、あるいは消失というおそれもある。現有標本の量や保管状態の調査、そしてゆくゆくは公的標本室の整備が課題である。

県外で現在公開されている福島県産維管束植物の最大のコレクションは、中通り南部の白河市近郊を中心とした 1920 年代~1950 年代にかけての数万点におよぶ鈴木貞次郎・鈴木貞雄コレクションで、東北大学大学院生命科学科標本室 TUS (以下東北大)、京都大学総合博物館 KYO (以下京大)に保管されている他、重複品の一部が福島大学教育学部標本室にも収められている。その他の主なコレクションとしては、時代順に、松本敏則らによる茨城県境の八溝山を中心とする 1909~1960 年代の東京教育大学コレクションが筑波大学生物科学系標本室 TKB に約 500 点、中通り南部の西白河郡を中心とする 1930 年代の今井直吉コレクションが東北大、東京大学総合研究博物館・理学研究科附属植物園 TI (以下東大)、東京都立大学理学部牧野標本館 MAK、京大に数千点、同じく西白河郡を中心とした 1930 年代の斎藤知賢コレクションが北海道大学大学院農学研究科附属植物園 SAPT に数千点、1950~1952 年の尾瀬学術総合調査コレクションが東大に数百点、主に 1980 年代以降の旧東北大学理学部植物分類学講座関係者採集の阿武隈山地や浜通りを中心とする標本数千点が東北大に保管されている。また、『福島県植物誌』に使われた会津の植物(斎藤 慧コレクション)数千点、浜通りの植物(湯沢陽一コレクション)数百点、水生植物(薄葉 満コレクション)数百点、イネ科植物(菅野修三コレクション)数百点などが東北大に寄贈されている。全体として会津、中通り北部と南部、浜通り南部の標本はあるが、その他の地域、特に浜通り中北部の標本が乏しい。この地域を北限とする植物は多いとみられ、植物地理学上重要な地域と思われるので、今後の調査と標本の集積が望まれる。コケ類標本に関しては、蘚類の樋口利雄コレクション約 1 万点が東北大に保管されている。

### (D) レッドデータブック

福島県生活環境部環境政策課(現環境政策室)の編集・発行による『レッドデータブックふくしま I 植物・昆虫類・鳥類』および『レッドデータブックふくしま I 植物・昆虫類・鳥類普及版』が 2002 年に出版された。植物の調査主体は福島県植物研究会メンバーを中心とした「福島県植物調査会」40 人ほどで、実質 2 年間の調査で約 2,600 件のデータを集め、とり



図 57. レッドデータブックふくしま I

まとめた。他の生物群と統一した福島県独自のカテゴリー区分で、コケ植物を含む植物は絶滅7種類、絶滅危惧310種類、準絶滅危惧140種類、希少168種類、注意8種類、未評価148種類が挙げられ、選定根拠、県内の分布・生育状況、生育に影響を与えている要因、特記事項、文献の他、絶滅危惧と準絶滅危惧の一部の種類については2万5千分の1地形図メッシュ（環境庁2次メッシュ）の分布図がつけられている。執筆者の担当部分がわからない、学名の索引がない、分類体系順の一覧がない、他の生物群と分量を合わせるために概要が2頁強に削られてしまった等の残念な点もある。また、調査期間が極めて短く、データ件数も少ないため、執筆時にきちんとした分布や生育状況が把握できたとはいいがたく、評価も主観的に判断せざるを得ない分類群が多かった。今後継続的にデータ収集に努め、改訂していく必要がある。レッドデータブックは日進堂印刷所（株）（TEL：024-594-2213）で3,600円と送料で入手可能であるが、残部が少ないとのことである。普及版の方は今のところ入手は困難である。

#### (E) 植物群落

福島県の植物群落については、福島大学学芸学部・教育学部の吉岡邦二、樫村利道および彼らの研究室出身者等により、湿原や風穴を中心に精力的に調査がなされ、主に同好会誌や報告書上で発表されてきた。また、尾瀬、赤井谷地、駒止湿原等の国内有数の湿原では、大規模な学術調査が行われ、報告書がとりまとめられている。

福島県の植生の概要については、上記の『福島県植物誌』に樫村利道による総説がある。また、1981～1988年に環境庁により5万分の1の『第2回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図』、『第3回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図』が出版されている。一般向けに書かれた植生に関する書籍としては、樫村利道『尾瀬ヶ原と赤井谷地』（2000年 歴史春秋社）がある。

（黒沢高秀：〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学教育学部 TEL：024-548-8201 FAX：024-548-3181 E-mail：kurosawa@educ.fukushima-u.ac.jp）

## 8. 茨城県

鈴木昌友

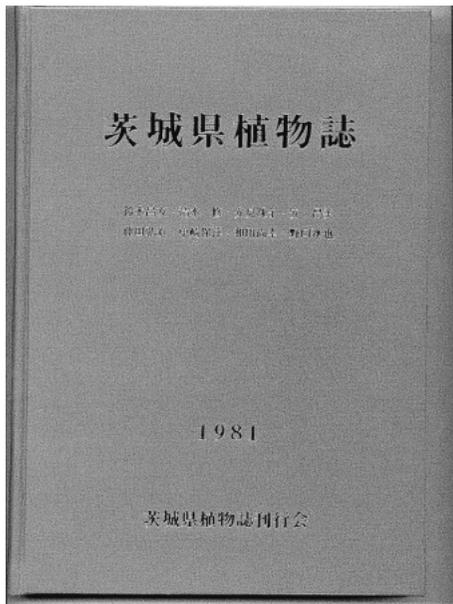


図 58. 茨城県植物誌

### (A) 植物誌

1931年に茨城県立女子師範学校の鶴町 猷氏によって、『茨城県産植物目録 高等植物之部』が出版されたが、これは半紙にガリ版で印刷し、こよりで綴じたものであった。1956年に茨城大学生物学研究室を中心とした茨城県植物目録刊行会が発足し『茨城県植物目録 第一版』(101頁)が出版された。続いて1957年勝田第一中学校校長の斎藤卯内氏が『自然をたずねて』(80頁)を出版し、その中に「茨城県産顕花植物(種子植物)及び羊歯植物目録」を加えている。1976年、茨城大学教育学部生物学研究室を中心に茨城県で第27回全国植樹祭が行われるのを契機に、県内で採集した標本をもとにして、『茨城県産植物目録』(49頁)を出版した。これらは主として関係機関に配布されてはいるが、一般に入手することができないので、1981年に地域フローラを調べているメンバーと共に茨城県植物誌刊行会を作り、『茨城県植物誌』(339頁)を刊行した。

県内の地域フローラとしては1976年の第27回全国植樹祭の時の「お手まき行事」の会場となる高萩市が自然環境や植生をふまえ、多くの写真を用いて主な植物を記載し、維管束植物のリストを掲載し、『高萩の植物』(277頁)を出版した。1979年に鹿島町教育委員会が『鹿島の植生』(235頁)を出版し、

鹿島町の主な植物の分布について記載して植物のリストを掲載している。1984年、小室 健氏は『奥久慈の植物と自然の風景』(219頁)を奥久慈植物研究友の会から刊行し、この中に維管束植物のリストがある。1988年に岩間町が『岩間の自然』を、また同年に日立市で『日立の植物』を出版している。1992年には笠間市が『笠間の自然』(297頁)を発行したがこれには植物のリストは記載されていない。1993年には茨城県北部の里美村で『里美の自然』(278頁)を、1996年には原子力施設の多い東海村で、『東海村の自然』(337頁)を刊行している。東海村、当時の村松村では1953年に河田 杰・林 弥栄の『鹿島灘沿岸地方における2国有林の植物調査報告』がありこの文献は当時と現在を比較できる貴重なものとなっている。1998年には金砂郷町から『金砂郷の自然』(306頁)が出版され維管束植物が記載されている。2000年には守谷町が『もりやの自然』(321頁)を刊行しスケッチを含む維管束植物のリスト、植生が記載されている。また、茨城生物の会という民間の団体があり、植物に関しては地域の貴重な種の報告があることもある。

### (B) 研究機関

1994年に茨城県立自然博物館が設立され、博物館では積極的に標本の収集と地域のフローラ調査を行っている。博物館内の研究は『茨城県自然博物館研究報告』に掲載され、毎年発行されている。また県内を4区域に分けて一区域4年かけて、フローラ、植生の調査を行い、その報告物が刊行されている。1998年に第一次総合調査報告書が、2001年に第二次総合調査報告書が出版されている。牛久市には自然観察の森があり、ここでも植生調査やフローラの研究が行われている。また、つくば学園都市の中に「アースデイつくば」という名称の研究団体があり、主として筑波山を中心にフローラや植生、ブナの生態を観察しかなりの実績をあげているグループがある。つくば市には筑波大学、農水省森林総合研究所、環境省国立環境研究所、財団法人国立科学博物館筑波実験植物園などがあり、それぞれの研究が行われている。水戸市の茨城大学理学部では植物生態を中心に県内の森林の消長を記録している。さらに十王町には林野庁林木育種センターがある。

### (C) 標本庫

標本類の分散を避け、現在、茨城県自然博物館に集中して収納している。自然博物館ではかなりの面積の収納庫があり標本ケースの設備もいい。まだ未整理の標本もあるが、学芸員、嘱託、ボランティアの協力で、徐々に整理が行われている。鈴木昌友コレクションの整理はおおよそ完了し、現在、佐藤正己氏の地衣コレクション

ンの整理が行われている。また大津昭二氏の植物のスライド写真が2万枚以上保管されている。閲覧可能である。

#### (D) レッドデータブック

1997年『茨城における絶滅のおそれのある野生生物（植物編）』（253頁）が出版された。1989年に日本自然保護協会が発行した『我が国における保護上重要な植物種の現状』を参考にし、茨城県の現状に併せて検討委員会（委員長鈴木昌友）を作り、県内に生育記録のある野生植物の生育状況を確認して、記載種のカテゴリー区分を実施した。120種ほどのカラー写真も掲載し学校関係、各自治体などに配布したが、茨城県での出版物は一般の県民には入手しづらいので一般人に対する普及を考え、1999年、改めて、記載した植物すべてにカラー写真を載せ分りやすく解説して普及版を作成した。記載された種は391種である。

#### (E) 植物群落

1979年に宮脇 昭、奥田重俊氏らが『鹿島及びその周辺域の植生』（122頁）を鹿島共同火カ株式会社から出版している。茨城県全体としては、1980-1981年にかけて、環境庁の依頼で国土地理院発行の5万分の1の地図を群落毎に色づけしたものはあるが、時代が立つにつれて土地の利用が進み開発が行われて、以前の植物群落は見られないのが現状である。

（鈴木昌友：〒310-0903 水戸市堀町 932-7）

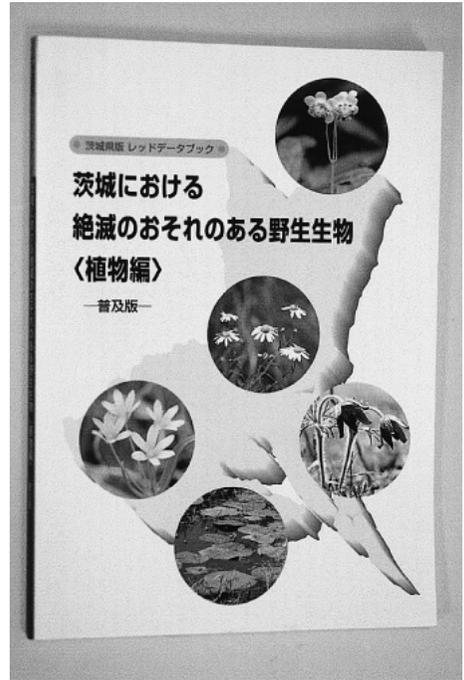


図 59. 茨城における絶滅のおそれのある野生生物〈植物編〉—普及版—

## 9. 栃木県

福田廣一

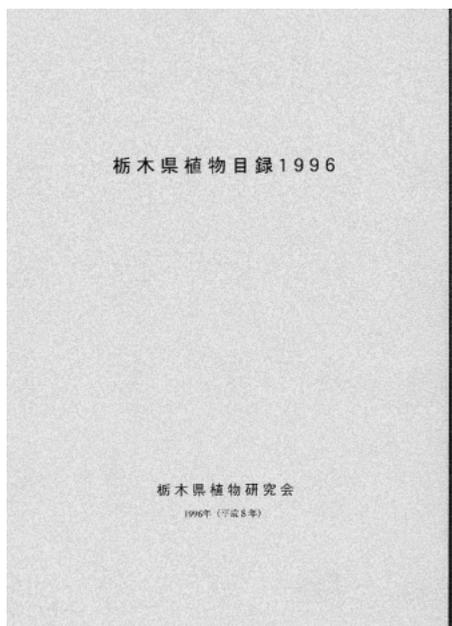


図 60. 栃木県植物目録 1996

### (A) 植物誌

現在までに栃木県植物誌と呼ばれる文献はない。しかし、1941 年に関本平八は栃木県に産するシダ植物と種子植物をまとめた『栃木県植物総覧』を刊行した。これは栃木県内全域の調査をしてまとめた最初の報告で栃木県初の植物誌といえる。以降の本県における植物相研究上で最も重要な基本文献となる。1951 年には『続栃木県植物総覧』も刊行された。また、まとまった植物目録として橋本千春・森谷 憲(編)の『栃木県植物目録』(1968 年)がある。これは、栃木県植物同好会が栃木県植物誌作成のための草案的出版物として刊行されたもののだそうである。時をおき、1996 年には栃木県植物研究会により今までの文献および追加調査資料に基づき 3,600 余種を掲載した『栃木県植物目録 1996』が刊行された。

地域あるいは市町村の植物誌をみると、まず、1936 年に東照宮から発刊された『日光の植物と動物』と天皇陛下の御著『那須の植物』(1962 年 保育社), 『那須の植物追補』(1963 年 保育社), 『那須の植物誌』(1972 年 保育社), 『那須の植物誌続編』(1985 年 保育社)があげられる。前著は当時の錚々たる研究者による詳細な日光地域の調査報告であり、後著は同様に那須地域の植物相を正確に記載した文献で本県屈指の植物誌

である。日光地域については 1986 年に、日光の動植物編集委員会(編)の『日光の動植物』(月刊さつき研究社)や栃木県立博物館の研究報告書『日光の動植物』などがある。博物館の地域調査報告書として『八溝山地の自然』, 『足尾山地の自然』, 『栗山地域の自然』などがある。市町村では真岡市の『真岡市の動植物』(1993 年)や今市市の『今市市植物誌 Vol.1-3』(1998, 2000, 2002 年), 黒磯市の『黒磯市動植物実態調査報告書』(1998 年)及び『黒磯市の植物』(星 忠直 1991 年), 塩谷町の『塩谷町の自然』(2000 年), 藤岡町の『藤岡町史資料編渡良瀬遊水地の自然』(2002 年)などの報告書が作成されている。この他に栃木県の自然環境保全地域指定等に伴う多数の地域学術調査報告がなされている。

栃木県の林務部自然環境課は栃木県立博物館の研究員をはじめ栃木県内の研究者および県外の専門研究者の協力を得て数年前から栃木県自然環境基礎調査を実施してきた。その結果が 2002 年 3 月に『とちぎの変形菌類・菌類・地衣類・藻類・蘚苔類』として刊行され、2003 年 3 月には『とちぎの植物』と題して維管束植物について発刊される予定である。次に発刊される予定の『とちぎの植物』では県内全域を踏査し収集した約 43,000 点の標本を基に、研究史等も含め報告されるもので、本年 3 月に刊行された『とちぎの変形菌類・菌類・地衣類・藻類・蘚苔類』と合わせると、待望の植物誌発刊がなされることになる。これらの報告は新規の野外調査に関してはすべて証拠標本を作製し栃木県立博物館に保管し、証拠標本に基づく報告書が作成されている点、殊に意義を持つといえる。

### (B) 研究機関

栃木県立博物館学芸部自然課では 7 名の専門研究員と 4 人の学芸嘱託員で構成され自然系部門全般の調査研究活動を行っている。内 2 名が植物の専門研究員である。栃木県立博物館は今年開館 20 周年を迎える。開館当初より前述のとおり地域調査(日光, 八溝, 足尾, 栗山, 那須)を実施し資料の収集整理保管を図ると同時に種々の研究報告書(紀要, 目録, 地域調査研究等)をだしてきた。那須の調査では那須御用邸の詳細な調査も行い『那須御用邸の動植物相』(2002 年)の研究報告書を刊行している。宇都宮大学にも数名の自然史に関わる研究者がいて栃木県立博物館や栃木県林務部自然環境課と協力して調査研究をすすめている。分類群によっては県内に研究者がいない場合も多く、博物館職員は調査研究におけるコーディネイターも務めることになる。

県内には自然史関連のサークルとして栃木県植物同好会と栃木県植物研究会および栃木県きのこ同好会があ

る。最も古い歴史を有するのが1930年に関本平八が創設した下野植物会を前身にもつ栃木県植物同好会である。同好会誌『とちのき』も51巻96号に及び歴史を感じさせる。1992年に長谷川順一を中心とする植物に興味関心の高い人々が新たに創設したのが栃木県植物研究会である。前述の目録の作成や会誌の作成を積極的に行い、会誌『フロラ栃木』も第10号まで発刊され、内容も充実したものとなっている。両植物の会とも博物館の調査研究活動等に積極的貢献を果している。15年ほど前に発足した栃木県きのこ同好会も栃木県立博物館に事務局を置き、会誌も第5号まで刊行され博物館の調査研究活動に積極的な貢献を果している。

### (C) 標本庫

栃木県立博物館 (TPM) には維管束植物約13万点 (未整理標本を含む)、蘚苔類約9,000点、藻類約1,300点、地衣類約3,000点、菌類約5,500点、変形菌類約750点の標本がある。維管束植物では渋佐信雄・小川晃一・森谷 憲コレクションなどが、変形菌では菊池理一コレクション及び書簡集が、菌類では吉見昭一コレクション、蘚苔類では長田武正コレクションなどがある。渋佐コレクションおよび小川コレクションは目録報告がなされている。標本の閲覧等は担当学芸員と直接連絡をとっていただきたい。維管束植物は小倉洋志でそれ以外は筆者福田廣一が担当している。

### (D) レッドデータブック

昨年度 (2001年) から栃木県林務部自然環境課と栃木県立博物館が共催で県版レッドデータブック作成に関する事業の実施検討を始めたところである。現在、概ねカテゴリーが決まり調査が開始されている。平成16年 (2004年) 末には県版レッドデータブックが刊行される予定である。

### (E) 植物群落

栃木県全域における植物群落 (植生) に関するまとまった最初の報告は宇都宮大学の薄井 宏博士による「栃木県現存植生図作成報告」によると思われる (薄井 宏 1972年 文化庁)。1974年にはすぐれた自然図をともなった「栃木県現存植生図」が描かれ、以降、環境庁の『第2回・第3回・第4回自然環境基礎調査 (植生調査) 現存植生図』等の報告がある。また、『自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書』などがある。ほかに長谷川順一の『栃木県の植生と花』(1982年) や宮脇 昭 (編) の『日本植生誌』(1986年) があげられる。地域的な調査報告としては自然環境保全地域指定につながる報告や学会や大学および博物館の報告などがある。

2002年3月に栃木県林務部自然環境課は『とちぎの植生 (植物群落)』(福田廣一他 2002年) を発刊した。そこには栃木県における植生研究史や国・県指定の自然環境保全地域なども記載され、既存文献からの群落リストや近年の植生調査の報告が多数載せられている。栃木県の植生に関する文献の大半は網羅されていると思うので文献のチェックには『とちぎの植生 (植物群落)』をみてほしい。

(福田廣一: 〒321-0685 栃木県宇都宮市睦町2-2 栃木県立博物館 TEL: 028-634-1311 FAX: 028-634-1310 E-mail: hiroichi@pref.tochigi.jp)



図 61. とちぎの植生 (植物群落)

## 10. 群馬県

大森威宏

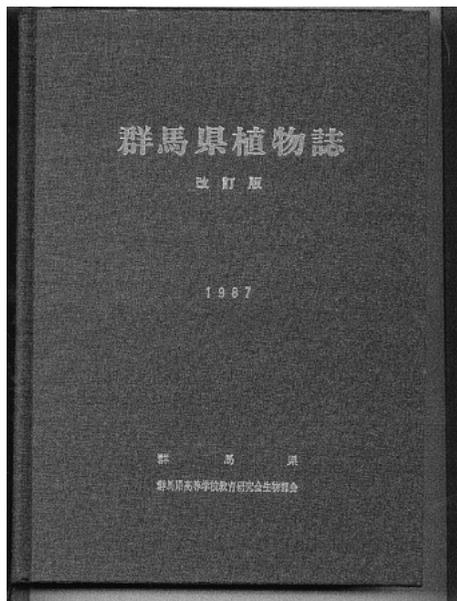


図 62. 群馬県植物誌 改訂版

## (A) 植物誌

1987年に群馬県高等学校教育研究会生物部会「群馬県植物誌改訂版」編集委員会(編)で『群馬県植物誌 改訂版』(群馬県発行)が刊行された。B5判, 604頁で, I 群馬県の自然環境, II 高等植物(植生・植物相), III 蘚苔類・藻類の構成になっている。目録の産地に対する引用標本は示されておらず, 分布図はない。なお, その基本になった旧版の植物誌は1968年に群馬県高等学校教育研究会生物部会より発行されている。最近の市町村単位のプロローガを扱った出版物としては『館林市の植物』(1995年 館林市教育委員会)などがある。このほか, 各市町村史刊行にあわせてプロローガ調査がなされ, 植物目録が作成される場合もある(安中市 2000年, 上野村 2002年など)。

なお, 尾瀬の大半は群馬県に含まれる。蘚苔類・藻類を含む尾瀬のプロローガ調査のまとまった成果は1950~1952年の尾瀬総合学術調査(第一次)のもので, 1954年に出版された『尾瀬ヶ原』(日本学術振興会発行 絶版)の中にまとめられた。群馬県では環境生活部自然環境課尾瀬保全対策室が実施する保全に関する調査の中で植物群落や植物相に関するものを実施し, その成果を報告書『尾瀬の自然保護』として毎年刊行している。

同報告書は2002年現在, 第25号まで発行されている。

一般向けに書かれた群馬県の植物に関する図書では須藤志成幸『群馬の植物散歩』(1982年 上毛新聞社)などがある。また, 尾瀬に関するものでは菊地慶四郎・須藤志成幸『永遠の尾瀬 自然とその保護』(1991年 上毛新聞社)があり, 尾瀬の植生および植物相が項目としてとりあげられ, 植物目録が掲載されている。

## (B) 研究機関

群馬県全体を網羅する植物単独の研究会・機関は存在しないが, 植物自然誌に関する調査・研究を行っている団体・機関には次のようなものがあげられる。

群馬県自然環境調査研究会が1974年に設立され, 植物相を含めて, 群馬県内の自然環境行政を推進するために必要な調査・研究を行っている。同会は県内学校の教職員を中心に構成され, 群馬県環境生活部自然環境課に事務局が置かれている。同会の研究成果は『良好な自然環境を有する地域学術調査報告書』として毎年刊行されるほか, 『奥利根地域学術調査報告書』などが発行されている。群馬県高等学校教育研究会生物部会は県内の高等学校教職員を中心に構成され, 年1回『群馬生物』(2002年現在第51号まで刊行)を刊行し, この中に植物相に関する報告が発表されることがある。1991年に結成された群馬野外生物学会は県内のアマチュアから大学関係者までが参加する団体で, 会誌『Field Biologist』を刊行している。動物が投稿の中心であるが, 植物に関する投稿もみられる。群馬県立自然史博物館は1996年に開館し, 年1回『群馬県立自然史博物館研究報告』を発行するほか, 3年単位で県内のプロローガ・植生を含めた調査事業を計画し, 成果は『群馬県立自然史博物館自然史調査報告書』として発表する。同報告書は第2号まで発行された。このほか個人レベルでは, 高崎市在住の伊藤市郎氏を中心とする淡水藻類研究会がカワノリを中心とした淡水藻類の分布調査を行っており, 『群馬生物』に長年にわたり調査結果を発表している。さらに, 伊藤市郎氏の研究は『日本の生物』1989年1月号に総説としてまとめられている。

## (C) 標本庫

群馬県立自然史博物館に約4万点の標本があり, その大半は戸部正久, 五味礼夫, 滝沢敦男, 田中恒司, 栗原尚次らによる県産植物のコレクションである。このうち, 戸部正久氏の標本は『群馬県植物誌』(旧版)の証拠となったものである。整理済み標本は館独自の収蔵管理システムにより, 2002年5月21日現在16,427

点がデータベース登録されている。これらの標本は事前連絡のうえ、資料担当立ち会いのもと閲覧が可能である。

沼田市立図書館には武井武一氏のコレクション約3,500点が保管されており、沼田市を中心とする群馬県北部のものが大半を占める。

#### (D) レッドデータブック

2001年に群馬県自然環境課が独自の基準でレッドデータブックを作成し、同時に普及版も発行した。また、レッドリストは群馬県ホームページ（自然環境情報システム）上で公開されている（<http://www.pref.gunma.jp>）。植物は絶滅種55種を含め、382種が選定された。

#### (E) 植物群落

堀 正一（監修）による『群馬県現存植生図』が1974年に群馬県から発行された。群馬県内の植物群落については『群馬県植物誌 改訂版』の中で独立した項目としてとりあげられ、50万分の1植生図が添付されている。1979、1988、1998年に行われた環境庁特定植物群落調査において特に重要な植物群落・個体群の追跡調査を行っている。このほか、県内の自然植生を有する地域、県自然環境保全地域、さらに最近では絶滅危惧種の生育地域や二次植生が残る場所についても植物群落の記載さらに追跡調査を県独自に行っている。群馬県では環境庁（現環境省）からの委託調査を含め、これらの調査を群馬県自然環境調査研究会（前述）に委託して実施し、県単独で実施したものについては、『良好な自然環境を有する地域学術調査報告書』に報告している。

特定地域を扱ったものでは、『尾瀬ヶ原の植生』（宮脇 昭・藤原一絵 1970年）や『沼田市の植生』（宮脇 昭他 1984年）が代表的なものとしてあげられ、特に前者には福島・新潟県側も含めた1万分の1植生図などが添付されている。

（大森威宏：〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩 1674-1 群馬県立自然史博物館 TEL：0274-60-1200 FAX：0274-60-1250 E-mail：ohmori@gmnh.pref.gunma.jp）

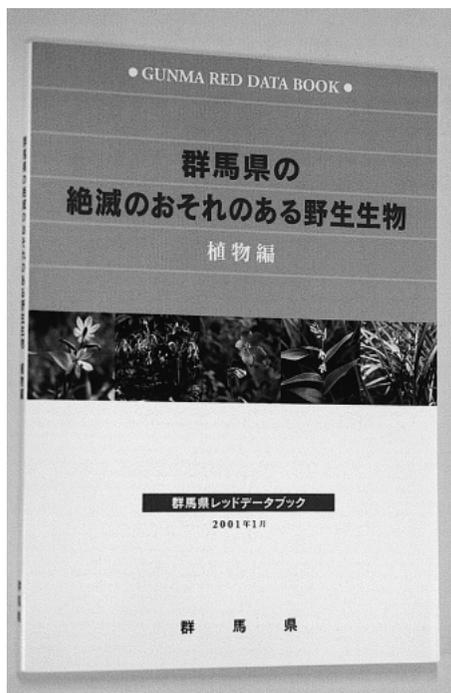


図 63. 群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編

## 11. 埼玉県

安田啓祐

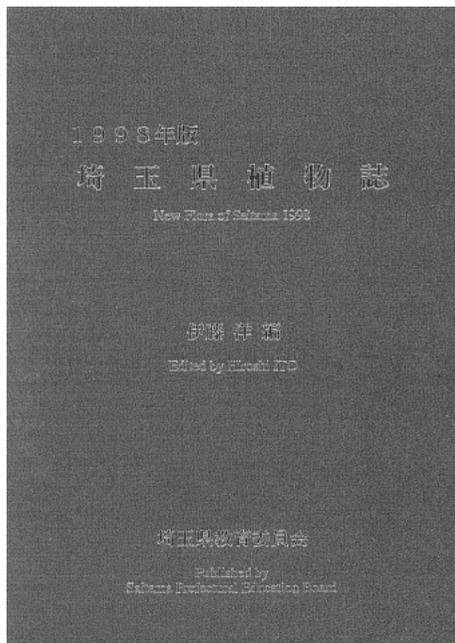


図 64. 1998 年版 埼玉県植物誌

## (A) 植物誌

1962年に刊行された埼玉県教育委員会・埼玉県科学教育振興会(編)の『埼玉県植物誌』(B5判 339頁)は、埼玉県の自然環境、植物概説などに続き、種子植物、シダ植物、コケ植物、菌類、藻類などが網羅されていたが、現在は絶版である。しかしその後、本県は東京都に隣接する特殊事情から、宅地、工業団地およびゴルフ場などの開発が進んだために、当時記載された内容が著しく変更されてしまった。そこで、主として1993~1997年の調査結果を中心にして、1998年に東京教育大学名誉教授伊藤洋(編)『1998年版 埼玉県植物誌(New Flora of Saitama 1998)』(A4判 833頁)が改めて刊行された。新版の内容は、埼玉の自然環境、埼玉の植物概観などの記述に続いて、2,487種類の維管束植物がリストアップされ、分布の現状が市町村毎の分布図を添えて詳述されている。コケ植物、藻類、地衣類、菌類などはリストのみが掲載されている。資料として、1962年版の植物誌には掲載されているが、新版のための調査では“見出せなかった植物”、“秩父地方の植物方言”などが組み込まれている。旧版ではイネ科とカヤツリグサ科に関する分布がほとんど示されていなかったが、新版では標本に基づいて示してある。分布図に関して、希少種は、盗掘などを防ぐ目的で、取って分布図をつけなかったものがある

が、それらは電子データの形で埼玉県立自然史博物館に保管してある。研究上必要な場合は、埼玉県立自然史博物館へ所定の手続をとれば、閲覧できるはずである。刊行後、記載内容の不具合、新産地の追加、追加種などの訂正をするための改訂版を出す準備を現在も継続中である。

埼玉県では、各市町村史の編さんが20年来盛んであり、種々の形式で各地域のフローラが刊行されており、その傾向は現在でも続いている。そのような地域フローラとして、最近のものの中からいくつかを以下に示す。北本市教育委員会市史編さん室(編)『北本市史 第3巻上』(1991年)、鶴ヶ島町史編さん室(編)『鶴ヶ島町(現鶴ヶ島市)史 自然編II 鶴ヶ島の植物』(1991年)、日高町史編集委員会等(編)『日高町(現日高市)史 自然史編』(1992年)、都幾川村史編さん委員会(編)『都幾川村史 地理編 第1章・第4節 植生』(1999年)、上福岡市教育委員会等(編)『上福岡市史 資料編第1巻 自然史・考古』(1999年)、神泉村教育委員会等(編)『神泉村史 自然編 植物』(1999年)。その他現在調査中または刊行間近なものに越生町、江南町、鳩山町などがある。

## (B) 研究機関

埼玉県の高等学校の生物の教員による『埼玉生物』が刊行されており、前述の1998年版の改訂に向けてのデータの収集が続けられている。

## (C) 標本庫

従来から埼玉県立自然史博物館に収蔵されていた標本の他に、1998年版の植物誌のために収集された標本9.6万余点、安田啓祐他の比企地域の標本2.2万点弱、岩田豊太郎の秩父地域の標本3.8万余点などが、いずれも埼玉県立自然史博物館に収蔵されている。大部分は未整理であるが、閲覧は可能である。

## (D) レッドデータブック

1998年に、埼玉県環境生活部自然保護課(現環境生活部みどり自然課)が『さいたまレッドデータブック 埼玉県希少野生生物調査報告書 植物編』を刊行した。その際に、国のレッドデータブック新カテゴリーに準拠しながら、埼玉県の植物に当てはまるように修正して、緊急に保護を要する維管束植物596種類を選定し

た。さらに、その他の分類群（コケ植物 101 種類、藻類 31 種類、地衣類 39 種類、菌類 65 種類）の選定種を合せると 832 種類になる。

1999 年に、埼玉県指定の植物天然記念物 72 件に関して、埼玉県教育委員会が『県指定天然記念物 植物 緊急現状調査報告書』を刊行した。天然記念物の多くが巨木・老木であるために、形状が指定時とは変化していたり、また現状維持が不可能に近いものが多いことを指摘した。この結果は、今後における天然記念物の指定のあり方に一考の余地があることを示唆している。

#### (E) 植物群落

現在県当局と調査のやり方などに関して交渉中であるので、予算がつき次第、2003 年度から、人間生活などの影響を受け易い場所から順次調査を開始する予定である。

(安田啓祐：〒338-8570 埼玉県さいたま市下大久保 255 埼玉大学教育学部 TEL：048-858-3218)

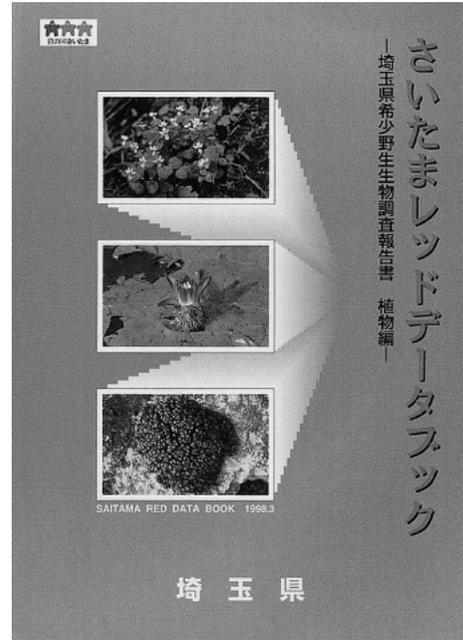


図 65. さいたまレッドデータブック 植物編

## 12. 千葉県

大場達之

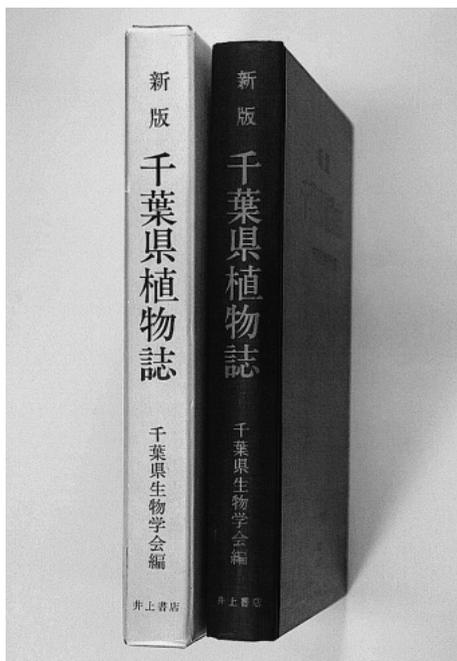


図 66. 新版 千葉県植物誌

## (A) 植物誌

千葉県の植物目録として最も早いものは 1932 年に與世里盛春によって編纂された。與世里は沖縄出身で旧制成東中学に赴任し、牧野富太郎の指導を仰ぎ、牧野の同定による標本を基礎に『千葉県の植物』を編纂した。この標本は現在千葉県立中央博物館に収蔵されている。與世里盛春 (1932 年)『千葉県の植物』(千葉県博物採集会)。1947 年に千葉大学の沼田 眞は鈴木時夫などとともに千葉県生物学会を結成し、その主要な事業として千葉県植物誌の編纂を行い、その成果が 1958 年に刊行された『千葉県植物誌』である。これは 1975 年に改訂され『新版 千葉県植物誌』として出版された。両書とも生態、群落などにも多くの頁を割き Biological Flora として評価されている。千葉県生物学会 (編) (1958 年)『千葉県植物誌』(千葉県生物学会), 千葉県生物学会 (編) (1975 年)『新版 千葉県植物誌』(井上書店)。最近では次のような目録が発表されている。蒲谷肇・岩瀬 徹・谷城勝弘 (1991 年)「千葉県植物目録 1991 年版とパソコン利用の植物リスト作成法の改良」(『清澄』 13: 13-28 頁), 天野 誠・遠藤泰彦・御巫由紀・大場達之 (1995 年)「千葉県産維管束植物チェックリスト」(『千葉中央博自然誌研究報告』 特別号 2: 11-74 頁)。1997 年には千葉県のレッドデータブック編纂の一環として、各種の植物分布データの収集が

おこなわれ、主要な種子植物 1,367 種について分布図が作成されている。なお千葉県立中央博物館では 1990 年に、分布データ記録のために 3 次メッシュによる『千葉県 3 次メッシュマップ』を刊行している。千葉県における動植物分布の最近の記録にはこのメッシュが使われているものが多い。ただし最近環境省から刊行された県別の 3 次メッシュマップと同じく 4 桁のコードを使用しているが、コード番号自体は異なる。大場達之 (1997 年)『千葉県主要種子植物チェック・マップ』(『千葉県植物誌資料』 特集 2 84 頁)。現在千葉県史自然誌編の資料編として千葉県植物誌の編纂が進行中で、2003 年の前半に刊行される予定である。これは全種 (軽微な品種などは除く) の分布図とカラー図版が掲載される予定である。また県史自然編の内、植物に関連したものとして次の 3 冊がすでに刊行されている。千葉県史料研究財団 (編) (1996 年)『千葉県の自然誌 本編 1 千葉県の自然』(789 頁 千葉県), 千葉県史料研究財団 (編) (1998 年)『千葉県の自然誌 本編 4 千葉県の植物 1—細菌類・菌類・地衣類・藻類・コケ類』(837 頁 千葉県), 千葉県史料研究財団 (編) (2001 年)『千葉県の自然誌 本編 5 千葉県の植物 2 植生』(794 頁 千葉県)。

## 地域植物誌

県内の地域植物目録は多数刊行されているが、比較的最近のものを挙げる。このなかでは折目庸雄が編纂した富里町、芝山町、酒々井町の植物誌が目立っている。これらは採集した標本に基づく目録で、その標本はすべて千葉県立中央博物館に寄贈されている。また市原市と佐倉市の植物目録は、両市の自然環境調査の一環としてボランティア参加の市民が小学校区を担当して行われたもので、それらの証拠標本は千葉県立中央博物館に収蔵されている。岩瀬 徹・西田 誠・吉田 治・高木仁平・大貫 通 (1965 年)「銚子地方海岸植物目録 海岸部」(銚子市観光協会 (編)『銚子の自然』80-103 頁)。吉川代之助 (1979 年)『千葉県船橋市野外植物目録』(110 頁 自己出版)。この目録の基礎となった標本は平塚市博物館に寄贈され、標本目録が出版されている。千葉演習林 (1985 年)「千葉演習林産植物目録」(『演習林』 24: 13-63 頁)。大野景徳 (1989 年)「市川の植物」(市立市川自然博物館 (編)『特別展資料市川の植物』)。折目庸雄 (1993 年)「富里の植物」(『千葉県富里町植物誌』14+140+12 頁 自己出版)。大場達之他 (1994 年)「市原市の維管束植物」(『市原市自然環境実態調査報告書 8 1990-1993 年』281-327 頁+1,420 分布図)。岩瀬 徹・小滝一夫・篠崎秀次 (1996 年)「千葉市の種子植物」(千葉県自然環境調査会 (編)『千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告書』275-319 頁)。村田威夫 (1996 年)「千葉市のシダ植物」(千葉県自然環境調査会 (編)『千葉市野生動植物の生息状況

及び生態系調査報告書』321-342頁)。小滝一夫他(編)(1997年)「大栄町植物目録」(大栄町史編さん委員会(編)『大栄町史自然編』420-447頁 大栄町)。折目庸雄(1997年)『芝山の植物 千葉県植物誌資料特集1』(60頁)。藤平量郎(1998年)「君津市の植物」(君津市市史編さん委員会(編)『君津市史自然編』123-238頁, 535-595頁 君津市)。川名 興・天野 誠(1997年)「袖ヶ浦市の維管束植物リスト」(『袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書 11』80-121頁)。折目庸雄(1999年)「酒々井の植物」(『千葉県印旛郡酒々井町植物誌 千葉県植物誌資料特集3』64頁)。大野景德(2000年)「鎌ヶ谷市植物目録」(『鎌ヶ谷市史 資料編VII(自然)』370-399頁)。大場達之・村田威夫・谷城勝弘・倉俣武男・木村陽子・小滝一夫・岩瀬 徹・篠崎秀次・島田秀一・小沢克巳他(2000年)『維管束植物フロラ(植物種類相)調査』(3-112頁+1,489分布図)。土屋 守(2000年)「野田市の植物 1~2」(『千葉生物誌』50(1):1-27頁, 50(2):1-16頁)。村上暢一・渋谷 孝(2002年)「文献による市川市植物目録」(『市川市自然環境実態調査報告書2001』35-113頁)。また千葉県環境部が行った自然環境調査は数多いが、1998年までの分については次の文献で一覧することができる。原 慶太郎(1992年)「千葉県自然環境保全地域等に関する文献情報」(『千葉生物誌』41(1):28-38頁)。また千葉県全体に関する植物関係の文献目録として次のものがある。千葉県自然誌資料調査会(編)(1986年)『千葉県自然誌関係文献目録-植物編-』(61頁)。

## (B) 研究機関

維管束植物に関係する研究機関としては千葉大学理学部、同園芸学部、同薬学部、東邦大学理学部、同薬学部、東京大学千葉演習林などがある。自然誌系の博物館としては1989年に開館した千葉県立中央博物館のほか、市川市立自然博物館がある。全県的な研究団体としては1947年創立の「千葉県生物学会」があり、機関誌『千葉生物誌』を刊行するほか、野外観察会、研究会などを定期的に開催している。活動的な団体として千葉県南部の「安房生物学会」は機関誌『冬虫夏草』を刊行している。そのほか『野草乃友』の「市原植物研究会」、『野草をたずねて』を機関誌とする「佐倉野草会」などがある。また千葉県植物誌編纂の連絡誌として『千葉県植物誌資料』が第18号まで刊行されている。

## (C) 標本庫

千葉県立中央博物館(CBM)では登録済みの標本が156,178点(2002/8/22現在)あり、未登録のものもほぼ同数ある。その主要なコレクションは次の通りである。1) 與世里盛春標本2,984点。2) 若名東一標本21,209点。3) 行方沼東標本シダ9,198点, 種子植物210点。4) 浅野貞夫標本7,416点。5) 折目庸雄標本約8,000点。6) 諏訪文二標本約4,000点。7) 土屋 守標本893点(『野田市の植物』の証拠標本)。8) 自然誌資料調査会収集標本約20,000点。千葉県立中央博物館設立準備のために1983年から、自然誌資料調査会が設置され1992年まで、千葉県の植物標本を収集した。千葉県以外の主要な標本は以下の通りである。9) 井波一雄標本約10万点(内12,327点は登録済み)。10) 西田 誠標本(ポリビア・チリの標本(約3,500点)を含む)。11) 稲垣貫一標本7,723点。12) 正宗嚴敬標本4,027点。13) 古瀬 義標本2,171点。14) 中村守一標本(現在整理中)。このほか千葉大学園芸学部の奥山春季コレクション、千葉大学薬学部標本資料室の萩庭丈壽コレクション(約54,000点)、東京大学千葉演習林資料室の標本(9,536点)などが主要なものである。また千葉市緑化植物園に浅野貞夫の収集した標本があり、その目録が刊行されている。個人の所蔵する標本としては斉藤吉永(1999年没)、能勢 保、谷城勝弘などのコレクションの規模が大きい。千葉県の高校に長く在職した伊藤 至(後に新潟県在住 2000年没)も多数の千葉県産植物標本を所蔵していた。



図 67. 千葉県の保護上重要な野生生物 植物編

## (D) レッドデータブック

1999 年に千葉県環境部自然保護課がレッドデータブックを刊行している、本編は絶版であるが普及版は入手可能である。千葉県環境部自然保護課（編）（1999 年）『千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物編』（435 頁 千葉県環境部自然保護課）、千葉県環境部自然保護課（編）（2000 年）『千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—普及版』（142 頁 千葉県環境部自然保護課）。

## (E) 植物群落

環境別あるいは相観的な区分によって千葉県の植物を総説したものとしては、前述の県史。『千葉県の自然誌 本編 5 千葉県の植物 2 植生』がある。植物社会学的な立場から千葉県の植物群落全般をとりまとめた仕事はまだない。

この原稿を草するにあたり御巫由紀，天野 誠，木村陽子氏のご助力を得た，記して御礼申し上げたい。  
(大場達之：〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 8-21-2 TEL：03-3701-6291 E-mail：ohba@ec.catv.ne.jp)

## 13. 東京都

畔上能力・森廣信子

## (A) 植物誌

小笠原諸島、伊豆諸島を含む東京都全域の植物誌は、現状においてはない。また現在植物誌編纂の計画も無い。

区市町村、あるいは限られた地域におけるフローラ情報は多数あるが、島嶼を除くと、主として西部の多摩地域に集中しており、23区内の都市部においてやや乏しい。また、島嶼にあっては、小笠原諸島についてはかなり研究が進んでおり、伊豆諸島においてもある程度まとまっているものの、伊豆諸島全体のフローラとしてまとめられている資料が乏しい。また、三宅島の火山活動による植物相への影響が現在懸念されている。しかしながら、野生生物の保護を進めるための基礎資料としてのフローラの必要性から、1998年、東京都環境保全局によって『東京都の野生生物種目録』が作成された。ただし、これは文献調査を主体としたもので、東京都発行による保全地域指定地自然環境調査報告書、博物館、公園などの自然環境調査報告書、各市町村発行の文献、環境影響調査報告書、学会誌、研究報告書、市民団体記録など約3,000点から収集し、専門の研究者、地域研究者による委員会（植物関係では大場秀章、小野幹雄、鈴木和雄、畔上能力他）で取捨選択、最新知見を補完したものである。目録に掲載した種数は、本土部で3,421種、保護対象種642種。伊豆諸島で1,313種、保護対象種306種。小笠原諸島で654種、保護対象種121種。全部の合計4,323種、保護対象種1,002種となる。なお、全部の参考文献約3,000点のうち主なものが、略式ではあるが、地域別に末尾に記載されている。

現状ではこれが東京都全域を対象とした唯一のフローラということになる。しかしながら、この目録については、東京都保全局に管理を一任しており、一般に公表はしていない。一般向けとしては、後述の『東京都の保護上重要な野生生物種—東京都レッドデータブック普及版—』が1999年出版され、主に東京都みどりの推進委員を対象に無料配布されている。

区市町村、および特定地域におけるフローラ情報は多数刊行されているが、そのうち主なものとしては以下の報告書がある。

## i) 東京都本土部

シダ植物については、「東京都のシダ植物」(芹沢俊介 1974年 『文化財の保護』第7号)がある。これは島嶼を含んでいないが、標本の裏づけのある資料である。

## ii) 東京都23区

○大田区／『大田区自然環境保全基礎調査報告書—大田区の植生—』(曾根伸典 1982年 東京都大田区 175頁)および『大田区自然環境保全基礎調査報告書—大井埋立地南部の自然—』(1982年 大田区 75頁)。これは主に植生を中心としたもので、前者には現存植生図(1:10,000)がある。フローラについては、末尾に和名のみで記載され、生育地、産量、NA指数(Naturality-Artificiality)による評価が付加されている。大井埋立地南部の報告書では、和名をみの簡単なフローラが付記されている。

○江東区／1984年に『江東区の野草』(日本植物友の会(監修) 東京都江東区)が出版され、引き続き1986年に『続・江東区の野草』(江東区総務部広報秘書室(企画編集) 浅井康弘・飯泉 優他(解説) 東京都江東区)が出版されている。一般向けのオール・カラー図鑑ではあるが、末尾に「江東区の野草リスト」があり、とくに帰化植物についての記載が目立つ。樹木は含まれていない。

○目黒区／『街の自然12か月 資料編 目黒区産動植物目録』(東京都目黒区土木部公園緑地課(編) 1985年 東京都目黒区 80頁)。これは一般向けに出版した『街の自然12ヶ月』の調査資料(標本など)をもとにまとめたものである。

○北区／『北区植物調査報告書』(北区環境保全課(編集) 1987年 東京都北区 110頁)。維管束植物目録、

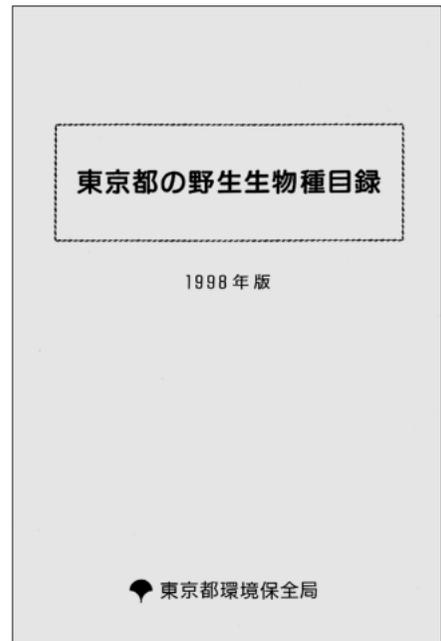


図 68. 東京都の野生生物種目録 1998年版

逸出植物, 過去の記録種, 帰化植物目録, 地区別出現状況, 注目される植物, 希少種, 減少の著しい種, コケ類目録などが記載されている。

○杉並区／『杉並区自然調査 東京都の自然に関する文献目録—植物・クモ類・昆虫類・鳥類—』(むさしの自然史研究会(文献収集) 1988年 杉並区都市環境部保全課 98頁)。これは文献のみであるが, 植物誌作成のためには重要な資料となる。

○港区／『港区生物現況調査報告書』(日本自然保護協会 1989年 東京都港区都市環境部環境対策課 230頁)。植物は恒川篤史, 井手久登がまとめており, フローラ, 植生, フェノロジーの3項目について調査および既存資料による取りまとめを行ったもの。自然教育園, 有栖川宮記念公園, 第六台場, イタリア大使館, フランス大使館などがあり, 一般的な調査の難しい区では貴重な資料である。

○葛飾区／『水元野草目録』(みずもと自然観察クラブ 1995年 みずもと自然観察クラブ 24頁)。カラー写真付の一般向け小冊子で, 1990年に続く第2回目のまとめという。シダ植物や裸子植物, 樹木などが抜けているが, 双子葉, 単子葉植物の草本を中心にまとめている。不完全ではあるが, 第3回目のまとめに向けて, 現在も引き続き調査を続行中である。東京都の東北部, 小合溜を中心とした湿生植物に注目すべき種が多いところである。

### iii) 区部を除く市町村

○青梅市／『青梅市の自然 II (動物・植物編)』(飯泉 優・曾根伸典他 1982年 東京都青梅市教育委員会 534頁)。

○奥多摩町他／「奥多摩植物目録」(鈴木和雄他 1984年 『東京都高尾自然科学博物館研究報告』第12号), 『奥多摩の植物』(奥多摩植物研究会 1986年 28頁)。両報告書とも, 秩父多摩国立公園の東京都部分を調査範囲としたもので, 東京都西北部の山岳部のフローラとしては信頼度の高いものである。標本は東京都高尾自然科学博物館に収蔵されている。

○八王子市／「高尾山植物目録」(高尾山植物調査会 1989年 東京都高尾自然科学博物館 30頁), 「武蔵陵墓地(多摩御陵)の植物」(畔上能力・谷本丈夫・豊田武司 1991年 『東京都高尾自然科学博物館研究報告』第14号), 『都立長沼公園とその隣接地の植物目録』(多摩丘陵植物調査会(編) 1999年 168頁)。「高尾山植物目録」は, 高尾国立公園を中心としたもので, 標本の裏づけのある資料である。なお, 周辺山地についての調査も, 引き続き行われている。「武蔵陵墓地の植物」は, 農水省林業試験場, 都市林調査の一環として, とくに許可を認められて行なった調査のうちの, フローラ部分についての報告書で, 立ち入りの難しい場所での記録として貴重な資料である。「都立長沼公園とその隣接地の植物目録」は, 酒井藤夫, 酒井啓子の調査資料を中心に東京薬科大学の小崎昭則, 北川淑子らによってまとめられたもの。都立公園という制約の中で標本つきのフローラとして評価できる。

○多摩市／『多摩市史叢書(8) 多摩市の自然(地学・植物目録・動物)』(多摩市史編集委員会(編) 1993年 多摩市 295頁)。多摩市植物友の会の協力で集めた標本をもとに, 国立科学博物館, 高尾自然科学博物館所蔵の標本などを加えて作成したものである。現在, 2000年を機に, 再調査をはじめている。

○稲城市／『稲城市史 資料編1 自然—稲城市の植物—』(畔上能力 1994年 稲城市 232頁)。稲城市には米軍管理下にある旧多摩弾薬庫があり, 長年にわたって自然が維持されているが, 立ち入り調査が難しく, また, 一方でニュータウン造成, 宅地開発が進行中という問題を抱えている。本調査では標本採集はしていない。発刊以後も多摩丘陵自然調査会(小崎昭則他)により, 標本採集に基づく調査が続行されている。

○清瀬市／『清瀬の自然フィールドガイド・春・夏・秋冬』(清瀬の自然フィールドガイド編集委員会(春) 1992年, (夏) 1987年, (秋冬) 1992年 東京都清瀬市)。これは一般向けのポケットサイズで, 和名のみ。フローラとしてのまとまりはないが, 清瀬市の植物相を知る手がかりにはなる。

○立川市／『立川の自然調査報告書』(畔上能力他 1994年 立川市教育委員会 168頁)。市のほとんどが人為的に攪乱されており, わずかに北側の玉川上水周辺, 南側の野川水源部に注目種が存在する程度である。かつてカワラノギクのタイプ地であった多摩川河川敷も今ではその面影も見られない。標本採集はしていない。

○あきる野市／『あきる野市, 植物・水生昆虫調査報告書』(あきる野市水辺生物研究会 1997年 あきる野市教育委員会 88頁)。あきる野市を流れる多摩川の支流, 秋川, 平井川, 養沢川, 盆堀川などの河川敷, 堤外地を中心とした地域のフローラならびに現存植生調査。フローラは和名のみ。

○武蔵村山市／『武蔵村山市史・資料編(自然=植物・キノコ・動物=) 採集目録1・植物編』(1999年 武蔵村山市史編さん委員会・武蔵村山市 338頁)。236~297頁に採集目録が記載されている。執筆者は石橋正行, 須藤弘樹, 蔭山一人。和名, 学名のみでオーサーネームは省略してある。標本の収蔵場所については不明

確。ここは狭山丘陵の西部、稜線は埼玉との県境になり、都立野山北公園がある。ここにはタチスゲ、オオニガナなど東京都の絶滅危惧種が生育しており、重要な拠点でもある。

#### iv) 島嶼部

○小笠原諸島／『小笠原諸島自然環境現況調査報告書—小笠原の固有植物と植生—』（小野幹雄・小林純子他 1983年 東京都環境保全局自然保護部緑政課 262頁）、『小笠原固有植物保全対策緊急調査報告書』（小野幹雄・奥富 清・木村 充・小林純子・豊田武司・山崎 敬他 1985年 東京ランドスケープ研究所）。小笠原諸島のシダ植物について伊藤 洋（1969年）、山崎 敬（1970年）、大場秀章（1971年）がまとめておられる。

○伊豆諸島／『大島・海のふるさと村ビジターセンター基本計画調査報告書』（大島自然調査会 1988年 東京都大島公園事務所 408頁）、『東京都大島町史 自然編』（大島町史編さん委員会 2000年 東京都大島町 272頁）、『八丈島誌（改訂増補版）』（第5章植物 53～78頁 1993年 東京都八丈島八丈町教育委員会（編著） 848頁）などがある。伊豆諸島のシダ植物については大場秀章（1967年）がまとめておられる。また、佐橋紀男（1979, 1983年）はハナワラビ属について発表されている。

### (B) 研究機関

以上のほか、個々の資料は多数あり、植物を対象とした地域的団体も多数あるが、冒頭にも述べたが、東京都全域を対象としての植物関係の調査、研究会というべきものはない。

東京都に本部をおく団体で、日本全域を対象としている団体はあるが、東京都の植物誌をつくる目的のためにあるわけではない。区市町村単位では、東京都環境局「自然保護民間団体名簿」に記載されている団体の中で植物分類、調査研究にあたっているとと思われる団体は多数あると思われるが、目的がそれぞれに違い、東京都の植物誌作成を目的としているものではない。

博物館では、東京都高尾自然科学博物館が唯一の東京都の自然系博物館でありながら、現在東京都では切り捨てを検討中と聞く。ますます、危機的な状況といわざるを得ない。

植物を研究している大学、博物館、植物園としては、東京大学、東京都立大学、東京農工大学、東京農業大、東京学芸大学、東京薬科大学、国立科学博物館、東京都高尾自然科学博物館などがあり、市町村単位では（財）多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）博物館部門、（財）府中市郷土の森博物館などがある。

### (C) 標本庫

東京大学総合研究博物館（TI）、東京都立大学理学部牧野標本館（MAK）、国立科学博物館（TNS）、東京都高尾自然科学博物館、（財）多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）、（財）府中市郷土の森博物館などがある。

### (D) レッドデータブック

『多摩川水系東京都地域内の絶滅危惧植物の現況に関する調査研究』（小野幹雄他 1991年）、『東京都の保護上重要な野生生物種—東京都レッドデータブック普及版—』（東京都環境保全局自然保護部 1999年 150頁）。

### (E) 植物群落

『東京都現存植生図』は1974年に刊行されたが、この時は小笠原諸島が含まれていない。調査担当は区部を宮脇 昭、奥田重俊、多摩地区を奥富 清、辻 誠治が担当している。1987年には『東京都植生調査報告書』において、本州部分の変化も含めて記載された。その後『東京都現存植生図』は、1988年に環境庁によって、また1996年から東京都によって発行されている。1978年以降、環境庁特定植物群落調査によっても、重要な植物群落について記載がなされている。小笠原諸島については、1991年刊行の『第二次小笠原諸島自然環境現況調査報告書』に植生図として掲載されている。

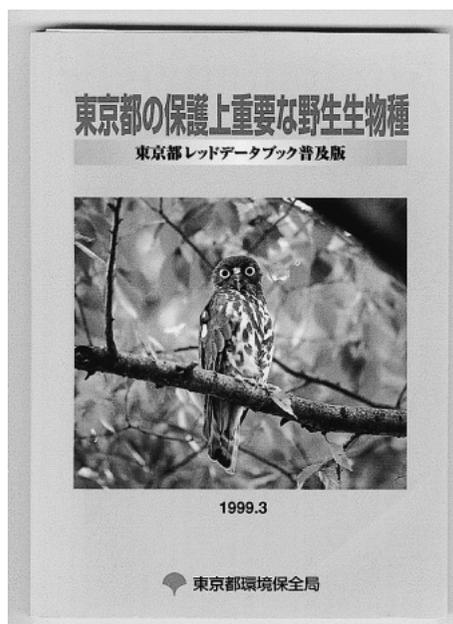


図 69. 東京都レッドデータブック普及版

多摩川河川敷など限られた地域での詳細な群落記載は多数あり、個人あるいは小グループでの研究は、植物社会学的記載の他にも、さまざまな視点からなされている。

○後書き

個人的に得られた資料をもとに記載しました。たいへん不十分な情報で申し訳ありません。各大学関係機関や博物館関係の専門研究者の持ち合わせる情報については、研究者間で入手できると思いますので、そこまであえて踏み込みませんでした。

東京都全域について、早急に総合的な調査が必要であることは申すまでもありませんが、区部や、島嶼部を含めると一朝一夕にできる問題ではなく、公的な機関、大学、博物館の研究者、地域における研究者の組織づくりから始める必要があるように思われます。本土部分においても、各区市町村が個々の目的に応じて自然に関する資料を作成しており、全体に統一したものになっていないのが実情です。標本にしても出来るだけ一ヶ所または二〜三ヶ所に集積できるとよいのですが、これもばらばらです。したがって資料収集だけでも上記のとおり、容易ではありません。本来なら東京都が主導で植物誌作成に向けての施策を講ずるべきで、都の施設、例えば東京都高尾自然科学博物館、都立大学などの拡充、活動の活性化を計るための施策が不可欠だと思います。

(A~D および後書きは畔上能力：〒193-0932 東京都八王子市緑町 900-16 TEL & FAX:0426-27-6388.  
E は森廣信子：〒193-0844 東京都八王子市高尾町 2436 東京都高尾自然科学博物館 TEL:0426-61-0305 FAX:0426-62-9407)

## 14. 神奈川県

田中徳久

### (A) 植物誌

2001年に神奈川県植物誌調査会(編)『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県立生命の星・地球博物館 A4判 1,582頁)が刊行された。当初の計画では、神奈川県植物誌調査会(編)『神奈川県植物誌 1988』(神奈川県立博物館)を増補、改訂する予定であったが、最終的には、記述や植物画の多くが新しく書き改められ、分布図も標本採集地を国土基本メッシュ(3次メッシュ)で表示するなど、まったく新しい植物誌になった。県単位の植物誌としては、松野重太郎(編)『神奈川県植物目録』(1933年 神奈川県博物調査会), 神奈川県博物館協会(編)『神奈川県植物誌』(1958年 神奈川県博物館協会), 宮代周輔『神奈川県植物目録』(1958年 自費出版), 『神奈川県植物誌 1988』に続いて5冊目の植物誌である。

県内の地域フローラをまとめた古いものには、松野重太郎『横浜附近植物目録』(1917年 校友会雑誌第24巻), 帝国女子医学薬学専門学校校友会(編)『武蔵登戸附近植物目録』(1932年 帝国女子医学薬学専門学校校友会), 増島弘行・石渡治一『三浦半島植物誌』(1950年 横須賀郷土文化研究室), 出口長男『多摩丘陵帷子川流域の植物』(1953年 自費出版), 松浦茂寿『箱根植物目録』(1958年 箱根博覧会), 林 弥栄他『丹沢山塊の植物調査報告』(1961年 林業試験場), 出口長男『横浜植物誌』(1968年 秀英出版)などがあり古き良き時代の貴重な記録となっている。また、出口長男『神奈川県帰化植物』(1979年 自費出版)は、帰化植物の多い神奈川ならではの植物誌であるといえる。

近年では、諏訪哲夫(編)『座間市の植物』(1983年 座間市教育委員会), 『相模原市の植生』(1988年 相模原市教育委員会), 大和市動植物調査会(編)『大和の植物』(1991年 大和市教育委員会), 川崎市青少年科学館(編)『1991川崎市自然環境調査報告書II, III』(1991, 1994年 川崎市教育委員会), 丹沢植物調査団(編)『厚木市荻野の植物1-2』(1995-1996年 厚木市教育委員会), 厚木市教育委員会(編)『厚木市相模川の動植物』(1998年 厚木市教育委員会), 愛川町郷土博物館展示基礎調査会(編)『愛川町の植物』(1997年 愛川町教育委員会), 綾瀬市(編)『動物・植物データ集』(2000年 綾瀬市), 綾瀬市(編)『綾瀬市史8別編自然』(2001年 綾瀬市)など、市町村域あるいは小地域の植物相調査が相次いで公表されており、現在『横浜植物誌 2002』も刊行準備中である。さらに、『湘南植物誌I-VI』(1985-2001年 平塚市博物館), 小崎昭則・北川淑子(編)『多摩丘陵のシダ植物—横浜市緑区・旭区を中心として—』(1994年 多摩丘陵植物調査会), 勝山輝男他『丹沢山地の種子植物・シダ植物』(1997年 『丹沢大山自然環境総合調査報告書』所載)など、市町村域を超えた範囲を対象とするものもいくつかある。

### (B) 研究機関

神奈川県立生命の星・地球博物館には、「神奈川県植物誌調査会」の事務局があり、厚木市郷土資料館、川崎市青少年科学館、相模原市立博物館、平塚市博物館、横須賀市自然・人文博物館、横浜市こども植物園などと、『神奈川県植物誌 2001』の刊行後も連携をとり、継続的に植物相調査と標本の集積を進めている。「神奈川県植物誌調査会」では、ニュースレター『FLORA KANAGAWA』を発行し、情報を発信し続けている。また、これらの博物館等の研究報告や調査報告書なども貴重な情報源である。なお、生命の星・地球博物館には、箱根の植物研究で知られる澤田武太郎の蔵書が収蔵されており、「澤田文庫」として公開され、活用されている。

大学では、東京農業大学、日本大学などに分類学関連の、横浜国立大学に植生学関連の研究室があり、最近では明治大学の保全生態学関連の研究室でも植物に関連した研究が行なわれている。また、神奈川県自然環境

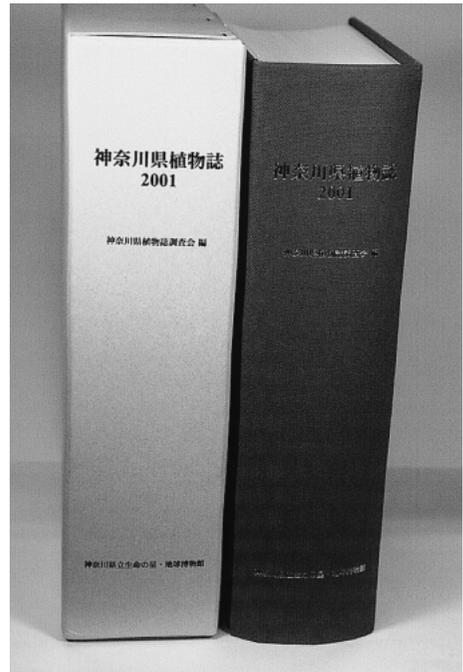


図 70. 神奈川県植物誌 2001

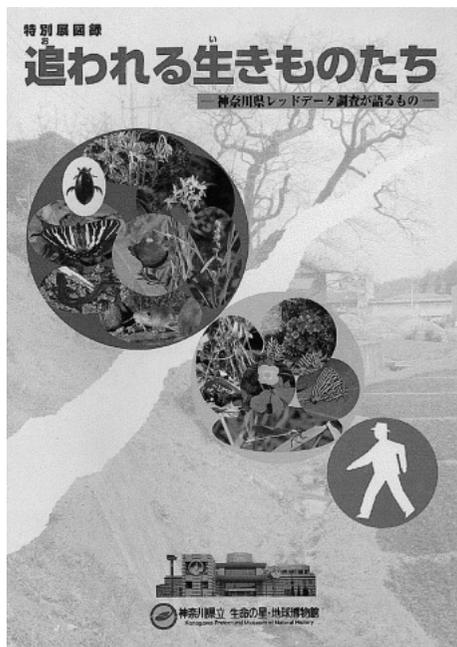


図71. 神奈川県立生命の星・地球博物館 特別展図録 追われる生きものたち

物館 現在は絶版)が刊行されている。また、神奈川県立生命の星・地球博物館の特別展の図録として『追われる生きものたち—神奈川県レッドデータ調査が語るもの—』(1996年 神奈川県立生命の星・地球博物館)がある。現在、2005年度を目処に、レッドデータブックの改訂に取り組んでいる。

#### (E) 植物群落

横浜国立大学におられた宮脇 昭博士とその研究室のメンバー、協力者による『神奈川県の実存植生』(1972年 神奈川県教育委員会)、『神奈川県の潜在自然植生』(1976年 神奈川県教育委員会)をはじめとし、『箱根・真鶴半島の植生調査報告書』(1969年 神奈川県教育委員会)、『逗子市の植生』(1971年 逗子市)、『横浜市の植生』(1972年 横浜市)など数多くの報告がある。また、近年では『相模原市の植生』(1988年 相模原市教育委員会)、『大磯町の植生』(1991年 大磯町)、『横須賀市の植生』(2001年 横須賀市)などの地域植生誌のほか、『大和市史8 別編自然』(1996年 大和市)、『綾瀬市史』(2001年 綾瀬市)にも植物群落の記載がある。さらに、環境庁(現環境省)による自然環境保全基礎調査の一環として、特定植物群落調査が実施されている。

県指定の天然記念物については『天然記念物総合診断報告書(第1-4報)』(1991-1994年 神奈川県教育委員会)があり、社寺林については、『神奈川県社寺林調査報告書 第一次調査』(1974年 神奈川県教育委員会)、『神奈川県における社寺林の植物社会学的調査・研究—神奈川県社寺林調査報告書 第2次調査—』(1979年 神奈川県教育委員会)がある。また、丹沢山地については、『丹沢大山区学術調査報告書』(1964年 神奈川県)、『丹沢大山自然環境総合調査報告書』(1997年 神奈川県)が、真鶴半島については、『真鶴半島総合調査報告書』(1994年 神奈川県教育委員会)があり、『箱根湿生花園研究報告(第1-7号)』(1983-1995年)には、群落の記載だけでなく、草原・湿原の維持に関する実験の成果も掲載されている。

(田中徳久 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館 TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846 E-mail: tanaka@nh.kanagawa-museum.jp)

保全センターや(財)国際生態学センターなどの研究機関もある。

アマチュアの同好会には、日本最初の植物同好会であると言われる「横浜植物会」があり、年報と会報を発行している。ほかに「さがみ野植物友の会」、「みちくさ会」(鎌倉)、「茅ヶ崎植物会」など、多くのグループが活動している。

#### (C) 標本庫

「神奈川県植物誌調査会」により収集された『神奈川県植物誌 1988』、『神奈川県植物誌 2001』の証拠標本は、生命の星・地球博物館(KPM)のほか、厚木市郷土資料館、川崎市青少年科学館、相模原市立博物館、平塚市博物館、横須賀市自然・人文博物館、横浜市こども植物園に収蔵されている。また、これらの標本庫には、それ以外の標本も収蔵され、それぞれに特色ある収集活動を進めている。

生命の星・地球博物館には20万点を超える標本があり、県内産ばかりでなく、沖縄・小笠原から北海道まで、広く各地の標本が集積されている。特に古瀬 義、大場達之、高橋秀男が採集した標本は膨大で、今となっては貴重なものを多く含む。

#### (D) レッドデータブック

1995年に神奈川県レッドデータ生物調査団(編)『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』(神奈川県立生命の星・地球博

物館 現在は絶版)が刊行されている。また、神奈川県立生命の星・地球博物館の特別展の図録として『追われる生きものたち—神奈川県レッドデータ調査が語るもの—』(1996年 神奈川県立生命の星・地球博物館)がある。現在、2005年度を目処に、レッドデータブックの改訂に取り組んでいる。

現在、2005年度を目処に、レッドデータブックの改訂に取り組んでいる。

## 15. 新潟県

石沢 進

## (A) 植物誌

野田光蔵のまとめた『越後の植物誌 I (1968年), II (1969年), III (1969年), IV (1971年)』(現在は絶版)が近年の刊行である。B5判でI~IVの4分冊総頁376で、コケ植物以上がリストアップされている。県内の最初の植物誌は、中村正雄(1925年)の『新潟県天産誌』であり、ほとんどの分類群が掲載されている。新潟県には島嶼があり、佐渡ヶ島の植物相(以下高等植物を対象としたもの)は北見秀夫(1963年『佐渡博物館研究報告 第5集』)が、粟島の植物相は池上義信(1972年『新潟県文化財調査年報』)が記載している。

県内の市町村史の自然編の中で植物相をまとめた市町村は次のようである。北蒲原郡笹神村(2002年)、新潟市(1991年)、西蒲原郡黒崎町(1994年、現新潟市)、西蒲原郡吉田町(2002年)、三島郡和島村(1996年)、三島郡越路町(1998年)、十日町市(1992年)、上越市(2002年)などである。市町村の教育委員会が中心でまとめた植物相には、小千谷市(1976年)、中魚沼郡津南町(1994年)などがある。県内の主な山体の植物相については、岩船郡朝日村朝日岳(1975年 高橋秀男)、岩船郡荒川町高坪山(1994年 柴田 治)、村上市臥牛山(1968年 工藤孝雄)、西蒲原郡巻町角田山(1976年 池野一男・白崎 仁)、弥彦山(1981年 伊藤 至)、三島郡出雲崎町小木ノ城山(1993年 石沢 進)、栃尾市守門岳(1970年 西山邦夫)、南魚沼郡塩沢町金城山(1977年 尾崎富衛他)、十日町市当間山(1973年 西山邦夫)、西頸城郡青海町黒姫山(1978年 石沢 進)などがある。上記以外にも溪谷や小地域における植物相が報告されている。

1980~2000年にわたって植物同好じねんじょ会が池上義信(監修)・石沢 進(編集)の『新潟県植物分布図集 第1~20集』(A4判)を刊行して1,250種の分布図を公表している(一部品切れ, 11集以後一部コケ植物を含む)。その分布図を引用して『ユキツバキを指標とした植物分布—新潟県における日本海要素の分布類型—』(1996年 石沢 進 学会出版センター)を出版している。植物同好じねんじょ会では、県内の植物誌のまとめを目指して、分布図集の索引の刊行に他の種を加えてチェックリストを計画中である。

野田光蔵が「日本海の高藻」について『日本海』No. 1(1967年), No. 2(1968年)や下記『新潟大学理学部紀要』などで分布や新種を報告している。シダ植物については牧野恭次(2001年)が『新潟県の羊歯植物』をまとめている。

一般向けに書かれた新潟県に関する植物の図書は、山本敏夫の『新潟県野草図鑑 I・II』(1998年 改装版第2刷 新潟日報事業社)、山本敏夫の『新潟県樹木図鑑』(1999年 改装版第2刷 新潟日報事業社)、松田一郎の『新潟県のキノコ』(1997年 第6刷 新潟日報事業社)、片桐 元の『山の妖精たち 奥阿賀の野草』(1998年 新潟日報事業社)などがある。小川清隆の『雪国の植物誌』(1990年 八坂書房)では季節ごとに主な植物を紹介し、越後における分布情報を加えている。酒井昭治の『新潟県の海浜の植物』(1987年 北都)では多数の写真を掲載し、海岸に生育する植物を紹介している。写真を多く使い地域の植物を紹介したのものには、『越後 新津丘陵に生きる里山の植物』(1996年 石沢 進(監修) 新潟県都市緑化センター)、『栃尾の植物』(1984年 笹岡 茂・種村清作)、『柏崎の植物』(1981年 柏崎の植物編集委員会)などがある。各地の地区理科センターで刊行した写真と簡単な解説を加えた案内書も多く出ている。

## (B) 研究機関

新潟大学理学部生物学科では『新潟大学理学部紀要 Ser. D (Biol.)』第1号(1964年)から第31号(1994年)まで刊行し、植物では主に海藻類の分類に関する報告がある。また1984~1992年の間に『新潟県植物分布調査記録1~3集』の報告書、理学部弥彦植物調査施設から1994~1997年に『新潟: 弥彦連山の植物 第

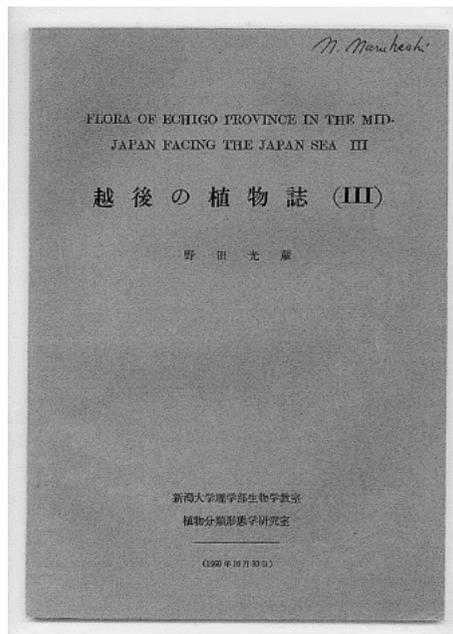


図 72. 越後の植物誌 (III)

1~4集』の報告書を刊行している。新潟大学では、森田龍義によりタンポポ属、ニガナ属などの研究が進められている。上越教育大学では、主に五百川裕により県内の植物相に関する新知見が報告されている。

長岡市立科学博物館は1951年に開館し、50年を迎えて『長岡市立科学博物館50年のあゆみ』の記念誌(2001年)を発行している。また、同博物館の『長岡市立科学博物館研究報告』第37号を2001年に出版している。また、博物館友の会の会誌『NKH』は2001年に81号を数えている。

財団法人佐渡博物館では、『佐渡博物館研究報告』を出版し、第5集(1963年)に前記北見秀夫の『佐渡の植物』、第8集(1981年)に本間建一郎の『佐渡のコケ植物』を掲載している。

新潟県教育委員会文化行政課では『新潟県文化財年報』第1~22(1954~1983年)で巨樹名木(1956年)、各地の植物相(1961, 1966, 1972, 1977, 1978年)や群落(1975, 1979, 1981年)を断片的に取り上げて掲載している。

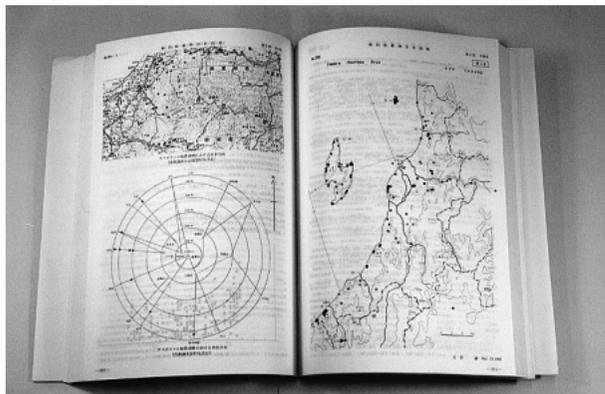


図73. 新潟県植物分布図集

「新潟の自然」刊行委員会では『新潟の自然』第1集(1968年)、第2集(1972年、地質が主)、第3集(1977年)を出版した後、活動していない。

新潟県生物教育研究会の『新潟県生物教育研究会会誌』は2002年に37号を数え、植物関係の報告も掲載されている。また、県内に関連する年次ごとの文献紹介も行っている。

新潟県生態研究会(上越生態研究会の改称)の『新潟県生態研究会誌』第1号(1979年)、第2号(1982年)、第3号(1986年)、第4号(1989年)、第5号(2002年)が刊行されている。また、毎年調査会を開催して活発に活動している。

植物同好じねんじょ会は上記分布図集の刊行の他、会報『じねんじょ DIOSCOREA』を2000年に第23号を刊行し、県内各地の植物相を掲載している。また、じねんじょ会の報告書として『飯豊連峰二王子岳の動物(両生・爬虫類)と植物』(岩沢久彰・石沢進(編)1989年)、『菅名岳の植物と動物(両生・爬虫・陸産貝類)』(石沢進(編)1991年)などがある。植物同好じねんじょ会として、春から秋にかけて月1回の観察会を開催して会員の向上に努めている。

佐渡の植物刊行会では、主に伊藤邦男により『佐渡の植物』第1集(1982年)、第2集(1984年)、第3集(1987年)、第4集(1987年)、第5集(1990年)、第6集(1990年)を刊行している。ただし第1, 2集は佐和田町立佐渡地区理科教育センター・両津市立理科教育センターなどが発行人である。

新津市は新津植物資料室(積雪地域植物研究所)を2001年に開設し、『新津植物資料室年報2001』(2002年)の他、『新潟県植物分布調査記録4, 5集』(2001, 2002年)を出版している。

植物に関する同好会として、東蒲自然同好会があり、会誌『四季のつどい』は、2002年に第28号を出版し、また、『東蒲原郡産植物目録』(2001年)をまとめている。

柏崎市立博物館では、『柏崎・刈羽地域の貴重な植物(群落)』(2001年) 相沢陽一(監修)のカラー判で自然の案内書を刊行している。また、柏崎植物友の会では、『柏崎・刈羽の山野草』(1986年 柏崎植物友の会)、『柏崎・刈羽の樹木』(1991年 柏崎植物友の会)、『柏崎・刈羽のきのこ』(1991年 柏崎植物友の会)など一般書を出版している。

上越植物友の会は、会誌『ろうたす』の発刊が継続し、2001年で26号を数えている。小国生物友の会では、会誌『かたこ』第46号を2002年に刊行している。

### (C) 標本庫

長岡市立科学博物館に約7万点の標本があり、その内訳は吉原正秀、西山邦夫他の県産植物3万点のコレクションと牧野恭次のシダ植物4万点のコレクションが収められている。問い合わせにより閲覧可能である。

新津植物資料室には、主に新潟県とその周辺の植物標本が約36万点(ただし、新聞紙の間に保存)の他、新潟大学の標本(高等植物5万点、日本海産海藻2千点)も同所で保管している。事前の連絡により閲覧も可能である。

新潟市の東地区公民館には、池上義信のコレクション（高等植物 10 万点以上、蘚苔類 7 万点以上）がある。その他未整理の標本多数収められている。

新潟薬科大学には、白崎 仁の高等植物 4 万点、コケ植物 4 万点のコレクションがあり、問い合わせにより閲覧可能である。

新潟大学教育学部高田分校では、岩野俊逸（1974 年）が吉川純幹のコレクションを『吉川標本目録』としてまとめたが、上越教育大学への編成変えにより、標本は分散し、主に東北大学に移管し、一部新潟大学に保管されている。

#### (D) レッドデータブック

2001 年に『レッドデータブックにいがた』（新潟県環境生活部環境企画課）が刊行され、その中には、維管束植物については、絶滅 1 種、野生絶滅 2 種、絶滅危惧 350 種、準絶滅・地域個体群 314 種、合計で 667 種を選定している。新潟県では、自然環境保全の目的で『新潟のすぐれた自然』（1983 年）、『続新潟のすぐれた自然』（1993 年）を刊行し、その中に植物編があり、地域、群落、種のランクからみた貴重な植物の生育地をリストアップしている。

#### (E) 植物群落

宮脇 昭（編）（1985 年）の『日本植生誌 中部』の中に県内の植物群落が記載され、現存植生図が示されている。1978、1988、1998 年に行われた環境庁特定植物群落調査により、県内の重要な植物群落が記載され、見直しも進められている。

新潟県ではブナ林の緊急調査を行い、『ブナ自然林保全対策緊急調査報告書』を 1987 年にまとめ、県内のブナ林の分布の実態を把握している。

地域ごとの植生については、宮脇 昭（編）（1968 年）『越後三山・奥只見周辺の植生』（新潟県・福島県 日本自然保護協会）、大場達之（1975 年）『朝日山系の植生』（日本自然保護協会）、新潟県生態研究会（1985 年）『妙高高原の植生』などがある。また、市町村史の中には植生の項目に群落や植生図を掲載しているものもある。

（石沢 進：〒956-0816 新津市東町 2 丁目 5-6 地域学園内 新津植物資料室 TEL & FAX：0250-22-9686）

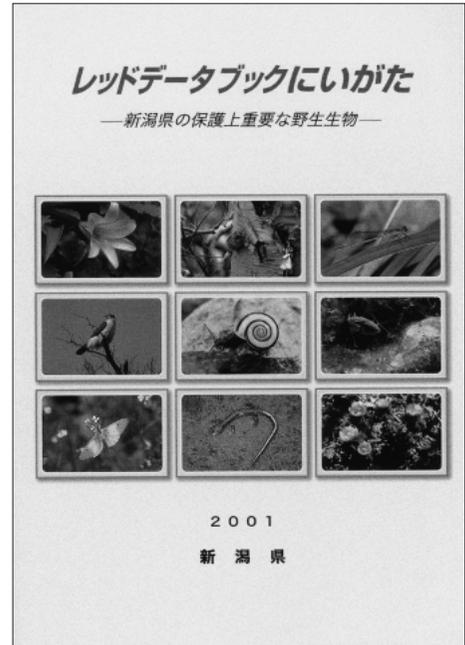


図 74. レッドデータブックにいがた

## 16. 富山県

中田政司

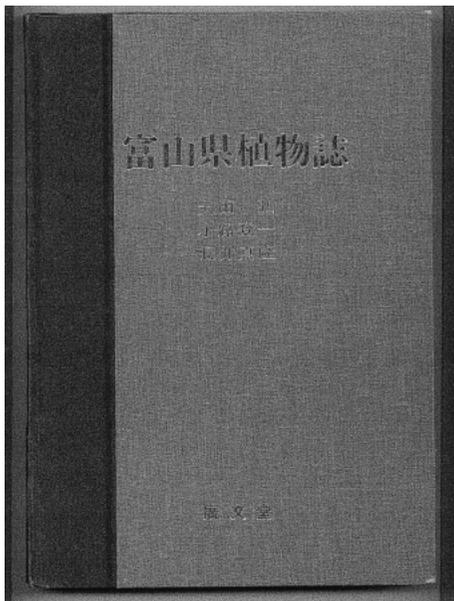


図 75. 富山県植物誌

### (A) 植物誌

1983年に置県100年を記念して、大田 弘・小路登一・長井真隆『富山県植物誌』(廣文堂 現在は絶版)が刊行された。B5判、430頁で、富山県の自然環境、植生概要、植物群落の記述に続き、シダ植物以上2,445種類がリストアップされている。生育域が群落学的な視点で記載されているのが特徴で、分布図や標本の引用はない。約20年が経過し、フローラに追加される植物や新しい情報が蓄積されてきたため、富山県中央植物園が事務局となって新しい富山県植物誌の編纂が計画されている。県内の地域フローラとしては、堀 与治『福光町自然植物誌』(1996年)、堀 与治『砺波地方の植物』(2001年)がある。中川定一『氷見市史9 資料編七 自然環境』の第3章植物(1999年)には氷見市の植物フローラがまとめられている。

一般向けに書かれた富山県の植物に関する図書では、進野久五郎『富山の植物』(1975年 巧玄出版 絶版)、長井真隆『富山のひとと植物』(1974年 KNB 興産 絶版)、長井真隆『とやま植物誌』(1994年 シー・エー・ピー)、鳴橋直弘(編)『とやま植物物語』(2000年 シー・エー・ピー)などがある。また、立山の花についての写真集、解説書も数冊発行されている。

### (B) 研究機関

富山大学理学部生物学科に「植物地理・分類学会」の事務局があり、会誌『植物地理・分類研究』の発行が行われている。また、富山大学理学部生物学科増田研究室には「富山県生物学会」の事務局がある。会誌『富山の生物』は2001年で40号を数え、動植混成の編集ながら富山県の自然史研究では重要な雑誌となっている。自然史系博物館としては富山市科学文化センターがあり、市立ながら全県をカバーする調査研究活動を行っている。『富山市科学文化センター研究報告』が年1回発行されているほか、『富山市呉羽丘陵自然環境調査報告』(1994年)、『常願寺川流域(有峰地域)自然環境調査報告』(1996年)などの報告書が発行されている。調査研究事業を行うユニークな植物園として県立の富山県中央植物園があり、毎年『富山県中央植物園研究報告』を発行している。『Curtis's Bot. Mag.』(1867~1984年)、中国の植物学関係雑誌・図書、マイクロフィッシュ(外国雑誌、標本集)などの文献が充実しており、部外者でも連絡すれば閲覧できる。

アマチュアの植物同好会としては「富山県植物友の会」があり、年間約30回の野外観察会のほか、講演会、展示会などの活動を行っている。『会誌』には植物に関する観察記録や野外観察会の報告が掲載され、2001年で42号になる。

### (C) 標本庫

富山市科学文化センター(TOYA)に8万点の標本があり、進野久五郎、大田 弘、長井真隆らの県産植物を中心としたコレクションが収められている。前2者のコレクションは、それぞれ『富山市科学文化センター収蔵資料目録』の第1号(1987年)、第8号(1995年)にまとめられている。標本は独自のシステムでデータベース化されており、富山県の植物相研究に役立っている。将来は公開も検討されている。富山県中央植物園(TYM)には3万点の標本がある。古瀬 義、里見信生らの標本は整理されているが、大部分は研究中の未整理標本である。どちらも閲覧可能である。

### (D) レッドデータブック

2001年に富山県自然保護課が独自の基準で県版レッドリストを制定し、インターネット上で公開している(<http://www.pref.toyama.jp/sections/1709/redlist2.htm>)。植物は387種類が選定されている。2002年に発

行された『富山県の絶滅のおそれのある野生生物（レッドデータブックとやま）』では一部の種・ランクの見直しが行われ、植物種は376種に変更されている。富山県刊行物センター（〒930-0006 富山市新総曲輪4-18 富山県民会館1階 TEL 076-432-3111 内線100）で入手できる。

#### (E) 植物群落

宮脇 昭（監修）による『富山県現存植生図』が1975年に、また宮脇 昭（編）の『富山県の植生』が1977年に富山県から発行されている。1979, 1988, 1998年に行われた環境庁特定植物群落調査により、県内の重要な植物群落の記載と定期的な状況の把握がなされている。森林群落については県林業試験場、富山県高教研生物部会、富山県中央植物園などによる研究が行われており、市民グループによる高山環境の植生調査も行われている。

（中田政司：〒939-2713 富山県婦負郡婦中町上轡田42 富山県中央植物園 TEL：076-466-4187 FAX：076-465-5923 E-mail：nakata@bgty.org）

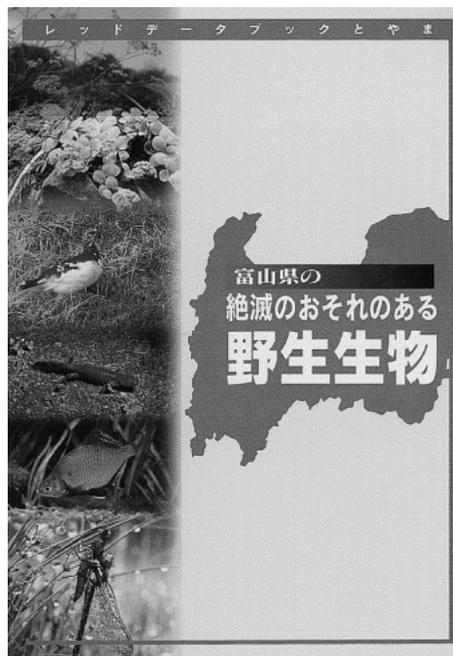


図 76. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物

## 17. 石川県

古池 博

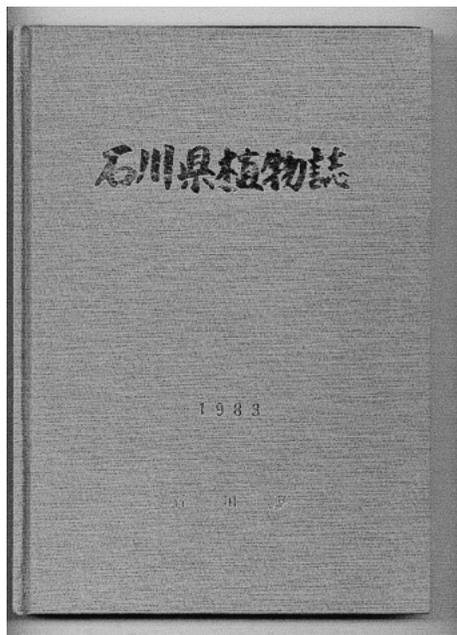


図 77. 石川県植物誌

## (A) 植物誌

石川植物の会 (編)『石川県植物誌』(1983 年 227 頁+26 図版 石川県)が唯一のものである。記載された維管束植物数は 1,908 種であるが、現在、確認できる種数は 2,188 種なので、内容はやや古い。図鑑には、小牧 旌『加賀能登の植物図譜』(1987 年 273 頁+8 図版 加賀能登の植物図譜刊行会)がある。2,200 図(種類)が掲載されている。木本植物では、里見信生(編)『石川県樹木誌』(1977 年 322 頁+9 図版 石川県林業試験場)と、里見信生・小牧 旌『石川県樹木誌図譜』(1987 年 48 頁+483 頁 石川県林業試験場)がある。また、石川県地域植物研究会(編)『石川県樹木分布図集』(1994 年 7 頁+489 頁+10 環境要因分布図 石川県林業試験場)は、自生種 447 種の水平・垂直分布図を掲載している。末尾には、石川県の植物地理区分に関する到達点を、叙述している。草本植物についても、石川県地域植物研究会により、1994 年度より二十年計画で、共同研究「石川県における草本植物の分布の研究」が進行中で、単子葉植物については、完成に近づいている。

蘚苔植物は、若干の地域についての目録がある。輪藻植物は、今堀宏三「石川県産輪藻類の沿革及び特異性 (1), (2)」(1953 年『北陸の植物』2:43, 57 頁)の報文がある。海藻類では、

能登自然史調査研究会(編)『石川県の浅海域の生物』(1998 年 90 頁+8 図版 石川県環境安全部自然保護課)掲載の目録が最新のもので 309 種を掲載している。菌類は、石川きのこ会(編)『石川県のキノコ』(1999 年 189 頁 石川県環境安全部自然保護課)が最新のもので、1,105 種類が記録され、図鑑には、池田良幸『石川のきのこ図鑑』(1996 年 255 頁+80 図版 北国新聞社出版局)がある。

地域の植物誌では白山には研究・調査の歴史があり豊富な資料がある。総説では、白山総合学術書編集委員会(編)『白山—自然と文化—』(1992 年 514 頁(12 図版を含む)+14 付図 北国新聞社)の第 2 編白山の生物の「植物と植生」(白山植物目録を含む)があり、文献目録も備わっている。維管束植物目録は、追補が作成されている。石川県白山自然保護センター『白山高等植物インベントリー調査報告書』(1995 年 200 頁 白山自然保護センター)は、高山帯を中心とした調査報告書である。他の地域や市町村の地域植物誌は多数あるが、最近のものでは、金沢みどりの調査(編)『金沢市植物調査報告書(丘陵および市街地)』(2002 年 56 頁 金沢市)がある。各市町村などの地域植物誌については、『石川県植生誌』の末尾に文献目録がある。秋山博之他『金沢大学丸の内キャンパス(金沢城址)の植物』(1993 年『金沢大学教育開放センター紀要』13)は、1950, 1977, 1992 年に行われた維管束植物の種類数の変遷を、検討している。

石川県の植物相の特徴をまとめた総説には、古池 博「石川県の植物相」(1996 年 石川の生物編集委員会(編)『石川の生物』17-31 頁)がある。普及・解説を目的に書かれた単行本は少ないが、石川植物の会『石川県の植物』(1991 年 112 頁 橋本確文堂)はその一つである。動植物を網羅したものでは、新版石川の動植物編集委員会『新版石川の動植物』(1999 年 108 頁 石川県環境部自然保護課)や、石川の生物編集委員会『石川の生物』(1990 年 304 頁 石川県高等学校教育研究会生物部会)が、概要を知るには役立つ。石川県の自然史を主な対象とした雑誌に『自然人』(「いしかわ人は自然人」)があり、現在、第 59 号(2002 年 4 月)まで出ている(橋本確文堂)。白山自然保護センター(編)『白山の人と自然「植物篇」』(1992 年 145 頁)は白山自然保護センター発行の普及誌『はくさん』所載の植物分野の論文・解説文のうち初期のものを編纂したものである。

## (B) 研究機関

## i) 大学

金沢大学理学部・大学院の植物自然史関係は組織上複雑なので、総称して植物自然史教室（研究室）と呼ぶことにする。金沢大学発足とともに、前身の植物地理分類教室（第一講座）が置かれ、北陸や日本海側の植物相・植生相の研究に大きな役割を果たしてきた。近年はいわゆる「白山プロジェクト」（白山山系における高山植物の多様性の解明と遺伝子資源の保全法の確立に関する研究）のような大規模な総合的研究や、分子データによる分類群の系統・分布の解明などの、研究活動が活発におこなわれている。本誌（『植物地理・分類研究』）は、教室の誕生とほぼ同時に「北陸の植物」の名称で、正宗巖敬教授によって創刊、発展してきたものであるが、現在は事務局が富山大学理学部に移転している。学内共同研究施設の自然計測応用研究センター臨海実験施設（もとの附属能登臨海実験所）は富山湾内浦の九十九湾にある。石川県農業短期大学の農業資源研究所遺伝資源部門は、白山の高山植物など野生植物の増殖・保全に関する研究をすすめている。金沢美術工芸大学デザイン科には環境デザイン専攻がおかれている。

## ii) 県立の植物自然史関連機関

石川県林業試験場は森林についての唯一の専門的試験研究機関であり、石川県産の木本植物の分類・分布・群落の研究著作物を系統的に発行してきた。石川県白山自然保護センターは、白山国立公園・県立自然公園の自然保護行政と調査研究を目的とする機関である。普及誌に『はくさん』のほか『白山の自然誌』シリーズがあり、研究・調査の成果は逐次刊行物『白山自然保護センター研究報告』に発表されている。また、各分野の研究者を組織した「白山自然保護調査研究会」の事務局がおかれている。国土交通省白山砂防科学館は、白山砂防の普及教育施設であるが、植生などに関する展示もおこなっている。のと海洋ふれあいセンターは海洋に関する普及活動と調査研究をおこなう施設で、海藻類の自然史研究を中心にする。石川県自然史資料整備室は、石川県教育委員会生涯学習課の施設である。これを拡充整備し、2005年に開館が予定されている自然史資料館（仮称）は、自然史博物館への発展を展望したもので、さまざまな研究団体の活動と共同・協力の拠点として大きな役割を果たすことが期待されている。

## iii) 植物園など

石川県林業試験場（石川郡鶴来町三宮）には、樹木園・展示館がある。面積は試験林などを加えて42ha余りで、サクラ属・ツバキ属のコレクションは、全国的水準のものである。金沢大学自然計測応用研究センター植物園（もとの理学部附属植物園）（金沢市角間町）は、主に実験植物園として機能しているが、キャンパスそれ自体が金沢市郊外の広大な里山地域＝角間区域にあるので、植物園の役割をも果たしている。移転以前の同キャンパスに生育していた維管束植物数は465種であった（里見信生他『金沢大学移転地（角間）の調査報告書』（1984年 84頁+4図版 金沢大学理学部）が、最近の調査では576種が確認されている金沢大学総合移転実施特別委員会・理学部附属植物園『金沢大学総合移転第Ⅱ期計画地内植物調査報告書』（1996年 73頁+1図版）。金沢大学理学部附属植物園では『金沢大学附属植物園年報』が第25号まで発行されており、地域の植物に関わる論文が多い。金沢大学薬学部（金沢市宝町）には、附属薬用植物園（石川県産の植物種約1,000種）があり、近く角間へ移転する。北陸大学薬学部（金沢市金川町）にも附属薬用植物園（保有植物種数約1,000種）がある。なお、旧金沢大学丸の内キャンパス（金沢市丸の内）は、金沢大学の移転とともに金沢城公園となった。理学部附属植物園があった東丸・本丸は、そのまま保全されることになった。本多の森・兼六園・金沢城公園は、金沢市街中心部の都市緑地である。従来から、河岸段丘崖の「緑の回廊」によって山地と結合した、「緑の心臓」として機能してきたが、生物多様性の保全のために、今後、ますます重要な役割を果たすことが期待されている。

## iv) 研究団体・普及団体

「石川県地域植物研究会」は、石川県をフィールドとしている研究団体で、会員の情報交換のほかに調査研究活動における相互協力、長期・短期の共同研究を実施している。データ処理はすべて電子化して実施しているので、結果的に主要な標本庫のデータベース化を進めていることになる。ほかに、1997年1月に発生したナホトカ号の重油汚染による、石川県沿岸の植物種／植物群落の影響調査を継続するなど、特別な分野や短期間の調査を実施している。「石川植物の会」は、教職員の自主的研修を目的とする団体である。石川県植物誌改訂版の発行をめざして、標本・データを蓄積している。「金沢みどりの調査会」は、金沢市のインベントリー研究の共同実施を目的とする団体である。一般市民が身近な植物の調査・標本採集をおこなうことと、研究者の正確な同定・データ解析を結合して、環境保全と生涯学習・社会教育への寄与をはかったもので、県内地方公共団体の取組みの前例になると思われる。同好者団体では、「金沢植物同好会」が最も歴史が古く、正宗

厳敬らによって1950年に設立された。その他、「能美郡植物友の会」、「加賀江沼植物を知る会」、「能登の山を歩く会」などがある。これらの団体は、今日、公益的な生涯教育団体として大きな役割を果たすようになっている。ほかに、里見信生らによって全国に先駆けて結成された、「石川県巨樹の会」があり、巨樹・巨木林の調査・保存・普及活動をおこなっている。植物をふくめて自然史の各分野から参加している団体では、「石川県自然解説員研究会」や「石川県自然史協会」などがある。「石川県に自然史博物館を実現する会」は、約60団体の団体会員と400名余の個人会員を有する、県下最大の自然史関係団体である。団体会員としては、主要な自然史関係団体のほか、農協県中央会、生協県連などの経済・社会団体、コンサルタント、企業なども参加している。自然史博物館の実現と発展の推進が目的であるが、会報「自然史」の発行や、シンポジウム・施設見学なども行い、現在の石川県自然史資料整備室への協力・共同も進めるなど多面的な活動をおこなっている。

### (C) 標本庫

金沢大学理学部標本庫(KANA)(金沢市角間町)は、30万点の維管束植物標本を持ち、北陸や日本海側で採集されたものが多い。タイプ標本をはじめ、研究・調査に引用された標本、最近行われた研究の、分子データの証拠標本なども含まれている。研究者の閲覧や研究機関との貸借も実施している。七尾市少年科学館(七尾市山王町)には、小牧 旌氏らの採集品を中心に、能登で採集された維管束植物標本が保管されている。閲覧可能である。石川県教育センター(金沢市高尾町)には、石川植物の会所蔵標本(5万点)が保管されている(閲覧可能)。前記の三標本庫の標本は、利用度が高い。なお、白山自然保護センター標本庫(石川郡吉野谷村木滑)の標本は、白山とその周辺で採集された維管束植物が大部分で、白山の植物相の研究には不可欠である。石川県林業試験場樹木園展示館(石川郡鶴来町三宮)には標本庫がある。広く石川県産の維管束植物が集められているほか、菌類の標本が収集されている。金沢大学薬学部標本庫(金沢市宝町)の標本は、十数万点とされるが整理が進んでいない。石川県自然史資料整備室標本庫(金沢市米泉町)には、維管束植物を中心に9万点余の標本があるが、近いうちに20万点前後になると思われる。閲覧を可能にするには標本・施設の整備が必要で、少し時間を要する。

### (D) レッドデータブック

環境庁のレッドデータブック作成事業の際に、石川県における日本植物分類学会の調査組織として、「石川県絶滅危惧植物調査会」が組織された。同会は調査完了後も存続して、調査研究をおこなってきた。石川県絶滅危惧植物調査会『石川県の絶滅のおそれのある野生生物(いしかわレッドデータブック)〈植物編〉』(2000年 358頁 石川県環境安全部自然保護課)はその成果である。維管束植物を対象とし、データは現地調査カードによる。652種類(種とそれ以下の分類群)のほかに、絶滅のおそれのある地域個体群と保護を要する植物群落(125群落)を記載している。なお、本書を基礎資料とし、映像と分布図を収録したCD-ROM、石川県環境安全部自然保護課・(株)アルカディア(編集・制作)『石川県の絶滅のおそれのある野生生物(いしかわレッドデータブック)』(2001年)が出版されている。

### (E) 植物群落

最近の総合的なものに、石川県植生誌編纂委員会(編)『石川県植生誌』(1997年 230頁 石川県環境安全部自然保護課)がある。県内に確認された183群集(相当する群落)が記述され、標徴種・区分種ならびに代表的な植生調査票を掲載、最近の石川県植物目録と詳細な文献表を付して同定の便宜を図っている。全県的な植生図(集)は、里見信生(編)『石川県の自然環境 第2分冊 植生』(1977年 34頁 石川県)が最

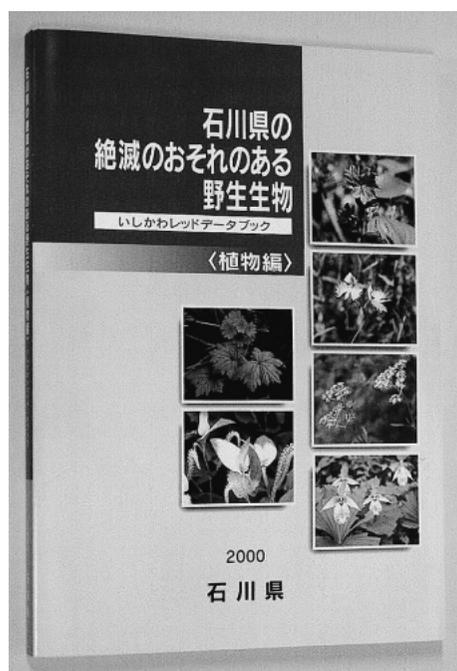


図78. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物  
〈植物編〉

初で、1:400,000 全県現存植生図が一葉と、1:50,000 現存植生図 25 葉が編纂されている。調査時点が開発・都市拡大の開始前後なので、資料的価値が高い。常用されているのは、環境庁『第3回自然環境保全基礎調査(植生調査)現存植生図』(1984年) 1:50,000の各図幅である。説明書は、環境庁『第3回自然環境保全基礎調査植生調査報告書(石川県)』(1988年 環境庁)であるが、やや旧くなっている。現在、環境省による新しい現存植生図(1:25,000)の調査作成事業が進行中(第6回自然環境保全基礎調査植生調査)である。

県内各地域の植生誌、植生図は多いので、詳細は『石川県植生誌』に譲るが、代表的なものに石川県白山自然保護センター『白山地域植生図及び同説明』(1995年 82頁+現存植生図(1:25,000) 2葉)がある。微地形と植生の対応関係が表示されている大縮尺の植生図には、石川県地域植物研究会(編)『石川県森林公園の植生(石川県森林公園植生調査報告書並びに図)』(1989年 198頁+図幅4葉+1図版 石川県)がある。

すでに紙面を超過しているので古植物や分子データ、最近取り組みが始まったフェノロジー・生活史・共生・生態系関係などは割愛した。環境保全・アセスメント・林業・造園などの分野では、近年、地域の植物的自然へのアプローチが著しいがこの点についても、省略する。石川県の場合、今後の地域の植物的自然の研究は、大学や自然史関連施設とネットワークを結んだ自然史資料館(仮称)を拠点に、他の自然史系団体と協力しながら、研究団体の共同研究の形態で、緩やかな計画性をもって進めることが、主流になるものと思われる。

(古池 博：〒921-8062 金沢市新保本 2-14-1 石川県地域植物研究会 TEL：076-249-5204 FAX：076-249-0533 E-mail：furuike-h@muh.biglobe.ne.jp)

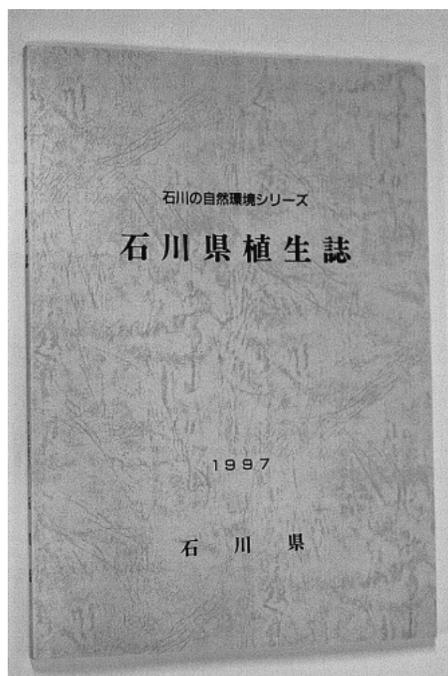


図 79. 石川県植生誌

## 18. 福井県

渡辺定路・横山俊一



図 80. 福井県植物誌



図 81. 福井県植物図鑑 ①～⑤

## (A) 植物誌

1933 年 10 月に『福井県生物目録』(福井県)が刊行され、その植物之部に植物目録が集録されている。B5 判、82 頁でシダ植物以上 1,766 種類のリストアップと採集された地域が示されている。それは、その序文にあるように、福井県を中心に行われる陸軍特別大演習御統監の為お見えになる昭和天皇を奉迎するための行事の一環として行われたものである。当時の尋常小学校 4 学年以上、中学校 3 学年以下の児童生徒の総数 68,588 名に教員の数を加えて 70,000 名近くが参加した、県下あげての大事業であり、蒐められた標本点数は 79,938 点であった。1933 年 10 月発行の『福井県植物目録』には植物之部に増補 3 頁 (38 種類) が追加され、計 1,804 種類がリストアップされ採集された地域が掲載されている。1973 年に『植物標本総合目録』(福井市自然史博物館)が刊行された。B5 判、175 頁で、1972 年までに収蔵された 2,356 種類(変形菌植物 67, 緑藻植物 15, 褐藻植物 39, 紅藻植物 55, 真菌植物 53, 地衣植物 22, 蘚苔植物 151, シダ植物 186, 裸子植物 17, 被子植物 1,751) が産地とともにリストアップされている。

その後フローラに追加される植物や新しい情報が蓄積されてきたため、1989 年に渡辺定路が『福井県植物誌』(現在絶版)を刊行した。B5 判、416 頁で、福井県の自然環境、福井県の植物相に続き、シダ植物以上 2,717 種類がリストアップされ、産地と標本番号が掲載されている。また、2003 年度中に『改訂増補福井県植物誌』が福井新聞社から出版される予定です。

また、1997～2001 年にかけて福井県から『福井県植物図鑑 全 5 巻』が出版された。第 1, 2 巻は『福井の野草』で約 1,350 分類群、第 3 巻は『福井の樹木』で約 430 分類群、第 4 巻は『福井のシダと海藻』で、シダ約 250 分類群、海藻約 200 分類群、第 5 巻は『福井のコケと地衣・[補遺]』で、蘚苔類約 150 分類群、地衣類約 65 分類群、変形菌約 50 分類群、淡水藻類約 12 分類群、維管束植物・補遺約 60 分類群、タケ類約 30 分類群が掲載されている。

県内の地域フローラとしては、福井県高等学校教育研究会理科部会発行『九頭竜川上流域生物調査』(1970 年)に「和泉村植物の目録」(34～64 頁)、『真名川流域の生物調査』(1982 年)に「大野市西谷地区植物目録」(維管束植物、蘚苔類 45～85 頁)、『南川流域の生物調査』(1991 年)に「南川流域の植物」(41～69 頁)、『足羽川流域の生物調査』(1998 年)に「足羽川流域の植物相」(32～35 頁)がある。

## (B) 研究機関

自然史系博物館として「福井市自然史博物館」があり、市立ながら全县をカバーする資料が収蔵されている。会誌『福井市自然史博物館研究報告』を毎年刊行し 2001 年で 48 号をかぞえ、動植物や地質天文など混成の編成ながら福井県の自然史研究では重要な雑誌となっている。

アマチュアの植物同好会としては「福井植物同好会」があり、年間約 10 回の植物観察会と 1 回の同定会を行っている。

## (C) 標本庫

福井市自然史博物館 (FUKUI) には約 57,500 点の標本があり、堀 芳孝、渡辺定路、林 幸子、小林貞

七、中西由美子、吉村洋子ら採集の県産植物を中心にしたコレクションが収められている。「堀 芳孝コレクション」は『植物標本総合目録』にまとめられている。閲覧可能である。

福井県自然保護センターの標本庫には1,041点（シダ植物417点、種子植物620点、藻菌類4点）の標本がある。閲覧可能である。

朝日町立の植物園「プラントピア」には十数万点の標本があるが、整理中である。県内標本には若杉孝生、松村敬二、斉藤芳夫などのコレクションがある。閲覧不可である。

#### (D) レッドデータブック

福井県の植物レッドデータブックはまだ刊行されていない（動物レッドデータブックは平成13年に刊行されている）。現在、植物レッドデータブック作成委員会を組織して平成16年3月発行に向けて準備を進めているところである。現在までの進行状況は、『福井県植物誌』、『福井県植物図鑑』などの過去のデータを参考にしてレッドデータとして一次リストの作成を行い、その一次リストの植物について、標本・文献調査、現地確認を進めているところである。一次リストとして約700種（亜種、変種も含む）があげられている。

一次リストに対して削除、追加を行って二次リストの作成、さらに個々の種の評価を行い、ランク付けを行う作業を進めてレッドデータができあがる。刊行が待たれる。

#### (E) 植物群落

福井県の植物群落については1979、1988、1998年に行われた環境庁特定植物群落調査により、県内の重要な植物群落の記載と定期的な状況の把握がなされている（『特定植物群落調査報告書』として刊行）。

福井県独自としては環境庁特定植物群落調査と平行して1973年から1976年までの「福井県自然環境保全基礎調査」、1979年から1985年までの「みどりのデータバンクと自然保護管理指標図」の作成を行っている（いずれも最終年度に完成品として印刷刊行）。さらに、1992年から1998年にかけて「福井県自然環境管理計画策定調査」を実施して、(1) 自然植生もしくはそれに近い植生、(2) 学術上貴重な種または個体の生育地、(3) 代償植生であっても郷土景観を代表する植生を選定基準にして104地点を選定し『福井県のすぐれた自然・植生編』（1999年）としてまとめ、印刷刊行している。

その他、福井県高等学校教育研究会理科部会による植生調査も行われている。また、今日的な特徴としては、開発にともなう行われる環境アセスメントによっても、地域に限定されるが、詳細に県内の植物群落が明らかにされている。

(A～Cは渡辺定路：〒910-0003 福井市松本4-3-25。D～Eは横山俊一：〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育地域科学部理科教育 TEL：0776-27-8696 FAX：0776-27-8524 E-mail：yokoyama@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp)

## 19. 山梨県

中込司郎

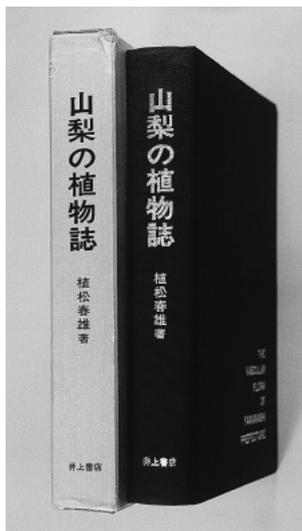


図 82. 山梨の植物誌

## (A) 植物

『山梨県植物誌』が 1982 年に山梨県より刊行された。(山梨県植物誌編集委員会 B5判 380頁) 山梨県の植生概要、地域ごとの植物分布、シダ植物以上 2,116 種等が記載されている。

植松春雄『山梨の植物誌』が 1981 年井上書店から刊行された (B5判 595頁)。リストアップされた種は県発行のものよりかなり多い。県植物の構成要素、地域別の植物分布、県内関係の植物命名資料等が記載されている。

地域のフローラとしては、『三つ峠の自然界』(篠原 博 A5判 161頁 1977年 サンニチ印刷)、『南アルプスの植物』(植松春雄 A5判 585頁 1967年 井上書店)、『山梨県巨樹名木誌』(秋山樹好 A5判 192頁 1974年 自費出版)、『植物観察図集』(秋山樹好 B5判 205頁 1977年 自費出版)、『山梨県巨木誌』(山梨県植物研究会 B5判 473頁 1994年 山梨県植物研究会)、『山梨の植物』(植松春雄 A5判 415頁 1958年 井上書店)、『山梨県の樹木』(中込司郎 B5判 172頁 1982年 自費出版)がある。

一般向きのものとしては『山梨の花・高山植物』等、富士山、南アルプス、八ヶ岳・等を主体とした写真と解説のものが何冊か山梨日日新聞社より刊行されている。

## (B) 研究機関

県内各大学には植物専門の講座をもっているところは無い、博物館、植物園、樹木園、植物公園、ハーバリウム等も無い。

研究会は、「山梨県植物研究会」があり、夏と秋に宿泊研修を行う。他県や環境省等の調査を行っている。会誌は『山梨植物研究』を年 1 回発行し 2002 年で第 15 号である。

同好会は「山梨生物同好会」があり、4 月から 8 月を除く 11 月まで月 1 回の現地研修会と 1 月に標本検討会、講演会、発表会を植物研究会と共催で行っている。会誌『山梨生物』は 2002 年で第 58 号になる。

## (C) 標本庫

公的機関の標本庫はない。個人所蔵標本としては植物研究会員が所蔵するものがあるが、あまり良く整理されていない。

## (D) レッドデータブック

2002 年 6 月に山梨県レッドデータブック作成委員会がつくられた。植物、哺乳類、鳥類、両生、爬虫、魚類、昆虫類の 5 部門が設定され、各部門ごとに作業をすすめることとなった。担当事務局は山梨県森林環境部みどり自然課である。

## (E) 植物群落

『山梨県現存植生図』及び『山梨県の植生』が宮脇 昭他により 1977 年に山梨県より刊行された。続いて 1983 年より 1986 年に行われた環境庁の植生調査によるものが 1988 年刊行された。『富士山北斜面の植生』が宮脇 昭他により 1969 年、山梨県 (国立公園協会) より刊行された。1979、1988、1998 年に行われた環境庁特定群落調査で県内の主要な植物群落が把握されている。これより先 1975-1979 年の 5 年間、山梨県貴重植物群落調査が県独自の計画で行われた、この調査は環境庁のものと同様であったため、5 年間の調査を再調査するかたちとなった。また、山梨県資源調査 (1995-2000 年) の植物部門では南アルプス北岳を中心とした高山帯の群落調査がされている。この他、キタダケソウ群落調査 (南アルプスクラブ、環境庁指導)、アツモリソウ群落調査 (1997-2001 年、県指導) 等がある。

(中込司郎：〒400-0125 山梨県中巨摩郡敷島町長塚 246 TEL & FAX：055-277-3663)

## 20. 長野県

松田行雄

## (A) 植物誌

長野県内も御多分に漏れず、戦後の農業人口は減少した。これは手作業的な農業経営から機械化が進み、また科学の発達から化学肥料、農薬の使用が可能になったこともあり、科学的な農業経営となった。余剰労働力は工業化が進んだ工場へ流出した。いわゆる三チャン農業といわれる時代を迎えた。世の中は工業化が進み現金収入を追い求めるようになった。その結果、生活を支えてきた里山は人手が入らず荒れるにまかせ、耕作放棄が進んだり、耕作地や里山は、開発が進み環境破壊が見られるようになった。人々は自然環境変化に敏感になり、自分たちの住む自然に目を向け、貴重な自然の遺産を残さなくてはいけないことに気付いた。県内の各郡、市町村は、第一歩として環境調査（動植物を含め）を始め、その結果を「郡誌」や「市町村誌」に残すようになった。

i) 郡誌、市町村誌は下記のようなものである。各市町村誌は『長野県植物誌』（1997年）を執筆された方々が積極的に関わりをもって参加された。出版年代順に掲載した。

『下水内郡植物誌』（1956年 下水内郡教育会 129頁）。『上伊那誌 自然編』（1965年 上伊那誌編纂会 673-839頁）。『東筑摩・松本市誌 第1巻 自然』（1957年 東筑摩・松本市郷土資料編纂会 877-1,178頁）。『上田小県誌 第4巻 自然編』（1963年 上田小県誌刊行会 593-687頁）。『上田小県誌 第5巻 資料・補遺編（2） 自然』（1973年 147-190頁）。『上伊那誌 自然編』（1965年 上伊那誌編纂会 673-839頁）。『長野県上水内郡誌 自然編』（1970年 上水内郡誌編集会 823-1,013頁）。『山ノ内町誌 自然編』（1971年 山ノ内町教育委員会 180-265頁）。『信州 佐久の植物』（1975年 佐久教育会 516頁）。『南安曇郡誌 第1巻』（1979年 南安曇郡誌改訂編纂会 837-980頁）。『坂城町誌 上巻 自然編』（1979年 町誌刊行会 176-290頁）。『清内路村誌 自然』（1982年 清内路村 24-170頁）。『本郷村誌』（1983年 本郷村誌編纂会 161-240頁）。『波田町 自然民俗編』（1983年 波田町誌編纂委員会 291-436頁）。『大町市史 自然環境 資料』（1984年 大町市史編纂委員会 451-744頁）。『原村誌 上巻 第1編自然』（1985年 原村 105-140頁）。『茅野市史 別巻 自然』（1986年 茅野市 245-382頁）。『佐久市志 自然編』（1988年 佐久市志編纂委員会 491-702頁）。『麻績村誌 上巻』（1989年 麻績村誌編纂委員会 76-103頁）。『村誌 さかきた 上巻』（1990年 坂北村誌編纂会 195-297頁）。『南佐久郡高等植物目録』（1990年 南佐久郡誌刊行会 131頁）。『塩尻市誌 自然』（1991年 塩尻市誌編纂委員会 615-995頁）。『堀金村誌 上巻』（1991年 堀金村誌編纂委員会 146-263頁）。『戸倉町誌 第1巻 自然編』（1991年 町誌編纂委員会 311-397頁）。『飯山市誌 自然環境編』（1991年 飯山市誌編纂委員会 285-458頁）。『富士見町誌 上巻』（1991年 富士見町教育委員会 157-196頁）。『生坂村誌 自然編』（1992年 生坂村誌編纂委員会 256-340頁）。『奈川村誌 自然編』（1992年 奈川村誌編纂委員会 127-178頁）。『上久堅村誌 自然環境』（1992年 村誌編纂委員会 55-78頁）。『小谷村誌 自然編』（1993年 小谷村誌編纂委員会 505-660頁）。『八坂村誌 自然編』（1993年 八坂村誌編纂委員会 461-634頁）。『根羽村の植物』（1993年 根羽村 35-278頁）。『望月町誌 自然編』（1994年 望月町誌刊行会 311-479頁）。『山口村誌』（1995年 奥原弘人 35-105頁）。『南佐久郡誌 自然編』（1995年 南佐久郡誌刊行会 3-368頁）。『白馬村誌 自然環境編』（1996年 白馬のあゆみ編纂委員会 337-458頁）。『松本市史 第1巻 自然編』（1996年 松本市編纂委員会 694-901頁）。『木曾・楢川村誌 自然』（1996年 楢川村誌編纂委員会 249-374頁、植物目録 524-588頁）。『木祖村誌』（1997年 木祖村誌編纂委員会 215-288頁）。『真田町誌 自然編』（1997年 真田町誌編纂委員会 249-310頁）。『美麻村誌 自然編』（2000年 美麻村誌編纂委員会 293-382頁）。『長野市誌 自然』（2000年 長野市誌編纂委員会 195-344頁）。『下伊那誌 生物編』（2001年 下伊那教育会編 7-239頁）。『上田市誌 自然編』（2001年 上田市誌編纂委員会 143-260頁）。いずれの市町村誌も各町村の植物分布上の位置、水平垂直分布、植生、植物方言、天然記念物、植物と生活、植物目録、植生図（景観植生図、植物群落）等が記載されている。

ii) 地域の植物研究も盛んで下記の出版物がみられる。

御嶽駒ヶ嶽綜合調査会（編）『御嶽研究 自然編』（1958年 479-729頁）、（植物相：横内斎、高等植物目録：水島正美、植物群落：前田禎三、蘚類：高木典雄・野口 彰、苔類：服部新佐、地衣類：黒川 道、蘚苔植物の群落生態とフロラ：安藤久次・佐々木好之、天然記念物：横内 斎）。小泉秀雄、横内 斎（改訂増補）『日本南アルプス寒地植物誌』（1959年 621頁）。清水建美『更級埴科地方誌 自然編』（1966年 511-616

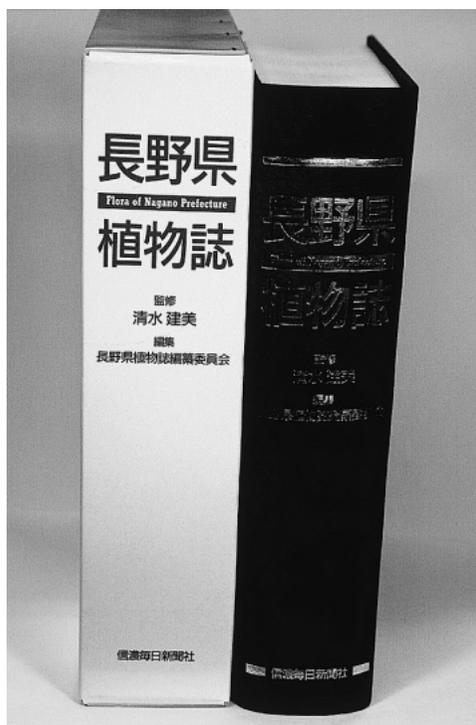


図 83. 長野県植物誌

に作成された。記載された植物種はシダ植物以上の高等植物が 2,506 種収録されている。『長野県植物誌』1997 年で未確認種とされた種類の中で、その後の調査で確認されたり又新しく追加された種類もあり、これらの種類は『長野県植物研究会誌』に「長野県植物誌 補遺 (1-5)」として報告されている。『長野県植物誌 資料集 CD-ROM (テスト版)』(2002 年)、(データ数 423,230 件、各種検索、分布図作成、プリントも可能)が発表された。

#### iv) 一般向けの植物解説書

各郡市の教育会や信濃毎日新聞社は一般向けの植物解説書に力を入れ出版している。奥原弘人『木曾谷の植物』(1971 年 384 頁 木曾教育会)、(木曾谷の植物研究史、木曾谷周辺の植物、植物相、木曾谷の国有林、特徴ある植物の分布図等)。原 寛・佐藤邦雄・黒沢幸子『軽井沢の植物』(1974 年 307 頁 井上書店)、(軽井沢の植物の特色、注目すべき植物、植物目録他)。今井建樹・坂本圭司『霧ヶ峰・八ヶ岳の植物』(1983 年 268 頁 信濃毎日新聞社)、(霧ヶ峰・八ヶ岳の春・夏・秋の植物)。渡辺隆一『志賀高原の植物』(1984 年 220 頁 信濃毎日新聞社)、(コースガイド、植物相と植生)。横内文人『長野県植物ハンドブック』(1984 年 433 頁 銀河書房)、(県内 58 地点の植物目録、文献、市町村 (14 地区) の植物目録)。奥原弘人『木曾の植物』(1985 年 236 頁 信濃毎日新聞社)、(丘陵帯・低山帯・亜高山帯・高山帯の植物、荒らされる植物等)。亀山 章『上高地の植物』(1985 年 221 頁 信濃毎日新聞社)、(自然と景観、植物社会 (水中・湿原・川辺林・火山・崩壊地等)、四季の植物等)。松田行雄・土田勝義『美ヶ原・霧ヶ峰の植物』(1986 年 261 頁 信濃毎日新聞社)、(中信高原の自然環境、植生の特徴、草原・森林・湿原・風衝地・岩壁の植物、自然保護等)。清水建美 (編)『乗鞍の自然』(1986 年 172 頁 信濃毎日新聞社)、(自然環境、植生と植物、ハイマツの生態系、開発の影響等)。土田勝義 (編)『八ヶ岳の自然』(1991 年 220 頁 信濃毎日新聞社)、(八ヶ岳のあらし、亜高山生態系、高山生態系、公園利用と自然保護、自然観察ガイド)。土田勝義 (編)『白馬の自然』(1994 年 190 頁 信濃毎日新聞社)、(白馬のあらし、春の自然～山麓の動植物、夏の自然～高山の動植物、地域環境の保全、観察コース)。中村浩志 (編)『千曲川の自然』(1999 年 172 頁 信濃毎日新聞社)、(自然と景観、植物のいとなみ)。高橋 勸『雪国飯山の植物』(2000 年 149 頁 信毎書籍)、(植物分布の概況、地区別の植物、帰化植物、特記すべき植物、高等植物目録)。

頁)、(植物の種類と分布、植生、帰化植物、きのご類、植物目録、植生図他)。清水建美 (監修)『富士見町の植物』(1979 年 富士見町教育委員会 311 頁)。諏訪の自然誌・植物編集委員会『諏訪の自然誌 植物編』(1981 年 692 頁)。奥原弘人『御嶽の植物』(1997 年 95 頁)。奥原弘人『木曾おおくわの植物』(1997 年 69 頁)。奥原弘人『奈川村の植物』(1998 年 71 頁)。池上陸美・高橋秀男『小谷村の植物』(1998 年 145 頁)。

#### iii) 県植物誌

『長野県植物誌』1997 年が出版される以前には、杉本順一『長野県植物総目録 全』(1966 年、1963 年 4 月～1966 年 2 月までの間『長野林友』に連載)、横内 齋『長野県の植物』(1976 年 446 頁)、横内 齋『信濃植物誌』(1983 年 401 頁)、大塚孝一『長野県のシダ植物』(1987 年 157 頁)、奥原弘人『信濃野生植物総目録』(1994 年)、(長野県産の種、亜種、変種、品種、雑種の計 3,966 種の学名、生育地を記載)などが出版された。

清水建美 (監修) 長野県植物誌編纂委員会『長野県植物誌』(1997 年 1,732 頁 信濃毎日新聞社)、(自然環境、植物研究史、長野県の植物相 [藻類、蘚苔植物門 (ミズゴケ科)、シダ植物門、裸子植物門、被子植物門、新植物名一覧]、長野県の植物地理、索引等)が刊行された。調査開始から出版まで 23 年間に蓄積された植物標本 (約 15 万点の標本を基

## (B) 研究機関

「長野県植物研究会」県内外の植物同好者が情報の交換や植物の分類生態を研究する目的で1967年6月に事務局を信州大学教養部生物学研究室において発足、活動として例会や共同調査、植物観察会、研究発表を行い、『長野県植物研究会誌』の発行(年1回、現在第35号)、現在事務局は信州大学理学部生物学教室内。

「長野県自然保護研究所」1996年9月に長野市北郷(飯綱高原)に開所、調査研究、情報管理、学習交流の3つの機能を持った県立の研究機関で、自然の保護・保全に関する総合的な研究を行う。調査研究(プロジェクト研究)：里山研究、野生動物保護管理、県版レッドデータブックの作成等／情報管理：自然保護に関連した情報収集、紀要の発行(年1回)／学習交流：野外観察会等の開催、ニューズレター『みどりのこえ』の発行(年4回)、支援相談(自然保護の実践活動等への講師派遣や各種相談対応)。

「信州大学志賀自然教育園」下高井郡山ノ内町志賀高原、志賀山溶岩台地に生じた亜高山針葉樹林の中に観察路があり、質問板があり自然に親しみながら学習できる。地形・地質・動植物の展示室や50種類の高山植物が植えられたロックガーデンがある。

「菅平高原自然館」小県郡真田町菅平、つくば大学菅平高原生物実験センターで、研究・採集された高山植物や動物の標本が保管されている。園内には樹木園があり約200種類の樹木が植栽されている。

「東館山高山植物園」標高2,030m 志賀山リフト株式会社経営、3万坪に群生する500種余りの代表的で珍しい高山植物を保護・増殖している。

「戸隠森林植物園」1968年開園、植物園は標高1,200m～1,250mにある。3分の1は湿地であるが、丘に登れば比較的乾燥し森林が展開する。面積は71haある。園内には約90種類の本木と約90種類の草本が知られている。園内に戸隠自然保護センターがある。

「経ヶ岳自然植物園」1951年開園、植物園はかつて草刈り場として利用された地域で、現在は地域の住民により管理されている草原で、季節ごとの野草が観察できる。

「軽井沢植物園」町営、軽井沢で発見された植物や町内の山林原野から移植された植物、寄贈された園芸植物など約145科1,600余種(変種・品種を含む)が集められている。園内の植物は科別に一連の場所に配列し、個々にラベルを付けて、種、または変種が比較検討できるようになっている。

「茶臼山自然植物園」長野市篠ノ井、栽培植物45種類18万本、自生植物129種類7万本、薬草31種類がある広い植物園。

## (C) 標本庫

「信州大学共通教育標本庫(SHIN)」横内 齋、奥原弘人、清水建美、長野県植物誌編纂委員、植物誌編纂協力者等の標本約25万点が収蔵されている。データベース433,230件が公開されている。標本の閲覧は事前連絡(井上 健研究室 TEL: 0263-37-2908)が必要。

「長野県自然保護研究所(NAC)」藤原陸夫採集の国内標本約14万点を中心に松田行雄採集ミスゴケ類標本16,000点等が収蔵されている。閲覧は事前連絡(TEL: 026-239-1031 FAX: 026-239-2929)が必要。

「下伊那教育会」下伊那教育会植物研究委員会 下伊那地方中心の標本約5千点が収蔵されている。

「諏訪教育博物館(諏訪教育館内)」諏訪教育会植物研究委員会 諏訪地方中心の標本約15,000点が収蔵されている。

「大町山岳博物館」北アルプス、北安曇地方中心の標本7,750点が収蔵されている。

## (D) レッドデータブック

『白馬村版レッドデータブック(動植物等)』(2000年 白馬村 レッドデータブック編纂委員会 96頁 白馬村)。植物は標高1,500m以下の自生種97種、標高1,500m以上の自生種119種が村独自の基準で絶滅度が決定され、環境庁版と同じ用語で

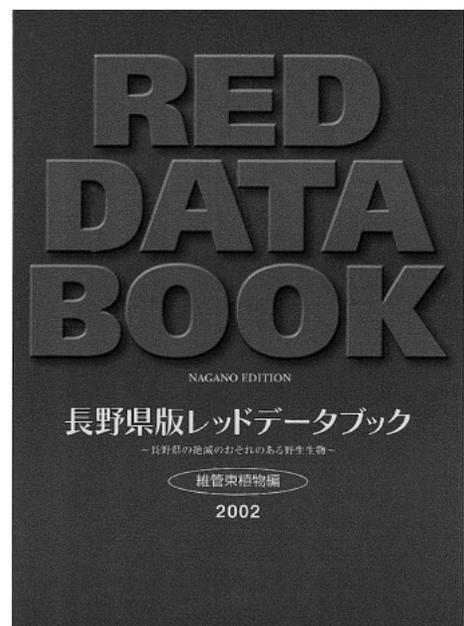


図84. 長野県版レッドデータブック 維管束植物編 2002

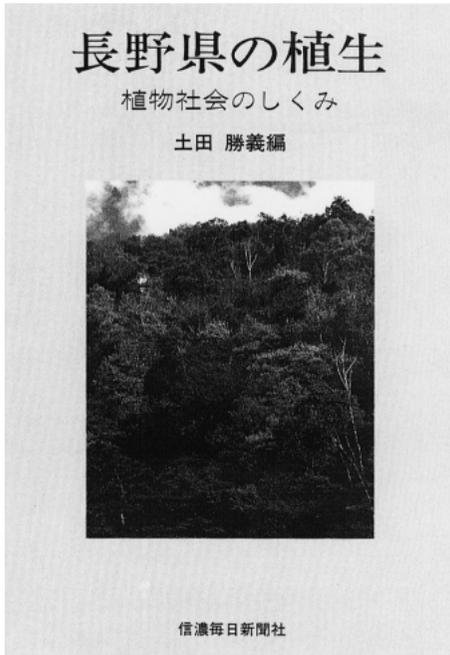


図 85. 長野県の植生

記載されている。また群落や巨木も対象にしている。

『長野県版レッドデータブック 維管束植物編』2002年刊行。1998年より長野県植物誌資料集作成委員が1975年以降25年余にわたって積み上げてきた『長野県植物誌資料集データベース』を基に(文献調査から再度現地調査を行い)刊行された。掲載されている種は県内自生種を対象として検討し、カテゴリーの具体的な要件によって決定された。その結果絶滅(1970年以降に標本の採取もされず絶滅したと考えられる)31種、野生絶滅0種、絶滅危惧IA類280種、絶滅危惧IB類224種、絶滅危惧II類136種、準絶滅危惧119種、情報不足67種、希少雑種135種の計992種(絶滅危惧種の割合25.5%)が解説され、対象種の分布は市町村別に地図におとされている。『長野県版レッドデータブック 植物群落編』は編集中、2004年出版予定。

#### (E) 植物群落

植物群落関係の出版物も多く見られ、一般向けの著書も見られる。

宮脇 昭(編)『長野県の植生図』第1集~第4集(付着色植生図49枚)、(1973-1976年 長野県植生図作製調査団 長野県)。宮脇 昭(監修)『長野県の植生自然度図』(付着色植生図49枚)、(1976年 長野県植生自然度調査委員会 長野

県)。宮脇 昭(編)『長野県の潜在自然植生図』第1集、第2集(付着色植生図49枚)、(1977-1978年 長野県植生図作製調査団 長野県)。宮脇 昭(編)『長野県の現存植生群落組成表』(1979年 本文411頁 本文以外の組成表177枚)、(長野県自然植生73群落、代償植生48群落)。鈴木兵二(監修)『霧ヶ峰の植物』(1981年 霧ヶ峰の植生246頁、霧ヶ峰の植物目録113頁 諏訪市教育委員会)。土田勝義『白馬の植物と植生』(1985年 268頁 信濃毎日新聞社)、(高山植物と植生、自然環境、植生の特徴、植生と植物、高山植物の生態、自然保護等)。土田勝義(編)『長野県の植生』(1987年 277頁 信濃毎日新聞社)、(自然環境、森林・高山帯・草原・湿原・川辺・火山の植生、植物遷移、各地の植生等)。

(松田行雄：〒390-0802 長野県松本市旭1-9-1 TEL & FAX：0263-33-8605)

## 21. 岐阜県

高橋 弘

## (A) 植物誌

『岐阜県の植物』(B5判 407頁)が岐阜県高等学校生物教育研究会の編集により、1966年大衆書房から出版された(絶版)。地形・地質概説、気候概説、植物地理概説、地域の植物と採集コース、植物化石、天然記念物の項目の順に記述され、最後に植物目録が添えられている。井波一雄氏による植物地理概説は、岐阜県における注目すべき大部分の植物の分布について、氏本人の踏査により明らかにしたことに基づいて解説されている。植物目録には産地として大まかな地域が添えられているが、標本は引用されていない。そのため、本格的な植物誌づくりに向けて、本年岐阜県植物誌調査会が結成され、調査や標本のデータベース作成等の作業が始められた。県内の地方植物誌としては、『郡上郡植物目録』(金古弘之 自費出版 1980年)、『高山市の植物』(飛騨植物研究会(編) 高山市 1987年)、『写真でみる久々野町の野生植物』(久々野町教育委員会(編) 久々野町 1993年)等がある。後の2つは長瀬秀雄氏の調査を基にしたもので、久々野町に関しては大部分の植物の証拠標本を「岐阜県久々野町植物目録」(岐阜県植物研究会誌 9:57-76頁 1992年)に挙げている。また、標本が引用された地方植物誌として、『郷土誌 21世紀への贈りもの—伊自良村の自然—(資料集)』(伊自良村教育委員会(編) 岐阜県山県郡伊自良村 2002年)等があるほか、『岐阜県植物研究会誌』に春日村、大垣市、七宗町、関市、富加町、可児市、美山町、明宝村等の植物相と、飛騨地方並びに岐阜県全体のシダ植物相が掲載されている。

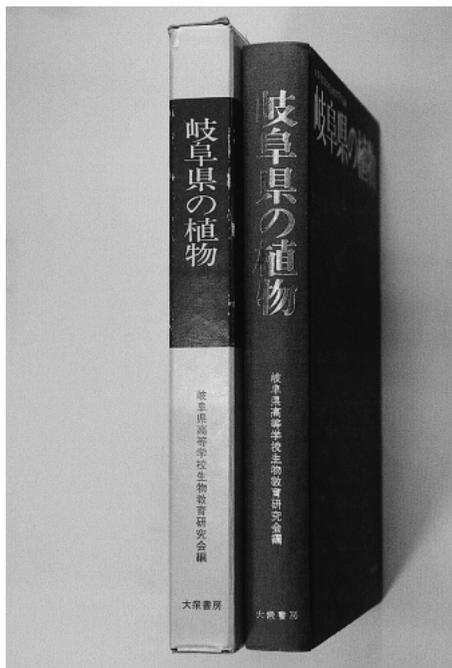


図 86. 岐阜県の植物

一般向けで写真を主体とした本としては、上記の『写真でみる久々野町の野生植物』のほか、『ガイドブック飛騨と美濃の植物』(岐阜県高等学校生物教育研究会 大衆書房 1987年)があり、『飛騨の自然賛歌』(小野木三郎 岐阜新聞社 2001年)には植物が多く紹介されている。

## (B) 研究機関

植物全般にわたる研究会組織として岐阜大学教育学部生物学教室に事務局を置く「岐阜県植物研究会」がある。総会時に研究発表及び特別講演を催し、年2~3回野外観察会を行っている。また、『岐阜県植物研究会誌』を年1回、『岐阜県植物研究会会報』を年4~5回発行しており、これまでに会誌は17巻、会報は90号発行されている。これとは別に、植物誌作成を目的とした「岐阜県植物誌調査会」が2002年に結成され、事務局を岐阜県博物館に置いている。毎月1回博物館で勉強会と標本納入等の作業を行っている。岐阜県博物館は人文系を含めた総合博物館で、『岐阜県博物館調査研究報告』を年1回発行している。少しユニークな研究会として、岐阜薬科大学に事務局を置く「慾齋研究会」がある。飯沼慾齋に関連することや植物について、研究会と講演会を開催し、『慾齋研究だより』を年4回発行している。慾齋研究だよりはこれまでに97号が発行されている。同研究会が企画した『飯沼慾齋』(飯沼慾齋生誕二百年記念誌編集委員会(編) 飯沼慾齋生誕二百年記念事業会 1984年 B5判 513頁)が刊行されている。慾齋について様々な方面から解説されており、貴重な文献である。

## (C) 標本庫

岐阜大学教育学部(GIFU;未登録)に約5万5千点の整理された標本があり、その他に約5千点の未整理標本がある。岐阜県の植物が多いものの、県外や中国の植物もある。岐阜県博物館にも約5万点の標本がある。こちらは大部分が岐阜県の植物で、長瀬秀雄氏と二村延夫氏の標本が多い。両氏の重複標本の多くが岐阜大学にも納められている。また、『郡上郡植物目録』に引用された標本が、岐阜県博物館に収められていて、

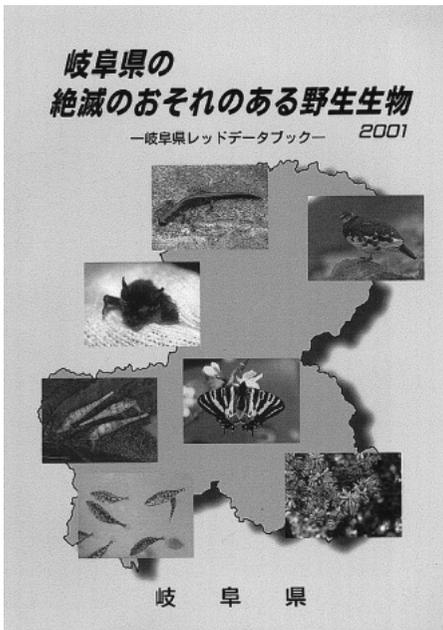


図 87. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物  
2001

現在整理中である。岐阜大学、博物館とも閲覧・ローンが可能である。

(D) レッドデータブック

2001 年に岐阜県自然環境森林課が独自の基準で『岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物』を編纂したが、市販はしていない。135 種の維管束植物が指定されている。

(E) 植物群落

環境庁による第 3 回自然環境保全基礎調査（植生調査）の『現存植生図 岐阜県』（1987～1988 年）がある。森林構造関係では、小見山 章氏が長年研究されてきた成果を『森の記憶 飛騨・荘川村六廐の森林史』にまとめて、京都大学学術出版会から出されている（2000 年）。

天然記念物については、『岐阜県の天然記念物 上、下』（堀武義・稲葉左馬吉・牛丸周太郎 教育出版文化協会 1981 年）がある。

（高橋 弘：〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学教育学部  
TEL：058-293-2258 FAX：058-293-2259 E-mail：takahash@cc.gifu-u.ac.jp）

## 22. 静岡県

湯浅保雄

### (A) 植物誌

1967年に静岡県生物研究会編集によって『静岡県植物誌』（現在は絶版）が刊行された。B5判，585頁で，静岡県の地形，地質，気候，植物分布の概要の記述の後に，プランクトン（久保田忠衛），富士山産変形菌（江本義数），静岡県産茸類（藤田達也），同海草（千原光雄），コケ植物（杉野孝雄），シダ植物（志村義雄），種子植物（杉本順一）が主な産地と共にリストアップされている。その後1984年に杉本順一によって『静岡県植物誌』（第一法規出版 現在は絶版）が刊行された。B5判，814頁で，静岡県の植物相の記述に続きシダ植物以上が主な県内産地と共に解説されている。しかし，分布図や標本の引用はない。県内の地域フローラとしては，小池常雄『静岡県湖西地方の植物』（1971年），志村義雄『富士山のシダ』（1987年）がある。大村敏朗『竜爪山植物誌』（1940年）と大村敏朗『静岡市西部植物誌』（1943年）は静岡植物研究会によって1993年，1995年に復刻されている。また，『磐田の自然』には磐田市のシダ以上の植物がリストアップされている。『豊田町誌 資料集自然編』には豊田町のフローラがまとめられている。

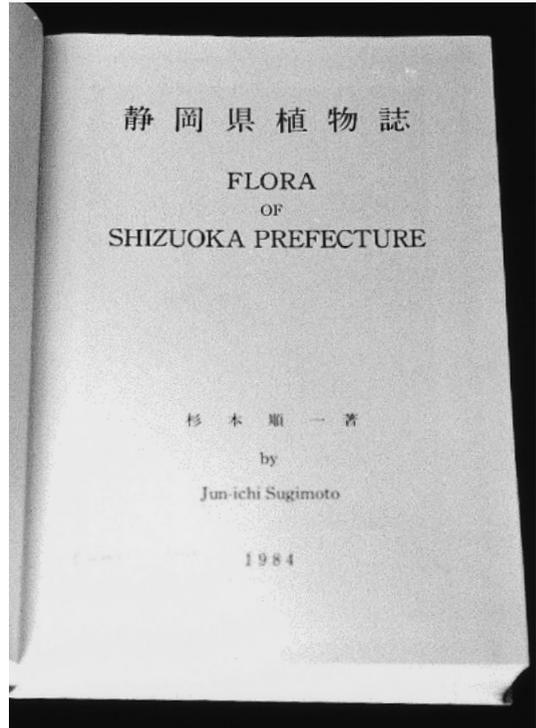


図 88. 静岡県植物誌

### (B) 研究機関

植物に関係するアマチュアの研究会としては，県西部を中心に活動を行っている「遠州自然研究会」がある。自然観察会と会誌『遠州の自然』の発行を行っている。会誌は現在25号を数え，その中には県内フローラに関する報告も多く載っている。また，「静岡植物研究会」は，野外観察会のほか調査や講演会，写真展などの活動を行っている。その会誌，会報には観察会で見られた植物が記録されている。会報は2002年末で81号になる。その他，「静岡県自然誌研究会」では，標本に基づく分布図集を計画し，『静岡県自然誌（植物）』に各地のフローラを標本番号と共に掲載している。

### (C) 標本庫

静岡県教育研修所に，杉本順一が『静岡県植物誌』の執筆などに使った標本が約62,000点ほど納められている。静岡県林業技術センターには約6,000点の標本がある。また，静岡大学農学部は標本庫には約6万点の標本があるが，研究中の未整理標本である。これらの標本の中で閲覧可能なものは，静岡県林業技術センターのものだけである。

### (D) レッドデータブック

静岡県自然保護室が主体となり，県内の専門家を使って1997年より実態調査を行い，2003年に県版レッドデータブックとして出版される予定である。

### (E) 植物群落

近田文弘『静岡県の植物群落』（1981年 第一法規出版 絶版）と静岡県から宮脇 昭他『静岡県の潜在自然植生』（1987年）が発行されている。

（湯浅保雄：〒422-8529 静岡県静岡市大谷 836 静岡大学農学部 TEL：054-238-4839 E-mail：afyyuas@agr.shizuoka.ac.jp）

## 23. 愛知県

芹沢俊介

### (A) 植物誌

愛知県は、地域自然史研究に関しては 1980 年代まで全国最後進県、それも 1 周遅れで独走に近いほどのお粗末な状態であった。全国的な植物分布図を作れば、いつもすっぽりと穴があく、いわば“暗黒地帯”であった。その一方で、名古屋市は日本有数の大都市であり、その周辺域では開発圧力が極めて高い。このままでは、植物は何があったのかもわからないまま、みな消え去ってしまう。この状況に危機感を持った人たちの間で、1992 年に「愛知県植物誌調査会」が結成された。そして、県内を行政区画を基礎に 58 区画に分け、どのような普通種でも各区画 1 点は必ず標本を作る、標本の裏付けがないものは自分自身が見たものでも“ある”とは認めないという方針のもとに、県植物誌作成のための調査が始まった。

10 年間の調査で、愛知県の植物の現況はほぼ把握できる状態になり、成果の一部は NGO 版、および県環境部版のレッドデータブックとして公表された。これらの図書により、愛知県における主要な植物の現況は、誰でも知ることができる状態になっている。しかし、全種を網羅した植物誌の編集作業は諸般の事情により遅れ気味で、まだ第 1 巻も発行できていない。

県内市町村等の植物誌としては、調査会活動の区画毎の成果をまとめる形で、以下のものが発行されている。

加藤等次・村松正雄・森下なつ子・村井寿一『新版 豊根の植物』(1995 年 豊根村)、小林元男『新城地方の樹木』(1998 年 愛知県)、小林元男『新城地方の植物』(2000 年 愛知県)、小林元男『愛知県地域別植物誌① 豊橋市の植物』(2001 年 愛知県植物誌調査会)。市町村史関係では、柴田和乎・日比野 修・塚本威彦『瀬戸市史・資料編 2・自然・III 植物』(1986 年 瀬戸市)が、その後の調査会活動によってほぼ裏付け標本がそろえられている。アセスメント関係では、国際博覧会候補地となった瀬戸市海上地区の植物目録が、主要種については標本の裏付けをもって作成されている。

なお、愛知県の植物に関する報告は、調査会が発足する前にも量的にはかなり発行されている。ただし愛知県全域の植物目録としては、大原準之助『愛知県国有林の植物誌 愛知県植物目録』(1971 年 名古屋営林局)が唯一のものである。

### (B) 研究機関

植物自然史に関する研究機関は、愛知県では極めて少ない。専任の植物分類系研究者がいる機関は、名古屋大学博物館、豊橋市自然史博物館、愛知教育大学の 3 つだけで、同規模の他県に比べれば研究体制は極めて弱体である。

NGO 組織としては、前項で述べた「愛知県植物誌調査会」(事務局：堀田喜久)がある。現在の会員は約 130 名、連絡誌として毎月『HERBARTUM AICHI』(B5 判 8 頁～16 頁)を発行している。愛知県内では、他に裏付け標本を伴う再現性のある調査活動を組織的にを行っている会はない。

なお、愛知県の植物的自然に関する普及活動を目的とした組織としては、「愛知みどりの会」(事務局：愛知教育大学生物学教室)があり、愛知県植物誌調査会と連携しながら、後で述べる『自然からの SOS レッドデータブックあいち・植物編解説』、『自然からの SOS レッドデータブックあいち・動物編解説』をはじめ、小中学生向け小図鑑『しぜんはともだち① 春の野の花』、『しぜんはともだち② 夏の野の花』、『しぜんはともだち③ 秋の野の花』などを発行している。

### (C) 標本庫

愛知教育大学生物学教室 (AICH) には、約 13 万点の標本が保管されている。これらの標本は、基本的に 2 つのコレクションから構成されている。愛知県及びその隣接地域 (主として岐阜県東濃地方の湧水湿地と木曾三川下流部) の維管束植物標本約 8 万点は、ほとんどが愛知県植物誌調査会やそれに関連する活動に伴って、1985 年以降に採集されたものである。調査会の標本は、主要なものはすべてここに納められている (普通種の標本約 2 万点は、整理が追いつかないため別途保管) ので、愛知県の最近の状況はこれでほぼ把握できる。ただし、古い標本がほとんどないため、過去の状況は把握できない。西三河地方の植物を長い間調査してこられた故大原準之助氏の標本は、寄贈を受けたがデータが不備で、大部分は整理できなかった。シダ植物とテンナンショウの標本約 5 万点は、もともと芹沢俊介が研究用に日本各地で採集したもので、愛知県という地域性はない。後者は基準標本など一部を除けば新聞紙にはさんだままであるが、種類毎に、量の多いもの

は更に地域に分けて整理されており、必要な時にはすぐ取り出すことができる。

ただしこれらの標本は、標本室に空調等の設備がなく管理の労力も足りないため、湿度の高い夏の間（5～10月）は防虫剤を入れて封鎖状態にしてあり、原則として利用できない。また、標本室のスペースが足りず、標本が棚いっぱいを出し入れに細心の注意を要する状態なので、冬の間も外来者に自由に利用してもらえない状況にはない。もちろん研究上の利用は歓迎するので、必要な場合は芹沢まで連絡してもらえれば、可能な限り対応する。

愛知県内の過去の状況を知ることが出来る資料としては、鳳来町立鳳来寺自然科学博物館に、東三河の植物を長い間調査された故鳥居喜一氏の標本約3万点が収蔵されている。また豊橋市立自然史博物館には、東三河南部の植物を調査された故恒川敏雄氏の標本約1万点が収蔵されている。どちらも採集日順の整理なので利用しにくい、標本目録が発行されているので、それをもとに目的の標本を探し出すことはできる。鳥居氏の標本目録は、基本は鳥居氏自身の手によって整理されており、信頼性が高い。恒川氏の標本目録は同定の誤りが多く、標本で再確認の方がよい。

なお、尾張地方を中心とした地域の植物を長い間調査してこられた井波一雄氏の標本は千葉県立博物館に納められているが、聞くところではこれもデータが不備で、あまり利用できないらしい。

維管束植物以外では、名古屋大学博物館に、高木典雄氏が収集されたコケ植物の標本約6.5万点が収蔵されている。

#### (D) レッドデータブック

愛知県植物誌調査会から1996年にNGO版維管束植物レッドデータブック『植物からのSOS 愛知県の絶滅危惧植物』（B5判 130頁）が発行され、1998年には環境庁のレッドリストを受けて、その緊急修正版『愛知県維管束植物レッドリスト』が発行された。更に、これらのNGO版レッドデータブックの実質的な改訂版として、2001年9月に愛知県環境部から、『レッドデータブックあいち植物編2001』（A4判 714頁）が発行された。調査対象は維管束植物とコケ植物で、維管束植物は芹沢俊介が愛知県植物誌調査会の資料を基に評価・執筆を担当し、絶滅（野生絶滅を含む）35種（一部亜種・変種を含む、以下同様）、絶滅危惧IA類55種、IB類159種、II類201種、準絶滅危惧119種、計561種と、全国版レッドデータブック掲載種で愛知県ではリスト外と判定されたもの23種が掲載されている。コケ植物のうち蘚類は高木典雄氏が担当し、絶滅危惧IA類11種、IB類11種、II類6種、準絶滅危惧21種、苔類は山田耕作氏が担当し、絶滅（野生絶滅を含む）3種、絶滅危惧IA類1種、IB類8種、II類2種、計14種が掲載されている。もともと発行部数が少なかったこともあって、県環境部の在庫はすでになくなっているが、協力者用に増刷したものが芹沢の手もとに多少残っている。

一方、写真を中心とした普及版は2002年3月に発行されたが、これも発行部数が少なく、数日で売り切れてしまった。現在では版權を愛知みどりの会が譲り受け、表題を『自然からのSOS レッドデータブックあいち・植物編解説』（B6判 244頁）と改め、相当数の写真を加えると共に『植物からのSOS』概説部分を全面的に書き直した上で収録し、装丁も改良して再発行したものを供給している。

市町村単位のレッドデータブックとしては、安城市からやや簡略化された体裁であるが、『安城の植物 安城の貴重な草花』（2001年 安城市）が発行されている。名古屋市のレッドデータブックは、愛知県のものとはほぼ同じ形式で、2003年度に発行される予定である。

#### (E) 植物群落

植物群落関係の研究については、現況を十分把握していない。

（芹沢俊介：〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学生物学教室 TEL：0566-26-2363 FAX：0566-26-2310）

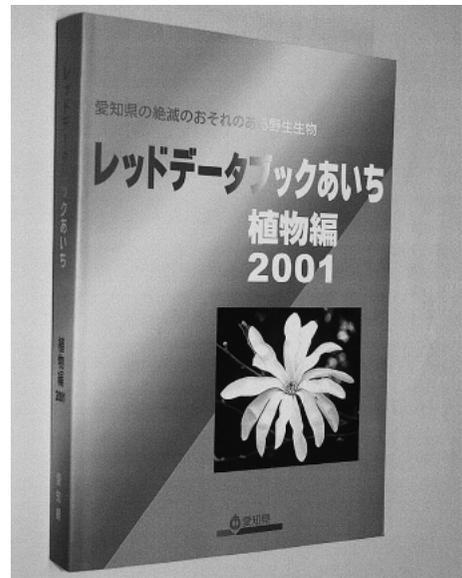


図 89. レッドデータブックあいち 植物編 2001

## 24. 三重県

山本和彦



図90. 三重県植物誌 上巻

## (A) 植物誌

三重県全域についての植物誌については、伊藤武夫による『三重県植物誌』（1932年 三重県植物誌発行所 上巻404頁、下巻436頁 絶版）が刊行されている。これには県内産植物目録も記載されているが、裏付けとなる標本はない。その後1951年に『三重県産生物目録』（三重県生物調査委員会 絶版）が出版されている。本書は県内産動植物の目録で、植物部門は、顕花植物・シダ植物（伊藤武夫）、蘚苔類・地衣類（伊藤武夫・孫副 正）、海藻類（瀬木紀男）のそれぞれの分野について目録および主な産地が記載されている。これらについても標本の引用はない。以上の二つ以外に三重県全域に関する植物誌は刊行されておらず、半世紀以上を経過した現在でも公的機関による植物誌編纂の計画はない。しかしここ数年来、加田勝敏らにより、大阪市立自然史博物館や三重県立博物館等に所蔵されている、三重県産植物標本の確認や整理が精力的に行われている。また県内のフローラに関する新知見や標本も増加しつつある。三重県では今のところ、前述の加田勝敏等、民間サイドから植物誌を編纂するための基礎的な資料収集が行われているのが現状である。

県内に帰化が認められる帰化植物について、太田久次は『改訂三重県帰化植物誌』（1997年 株式会社ムツミ企画 246頁）を出版している。三重県における帰化の歴史や帰化の概要等が

述べられ、後半には542種類の県内帰化植物の目録およびそれぞれの発見年が載せられている。シダ植物では、三重シダの会により『三重県のシダ植物』（1989年 三重県良書出版会 188頁 絶版）が刊行されている。本書には、1988年末までに三重県内で確認された295種、27変種、16品種、4奇形種、65雑種のシダ植物がとりあげられ、それぞれの特徴や、県内の分布状況が記載されている。裏付けとなる標本も大阪市立自然史博物館や京都大学等の公的機関の標本庫に所蔵されている。

県内の地域フロラとしては、川口三好次『尾鷲の植物誌 種子植物篇』（1979年 尾鷲市教育委員会）や四日市市自然環境保全現況調査グループ（編）『四日市市の植生と植物相』（1990年 四日市市環境部環境保全課）等がある。『大宮町史自然編』（1986年 大宮町）には山田耕作、山内繁太郎、孫副 正、中馬千鶴等により大宮町の植物フローラがまとめられている。また『多度町史自然』（1995年 多度町）において加田勝敏、葛山博次は多度町の植生と植物相を報告している。最近では、山本和彦が『勢和村の植物フロラ』（2001年 『勢和村史』資料編二）をまとめている。

他に三重県内の植物誌に関する書籍では、武田明正『三重の樹木』（1980年 三重県・大阪営林局）、武田明正『郷土の樹木 —三重県の樹木誌—』（1993年 第17回全国育樹祭三重県実行委員会）がある。三重生物教育会による『三重の生物』（1994年）にも三重県の植物の概要や各地域の特性などが紹介されている。また御在所岳など、鈴鹿山脈の代表的な山の花の写真集や解説書も刊行されている。

## (B) 研究機関

県内の動植物や地質・地形等、自然環境全般にわたって調査研究および啓蒙活動を行っている会として、「三重自然誌の会」（事務局三重県立博物館気付）がある。県内の自然情報を紹介した情報誌『自然誌だより』が季刊され、2002年の夏号で53号になる。また県内の自然誌に関する総説・論文・短報・資料を扱った会誌『三重自然誌』が年1回発行されている。これまで「菅島の生物」、「伊賀の自然」、「志摩半島の湿地」、「海山町船越池のハマナツメ群落」等の特集が生まれ、植物関係では、それぞれ植物相や植生が報告されている。

シダ植物の同好会として「三重シダの会」があり、年2回の観察会が実施されている。また年1回発行される会誌『三重のしだ』には、県内のシダ植物の分布状況等の情報が載せられている。前述の著書『三重県の

シダ植物』はこの会が発行。コケ植物に関する会として「三重コケの会」がある。会誌『三重コケの会ニュース』が年4回発行され、2002年で22巻3号になる。会誌では県内外を問わず、全国的なコケのフロウラが報告されている。

#### (C) 標本庫

三重県立博物館には約5万点の標本があり、矢頭献一、百永章、筒井養之助、服部哲太郎、小出哲夫らのコレクションが収められている。現在、大部分が未整理な状況で、閲覧、ローン等は不可。他に市町村の郷土資料館や公民館等には地域の標本が収められたところもわずかだがある（例えば、尾鷲市郷土室には尾鷲市周辺で採集されたシダ植物の標本が収蔵されている）。しかし担当者が替わると標本の管理が放棄される懸念もあり、今後の管理が問題となってくると思われる。

#### (D) レッドデータブック

1995年に三重自然誌の会より『自然のレッドデータブック・三重—三重県の保護上重要な地形・地質および野生生物—』（三重県教育文化研究所 183頁）が刊行されている。これには329種の保護上重要な植物種が掲載されている。現在レッドデータブックの改訂作業が進行中で、2001年に三重県立博物館と三重自然誌の会により「レッドデータブック準備書 レッドデータブック三重2005・調査対象種および重要生態系候補地一次リスト」を公開し、現況調査を行っている。植物は維管束植物451種、10亜種、62変種、6品種、1雑種およびコケ植物27種が調査対象種となっている。2005年に改訂版が刊行される予定である。

#### (E) 植物群落

三重県の現存植生図は、1979、1985年に環境庁から発行されている。また1979年には『第2回自然環境保全基礎調査植生調査報告書』（武田明正他 三重県・環境庁）が刊行され、1984年に南川幸は宮脇昭（編）『日本植生誌 近畿』において「三重県の植生」をまとめている。環境庁による特定植物群落調査は1978、1988、1997、1998年に行われ、県内の保護上重要な植物群落の調査およびその後の追跡調査が実施されている。日本自然保護協会発行『植物群落レッドデータブック』（1996年）には、三重県における保護対策を必要とする植物群落が110余掲載されている。

天然記念物関係では三重生物教育会『三重県の天然記念物』（1992年）が刊行されており、県内の天然記念物の現況がまとめられている。

（山本和彦：〒519-3647 三重県尾鷲市小川西町8-40 TEL & FAX：05972-3-2696 Email：paliurs@mtu.ne.jp）

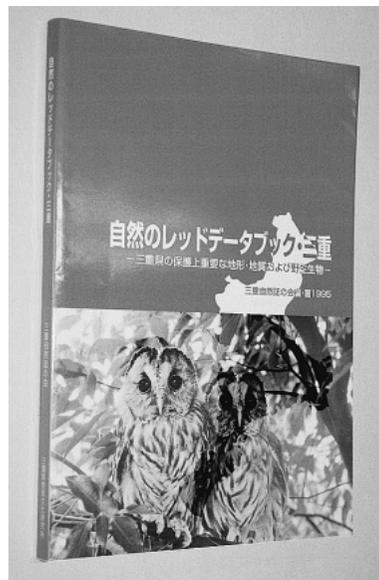


図91. 自然のレッドデータブック・三重

## 25. 滋賀県

村瀬忠義

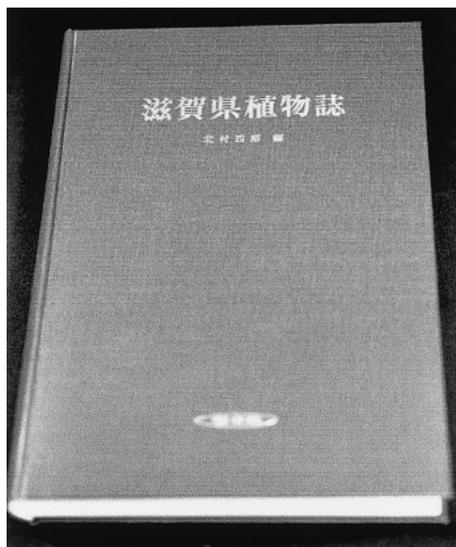


図 92. 滋賀県植物誌

### (A) 植物誌

地方植物誌の先駆けと考えられる 1968 年に出版された北村四郎 (編)『滋賀県植物誌』(保育社 絶版)がある。B5 判、362 頁で、滋賀県の植物研究史、滋賀県天然記念物、滋賀県有用植物、滋賀県植物地理、滋賀県野生植物 (種子植物、シダ植物、苔類、菌類、鼓藻類、琵琶湖の植物性プランクトン) に及んでいる。種子植物、シダ植物の目録には 2,075 種類がリストアップされている。この目録はほとんどが京都大学理学部植物学研究室の標本庫 (現在は京都大学総合博物館) に保存された標本による記載であり、特に故橋本忠太郎氏 (1886-1960 年) が全県下を精力的に踏査・採集された標本がその中に寄贈され、それが基礎となっている。

滋賀県の植物分布に関しては、村瀬忠義 (1979 年) は『滋賀県の自然』(滋賀県自然保護財団発行) に「滋賀県の植物地理概説」(899-928 頁) として滋賀県における分布上注目すべき植物 (分布図)、区系分布から見た滋賀県植物の分布を、滋賀県植物地理区を設けて解説を試みた。また、村瀬忠義 (1990 年) は『プランタ』(第 9 号 81-86 頁) の「地域植物誌研究」

に滋賀の植物としてフローラの概説と滋賀県の植物誌についても触れ、その当時の算定ではシダ植物以上の高等植物で約 2,150 種類に追加された。現在、県立琵琶湖博物館の標本から目録を作成中であるが、約 2,300 種類は下らないと推定される。

県内の地域フローラとしては、近年市町村が盛んに改訂版を出しており、『米原町史 通史編』(2002 年) は霊仙山、『守山市誌 自然編』(1996 年) は野洲川流域のフローラと植生が詳細に述べてある。その他、『滋賀県の自然保護に関する調査報告書』(吉良竜夫・菅沼孝之他 1972 年 滋賀県)、植物分類学者の村松七郎『彦根の植物』などがある。

### (B) 研究機関

滋賀県立琵琶湖研究所 (大津市) では日本最大の古代湖、琵琶湖とその集水域および世界の湖の総合研究が行われ、『琵琶湖研究所所報』、『琵琶湖研究所ニュース』や多数の研究報告がだされている。滋賀県立琵琶湖博物館 (草津市下物町) は琵琶湖を中心とした自然史系博物館と民族資料館との両面を持ち、国内外の総合的な研究と資料集めがなされ、『琵琶湖博物館研究調査報告』や『資料目録』が多数刊行されている。また、近くには草津市立水生植物公園があり、ハスやスイレンなどの水生植物のほか多数の草花や花木が栽培され、池の多い庭園が美しい。野洲郡野洲町の希望ヶ丘文化公園内には森林センターや花緑公園 (樹木園) がある。

滋賀県植物同好会は 1985 年発足以来、例会や野外調査活動が活発で、会誌『滋賀の植物』の号を重ね、『びわ湖グリーンハイク』(1994 年)、『びわ湖フラワーハイク』(1997 年)、『近江植物歳時記』(1998 年) をいずれも京都新聞社より発行している。滋賀県植物研究会も 2001 年春に発足し、琵琶湖博物館に集い、『滋賀県植物誌』の改訂・編纂を大きな目標として、野外調査で植物標本や生態写真の収集に励み出した。

### (C) 標本庫

滋賀大学教育学部生物学教室生物標本室に整理済標本 3,600 点 (菌類 1,600 点を含む) と未整理標本 3,800 点、合計 7,400 点がある。整理済標本には故橋本忠太郎氏のコレクションのシダ〜種子植物の約 2,000 点がある。これらは『滋賀県植物誌』に引用されている。

滋賀県立琵琶湖博物館の標本庫には腊葉標本総数約 141,700 点があり、内訳は桑島正二 (前近畿植物同好会会長) 標本 19,950 点は整理・配架されて、『琵琶湖博物館植物標本目録 1』が刊行された。全国産地が主で、滋賀県産標本は 2,000 点未満である。村瀬忠義標本は総数約 77,000 点あり、滋賀県産標本が約 50,000 点、県外産標本約 27,000 点で、滋賀県産標本の大半が整理・配架されつつある。この滋賀県産標本は滋賀県

全域を網羅しており、特に伊吹山の標本は稀産種などがほとんど揃っており、点数も多いので、交換標本に使用し、目録刊行の準備が始まっている。橋本忠太郎標本は滋賀県産で、コレクションは三つに分けられて、京都大学総合資料館の植物収蔵庫、滋賀大学教育学部生物学教室生物標本室、その残部が滋賀県立琵琶湖博物館に寄贈され、その内、琵琶湖博物館にはシダ～種子植物の約30,000点および蘚苔類標本約1,500点が整理中である。琵琶湖博物館は開館10年に満たないが、明治時代からの標本が揃うようになった。整理・配架が進めば閲覧も可能である。続いて、北川良也標本1,203点、建部俊夫標本（主にシダ植物）1,482点は整理・配架され、『琵琶湖博物館植物標本目録 2』として刊行の作業が進行中である。さらに谷元峰男標本（整理中）約5,200点、西田謙二標本（未整理）約5,000点、博物館職員とその他採集の標本が約1,700点がある。その他、菌類（キノコ）約108点も集まっている。これらのシダ～種子植物の滋賀県産標本は総数が8万点を越え、将来『滋賀県植物誌』の改訂の声が上がっている。

東浅井郡浅井町立博物館に松山外次郎氏の植物標本約2,000点余りが寄贈され、保管されているが、大正から昭和初期に採集されたもので、産地は藤原岳、御在所山、伊吹山周辺、大台ヶ原、石川県白山、三重県各地で現在は法規制で採集できないものや絶滅種、絶滅危惧種が含まれる。

その他、青木 繁（私設研究所）氏と村長昭義氏（犬上郡多賀町立博物館に寄贈）の標本が多数ある。

#### (D) レッドデータブック

2001年にレッドデータブック近畿研究会（編著）『改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータブック近畿 2001—』が関西自然保護機構から出版され、滋賀県では408種類があげられている。

滋賀県琵琶湖環境部自然保護課から『滋賀県で大切にすべき野生生物（2000年版）目録』（「植物」31-82頁+解説書CD-ROM）が刊行されている。植物には522種類が上げられている。

#### (E) 植物群落

滋賀県の自然環境保全調査から『滋賀県の現存植生と貴重自然』（1974年 滋賀県発行）として、5万分の1の地図の現存植生図と貴重自然の分布図が描かれた。滋賀県の詳細な植生に関しては『滋賀県の自然』（1979年 滋賀県自然保護財団発行）に滋賀県の植生分類と解説および分布図などを969-1,048頁に滋賀県植生調査研究会が纏めている。1998年にまとめられた環境庁の『特定植物群落調査報告書』（追加・追跡調査を含む）があり、全県下の注目すべき植物群落の調査がなされている。年代の古いもので、2冊の『滋賀県天然記念物調査報告書』がある。第一冊（1924年）は滋賀県保勝会発行で「第一篇植物」のほか動物、地質鉱物の篇も含まれる。第二冊（1935年）は滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会の編纂、滋賀県発行によるもので、報告書は天野川源氏蝨発生地以外は植物で主として橋本忠太郎氏と阿佐常右衛門氏が分担している。当時の自然状態の貴重な植物や植物群落の詳細な記載がなされている。

（村瀬忠義：〒526-0067 滋賀県長浜市港町1-8 TEL & FAX：0749-63-9006）

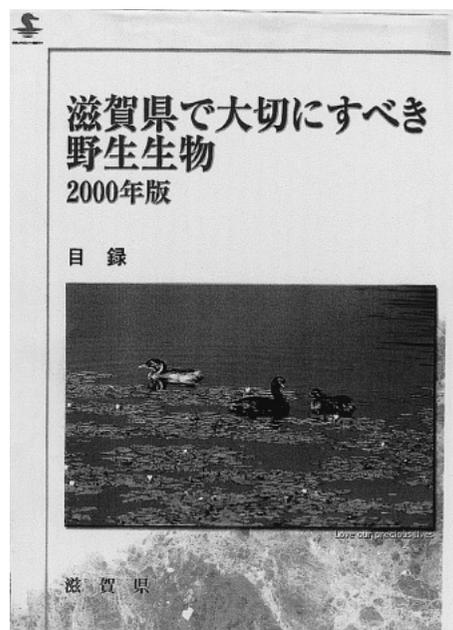


図 93. 滋賀県で大切にすべき野生生物 2000年版

## 26. 京都府

村田 源

## 京都府草木誌

竹内 敬 著

## (A) 植物誌

京都府はまだ植物誌が完成していない。京都府のフローラに関し、最もまとまった本は竹内 敬『京都府草木誌』(1962年 A5判 157頁+白黒写真アート 26頁 宗教法人大本 目下絶版)である。この本は竹内 敬氏が明治40年頃から昭和23年頃までに京都府下で個人で採集されたシダ植物、顕花植物(帰化植物も含む)の目録で、2,147種が記録されている。

普通種は学名と和名だけが記され、分布上注目すべき植物は産地を、稀なものは「稀産」または「稀品」として採集年月日も記されている。種名の配列は本田正次『日本植物名彙』によって、羊歯、裸子、被子植物(双子葉、単子葉)の順に並べられ、最後に「私の未採集品」として105種の産地と採集者が記録されているが、文献と索引が無いのが惜しまれる。

生物多様性調査の時、ここに記されているものは全部カードに起こし、標本についても調査したが普通種については標本が見つからなかった。稀産種の大部分は京都府立植物園に寄贈されて未整理のまま残されている。

京都府立植物園は標本室が整備されておらず、非公開であるが、当時の園長の特別許可を得て標本を調べることができた。その標本を再

図 94. 京都府草木誌

検討した結果は、村田 源によって「京都府立植物園に残された竹内 敬先生の標本の再検討」として『京都植物』第23巻第4号(1997年)以後に毎号連載(目下連続中)されている。

一般向けに書かれた本には次のようなものがある。永井かな『鞍馬・貴船の植物図譜』(1983年 個人出版)、吉見昭一『京都のキノコ図鑑』(1986年 京都新聞社)、村田 源(監修)・永井かな(解説)・内藤登喜夫(写真)『京都の野草図鑑』(1985年 京都新聞社)、伊佐義朗『京都市の巨樹名木 I-IV』(1974-76年 京都市)、『京都市の巨樹名木補遺 I-IV』(1979-89年 京都市景勝地植樹対策委員会)、亀岡市名木古木選定委員会(編)『亀岡の名木』(1996年 亀岡市)、京都府植物相研究会(編)『山陰海岸国立公園久美浜海岸砂丘の植物』(1996年 久美浜町教育委員会)、やましる里山の会(編)『木津川の花ごよみ』(2000年 淀川工事事務所木津川出張所)、米沢信道『京都御苑 四季の花』(2002年 京都新聞社)。

また、植物以外の自然を紹介したものの中で、京都府のフローラに関し重要と思われるものをいくつか記録すると、京都自然研究会(編)『京都の自然』(1960年 六月社)、村田 源・間直之助『嵐山の植物とサルの食草』(1968年 岩田山自然史研究所)、深泥池を守る会(編)『深泥池—みぞろが池』(1994年 深泥池を守る会)、北村四郎・景山春樹・藤岡謙六(編)『比叡山—その自然と人文—』(1961年 京都新聞社)、この本には比叡山の植物解説及び比叡山植物目録が載っている。久山喜久雄(編)『フィールドガイド大文字山』(1993年 ナカニシヤ出版)、四手井綱英(編)『下鴨神社糺の森』(1995年 ナカニシヤ出版)、藤田 昇・遠藤 彰(編)『深泥池氷期からの自然』(1994年 京都新聞社)、井本伸広・山崎泰正(編)『京都の不思議事典』(2000年 新人物往来社)などがある。

また限られた地域を詳しく取り扱ったものには、三木 茂『山城水草誌』(1937年 『京都府天然記念物調査報告書』)、『巨椋池干拓誌—三木 茂による植物記事がある(1962年 巨椋池土地改良区)、『巨椋池干拓誌 追補版』(1981年 巨椋池土地改良区)、岡本省吾『芦生演習林樹木誌』(1941年 『京大農演習林報告』13)、S. Yasuda and H. Nagamasu 『Flora of Ashiu, Japan』(1995年 『Contr. Biolog. Lab. Kyoto Univ.』 No. 4)、村田 源『嵐山植物目録』(1965年 大阪営林局)、深泥池学術調査団(編)『深泥池の自然と人』(1981年 京都市文化観光局)、京都市林業振興課(編)『八丁平環境調査報告書』(1985年 京都市経済局)、村田源・田端英雄・井本伸広『大江山連峰の自然体系調査報告書—大江山周辺の地学概説と内宮岩戸山付近の植物』(1996年 京都府加佐郡大江町)、山崎俊彦『京都西山周辺の植物目録』(1999年 乙訓の自然を守る会)、京都府生物教育会(編)『京都の生物教育』(1999年 日本生物教育会第54回京都大会実行委員会 1-21頁)に村田 源によって「京都府の植物」として植生の概要と共にフローラ関係の文献もまとめられている。

## (B) 研究機関

「京都大学理学部植物学教室」大正8(1919)年に小泉源一先生が助教授として京都帝国大学にこられてから、この方面の研究の中心となった。京都大学理学部に植物学科第三講座が設置されたのは昭和17年で植物分類学及び植物地理学がこの講座の内容となった。それより先、1932年に「植物分類地理学会」が設立され、『植物分類、地理』が刊行されるようになり、その事務局が植物学教室に置かれ、若手研究者と在野の植物研究者達との間に緊密な関係が生まれた。『植物分類、地理』は第51巻まで続き、70周年記念事業として第1-50巻(1932-2000年)の総索引が出版された。2001年より「日本植物分類学会」と合併し、英文誌は『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』の誌名を継承し第52巻より出版、新しく和文誌は『分類』という誌名で第1巻より発刊されることになって今日に至っている。

アマチュア植物同好会としては「京都植物同好会」があり、京都府下のフローラの研究に対しては最も中心的な役割と活動を行っている。年間12、1、2と7、8月を除いて各月毎に野外観察会を行い、毎年1回(1月または2月)に総会と講演会を行っている。創立は1952年で会誌として『京都植物』が刊行されている。『京都博物』は第1-18巻までは謄写版刷であったが、第19巻より簡易印刷となり現在(2002年)第26巻が発刊中で、2年で1巻を閉じるように編集されている。「博物同好会」が1939年に設立され『野外博物』という誌名で第1-5巻まで刊行されたが、大東亜戦争で自然消滅し、戦後そのあとを継ぐ形で出発したのが「京都植物同好会」である。

京都には京都府立植物園があるが、花卉園芸が中心で、植物誌的な研究は行われていない。京都府立大学、林業試験場等が公立の研究機関としてあるが、いずれも林学が中心でフローラ的な研究はほとんど行われていない。

## (C) 標本庫

京都大学には約150万点の植物標本がある。これはフランス人の宣教師 Urbain Faurie が日本、台湾、朝鮮半島などで採集し、手元に残していた標本約6万点(コケ・地衣等も含む)が国外に持ち出されようとしていたのを、岡崎忠雄氏が買上げて7個の標本箱と共に京都大学に寄贈されたのが基となり、田代善太郎氏の主として九州地方での採集品約2,500点を桃谷順一氏が買上げて寄贈されたものを加え、その後小泉源一、大井次三郎、北村四郎、田川基二、広江美之助を始め、ここで研究を行った田村道夫、村田源、岩槻邦男、清水建美、北川尚史、堀田満、小山博滋、福岡誠行、近田文弘、鳴橋直弘、若林三千男、高橋弘、加藤雅啓、光田重幸、永益英敏他の採集品を加え、アマチュアの研究者からの寄贈によるもの及び海外の研究機関との交換によるものなどである。理学部植物学教室にあったが、「京都大学総合博物館」が出来上がってから、シダ植物だけをもとの植物学教室に残し、種子植物や地衣、コケその他は全部総合博物館に移っている。目下関西では最も充実した標本庫となっていて、全世界各地からの採集品と共に Engler システムによる順序で、全部一律に整理されている。種以下の亜種、変種、品種に至るまでほとんどカバーを作って中に納められているので、専門家はすぐに目的の標本を取り出せるようになっているが、各台紙に貼付けられたラベルには必ずしも同定した植物名が記されていないので、標本が自分で同定できる人でないと、一般の同好者には利用はちょっと無理である。

その他外国のものでは、サハリン、台湾、朝鮮半島、中国大陸、ミクロネシア、北アメリカ、ヨーロッパ、ブラジルなどの標本が収納されている。海外調査によるコレクションとしては、ヒマラヤ、アフガニスタン、インドネシア、タイ、フィリピン、北アフリカなどのものが比較的充実している。

「京都市青少年科学センター」設立当初には一般の人々にも利用できるような標本室も作って努力されたが、標本を管理し取扱う能力のある職員がその後継続して配置されなかったので、標本の補充、管理が行き届かず、虫害もひどくなって、この施設が少なくとも標本に関してはセンターとしての役割を果たしていない。

「大花山植物園」亀岡市天恩郷(旧亀岡城跡)にあり昭和26(1951)年開園。初代園長は『京都府草木誌』の著者竹内敬、現園長は津軽俊介。現在収蔵標本(シダと顕花植物)約10万点。京都府下の標本はこの標本庫が最も充実している。設立が新しく、何も無いところから出発したので、私が提案したとおり実行していただいたので、標本の質はおそらく日本一であろう。花や実のついたものだけでなく、実生や徒長枝、種子や冬芽をつけた枝、双葉をつけた幼植物まで標本とし、木の全形や花の状態などは写真による記録を併用してラベルと共に立体的に記録の充実をはかり、サクラジマダイコンやスイカまで標本にされている。またできるだけ変異を標本として記録することに努め、大小様々の個体を採集して複数の標本を作り、同じ採集者

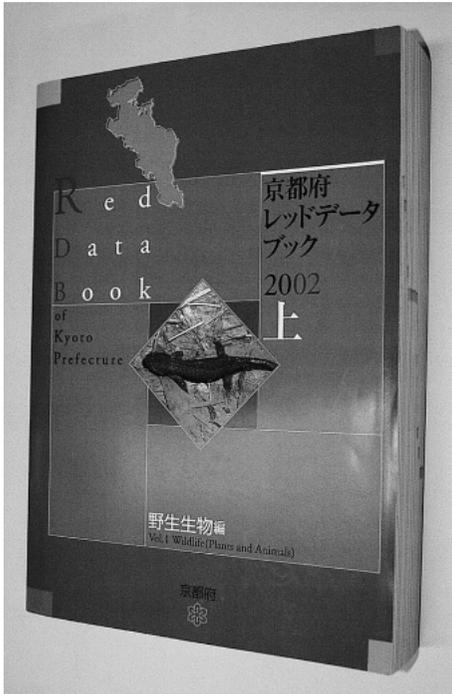


図95. 京都府レッドデータブック 2002 上

No. を付して、国内はもとより、海外の主な標本館とも標本交換を行っている。その第一セットは京大の総合博物館にあり、ついで国立科学博物館、東北大学、東京都立大学、金沢大学、岐阜大学、福井総合植物園、大阪自然史博物館、牧野植物園、頌栄短大、倉敷市立自然史博物館などにも収納されている。海外では台湾中央科学院、ミズリー植物園、カーネギー自然史博物館、ハーバード大学、ニューヨーク植物園あたりとも交換を行っている。現在一番困っているのは、小さい宗教法人大本の本部の一部にあり、収納標本の収蔵力が限界にあり、標本の閲覧に関するスペースが全く無いことである。海外の標本では、ブラジルのものが比較的まとまっている（未研究）。

#### (D) レッドデータブック

『京都府レッドデータブック 2002 上 野生生物編』（935頁）、『京都府レッドデータブック 2002 下 地形、地質、自然生態系編』（471頁）が2002年4月に刊行された。植物では絶滅種、絶滅寸前種、絶滅危惧種、準絶滅危惧種、要注目種のカテゴリーに分け、コケ類138、シダ植物108、種子植物556種類が記録されている。この調査には大本花明山植物園が中心となり、大本本部の会議室を貸していただいて植物分科会を開き、資料を持ち寄って検討を重ねた。

この京都府レッドデータブックの完成によって、絶滅が危惧されている多くの種が遺存しているところは、地形、地質関係でもレッドリストにあげられている所と密接な関係があることがわかった。

本書を入手希望される方は〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町 京都府企画環境部環境企画課に申し込めば上下巻セットで5,000円（送料別）で入手できる。

#### (E) 植物群落

『京都府植生図 1/50,000』（1974年 京都府教育委員会）、『京都市植生図 1/10,000』（1979年 京都市公害対策室）、第2回自然環境基礎調査（植生調査）による『現存植生図』（1982年 環境庁）がある。京都府公害対策室による『京都府の植物（自然環境保全のための基礎資料）』（1965年 京都府）、第2回自然環境保全基礎調査による『京都府植生調査報告書』（1979年 京都府）が発行されている。1989、1998年におこなわれた環境庁特定植物群落調査により、府内の主要な植物群落が記載され、定期的な状況の把握が行われている。

植生に関しまとまった図書としては宮脇 昭（編）『日本植生誌 近畿』（1984年 至文堂）があり、その中の地域植生誌として「京都府の植生」（453-464頁）が村田 源によってまとめられている。京都市北区にある深泥池は浮島や多くの遺存種が存在することが知られ、深泥池水生植物群落として国の天然記念物に指定（1927年）されていたが、指定対象は深泥池生物群集に変更（1988年）された。浮島に関する主な論文には次のようなものがある。三木 茂「深泥池特に浮島の生態研究」（1929年 『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第10冊 61-143頁 京都府） 京都大学理学部生態研究施設深泥池研究グループ「深泥池浮島の生態学的研究」（1981年 『深泥ヶ池の自然と人』京都市文化観光局）がある。

（村田 源 〒615-8282 京都市西京区松尾大利町 20-55）

## 27. 大阪府

藤井伸二

## (A) 植物誌

## i) 研究小史

植物研究が本格的に始まったのは、田代善太郎・牧野富太郎の指導をうけて、原 宮男・川崎 正・竹下英一らが発足させた「大阪植物同好会」の活動（1926～1931年 会報は第1～42号）からである。竹下の名は牧野によってカツラギグミに献名された。その後、堀 勝・津田広之助により1929年に発足した「堺植物同好会」は、「河泉植物同好会」を経て「近畿植物同好会」に改称、現在に至る。府下の植物標本の大部分は「近畿植物同好会」が開催した採集会で収集され、それらが植物誌編纂の基幹資料となっている。

池田師範学校の教諭をながく勤めた堀は、田代の指導を受けつつ、桑島正二をはじめ多くの博物好きの教員を養成し、彼らの協力によって最初の大阪府植物誌を刊行した（1938年）。戦後に再開された「近畿植物同好会」の採集会は、北村四郎・田川基二・広江美之助・村田 源（京都大学植物学教室）らの指導を受け、児玉務・瀬戸 剛・米沢新治・小山三郎・中西定雄・中島徳一郎・松本邦夫・里中長治らが活躍した。その成果は、堀 勝による増補改訂版として刊行された（1964年）。1970年代および1980年代の研究の進展は、大阪市立自然史博物館（1974年に現在の場所に移転）において標本の受け入れ・整理を精力的に行った瀬戸 剛の尽力による。それらは、桑島正二による目録の刊行（1990年）によって集成された。近年では、補遺を執筆している平野弘二・山住一郎の他、帰化植物の植村修二、泉州地域の清水千尋・上久保文貴、北河内地域の田中光彦などの活動が顕著。2001年末までに開催された採集会（後年は「例会、観察会」と改称）は、通算505回にもおよぶ。詳しくは、下記文献および『近畿植物同好会々誌・会報』を参照。

近畿植物同好会（編）、1968年、近畿の植物、35頁、近畿植物同好会、大阪。

桑島正二、1989年、私の植物研究、プラント（3）：69-74頁。

## ii) 概説

大阪府は、概して植物相が貧弱である。しかし、日本海要素と襲速紀要素の遷移帯にあたることや、大陸草原性植物群の遺存分布、淀川沿いに生育する原野の植物などに特徴がある。詳しくは後述の植物誌（堀 勝1964年）および以下の文献を参照。

瀬戸 剛・梅原 徹、1993年、地域植物研究—大阪府、プラント（29）：39-43頁。

レッドデータブック近畿研究会、2001年、改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータブック近畿2001—、164頁、4図版、平岡環境科学研究所、川崎。（府県別の総説があり、文献として重要）

## iii) 植物誌・目録

植物誌はこれまでに3回出版され、最新のものが桑島正二（1990年）である。これは、大阪市立自然史博物館の収蔵標本に基づいた目録で、著者とその協力者らおよび歴代の研究者らが半生をかけて標本を収集・整理した成果である。大阪府が刊行した野生生物目録は、桑島の目録にその後の補遺を加味したものだが、産地情報は省かれている。なお、植物相や地域的特色は、堀 勝（1964年）に詳しい。

田代善太郎・堀 勝、1938年、大阪府植物誌、289頁、大阪府池田師範学校、大阪。

堀 勝、1964年、大阪府植物誌 増補改訂版、436頁、六月社、大阪。

桑島正二、1990年、大阪府植物目録、197頁、近畿植物同好会、大阪。

大阪府（編）、2000年、大阪府野生生物目録、352頁、大阪府、大阪。

## iv) その他の主要文献

桑島正二（1990年）以降、目録の補遺が継続的に報告されている。また、その他にも特定地域の植物相を扱った報告がある。以下に主なものを記す。

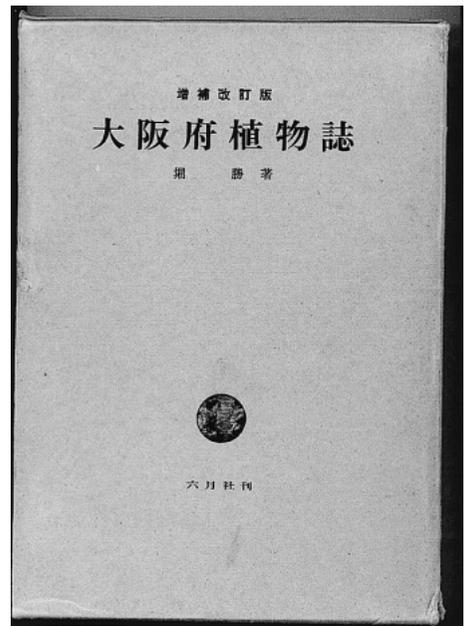


図 96. 増補改訂版 大阪府植物誌

- 梅原 徹・栗林 実. 1991 年. 滅びつつある原野の植物. *Nature Study* **37** (8) : 3-7 頁.
- 大阪府 (編). 1989 年. 天野山の自然とその保全. 大阪府, 大阪. (梅原 徹氏が執筆, 標本引用を報告書レベルで行った画期的リスト)
- 大阪府 (編). 1999 年. 槇尾川ダム地域の自然. 大阪府, 大阪. (梅原 徹・丸井英幹・瀬戸 剛らによる研究史, 植生, 植物相がまとめられている)
- 大阪府農林部自然保護課 (編). 1977 年. 金剛・生駒山地及和泉山脈の環境保全調査 (学術調査). 大阪府, 大阪. (瀬戸 剛氏が執筆, 大阪府南部山地に特徴的にみられる植物についての文献)
- 大阪府農林部自然保護課 (編). 1978 年. 北摂山系自然環境保全調査 (学術調査). 大阪府, 大阪. (堀田 満氏が執筆)
- 近畿植物同好会 (編). 1968 年. 近畿の植物. 近畿植物同好会, 大阪. (近畿地方全体の植物区系を扱っている)
- 桑島正二. 1991 年. 大阪府植物目録補遺 (1). 近畿植物同好会々誌 **14** : 3-4 頁.
- 桑島正二・平野弘二. 1993~97 年. 大阪府植物目録補遺 (2~7). 近畿植物同好会々誌 **16~21**.
- 小山三郎. 1966 年. 豊中植物誌. 教育研究所紀要 (25) : 1-168 頁.
- 堺植物同好会 (編). 1998 年. 堺市植物目録. 堺植物第 38 号.
- 清水千尋. 1990 年. 和泉市信太山の植物. 近畿植物同好会会報 (49) : 14-21 頁.
- 瀬戸 剛. 1963~1964 年. 近畿地方シダ植物目録 I~II. 大阪市立自然科学博物館研究報告 **16~17**. (OSA の標本にもとづく目録)
- 平野弘二・山住一郎. 2000~2002 年. 大阪府植物目録補遺 (8~10). 近畿植物同好会々誌 **23~25**.
- みどりとしきものマップづくり会議 (編). 1998 年. メッシュマップ大阪市の生きもの. 大阪市立環境科学研究所, 大阪. (市民調査による 246 種のメッシュマップが掲載)
- 村田 源. 1954~1988 年. 近畿地方植物誌 1~30. 兵庫生物 **2** (4-5) ~ **9** (4). (KYO の標本にもとづく目録)
- 村田 源. 1989~2002 年. 近畿地方植物誌 31~45. 近畿植物同好会々誌 **13~25**. (KYO の標本にもとづく目録)
- v) 発見・新産についての報告が掲載されるおもな雑誌  
『近畿植物同好会々報』, 『近畿植物同好会々誌』 (近畿植物同好会発行), 『Nature Study』 (大阪市立自然史博物館友の会発行)。

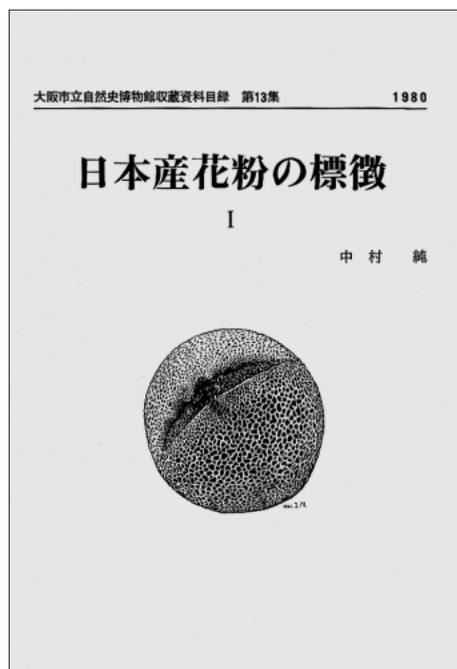


図 97. 日本産花粉の標徴 I

#### (B) 研究機関

- 大阪市立自然史博物館 (大阪市東住吉区長居公園) 種子植物研究者 2 名, 菌類研究者 1 名. 植物標本庫を有する (次項を参照). 研究報告, 自然史研究, 収蔵資料目録などを発行. 植物関連の収蔵資料目録には, 『日本産海藻目録 緑藻・褐藻, 紅藻 (1), 紅藻 (2)』, 『三木 茂博士寄贈水草腊葉標本目録』, 『真砂久哉氏収集和歌山県産シダ植物標本目録』, 『日本産花粉の標徴』, 『被子植物の花粉』などがある. 『自然史研究』には, 『琵琶湖産水草目録』 (第 2 巻第 11 号), 『収蔵標本目録 1』 (第 2 巻第 16 号), 『近畿地方の分布図文献目録』 (第 2 巻第 15 号, 第 17 号), 『シンポジウム記録集 21 世紀に伝えたい近畿の植物と自然環境—レッドデータブック近畿 2000 年版をめざして—』 (第 2 巻第 15 号) などがある.
- 大阪市立大学理学部附属植物園 (交野市私市) 植物分類学研究者 2 名.
- 大阪市立大学理学部 (大阪市杉本町) 植物生態学研究者 2 名.
- 大阪府立大学 (堺市学園町) 総合科学部所属の植物分類学研究者 2 名の他, 農学部にも多数の農学研究者を擁する.

以上の他, 大阪教育大学, 大阪学院大学にも植物分類/生態

学の研究者が所属している。しかし、いずれの研究機関にも、大阪府の植物相を主要テーマにしている研究者はいない。地域の自然については、きしわだ自然資料館、貝塚市立自然遊学館などが活動を行っている。ビジターセンター等は、箕面、金剛山、岩湧山などに設置されている。

### (C) 標本庫

○大阪市立自然史博物館植物標本庫 (OSA) 収蔵標本約 28 万点

大阪を中心とした近畿地方産植物を重点的に収集。近畿地方のフローラに関する標本資料としては、京都大学総合博物館 (旧理学部植物標本庫) について重要。とくに瀬戸 剛氏が精力を注いだシダ植物のコレクションが特色。また、蘚類・苔類・藻類の標本も充実。三木 茂水草コレクションと児玉 務苔類コレクションは多くのタイプ標本を含む。主なコレクションは以下のとおり。

山本虎夫海藻コレクション (13,000 点), 児玉 務苔類コレクション (23,000 点), 中島徳一郎蘚類コレクション (30,000 点), 真砂久哉和歌山県シダ植物コレクション (10,000 点), 瀬戸 剛維管束植物コレクション (50,000 点, OSA の骨格をなす重要なコレクション), 三木 茂水草コレクション (3,600 点, 多くのタイプ標本を含む), 桑島正二大阪府維管束植物コレクション, 梅原 徹維管束植物コレクション (10,000 点, 湿生植物が充実), 布藤昌一維管束植物コレクション (50,000 点, 整理中), 畔田翠山標本帖 (江戸時代の数少ない植物標本), 粉川昭平果実・種子コレクション (5,000 点, 整理中), 布谷知夫木材プレパラートコレクション (1,200 点)。

※閲覧：事前に植物研究室スタッフに連絡。〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館 植物研究室。TEL: 06-6697-6221 (代)。なお、標本庫についての詳細は次の文献を参照。

藤井伸二. 2002 年. 大阪市立自然史博物館植物標本庫 (OSA) について. 日本植物分類学会ニューズレター (5) : 25-27 頁.

### (D) レッドデータブック関連

#### i) レッドデータブック

大阪府に関連するレッドデータブックは、府発行のもの他に、環境庁発行の全国を対象にしたもの、レッドデータブック近畿研究会発行の近畿地方を対象にしたものがある。後者は、大阪府について、保護上重要な植物の現状、保護上重要な地域、保全上の課題などの記述が盛り込まれており、現状を概観するのに重要。

大阪府 (編). 2000 年. 大阪府における保護上重要な野生生物—大阪府レッドデータブック—. 404 頁. 大阪府, 大阪.

レッドデータブック近畿研究会. 2001 年. 改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータブック近畿 2001—. 164 頁. 平岡環境科学研究所, 川崎.

#### ii) 関連する文献

梅原 徹. 2000 年. 地方版レッドデータブック作成の意義と課題. 関西自然保護機構会報 22 (2) : 123-129 頁. (草原性植物の絶滅の様子を明らかにしている)

梅原 徹. 2001 年. 大阪で絶滅した水草の標本採集年代. 水草研究会会報 (73) : 1-6 頁. (水草の絶滅の様子を明らかにしている)

レッドデータブック近畿研究会 (編). 1999 年. シンポジウム「21 世紀に伝えたい近畿の植物と自然環境—レッドデータブック近畿 2000 年版をめざして—」記録集. 自然史研究 2 (15) : 297-244 頁.

### (E) 植生・植物群落

植物群落については環境庁等の報告があるが、いずれも樹林に偏重している。港湾整備と埋め立てにより著しく減少した海浜植物群落、ニュータウン開発で激減した丘陵地の貧栄養湿地性植物群落、埋め立てと富栄養化で見る影もなくなった溜め池

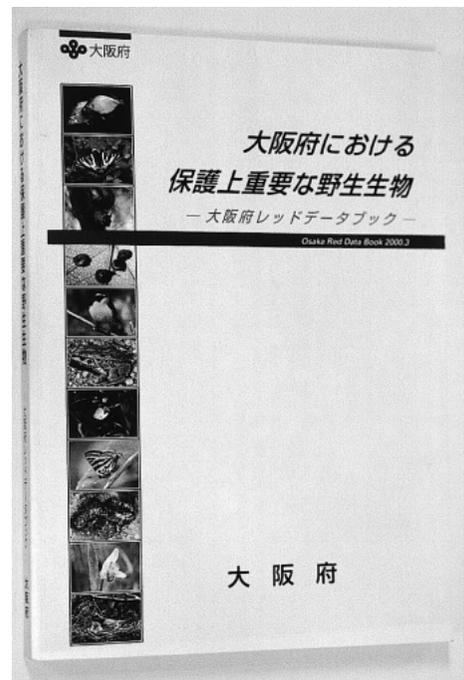


図 98. 大阪府における保護上重要な野生生物

の水生植物群落、遷移によって消失した茅場の草本植物群落など、大阪府の数少ない特性が消えつつある。これらの群落は、小規模で目立たないものが多く、調査の目がほとんど向けられなかったようだ。一方で、和泉葛城山のブナ林は国指定天然記念物に指定され、岸和田市教育委員会や市民グループによる調査が継続的に行われている。

和泉葛城山ブナ林保護増殖調査委員会. 1993 年. 和泉葛城山ブナ林保護増殖調査報告書. 岸和田市教育委員会・貝塚市教育委員会.

上久保文貴. 1998 年. 大阪府南部の海辺の植物. 近畿植物同好会々報 (74): 6-9 頁.

環境庁 (編). 1980 年. 日本の重要な植物群落近畿版. 第 2 回自然環境保全基礎調査 (緑の国勢調査) 特定植物群落調査報告書.

環境庁 (編). 1988 年. 日本の重要な植物群落 II 近畿版 1~2. 第 3 回自然環境保全基礎調査 (緑の国勢調査) 特定植物群落調査報告書 (追加調査・追跡調査).

近畿植物同好会社寺林調査委員会. 1973~1980 年. 社寺林調査報告 (1) ~ (5). 近畿植物同好会々誌 3~8. 服部 保・中西 哲・武田義明. 1987 年. 近畿地方における照葉樹林主要構成種の地理的分布, とくに後氷期の分布拡大について. 日本生態学会誌 37: 1-10 頁.

文化庁. 1972 年. 天然記念物緊急調査 植生図・主要動植物地図. 文化庁.

宮脇 昭 (編). 1984 年. 日本植生誌 (近畿). 596 頁. 至文堂, 東京.

#### (F) 今後の課題と最近の話題

面積が狭くて瀬戸内式気候に支配されるために植物相は貧弱で、フローラリストの研究はほぼ終了している。今後は、個々の種類の分布について、詳細に明らかにしていく必要がある。とくに、都市化や開発により、多くの植物が減少あるいは絶滅している現状があり、人間活動と植物の変化にも目を向けなければならない。

小山三郎や松本邦夫の標本は、未整理のまま大阪市立自然史博物館に収蔵されている。将来は、ラベルのないこれらの標本の整理に取り組む必要がある。しかしながら、研究を担うべき有能な若手のリクルートメントはほとんどないのが現状。

近年のトピックとしては、カワチスズシロソウの記載、トネハナヤスリの淀川からの発見、ミツバコンロンソウの金剛山からの発見、イセウキヤガラの大阪湾での発見、ナンゴクウラシマソウの泉南からの発見、コバノチョウセンエノキの発見、近畿地方で激減したヒキノカサの再発見、淀川のわんどでのボタンウキクサの大繁茂などがある。

本稿の執筆にあたり、元大阪市立自然史博物館の瀬戸 剛氏からは多くの貴重な助言をいただいた。記して感謝したい。

(藤井伸二: 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館)

## 28. 兵庫県

黒崎史平

### (A) 植物誌

『兵庫県植物目録』(1971年 紅谷進二(編) 六月社 173頁)以来全県的にまとまったものは刊行されていない。木本に限れば、『兵庫県の樹木誌』(1995年 橋本光政(編) 兵庫県 678頁)がある。この本は1-372頁が写真, 477-651頁が目録で, また56頁にわたる研究史物語がある。モノグラフとしては『兵庫県イネ科植物誌』(1995年 藤本義昭 藤本植物研究所 249頁)がある。新しい兵庫県植物誌の基礎として, 福岡誠行・黒崎史平・高橋 晃(編)「兵庫県産維管束植物」がシリーズとして兵庫県立人と自然の博物館発行の『人と自然』に連載されている。1(1999年)にはシダ植物, 2(2000年)には裸子植物および被子植物のヤママモモ科~ヤドリギ科, 3(2001年)にはタデ科~アブラナ科が扱われ, 主に人と自然の博物館と頌栄短期大学の標本を基にし, 各種について各区画(県内を20市70町と神戸市9区の計99区画に分けている)あたり, 原則として1標本が引用されている。

地域的な植物誌としては『西神戸(神戸市西区及びその周辺地域)の植物』(1989年 小林禮樹 同発行 141頁), 『淡路島の植物誌』(1992年 小林禮樹 自然環境研究所発行 217頁), 『六甲山地の植物誌』(1998年 小林禮樹・黒崎史平・三宅慎也 神戸市公園緑化協会発行 301頁)があり, いずれも目録には証拠標本が引用されている。また『大屋町史 自然編』(2001年)では, 第2章植物第2節植物相第1項植物相の概略, 第2項花の咲く植物: 種子植物(158-253頁)(橋本光政, 池田 博, 黒崎史平分担), 第3項胞子で増える植物(254-293頁)(白岩卓巳, 西村直樹, 畦 浩二, 木村全邦, 横山了爾, 鳥越 茂, 佐藤祐司, 三好教夫分担)と対象を維管束植物に限っていない。その資料編(581-671頁)には植物目録と標本が引用されている。

植物誌に関する雑誌として, 兵庫県植物誌研究会発行の『兵庫の植物』があり, 年1回発行され, 2002年で12号を数え, 兵庫県の植物誌研究には重要な雑誌となった。また, 同研究会の会報は年に数回発行され, 短報, ニュースなど速報が載せられている。兵庫県生物学会発行の『兵庫生物』は年1回発行され, 2001年に第12巻第2号を発行し, 動植混載の編集で, 近年植物誌関連の論文が少ないが, 重要な雑誌である。

### (B) 研究機関

自然史系の博物館として, 「兵庫県立人と自然の博物館」があり, 全県的に調査研究活動をおこなっている。植物を研究している研究機関としては, 頌栄短期大学福岡研究室があり, 約20万点の標本を所蔵しその約半数は兵庫県内産で, これらの標本を基に兵庫県レッドデータブックの改訂が進められている。また, 神戸大学理学部生物学科では兵庫県内もフィールドの一部としている。

アマチュアの植物同好会としては「兵庫植物同好会」があり, 年間8回の野外観察会の他講演会などの活動をおこなっている。会報には観察記録や野外観察会の報告が掲載され, 2002年で18号になる。

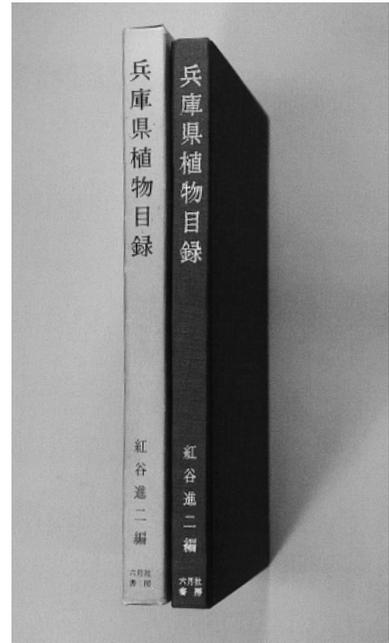


図 99. 兵庫県植物目録

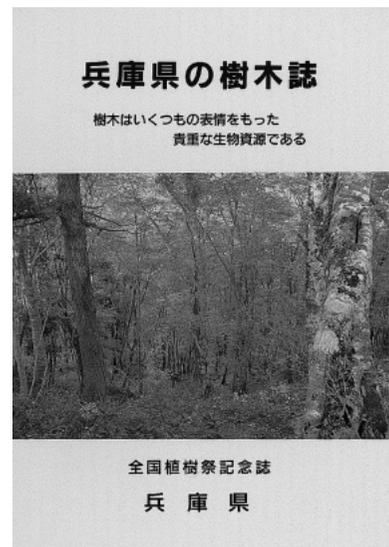


図 100. 兵庫県の樹木誌

## (C) 標本庫

兵庫県立人と自然の博物館 (HYO) には約 10 万点の標本があり、なかでも細見末雄氏のコレクションは兵庫県の植物相研究に役立っている。頌栄短期大学 (SHO 未登録) には約 20 万点の標本があり、福岡誠行、黒崎史平の標本に加えて、小林禮樹、矢内正弘、三宅慎也、藤本義昭、内海功一、清水孝浩他多数の方の寄贈標本がある。『西神戸の植物』、『淡路島の植物誌』、『六甲山地の植物誌』、『兵庫県イネ科植物誌』などの証拠標本のほとんどが納められている。また清水孝浩氏のスゲ属植物の標本は全国的に採集され、かつよく整理されているので、スゲ属の標本の鑑定に大いに参考になっている。どちらの標本庫も閲覧可能である。

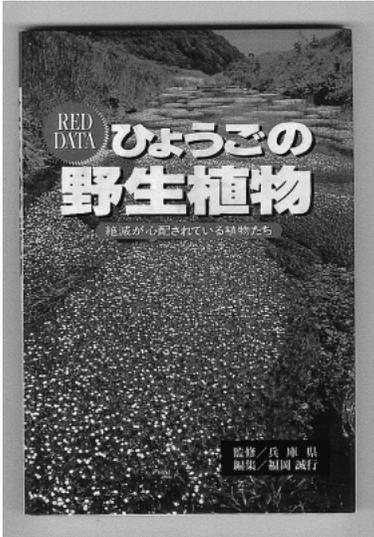


図 101. ひょうごの野生植物

## (D) レッドデータブック

1995 年に兵庫県環境管理課より『兵庫の貴重な自然 一兵庫県版レッドデータブックー』が出版され、裸子植物、種子植物 627 種類が選定された。1996 年にはその普及版『ひょうごの野生植物 絶滅が心配されている植物たち』(福岡誠行 (編) 神戸新聞総合出版センター 222 頁) が出版された。現在兵庫県版レッドデータブックは改訂作業がすすめられており、2003 年に出版予定である。

## (E) 植物群落

兵庫県立人と自然の博物館、神戸大学発達科学部人間環境科学科などを中心として植生調査が進められている。最近の出版物としては『神戸の植生 改訂版』(2000 年 武田義昭 (監修) 神戸市環境局) や『大屋町史 自然編』(2001 年 第 2 章植物第 1 節植生 141-157 頁 武田義明、栗山みどり分担) などがある。前者には「神戸の植生 CD-ROM 版」が、後者には「大屋町現存植生図」がつけられている。(黒崎史平：〒658-0065 兵庫県神戸市東灘区御影山手 1-18 頌栄短期大学 TEL：078-842-2541 FAX：078-851-2154 E-mail：kurosaki@glory-shoei.ac.jp)

## 29. 奈良県

北川尚史

## (A) 植物誌

奈良県には岡本勇治『大和植物志』(1937年 大和山岳会)以来、県下全域を扱った植物誌は出ていない。したがって、『大和植物志』は今日もなお奈良県のフローラを知る上で重要な文献であり、1997年に復刻版が出た(個人出版)。この植物誌の基になった標本は残っておらず、本書の内容を現在の知識で再検討することができない。

藤本敬治『大和の植物』(1972年 六月社書房)は県内の主要な地域のフローラ、主要植物、樹叢・名木・巨木・天然記念物、帰化植物などについて解説し、巻末に奈良県産の植物目録を載せている。本書の記録の基になった標本の所在は不明である。

菅沼孝之他(編)『奈良県史 第2巻 動物・植物』(1990年 名著出版)は奈良県の植物自然史に関する重要な文献である。本書の植物編・第2章「植物分布」(岩田重夫)は、県内を8つの植物区に分け、さらにそれぞれを2~4に細分し、それぞれの小地域のフローラを概観している。第3章「シダ植物」(辻本善次)には、県内のシダ植物の目録と主要地域のシダ植物フローラが載っている。また、第4章「古生物」(粉川昭平)は、奈良県内で産した新生代の植物化石の記録を報告している。

昭和30年代以降、県下の地方自治体は競って地方史を著したが、それらの市町村史の大部分がその地域の植物を扱っている。市町村史における「植物」の項目のほとんどが小清水卓二、岩田重夫の両氏とごく少数の研究者によって調査され、執筆されたものである。記述の手法はどの自治体のももほぼ同様であり、フローラの扱いは簡略で、その地域の巨樹・名木など目だった植物だけを挙げている場合も多い。市町村史など、小地域のフローラを扱った文献のリストは、『奈良県史 第2巻』第1章「奈良県植物研究史」(北川尚史)に載っている。

「奈良植物研究会」設立の目的の一つは奈良県植物誌の作成であったが、長らくそのための本格的な活動は行われなかった。ようやく最近、植物誌作成の機運が高まり、まず、世界遺産に登録された春日山のフローラの解明に向けて現在調査が進められている。

奈良県では植物標本の集積がまだ少なく、また県内に標本を十分に収蔵する場所がないため、植物誌の作成には、県外の大阪市立自然史博物館(OSA)や京都大学総合博物館(KYO)などへの依存が不可欠である。

下記の『奈良植物研究』と『奈良植物研究会会報』に奈良県のフローラや植生に関する多くの記事が載っている。

## (B) 研究機関

1977年に「奈良植物研究会」が設立されて以来、その会員たちによって奈良県の植物が調査・研究されてきた。2002年7月現在、会誌『奈良植物研究』は25号、会報『奈良植物研究会会報』は76号、例会(現地観察会)は205回に達している。

奈良県の植物自然史関係の研究は、地元では、戦前は奈良女子高等師範学校と奈良師範学校、戦後はその後身の奈良女子大学および奈良教育大学において行われてきた。しかし、スタッフが少なく、現在、両大学ともにその分野の研究者は1名に過ぎない。

## (C) 標本庫

奈良女子大学に小さな標本庫がある。整理された標本は少なく、戦前の古い標本は島津製作所発売の教育用の標本セットなどであり、奈良県関係の特に重要なコレクションはない。奈良教育大学にも小さな標本庫があり、主として奈良県の維管束植物のコレクションを収蔵している。それは、比較的最近(1970年以降)採集

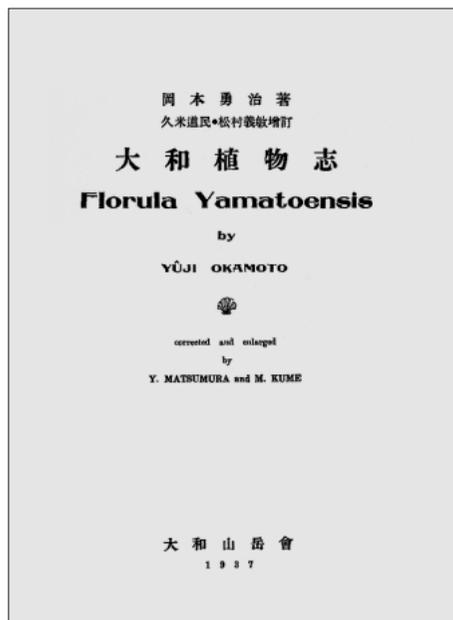


図 102. 大和植物志

された約 15,000 点の標本であり、県内のフローラを研究テーマとした修士論文および卒業論文を作成した生物学教室の学生のコレクションが大部分である。人手不足のため貸し出しは難しいが、閲覧は可能である。県内の自然史関係の研究者たちが 1993 年に「県立自然博物館をつくる会」を結成し、奈良県に県立自然史博物館を設立する運動に取り組んでいるが、まだ設立の見通しはまったく立っていない。この運動の過程で、故岩田重夫氏が遺した約 1 万点の植物標本からなるコレクションが 2001 年に奈良県に寄贈され、現在、奈良県立大学の一室に収蔵されている。これは主として奈良県産の標本であり、1950・60 年代に採集されたものを多く含んでいる。閲覧は現在のところ「県立自然博物館をつくる会」の会員に限られている。

#### (D) レッドデータブック

現在計画中であり、まだまとまったものは出ていない。しかし、近畿地方全域を扱った、レッドデータブック近畿研究会（編）『改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータブック近畿 2001—』（2001 年 平岡環境科学研究所）によって、奈良県の保護上重要な植物の概要を知ることができる（この書の奈良県の部分は瀬戸 剛氏が担当している）。

#### (E) 植物群落

『特定植物群落調査報告書』（1978 年 奈良県）、『特定植物群落調査報告書 追加調査・追跡調査』（1988 年 環境庁）において、菅沼孝之氏が奈良県の主要な植物群落を報告している。また、上記の『奈良県史 第 2 巻』第 5 章「植生」（菅沼孝之）は、奈良県の植生を極盛相植生と代償植生に大別し、それぞれをさらに小さな植生単位に区分してそれぞれの植生を解説している。

奈良県全域を扱った植生図は、菅沼孝之他『奈良県植生図：天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図 29』（1975 年 文化庁）および菅沼孝之（代表）『現存植生図・奈良県』（1985 年 環境庁）がある。後者は 5 万分の 1 地図により、奈良県全域の植生を表した詳細な植生図である。市町村単位や特定の小地域の植生図は数多く出ている。

天然記念物に関しては、『奈良県史 第 2 巻』「天然記念物」（菅沼孝之）が国指定および県指定の物件を記載している。

（北川尚史：〒619-1303 京都府相楽郡笠置町草田切 28 番地 TEL & FAX：0743-95-2588）

## 30. 和歌山県

山元 晃

## (A) 植物誌

1929年に宇井縫蔵『紀州植物誌』（高橋南益社）が刊行された。B5判、338頁で、序説と各論に分かれ、各論ではキク科から始まり各種に対して簡潔な解説及び普通種以外は産地が挙げられて、シダ植物まで、2,000余種の種類がリストアップされている。上記植物誌に記録された植物標本の多くは、現在、武田薬品工業株式会社京都薬用植物園に保管されている。そのほか、1937年に坂口總一郎著で『紀州植物研究之葉』（福本印刷所出版部）が刊行されている。坂口氏が採集した標本は、現在、和歌山県立自然博物館や京都大学総合博物館などにわずかに残されている。地域的なものとしては、古座川町平井周辺は1932年に館脇 操「和歌山演習林植物目録（第一報）」（『北海道帝国大学演習林研究報告』第七卷）、1938年に館脇 操「和歌山演習林植物目録（第二報）」（『北海道帝国大学演習林研究報告』第十三卷）が発行され、それぞれ444種、133種が報告されている。清水町近井については、1941年に岡本省吾「和歌山演習林植物誌」（『京都帝国大学演習林報告』第十四号）が発行され、855種35変種が記録されている。

1957年に小川由一は、『和歌山信愛短期大学紀要』で「紀伊友ヶ島植物誌」、1958年に「紀伊高野山植物誌」、1960年に「紀伊小口郷植物誌」を発表している。また、1977年に小川由一『紀伊植物誌II 高野山の植物』、1985年に中村正寿（編）『紀伊植物誌III 紀州の植物覚書』が刊行されている。『紀伊植物誌II』には、高野山植物目録及びその追補解説がまとめられている。『紀伊植物誌III』には、真砂久哉による小川植物コレクションのシダ植物や和歌山県のシダ植物分布についての報告がある。

1983年に関西自然保護機構（編）『友ヶ島学術調査』（和歌山市）が刊行されている。この中には、山元 晃・高須英樹の「友ヶ島の植物目録」、山元 晃の「友ヶ島植物目録の追加種及び再確認種」がまとめられている。本州最南端として植物分布上注目される大島（串本町）の植物については、1940年に塚本洋太郎ほか4名編の『大島植物目録1』、1976年に『大島植物目録2』（復刻版）、1999年に京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所から『紀伊大島植物目録』として刊行されている。

最近和歌山県のフローラに追加された植物や新しい情報は、『和歌山県紀北部、紀中部両地域の帰化植物』（岡部種造・三尾喜太郎 1982年）、和歌山県立自然博物館発行の『和歌山県帰化植物目録I・II・III』（山元 晃 1988, 1989, 1994年）、『和歌山県のスマレ』（山元 晃 1992年）、『和歌山県内のカヤツリグサ科スゲ属ナキリスゲ節の分布』（山元 晃 1998年）がある。

水生植物については、「和歌山県北部に見られるため池の水草」（山元 晃 1995年）がある。また南紀生物同好会の会報『くろしお』（No.14~19, 1995~2000年）には、県内各地域のため池の水生植物が、北野一夫により紹介されている。1991年に古座川町教育委員会は松下 弘・後藤 伸『古座川の自然I, II』を発行したが、その中ではキノクニスズカケ、キイトラッキョウ、着生ラン、シダ植物など古座川流域を特色づける種についての紹介がなされている。1997年に中畷章和・瀬戸 剛・佐久間大輔『真砂久哉氏収集和歌山県産シダ植物標本目録』が大阪市立自然史博物館から発行されている。この目録は和歌山県はもとより、日本のシダフローラ解明にとって貴重なものである。

現在、最新の和歌山県植物誌は発行されていないが、2001年に和歌山県がレッドデータブックを発行した際、1929年発行の『紀州植物誌』に記録された種をはじめ、県内各地域の報告書に見られる植物について、丹念に検討した経緯がある。また和歌山県立自然博物館には寄贈、収集された標本もあり近い将来「平成版和歌山県植物誌」の発行が期待される。

一般向けに書かれた和歌山県の植物に関する図書では、小川由一『高野山の植物』（1940年 高野山大学出



図 103. 紀伊植物誌 I, II, III

版部 絶版), 熊野路編さん委員会(編)『熊野中辺路 大塔山系の自然』(1973 年 熊野中辺路刊行会), 『くまの文庫⑤ 大塔山系の自然』(1973 年 熊野中辺路刊行会), 『くまの文庫⑧ 森林と動植物』(1975 年 熊野中辺路刊行会), 南紀生物同好会(編)『わかやまの生物』(ヤワラハチジョウシダをはじめ数十種類の植物紹介記事あり 1979 年 帯伊書店), 真砂久哉『南紀から地球の植物をみる—シダに惹かれたナチュラルリストの記—』(1996 年 研成社) などがある。

## (B) 研究機関

植物を研究している機関には, 和歌山県立自然博物館(海南市船尾)があり, 1982 年の設立以来, 和歌山県の地域フローラ解明のため, 和歌山県内の維管束植物の収集を行っている。

和歌山大学教育学部生物学教室の高須研究室(和歌山市栄谷)では, 植物の生活史や繁殖生態についての野外研究とともに分類学的な研究活動も行っている。講座は植物形態学及び生態学を中心に, フィールドに強い人材育成にも力を入れている。

和歌山県植物公園緑花センター(那賀郡岩出町坂本)は, 1979 年に設置されて以来, 緑化樹及び花卉に関する育成技術の研究向上と共に緑と花の情報発信機能を持ち, 植物公園としての憩いの場の提供をしている。

京都大学大学院農学研究所附属亜熱帯植物実験所(西牟婁郡串本町須江)は, 1935 年に開設され和歌山県の植物実験施設としては最も古いものの一つである。戦後は主として観葉植物などの園芸植物の導入と栽培法の試験が行われている。

京都大学大学院農学研究科附属演習林和歌山演習林(有田郡清水町近井)は, 1926 年に開設され森林生態に関する研究をはじめ, スギ・ヒノキを中心とした森林施業方法に関する研究等が進められている。最近では, 小中学生対象の植物観察会の開催や高校生への林業実習など教育の場としても活用されている。

国立医薬品食品衛生研究所和歌山薬用植物栽培試験場(日高郡川辺町土生)は, 1935 年に業務を開始以来, 除虫菊やケシ栽培等の研究が行われ, 現在ではトウキ, シャクヤク等の多種多様の薬用植物の栽培が試みられ, 近畿地方における中心的役割を果たしている。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション南管理部和歌山研究林(東牟婁郡古座川町平井)は, 2001 年(平成 13 年)4 月に旧北海道大学農学部附属和歌山演習林から組織換えされた。この研究林は 1925 年に創設されて以来, 森林施業と林学の教育研究を行い, 最近の長期計画ではスギ・ヒノキばかりでなく各種の広葉樹林の再造成, 天然林の位置づけの見直しを行い, 各種試験林・保存林で研究活動が行われている。

近畿大学農学部生石農場(有田郡清水町楠本)は, 薬用植物の栽培はじめ, 有用植物の馴化等の研究が行われている。

植物に関する研究会には, 「和歌山県自然環境研究会」(1974 年設立)があり, 1975 年以降は組織的な学術調査として「和歌山県におけるニホンカモシカの生態調査」を実施し, 会員は個々に生物研究等各分野別に継続調査をしている。2002 年に過去 30 年間にわたる研究成果を鈴木 昌ほか 3 名の編集で『大塔山系大杉大小屋国有林・黒蔵谷国有林自然環境調査研究報告集』として発行されている。調査会には, 「和歌山県自然保護調査会」(1978 年設立)があり, 和歌山県内の自然を調査研究し, 自然の保全につとめることを目的とし, 調査事業・講演会及び研究会等の開催を行っている。

植物同好会としては, 「南紀生物同好会」(1949 年設立)があり, 年間 3 回の自然観察会(春季・夏季・秋季)のほか, 会員研究発表会などの活動を行っている。刊行物は, 会誌『南紀生物』年 2 回, 会報『くろしお』年 1 回の 2 種類がある。会誌には生物に関する総説・論文・短報が掲載され, 2002 年で通巻 88 号になり, 会報には総説, 採集観察記, 生物に関する随筆・紀行文, 県内ニュースを主とし, 通巻 41 号となる。他に, 「和歌山県生物同好会」(1961 年設立)があり, 年間 4~5 回の野外観察会のほか, 講演会などの活動を行っている。会誌『紀州生物』には論文, 生物に関する観察記録, 短報などが掲載され, 2002 年で 31 号になる。上記両同好会の会誌, 会報には県内の貴重なフローラ情報が記載されている。

## (C) 標本庫

和歌山県立自然博物館(海南市船尾)に約 5 万点の標本があり, 小川由一の高野山植物を中心としてコレクション(約 1 万 5 千点)が収められている。自然博物館の標本は, 『小川由一植物寄贈目録』にまとめられ, 標本はデータベース化されており, 和歌山県の植物相研究に役立っている。また上記寄贈目録は将来の公開へ向けて検討されている。残りの標本の大部分は未整理標本である。この中には, 大堀武夫, 岡部種造, 山本虎

夫、山本修平、北野一夫、山元 晃等による昭和40年代以降から平成14年までの標本（シダ類、水草、海藻等）が含まれている。標本の閲覧は可能である。

ふるさと自然公園センター（田辺市稲成町）には、松下 弘の古座川流域の植物標本ほか田辺市周辺の採集者による標本等、数千点の標本がある。

京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所（西牟婁郡串本町須江）には、現在約800点の植物標本がある。『大島植物目録1』に記録された植物標本は、京都大学総合博物館で閲覧できる。

京都大学大学院農学研究科附属演習林和歌山演習林には、岡本省吾の標本を中心に維管束植物標本が約1,300点収蔵されている。

#### (D) レッドデータブック

2001年に和歌山県環境生活部環境生活総務課が、『保全上重要なわかやまの自然—和歌山県レッドデータブック—』を編集・発行した。頁数は428頁である。種名のみをインターネット上で公開している。植物は530種類が選定されている。（<http://www.wakayama.go.jp/prefg/032000/reddata/shokubutu/shokubutu2/50.html>）

#### (E) 植物群落

宮脇 昭他による『熊野・枯木灘自然公園学術調査報告』（1971年 財団法人日本自然保護協会）の中で、熊野・枯木灘県立自然公園域の植生についての報告がある。1974年に『天然記念物緊急調査 植生図・主要動植物地図 30 和歌山県』が文化庁から発行されている。環境庁委託による『第2回自然環境保全基礎調査植生調査報告書』が1979年に和歌山県から発行されている。また、『和歌山県現存植生図』が1981年に環境庁から発行されている。1974、1975、1976、1977、1978、1979、1981～1983年に行われた『和歌山県自然環境保全地域候補調査報告書』により、県内の重要な天然林、社寺林、溪谷等の記載がなされている。1965～1969年に「紀伊半島南部における極相林の研究」の一環として、後藤 伸他は稲積島、九龍島、那智山を調査・報告している。1969、1971年に「西の河原生林」、1972、1973年に「大塔山原生林」の植生について、木下慶二が『南紀生物』会誌で報告している。

森林植生については、大塔山系大杉谷・黒蔵谷を水野泰邦、後藤 伸らが1971年に「大塔山系生物調査グループ」を結成して以来調査・研究を継続している。2002年に水野泰邦は「大杉谷・黒蔵谷の森林植生」についての現況を報告している。

都市部の植生については、1976年に中村正寿（編）『和歌山公園および岡公園の植生等調査報告書』、1995年に海南市教育委員会（編）『春日の森調査報告書』、1991年に新宮蘭沢浮島植物群落調査委員会・和歌山県新宮市（編）『国指定天然記念物新宮蘭沢浮島植物群落調査報告書』等がある。

1921年から1950年にかけて『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』が和歌山県から発行されているが、その後各市町村ごとの調査報告はあるものの、県としての詳細な現況報告は見られない。

（山元 晃：〒649-7161 和歌山県伊都郡かつらぎ町笠田東 968-2）

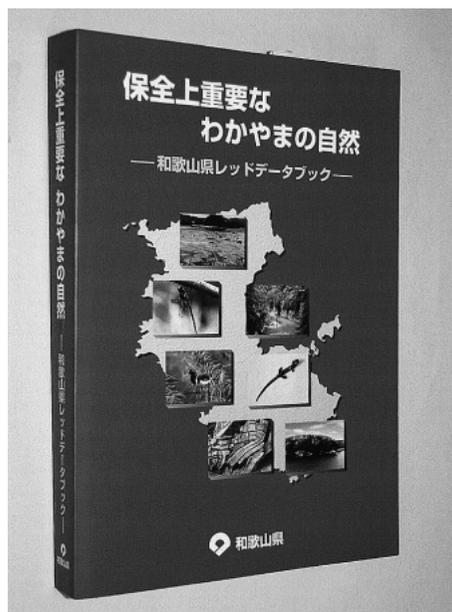


図 104. 保護上重要なわかやまの自然

## 31. 鳥取県

清水寛厚

## (A) 植物誌

県全体の植物誌は未だ編纂されていない。地方的植物誌としては、古く『鳥取県日野郡生物誌』（1955年 日野郡科学教育研究会 206頁）があるのみで、植物は故青戸正義氏らにより種子植物とシダ植物 1,125種が記録され、簡単な生態・形態が記載されている。小地域のまとまりのある植物相としては『三徳山の植物相』（清水寛厚他 1991年 名勝・史跡三徳山保存管理計画策定事業報告 三朝町教育委員会）、『唐川湿原の植物相』（清水寛厚 1990年 国指定天然記念物唐川のカキツバタ群落調査報告書）などがある他はおおむね断片的なものである。しかし、後述の RDB の分布調査に併せて一般植物のデータも蓄積されてきたので、近い将来、鳥取県の植物誌も編纂される予定である。

植物種に関する一般書としては、鳥取県のシンボリック存在の大山に関するものが多く、伊田弘実『大山の花上・下』（1965, 1966年 米子市観光協会）、伊田弘実『大山の花たち』（1973年）、野川 茂『原色大山の蘚類』（1978年 今井書店）、棚田耕吉『大山の植物レポート』（1987年 今井書店）、小西 毅・棚田耕吉・川上明敏・鷺見寛幸『花ごよみ大山』（1993年 今井書店）、小西 毅・棚田耕吉・川上明敏・鷺見寛幸『花ごよみ大山 II』（1998年）、森本満喜夫『大山の住人たち』（2002年 今井出版）、清水寛厚（分担執筆）『大山の植物』（1992年 山陽新聞社（編）『大山その自然と歴史』）などがある。三徳山はじめ自然度高い山地を擁する三朝町では『花の三朝路』（1983年 森本満喜夫 三朝町教育委員会編）、鳥取県の 3 大河川の河川敷を中心に主要な植物が解説されている藤島弘純（編）『千代川の自然』（1994年 富士書店）、『天神川の自然』（1997年）、『日野川の自然』（2000年）、そして藤島弘純（編）『鳥取砂丘の住人たち』（1992年 富士書店）などがある。その他、新日本海新聞社発行の『鳥取県大百科事典』（1984年）にも主要な植物が解説されている。

## (B) 研究機関

鳥取県立博物館に事務局をおく「鳥取県生物学会」は会誌『鳥取生物』を年 1 巻ずつ発行し、2002年現在 34 巻になり、鳥取大学教育学部（現教育地域科学部）の研究者や地元生物研究家の研究が掲載されている。また、鳥取大学教育学部教官は生物学会員の協力を受け数多くの学術調査に携わり、鳥取県の植生研究に貢献してきた。やや一般的な会としては鳥取大学農学部林学系の研究者達が組織している「広葉樹文化協会」があり、雑誌『Forest Art』を刊行し、今年 10 周年を迎え第 22 号を発行し、広葉樹林の保全や利用など、啓発に貢献している。

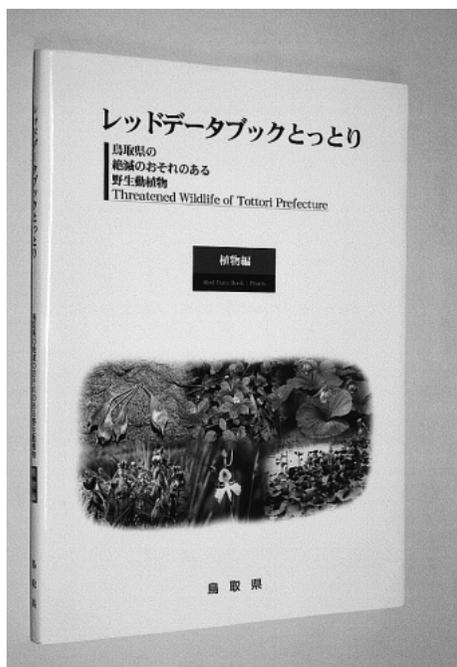


図 105. レッドデータブックとっとり

## (C) 標本庫

保存設備が完備されている鳥取県立博物館に植物標本の収集が進められている。『鳥取県立博物館所蔵目録』が刊行されており、46 巻に達している。そのうち『植物目録集』は 14 巻を占め、故人となった植物研究者（生駒義博、岩永通之介、川上明敏各氏）が収集した標本を中心に田中昭彦氏が村田 源氏をはじめ多数の専門家の協力を得て同定整理し、25,543 種が登録され公開されている。今後、RDB 種をはじめ各個人や鳥取大学に保有されている標本を集積し充実する予定になっている。

## (D) レッドデータブック

2002 年には清水寛厚他（編）『レッドデータブックとっとり植物編』（鳥取県生活環境部環境政策課 A4判 203頁）が出版され、市販もされている。選定種数は 330 種でカラー写真とともに水平垂直分布図が掲載されているが、出版に先立ち制定された県希少野生動植物保護条例が付録されていて、RDB が乱獲を助長することに繋がらないよう配慮されている。

## (E) 植物群落

全域的な群落調査に関する資料としては、『鳥取県の自然調査報告』(1973年 鳥取県),『社寺林の研究(鳥取県)』(1977年 『森林』第8号 土井林学振興会緑地研究会),環境庁委託自然環境保全基礎調査として『植生調査報告書』(1979, 1988年),『特定植物群落調査報告書』(1978年),『鳥取県現存植生図』(1982年)などがある。また,宮脇 昭(編)『日本植生誌中国』(1983年)には鳥取県の植生概説,大山の群落組成および各種群集・群落組成の中に鳥取県内地域の植生が網羅的に包含されている。清水寛厚(編)『鳥取県のすぐれた自然』(1993年)には社叢,森林,低木林・草原・湿原,貴重植物群生地など120ヶ所の植物群落が概説紹介されている。

地域的群落報告としては,『大山隠岐国立公園大山地区学術調査報告書』(1973年 日本自然保護協会),『東中国山地自然環境調査報告』(1974年 兵庫・岡山・鳥取県),『毛無山・宝仏山自然地域学術調査報告書』(2000年 鳥取県),『鳥取砂丘調査報告書(第2集)』(1964年 鳥取県教育委員会),『昭和54年度天然記念物鳥取砂丘特別調査報告書』(1980年 鳥取市教育委員会)などがあり,多くは群落組成が示され,植生図も付録されている。

文化財関連では,生駒義博(編)『天然記念物緊急調査31 鳥取県』(1973年 文化庁),越智春美(分担執筆)『鳥取県文化財調査報告書第14集』(1989年 鳥取県教育委員会),『鳥取県の文化財』(1995年 鳥取県教育委員会)には鳥取県指定天然記念物の概説がなされている。その他小冊子が多数出版され,各市町村史誌に市町村天然記念物が記載されているが,三朝町ではとくに『三朝町の文化財』(1988年 三朝町教育委員会編)など文化財関連の図書がいくつか出版されている。

(清水寛厚:〒680-0001 鳥取市浜坂5-5-9 TEL & FAX:0857-27-0871 E-mail:shim@fed.tottori-u.ac.jp)

## 32. 島根県

杵村喜則

## (A) 植物誌

「島根県植物誌」といったかたちでまとめられたものは無い。県内のフローラに関係したものとして、丸山 巖 (分担)『島根県大百科事典 上・下』(1984 年 山陰中央新報社)に、県内特産、分布限界あるいはそれにちかい分布状況のもの、その他県内における稀産する植物 265 種余がとり上げられている。県内の地域フローラとしては「島前の植物目録 I-V」(木村康信・丹後重興 1982 年 『島前の文化財』 隠岐島前教育委員会)、「島根半島の植生と植物相」(杵村喜則 1989-1991 年 『山陰地域研究』)の中に維管束植物の目録、「島根県のシダ植物」(杵村喜則 1997 年 『ホザキグリーン財団研究報告』)などがある。組織的な調査等による植物誌編纂の計画も無いようである。

島根県の植物に関する一般向けの印刷物には丸山 巖『しまねの草花』(1985 年 山陰中央新報社)、杵村喜則『しまねの身近な草花』(1992 年 山陰中央新報社)などがある。

## (B) 研究機関

島根県の自然系博物館的存在のものとしての島根県立三瓶自然館がある。植物が専門の学芸員 2 名が配置されている。その他にはこれといったこの方面での研究機関は聞かない。

## (C) 標本庫

島根県立三瓶自然館の中に、標本庫らしきものが準備されている。丸山 巖の標本が約 1 万点収納されたが、標本としての整理はこれからであるらしい。

## (D) レッドデータブック

島根県 (景観自然課) は 1996 年に県独自の基準で県版レッドリストを作成し、1997 年に『しまねレッドデータブック—島根県の保護上重要な野生動植物—』を刊行した。植物編には緊急保護種 6 種、要保護種 42 種、要注意種 76 種、計 124 種が選定、記載されている(『植物編』杵村喜則 1997 年 島根県生活部景観自然課 266 頁)。県では平成 15 年度内に改訂版を刊行する予定で、現在その作業が進められている。

## (E) 植物群落

1977 年に『島根県現存植生図 1/5 万』が、島根県の現況としての植生型の大要と配分を把握するために作成され、発行されている。島根県の植生誌としてまとめられたものは無いが、宮脇 昭 (編)『日本植生誌 中国』には島根県内での調査結果も記述され、その中の地域植生誌として島根県分の大要が整理(杵村喜則分担)されている。環境庁第 3 回自然環境保全基礎調査としての植生調査による現存植生図島根県分(1979-1986 年調査)にも植生型の大要と配分がまとめられている。環境庁の特定植物群落調査では 189 群落が記載、報告されている。現在、県内の群落調査については組織的な調査等は実施されることもない。

(杵村喜則：〒690-0823 島根県松江市西川津町 2627-5 TEL & FAX：0852-26-2667)

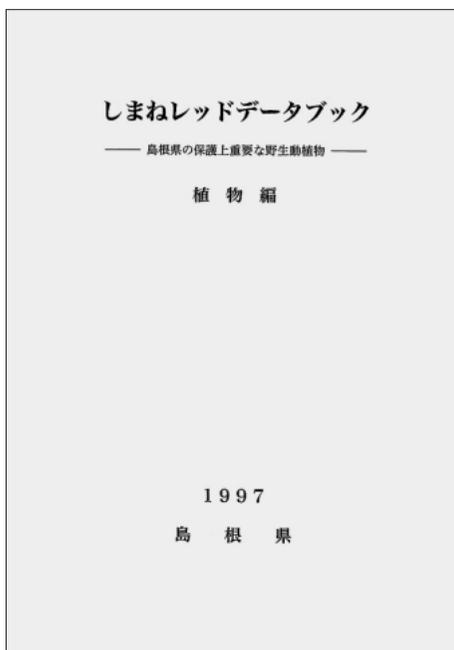


図 106. しまねレッドデータブック 植物編

## 33. 岡山県

狩山俊悟

## (A) 植物誌

岡山県全域を対象としたものとしては、大久保一治『私の採集した岡山県自然植物目録 付 帰化植物・栽培植物 増補改訂版』(自費出版 在庫切れ)が1999年に発行されている。B5判、357頁で、学名、和名、和名の漢字表記、分布域、岡山県での分布概況、個人所有の引用標本などが簡潔に記述されている。県内の地域フローラとしては、公的機関に保管された標本が引用されたものに限ると、狩山俊悟(編)『倉敷市生物目録<植物>』(1994年)、小島裕子他(編)『岡山市産植物目録 改訂版』(2000年)、榎本 敬他(編)『清音村植物目録』(2002年)などがある。2003年に岡山県版レッドデータブックが出版予定であり、その作業にあわせて岡山県生物目録が作成されている。この目録が出版されるかどうかは不明である。

一般向けに書かれた岡山県の植物に関する図書では、西原礼之助・古屋野 寛『岡山の植物』(1964年 日本文教出版)、西原礼之助・古屋野 寛『岡山の樹木』(1981年 日本文教出版)、羽賀 実『岡山の野の花 春』(1982年 山陽新聞社)、羽賀 実『岡山の野の花 夏・秋』(1983年 山陽新聞社)、羽賀 実『続岡山の野の花』(1985年 山陽新聞社)、千葉喬三他『岡山の樹木<上>』(1989年 山陽新聞社)、千葉喬三他『岡山の樹木<下>』(1990年 山陽新聞社)などがある。

## (B) 研究機関

岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科星野研究室に「日本すげの会」の事務局があり、会誌『すげの会会報』を年1回発行している。岡山大学資源生物科学研究所野生植物研究室では、国内外から野生植物の種子を収集、保存している。

自然史博物館あるいはそれに類似する施設として、倉敷市立自然史博物館と岡山県自然保護センターがある。倉敷市立自然史博物館は主に岡山県全域を対象に資料収集保管事業、調査研究事業、展示事業、教育普及事業を行っている。『倉敷市立自然史博物館研究報告』を年1回発行しているほか、収蔵資料目録をほぼ年1回発行している。地方植物誌や国内の博物館出版物などの文献が充実し、部外者でも連絡すれば閲覧可能である。岡山県自然保護センターは自然保護に関する教育普及事業や調査研究事業を実施し、『岡山県自然保護センター研究報告』を年1回、普及雑誌『自然保護センターだより』を年4回発行している。

アマチュアの植物研究会としては、「倉敷市立自然史博物館友の会」の中にシダグループがあり、毎月1回野外観察会を行い、県内のフローラを明らかにする目的で、シダ植物を含む維管束植物全般の調査活動を続けている。「倉敷市立自然史博物館友の会」では、植物、動物、地学混成の編集ながら、連絡誌『倉敷市立自然史博物館友の会ニュース』を毎月1回、会報『しぜんしくらしき』を年4回発行している。

## (C) 標本庫

倉敷市立自然史博物館(仮称 KURA)に約18万点の標本があり、宇野確雄、佐藤清明、小島裕子、狩山俊悟らの県産植物を中心としたコレクションが収められている。「宇野確雄植物コレクション」については、『倉敷市立自然史博物館収蔵資料目録』第1号(1991年)~第11号(2002年)として順次発行中である。収蔵標本のうち約13万点についてはデータベース化が終わり、各種の研究活動や収蔵資料目録発行に活用されている。標本は閲覧、貸し出しともに可能である。

岡山大学資源生物科学研究所(RIB未登録)に約5万点のさく葉標本と約2万5千点の種子標本がある。うち約1万点は生存種子である。近藤萬太郎、笠原安夫、小島裕子、榎本敬らの標本がある。雑草と帰化植物の種類数、点数が多い。1980年までに収集された約1万点の標本は『岡山大学農業生物研

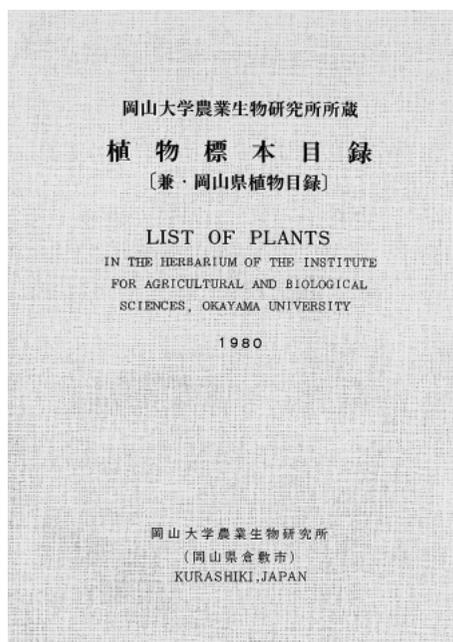


図 107. 岡山大学農業生物研究所蔵 植物標本目録

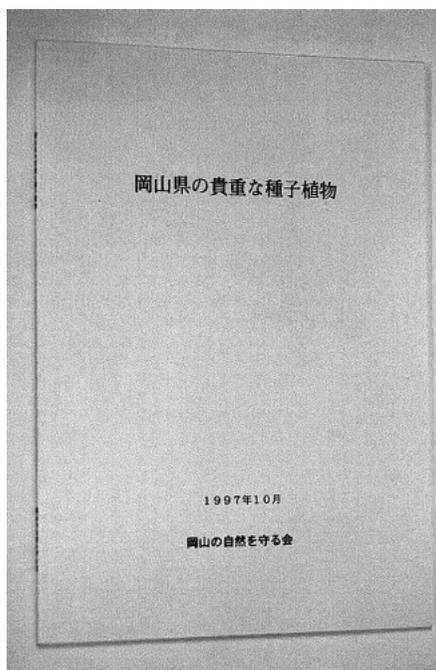


図 108. 岡山県の貴重な種子植物

究所標本目録 1980』(1980 年 岡山大学農業生物研究所雑草学研究室)として出版された。標本はデータベースによって管理されており、閲覧、貸し出しとも可能である。貸出標本のデータはファイルでも配布可能である。種子画像もデータベース化を進めている。

岡山県自然保護センター(略称 opncc)に約 1 万 1 千点(整理済み分)の難波早苗氏の採集標本があり、県産植物を中心としたコレクションが収められている。標本はデータベース化されているが、まだ整理事業中である。将来は公開も検討されており、閲覧は可能である。『難波早苗氏植物標本目録』第一次分(1998 年)として 3,262 点がまとめられたものがある。

#### (D) レッドデータブック

1997 年に岡山の自然を守る会・自然研究会が編集し、岡山の自然を守る会が発行した『岡山県の貴重な種子植物』がある。A 4 判 64 頁で、456 種が掲載されている。また、岡山県自然保護課が県版レッドデータブックの作成作業を進めている。2000 年には掲載候補種がインターネット上で公開されている([http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/sizen/sizen\\_ordbkouhosyu\\_3.htm](http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/sizen/sizen_ordbkouhosyu_3.htm))。植物は 647 種が選定されている。2003 年为目标に印刷物として出版される予定である。

#### (E) 植物群落

岡山県環境部(編)による『岡山県植生図』(1975 年)、宮脇 昭他による『日本植生誌 中国』(1983 年至文堂)などがある。環境庁による特定植物群落調査が実施され、1979、1988 年には報告書としてまとめられている。

(狩山俊悟：〒710-0046 岡山県倉敷市中央 2-6-1 倉敷市立自然史博物館 TEL：086-425-6037 FAX：086-425-6038 E-mail：muskari@city.kurashiki.okayama.jp)

## 34. 広島県

関 太郎

## (A) 植物誌

1997年11月に広島大学理学部附属宮島自然植物実験所と比婆科学教育振興会の共同編集で『広島県植物誌』(中国新聞社)が刊行された。B5判, 832頁で, カラーグラビア32頁, 広島県の植物相と植生, 広島県の植物研究史, 植物目録, 広島県の地名, 天然記念物, 自然公園と自然環境保全地域, 維管束植物文献目録(コケ・地衣・淡水藻類はそれぞれの目録で文献がある)という構成になっている。植物目録では種子植物2,206“種”(種・亜種・変種をそれぞれ“種”として数え, 原則として品種は数えない), シダ植物301“種”, コケ植物678“種”, 地衣植物440“種”, 淡水藻類1,257“種”が収録されている。種子植物では, ツガなど52種について, 堀川芳雄博士の考案した3面法による分布図が付されている。これは国土地理院の1:50,000地形図を4分割したものを単位として, 水平分布と南北・東西方向の垂直分布(海拔50mごと)をメッシュマップの手法で表示したものである。シダ植物では, 1:25,000地形図を単位とした水平分布のみが, スギナなど31種で示されている。また, 種子植物では, イヌビワなど23種について伊藤之敏氏の筆になる線画が, コケ・地衣・淡水藻類では, 代表的な種の写真が掲載されている。

『広島県植物誌』編集の基本方針は, 確実に標本のあるものについて載録することとし, 標本がなくて, 文献だけで記録されているものは未確認種として取り扱った。参照した標本は10万点以上にのぼるが, その中から各市町村(島については各島ごと)につき1点の代表標本のみを載録した。標本は採集者名の略号と標本番号が付され, 採集年月日などは省略されている。産地の標記は市町村名と島・山・川・滝などの地名を付し, 海拔高度や群落などは記述していない。絶滅の恐れのある貴重種については, 「県東部」などの標記で地名を伏せてある。文献は約1,800件について, そのすべてを各種ごとに載録した。

目録部分の執筆者は, 種子植物が関 太郎・渡辺泰邦・吉野由紀夫(ラン科はシロバシ, タンポポ属とタケ亜科は浜田展也), シダ植物が松村雅文・田丸豊生・浜田展也, コケ植物が出口博則・山口富美夫・坪田博美・関 太郎, 地衣植物が中西 稔・生塩正義・竹下俊治, 淡水藻類が半田信司・前安井 明・中野武登である。

広島県の維管束植物のフローラとしては, 土井美夫『広島県植物目録』(博新館 1983年)があり, 図説としては, 井波一雄・三上幸三『広島県植物図選 I-V』(博新館 1981-1990年), 竹田孝雄『広島県のシダ植物』(博新館 1987年), ササ類では, 竹田孝雄『広島県ササ類植物誌』(シンセイアート出版部 1995年)などがある。広島県における維管束・コケ・地衣・淡水藻類などの地域フローラ及び植生は多数あるが, 代表的なものを報告書名で記すと, 『三段峡と八幡高原』(広島県教育委員会 1959年), 『巖島の自然』(宮島町 1975年), 『弥栄峡の自然』(名勝弥栄峡学術調査委員会 1979年), 『滝山峡—自然と生活—』(滝山峡学術調査委員会 1983年), 『帝釈峡の自然』(帝釈峡の自然刊行会 1988年), 『立岩貯水池周辺地域の自然』(中国電力株式会社 1989年), 『灰塚ダム湖とその周辺の自然』(灰塚ダム地質動植物学術調査団 1996年), 『芸芸熊野の自然誌』(熊野町教育委員会 1996年), 『広島県高野町の自然』(高野町教育委員会 1998年)などがある。維管束植物だけのフローラとしては, 太刀掛優『広島県呉市植物誌』(比婆科学教育振興会 1999年)がある。

## (B) 研究機関

広島大学(東広島市鏡山)には, 大学院理学研究科生物科学専攻植物生物学(出口博則教授の研究室, もと植物分類・生態学講座), 同附属宮島自然植物実験所, 総合科学部総合科学科自然環境研究, 教育学部自然シ

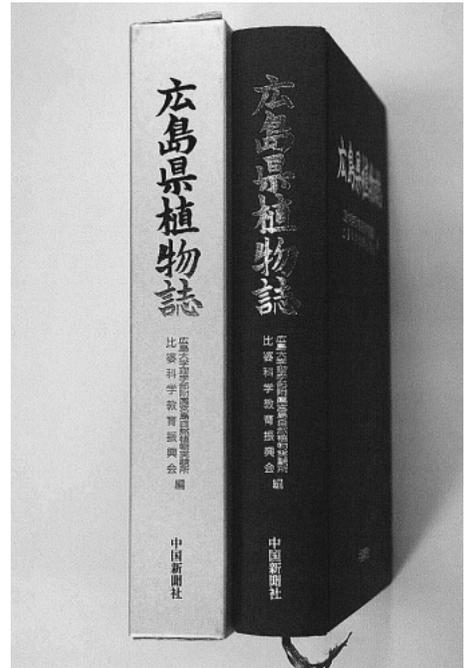


図 109. 広島県植物誌

STEM教育学などの研究室において、広島県の植物相や植生の研究が行われている。「ヒコピア会」は、昨年、創立 50 周年を迎えた植物分類学・生態学の研究会で、広く国内外の方々が会員となっている。その事務局は大学院理学研究科の出口博則教授の研究室に置かれている。会誌『ヒコピア』は年 1 回刊行され、国際的な学術雑誌である。

「ヒコピア会」と宮島自然植物実験所との共催で、月 1 回、「ヒコピア植物観察会」が主として広島県内で開催されている。この観察会は昭和 31 年（1956 年）に堀川芳雄博士によって始められ、広く一般に開放されている。「ヒコピア植物観察会」は、どんな天候でも、毎月の予定日には欠かさず開催され、この会で培われた人脈と集約された情報が『広島県植物誌』を完成させる大きな原動力となった。

広島市立植物公園（広島市佐伯区）でも、広島県の野生植物について、長年にわたり調査が続けられており、吉和村冠山や湯来町東郷山などの地域フローラが発表されている。また、植物公園では、「植物公園友の会」と共催で「植物観察会」が開催されている。「広島草木に親しむ会」は主婦を中心とした会で、和田千恵香さんを代表に熱心な活動が続けられている。

### (C) 標本庫

広島大学大学院理学研究科生物科学専攻植物生物学出口教授の研究室には蘚苔類を中心とした標本が、世界的な視野で集められている。広島県の維管束植物の標本は同附属宮島自然植物実験所に集められ、約 10 万点にのぼるが、自由に閲覧できるほど整理されてはいない。宮島実験所には広島県をはじめ日本並びに世界各地からの蘚苔類の標本もあり、理学研究科の蘚苔類標本と合わせれば数十万点に及ぶ。しかし、蘚苔類の標本も自由に閲覧できるほど整理されておらず、またデータベース化も進んではいない。宮島実験所には、土井美夫氏の維管束並びに蘚苔類標本（広島県及び鹿児島県）、河毛周夫氏の広島県東部の維管束植物、竹田孝雄氏の広島県のシダ植物及びササ類の標本があり、広島県のフローラの資料として重要である。また、広島県のものではないが、高柳悦三郎氏のコレクションがある。これは村越三千雄氏の植物図鑑の基礎資料となったもので、明治から昭和初期にかけて、北はサハリン・中国（東北）から南は台湾に至る旧日本領土の各地からの標本がある。栽培植物も多く、保存状態も良好で、まことに貴重な植物標本である。広島市植物公園には広島県各地の野生植物の標本が保管されている。広島市植物公園は伝統的にランの研究が行われており、県内の野生ランの貴重な標本も多い。広島県比婆郡比和町にある比和町立自然科学博物館には、竹田孝雄氏の広島県のシダ・ササ類の標本、高野町など広島県北部の地域フローラ調査標本が保管されている。広島県には、比和町立自然科学博物館の他には、国公立の自然科学博物館がない。そのために、『広島県植物誌』に引用された宮島実験所保管以外の標本は個人で保管している現状である。広島県に公の自然誌博物館が設置されることを切望する次第である。

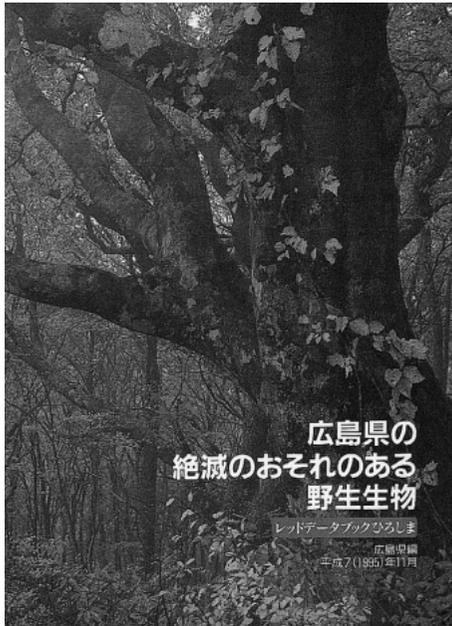


図 110. 広島県の絶滅のおそれのある野生生物

### (D) レッドデータブック

広島県は平成 6 年（1994）3 月に「広島県野生生物の種の保護に関する条例」を制定した。1992 年のリオデジャネイロにおける国連環境開発会議（地球サミット）をうけて、日本政府が「生物多様性国家戦略」をまとめたのが平成 7 年（1995 年）であるから、広島県の条例はそれに先駆けたものであり、野生生物の保護条例は、熊本県に次いで、全国では 2 番目のものであった。この条例を施行するための基準として『広島県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックひろしま—』（広島県 1995 年）がまとめられた。植物は維管束植物のみが取り扱われ、178 種が載録されている。この普及版という形で『広島県の自然と野生生物』（中国新聞社 1995 年）が発行され、本書には各種ごとにカラー写真と県内の分布図、分かりやすい解説が付いている。その後、環境庁（2000 年）のレッドデータブックが刊行された。広島県は独自のカテゴリーを採用していたので、環境省のカテゴリーとの整合性をはかり、さらにコケ植物や群落などを加えた新しいレッドデータブックの改定作業が平成 12 年度に行われた。その報告書は、まだ、

印刷になっていないが、種子植物 284 種、シダ植物 44 種、コケ植物 53 種、植物群落 145 地点が載録されている。平成 14 年度には現地調査と、さらに検討作業が続けられている。広島市でも独自のレッドデータブックの作成が進められ『広島市の生物—まもりたい生命の営み—』（広島市 2000 年）が刊行された。これには、種子植物 78 種、シダ植物 16 種、コケ植物 19 種、地衣類 9 種、藻類 4 種、菌類 23 種、群落 15 が載録されている。代表種のカラー写真、各種ごとに広島市域の分布図がある。

#### (E) 植物群落

広島県全域の植物群落を扱ったものとしては、『第 2 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書』（広島県 環境庁委託 1978 年）があり、県内の代表的な植物群落の組成表がある。この追跡調査として、『第 3 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書（広島県）』（環境庁 1988 年）がある。第 4 回調査も行われたが、その報告書は印刷されていない。鈴木兵二他『広島県の植生図』（広島県 1979 年）は 1:200,000 の植生図とその解説書である。さらに、『広島県の現存植生図』（広島県 1979 年）があるが、これは 1:50,000 の植生図のみで、解説書はない。県内の地域植生については、前掲の各地の報告書の中に多数ある。

(関 太郎：〒738-0027 広島県廿日市市平良山手 3-26 TEL & FAX：0829-32-5513)

## 35. 山口県

鈴木和雄

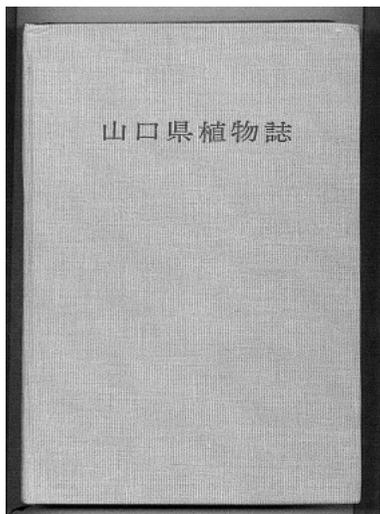


図 111. 山口県植物誌

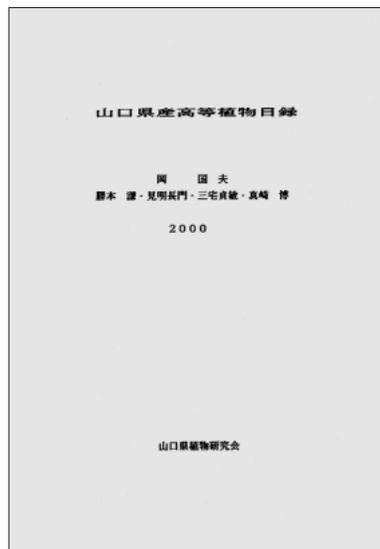


図 112. 山口県産高等植物目録

## (A) 植物誌

1965 年に、山口自然研究会が編集した『山口の自然』が六月社から出版されている。広く自然について扱っているが、その中に、山口に特徴的な植物についての解説が載っている。「山口の植物」、「内海の植物」、「エヒメアヤメ」、「ナギの自生北限」、「コウライタチバナ」、「シダの王国滑国国有林」、「ユズとナンテン」、「タイリンアオイ」、「ノハナショウブ」、「ミツガシワ」、「山口の滝植物」、「ツルマンリョウ」、などの植物に関する記述がある。非常に参考になる本であるが、現在では手に入りにくくなってしまった。

1972 年に岡 国夫が中心になってまとめた『山口県植物誌』は、山口県産植物の集大成と言ってよいもので、以後の山口県の植物についての規範となっている。各論の前におかれている「山口県植物調査研究沿革」の中には、山口県植物相解明へ向けてなされてきた活動が歴史年譜に詳細に述べられている。各論では分布図を適時交え、維管束植物 2,301 種（雑種を含む）について記述されている。各項目に時に見られるコメントから著者のその分類群に対する考えを伺い知ることができ、参考になる。山口県教育財団の発行。

1991 年に萩市郷土博物館から発行された吉松 茂『改訂 山口県北部地方植物目録』（1,800 種掲載）は 1962 年発行の吉松 茂による『山口県北部地方植物目録』（1,413 種掲載）の改訂版である。萩市を中心とした山口県の日本海側に面した北部の地域を中心にまとめられている。

2000 年に、岡 国夫、勝本 謙、見明長門、三宅貞敏、真崎 博らによって『山口県産高等植物目録』が出版された。これは山口県植物研究会の発行である。岡 国夫他による 1972 年版の改訂版にあたる。ここでは 2,800 種が掲載されている。

2000 年に発行された『山口県の巨樹資料 植物調査の歩み』はユニークな本である。山口県植物研究会の会長であった故岡 国夫を追悼して、山口県植物研究会の勝本 謙、三宅貞敏、真崎 博らによって出版されたもので、岡 国夫の資料に基づき県内産の巨樹について詳しくまとめられている。また、岡 国夫の年譜、業績目録なども掲載されており、山口県の植物誌研究の近年の歴史が分かる。

## (B) 研究機関

公立の研究機関としては県立山口博物館（〒753-0073 山口市春日町 8 番 2 号 TEL：083-922-0294 植物担当：嶋村拓実）が県の植物調査の中心となっている。県内の植物調査、希少植物の分布調査などを行っており、研究報告書、解説書などの発行、観察会などを行い県内の植物情報を発信している。また、萩市の郷土博物館（〒758-0041 萩市江向 TEL：0838-25-6447 植物担当：福田靖子）は萩市を中心とした山口県北部の植物相調査を行っている。秋芳町立の秋吉台科学博物館（〒754-0511 美祿郡秋芳町秋吉台 TEL：0837-62-0640 生物担当：中村 久）では秋吉台の地質、生物などの調査を行っている。植物についてはホームページでの紹介も行っている（<http://www.ymg.urban.ne.jp> から）ほか研究報告書（現在第 34 号発行）や調査報告書も逐次発行している。また、県内の調査を主体に活躍している会には「山口県植物研究会」（〒744-0002 下松市上豊井万福寺 TEL：0833-41-3495 真崎 博方）がまずあげられる。故岡 国夫を中心に活動し、現在も県内の植物相の調査などを積極的に行っている。県のレッドデータブックをまとめるときにも、中心になって活躍した。このメンバーの一人が中心になって「里山自然誌の会」（〒753-0024 山口市金古曾 8-3 TEL：083-924-

6798 三宅貞敏方)も作られている。レッドデータブック作成に貢献した会としては「山口植物学会」(会長:南 敦 光市中中央6-21-16)もあげられる。山口県の特に東部を中心に活躍されているようである。

### (C) 標本庫

山口県立大学には高等植物5千点くらいの標本が納められている(鈴木和雄が管理している)。ほとんど塩見隆行の標本で、各分類群を広く収集され、美しく、丁寧に作られている。県立山口博物館には岡 国夫の寄贈標本(約1万点)、三宅貞敏、真崎 博らの標本など約12-13万点が収蔵されている。県外の植物では南方系(琉球列島)の植物が充実している。これまで整理された標本7万8千点については目録が出版されている、『山口県立山口博物館収蔵資料目録 植物標本目録I』(1976年)、『山口県立山口博物館収蔵資料目録 植物標本目録II』(1997年)。現在なお整理中で、データベース化、分布調査を並行して行っている。萩市郷土博物館には約1万点の主に池田美成、吉松 茂の萩市周辺の植物標本が収められている。秋吉台科学博物館には秋吉台の植物を中心に3千点の標本が収められている。またコケ植物の標本も300点くらい収められている。

なお参考までに、鈴木和雄(山口県立大)の東京都の植物を中心にした標本約1万5千点は都立大牧野標本館に収蔵されている。

### (D) レッドデータブック

2002年に山口県でもやっとレッドデータブックが発行された。『レッドデータブック山口 山口県の絶滅のおそれのある野生生物』というもので山口県の環境生活部自然保護課が中心になって、まとめたものである。ほ乳類、鳥類、両生・爬虫類、淡水産魚類、甲殻類、その他の動物、昆虫類、クモ類、維管束植物、コケ植物についてそれぞれ独自の見解で制定している。A4判で511頁におよぶ大著である。ちなみに維管束植物掲載種の内訳は絶滅危惧IA類273種、絶滅危惧IB類47種、絶滅危惧II類224種、準絶滅危惧82種、計626種である。

### (E) 植物群落

国指定の天然記念物となっている樹林には、「満珠樹林(防府市沖の小島)」、「峨眉山樹林(光市室積)」、「指月山樹林(萩市)」、「長門一の宮、住吉神社社叢(下関市)」などがある。岡 国夫が『山口県植物誌』のなかで、注目すべき植物群落をあげている。それによると、これらは国や県の天然記念物指定されており、主なものには「小郡町ナギ自生北限地」、「二位の浜のハマオモト群落」、「西の浦のエヒメアヤメ自生南限地帯」、「小串のエヒメアヤメ自生南限地帯」、「水無瀬島のアコウ自生地」、「日吉神社のオガタノキ巨樹群」、「川上のユズおよびナンテン自生地」、「笠山のコウライタチバナ自生地」、「青海島八王子山タチバナ自生北限地」、「二鹿のシャクナゲ群生地」、「一位ヶ岳のベニドウダン自生地」、「出雲神社のツルマンリョウ自生地」、「熊野神社のツルマンリョウ自生地」である。(敬称などは略した)。

(鈴木和雄:〒753-8502 山口市桜島3-2-1 山口県立大学 TEL:083-928-5447 E-mail:suzuki@yamaguchi-pu.ac.jp)



図 113. レッドデータブックやまぐち

## 36. 徳島県

木下 覺・小川 誠

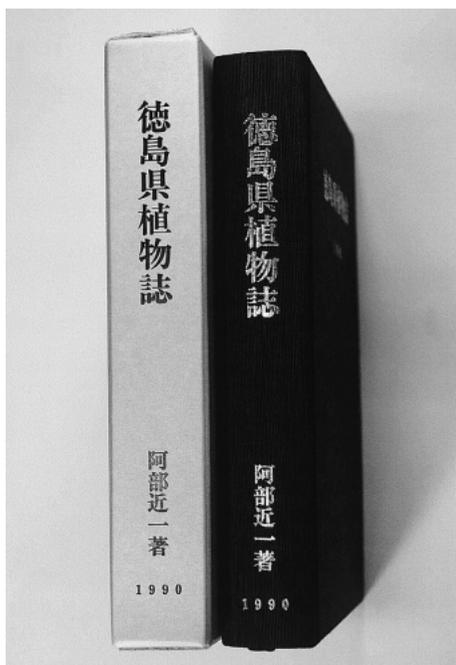


図 114. 徳島県植物誌

## (A) 植物誌

1990 年に阿部近一氏により『徳島県植物誌』(教育出版センター 現在は絶版)が自費により刊行された。B5 判, 580 頁の立派なものである。内容は、はじめに図版により徳島県の植物が紹介されていて、氏の発見による「タヌキノショクダイ」がカラー図版の最初の頁を飾っている。カラー図版が合計 31 頁あり, 大小 162 図の植物写真には, コメツガ林, タカネイバラ, ハクサンシャクナゲ, ケンザンデンド, ツルギハナウドなど, 徳島県の希少植物や特産種, 植物分布や植生など, 徳島県を特色づける種や生育地の写真が豊富に紹介されている。また, 白黒図版は 105 頁にわたり, 植物写真は 412 図のほか, 採集会のスナップ, 植生図, 植物図版など多数の掲載がある。続いて, 徳島県における植物の生育環境, 植物研究史, 徳島県の植物の概況, 徳島県の植物分布と植物相, 巨樹老木, 天然記念物とその植物と続き, 最後に徳島県植物目録が記載されている。集計表によると, シダ植物が 363 種, 裸子植物 24 種, 被子植物は 2,779 種, 計 3,166 種(変種, 品種を含む)がリストアップされている。北限や南限種などの特定の種を除き, 分布図や標本の引用は無いが, 生育の確認場所が市町村名などで記載されていて, 証拠標本は徳島県立博物館に納められている。

一般向けに書かれた徳島県に関する図書では, 阿部近一『徳島県野草図鑑上・下』(1983 年 徳島新聞社), 木内和美(解

説)・阿部近一(監修)『徳島県樹木図鑑』(1990 年 徳島新聞社), 阿部近一(監修)・日本生物教育会徳島県支部(編)『高越山の自然』(1978 年 原田印刷), 木村晴夫(編)『徳島の自然・植物』(1978 年 徳島中央公民館), 頭師喜久夫『黒沢湿原・野草百科』(1992 年 さくら印刷), 頭師喜久夫『剣山に咲く花』(2000 年 さくら印刷)などがある。

## (B) 研究機関

徳島県立博物館: 本県における自然史研究における中枢の機関である。機関誌『徳島県立博物館研究報告』が毎年発刊されていて, 動植物などの自然史や埋蔵文化財関係の研究結果が報告されている。また, 室内実習や野外観察会などの植物関連行事が開催されている。2002 年度は新たに「みどりの探検隊」という野外観察会が年 4 回開催され, デジタルカメラを用いて那賀川の植物を記録する行事が行われている。博物館を取り巻く活動として「徳島県立博物館友の会」があり, 県外への植物観察会や, 近郊の園瀬川の自然や歴史を探索「園瀬川探検」が開催され, 絶滅危惧種のフジバカマやノニガナを発見するなどの成果があがっている。また, 県内の植物研究者や愛好家が集まって「みどりクラブ」という会合を博物館で月 1 回行っており, 県内の植物標本を見ながら情報交換を行っている。

徳島県自然保護協会: 徳島大学総合科学部に事務局があり, 過去に次のような調査報告書が刊行されている。『黒沢湿原の植生・黒沢湿原とその周辺の植物相』(1974 年), 『城山の植生・植物相』(1977 年), 『落合峠周辺の植生・植物相』(1983 年), 『眉山の植生・植物相』(1986 年)。

徳島生物学会: 県内の大学(医学部, 歯学部, 薬学部, 総合科学部, 教育学部)などの研究者, 小中高等学校などの生物教育に携わる教員などで構成される学会。会員には植物分類, 植生などの研究者がいて, 毎回ではないが, 地域フロラや植生などに関する研究成果も報告される。徳島大学総合科学部に事務局がある(2002 年現在)。

徳島県植物研究会: 徳島県の植物を調査研究することを目的として, 1973 年に結成された同好会。毎月 1 回の観察会や植物標本同定会, 講演会, 写真展などを開催している。また, 毎年 1 回四国の四県が持ち回りで, 「四国植物研究会」を開催し, 研究発表や情報交換などを行っている。2002 年度は徳島県が担当で, 9 月

に剣山で開催された。さらに、本県を会場として開催される植物関係の研究会で、野外研修を伴うものでは、会のメンバーが協力して運営にあたることが多い。近年開催されたものは、「植物分類地理学会野外研修会」(1993年)、「スゲの会第5回全国大会」(1994年)、「水草研究会第19回全国集會」(1997年)などがある。

阿波学会：県内の諸学会の連絡協調を図り、科学的調査研究を目的として1953年に結成された。毎年県立図書館と共催で県下各地の市町村を順次総合調査し、その結果を報告する発表会を開催している。また、その成果をまとめた『阿波学会紀要：総合学術調査報告』を発行し、2002年度で第48号となる。ちなみに2001年度の調査は佐那河内村で実施され、19学会から21班、179名が参加した。植物関係では毎年、徳島生物学会から植生班、徳島県植物研究会から植物相班が参加し、調査の成果を報告している。これらの調査研究により、県内の市町村レベルでのフロラや植生の状況が次第に明らかにされている。また、1985年には『阿波学会三十年史・記念論文集』が発行され、植物関係では「徳島県に模式産地をもつ植物」(阿部近一)、「徳島県の植生」(森本康滋)などの論文が掲載されている。その後、1994年には『阿波学会40周年記念誌・論文集『吉野川』故阿部近一先生を偲んで』が発行されている。

### (C) 標本庫

徳島県立博物館(TKPM)に18万点を越える維管束植物の標本があり、そのうち10万点が整理済みで閲覧可能である。伊延敏行、阿部近一(『徳島県植物誌』の証拠標本)、赤澤時之各氏らの県産植物を中心とした標本が収められている。これらの一部は、『徳島県立博物館所蔵資料目録』の第16号(1987年)にまとめられており、希少種や絶滅危惧種などを除いたものはインターネット上で公開されている(<http://www.museum.comet.go.jp/database.htm>)。標本は独自のシステムでデータベース化されており、徳島県の植物相研究やレッドデータブック作成などに役立っている。

### (D) レッドデータブック

2001年に徳島県環境生活部環境政策課(現徳島県県民環境部環境局循環型社会推進課)から、徳島県版レッドデータブック掲載種検討委員会(編)『徳島県の絶滅のおそれのある野生生物—徳島県版レッドデータブック—』が出版された。動物と維管束植物について扱っており、カテゴリーについては環境省(旧環境庁)に準拠している。維管束植物では絶滅が30、絶滅危惧I類が533、絶滅危惧II類が156、準絶滅危惧が19、情報不足が73、地域個体群が3の計814分類群が選定されている。維管束植物については本文の内容をインターネット上で公開する予定で当局と調整中である。

### (E) 植物群落

宮脇 昭(編)『日本植生誌 四国』(1982年 至文堂)の中で、「徳島県の植生」が宮脇 昭・森本康滋の両氏によってまとめられている。併せて『四国植生誌 附表』、『四国現存植生図』、『四国潜在自然植生図』などが発行され、徳島県関係も記載されている。環境省の特定植物群落調査が1973年から全国一斉に実施され、その後も5年ごとに定期的に行われ、その調査結果は『日本の重要な植物群落 四国版』(環境庁編)などの刊行物として公表された。これらの調査により、県内の重要な植物群落の記載と定期的な状況の把握がなされている。

(木下 覺：〒771-0372 徳島県鳴門市北灘町栗田字東傍寺 288-1 TEL & FAX: 088-682-0215. 小川 誠：〒770-8070 徳島県徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館 TEL: 088-668-3636 FAX: 088-668-7197 E-mail: ogawa@staff.comet.go.jp)

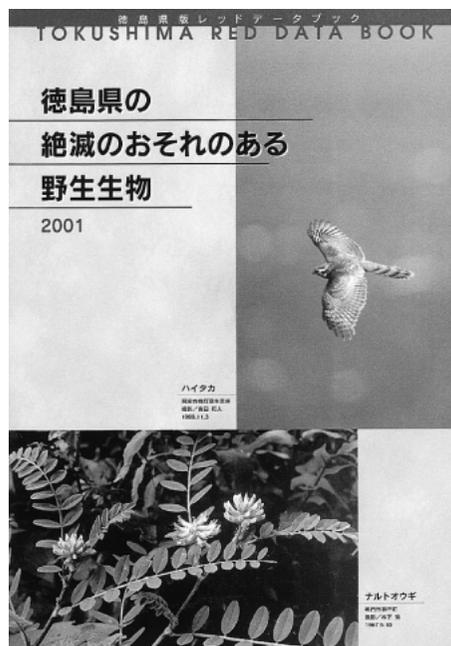


図 115. 徳島県の絶滅のおそれのある野生生物

## 37. 香川県

久米 修

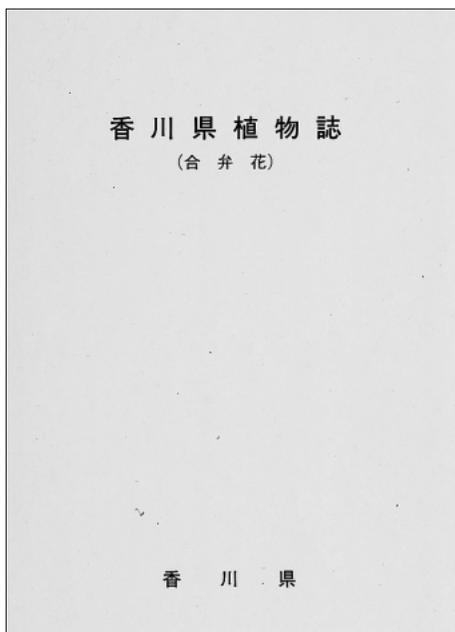


図 116. 香川県植物誌 (合弁花)

## (A) 植物誌

『香川県植物誌』は、1980年から1984年にかけて合弁花、離弁花、単子葉・裸子、シダ植物の4分冊で、香川県環境保健部が発行している。これは、香川県の自然環境基礎資料をとりまとめるという行政資料として発行された。B5判、113頁で、標本資料に基づく植物目録（一部文献引用あり）と代表的産地（市町名のみ）、3階級表示の産量が記載されている。編集委員は、氏家由三、大石泰輔、久米 修、坂口清一、佐藤幸隆、高木真人、新居正敏、三谷 進、和気俊郎である。発行目的が行政資料である事から印刷部数が少なく、現在は在庫も無く絶版となっている。

当初の企画発行から20年以上が経過して、その後の新知見も少なからず蓄積している事と、既刊が植物目録のみで本来の「誌」になっていない事などから改訂版の編纂の必要性が語られているが、財政的事情などから実現していない。

植物に関する一般向けの図書としては、橋本 薫『小豆島讃花』（1994年 月刊「び〜ぷる」）がある。また（財）かがわ水と緑の財団が普及広報版として発行している『かがわの自然』、『自然との共生を考える』、『香川の保存木』は、植物を含めた香川県の自然について広く解説されている。

## (B) 研究機関

香川大学教育学部生物教室に「香川生物学会」の事務局があり、会誌『香川生物』の発行が行われている。同学会は植物専門の学会ではないが、香川県内唯一の生物関係の学会として、香川県の自然史研究の中核を担っている。

植物関係の同好会としては、1973年に発足した「香川植物の会」があり、毎月定例会と観察会が実施されている。また毎月発行される会報には、例会や観察会時の報告と共に県内外の植物に関する情報が掲載され、2002年9月号で362号を数える。その他の主な同好会としては、「牟礼草友会」、「坂出野草の会」、「香川県巨樹の会」などがある。

## (C) 標本庫

香川県内には体系だって標本を収蔵管理している機関はなく、ほとんどの物が個人的に収集保管されている状態である。少数ながら公的機関が保持している例として、香川大学教育学部生物教室に実習用として保管されているのと、高松市市民文化センターに「坂口清一コレクション」が収蔵されている。「坂口コレクション」については、一部標本の信憑性に疑問を持つ声もあり、県内の研究者には活用されていない。

## (D) レッドデータブック

香川県版レッドデータブックについては、香川県自然保護室が1999年から5ヶ年計画で動植物9分類群について策定を開始した。1999～2001年度にかけては文献・標本・現況調査を実施し、2002年度は補足調査と県版レッドリストの制定、2003年度に県版レッドデータブックとして出版される見込みである。

## (E) 植物群落

香川県の現存植生図は、旧環境庁編の5万分の1図があるが、作成から年数が経過したことから環境省により改訂のための調査が逐次実施されている。香川県においては、2001年度から調査が開始され、2003年度には全県の見直しが完了する予定である。

1978年環境庁（編）の『日本の重要な植物群落』では、香川県の特定植物群落が33箇所取り上げられて

おり，県内の重要な植物群落についてほぼ網羅している。その後の変遷において追加削除されながら，定期的な追跡調査が行われている。

天然記念物については、『香川の文化財』（1996年 香川県教育委員会）にまとめられている。  
(久米 修：〒761-8074 香川県高松市太田上町 78-11 香川植物の会 TEL：087-889-4765)

## 38. 愛媛県

相原英二

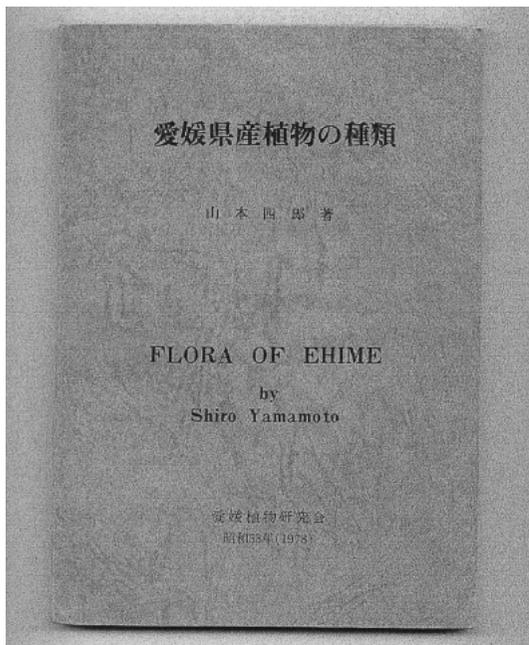


図 117. 愛媛県産植物の種類

## (A) 植物誌

愛媛県には西日本最高峰(海拔 1,982 m)の石鎚山、蛇紋岩(橄欖岩)や石灰岩の特殊岩石からなる東赤石山や四国カルスト、南部の温暖な海岸半島や島嶼部などがある、気候的、地形・地質的な自然環境は変化に富んでいる。愛媛県のフローラは多様で、県固有種や隔離分布種、分布限界種などの植物地理学的に注目される植物が多く分布している。

愛媛県のフローラに関する主な著書としては八木繁一の『愛媛県植物誌』(1928年)、余吾一角の『周桑郡植物誌』(1929年)、山下幸平の『愛媛県植物便覧』(1936年)などが古くから知られている。最も新しくまとまったフローラリストは1978年に刊行された山本四郎の『愛媛県産植物の種類』(愛媛植物研究会現在は絶版)であり、品種までを含めた3,166種類の維管束植物とその分布情報(主な産地、高度、生育量など)が記載されている。刊行後に県内で新たに確認された植物種については山本四郎(1978~1999年)および山本四郎・相原英二(2000年~)が『エヒメアヤマ(愛媛植物研究会誌)』の中で「県下新記録植物・県下新産地植物」として掲載しており、400種類

以上が追加されている。現在までに愛媛県において確認情報のある植物は3,600種類以上におよぶと考えられ、新たな愛媛県植物誌の編纂が望まれている。

## (B) 研究機関

自然史系博物館としては愛媛県総合科学博物館(新居浜市)および愛媛県立博物館(松山市)があり、愛媛県内の自然に関わる調査研究、資料の収集・展示を行っている。また、各博物館からはそれぞれ『愛媛県総合科学博物館研究報告』、『愛媛県立博物館研究報告』が発行されている。その他、上浮穴郡面河村には面河山岳博物館があり、石鎚山系と面河地区の自然史を中心に研究活動や教育普及を行っている。

アマチュアの植物同好会としては「愛媛植物研究会」があり、年間約10回の野外観察会の他に、会誌の発行や研究発表会などの活動を行っている。1955年から発行されている会誌『エヒメアヤマ』には県内の植物に関する各種論文や分布情報などが掲載され、2000年で40号になる。

## (C) 標本庫

愛媛県総合科学博物館に1~2万点の標本があり、野村義弘、三好保徳、石川早雄らの県産植物を中心としたコレクションが収められている。また、愛媛県立博物館には余吾一角、山本一、山本四郎らのコレクションが約1万点ある。その他、面河山岳博物館に楠博幸の標本が約3千点、今治市の鹿ノ子池公園みどりの相談所に渡辺憲一の標本が約1万点保管されている。いずれの標本庫も閲覧は可能であるが、大部分が未整理標本であるため利用環境はあまり良好ではない。

## (D) レッドデータブック

1999年から愛媛県自然保護課が県版レッドデータブックの作成事業を計画し、「愛媛県貴重野生動植物検討委員会」および「専門分科会(ワーキンググループ)」を設置して絶滅の恐れのある野生動植物の調査とデータ収集を実施している。高等植物に関しては愛媛植物研究会々員を作業メンバーとした専門分科会が2002年まで現地調査とデータ検討分析を行っており、レッドリストを作成している。愛媛県レッドデータブックは2003年に印刷物として出版される予定である。

その他、市町村レベルのレッドデータブックとして2002年に松山市環境保全課が『レッドデータブックまつやま 2002 松山市における絶滅のおそれのある野生生物』（まつやま自然調査会（編）246頁）を発行しており、高等植物は285種類が掲載されている。

#### (E) 植物群落

1979, 1988年に行われた環境庁の自然環境保全基礎調査において愛媛県の現存植生図（1/5万）が作成され、植物群落の種類と特徴、分布状況などが報告されている。愛媛県には暖温帯から亜高山帯までの様々な植生が分布しており、蛇紋岩（橄欖岩）や石灰岩などの特殊岩石地や海岸にも特徴的な植生がみられ、植生状況は多彩である。

また、1979年に行われた環境庁の特定植物群落調査において県内61ヶ所の重要な植物群落の記載がされ、その後1988年に行われた追加・追跡調査により現存する73ヶ所の群落の現状が報告されている。県内の重要群落は石鎚山系、赤石山系、四国カルストなどに集中しており、亜高山や特殊岩石地の植物群落に注目すべきものがある。山中二男、鈴木兵二などによって古くから調査研究が行われてきた。

（相原英二：〒790-0842 愛媛県松山市道後湯之町14-23 TEL & FAX：089-921-2357 E-mail：eaihara@muj.biglobe.ne.jp）

## 39. 高知県

鴻上 泰

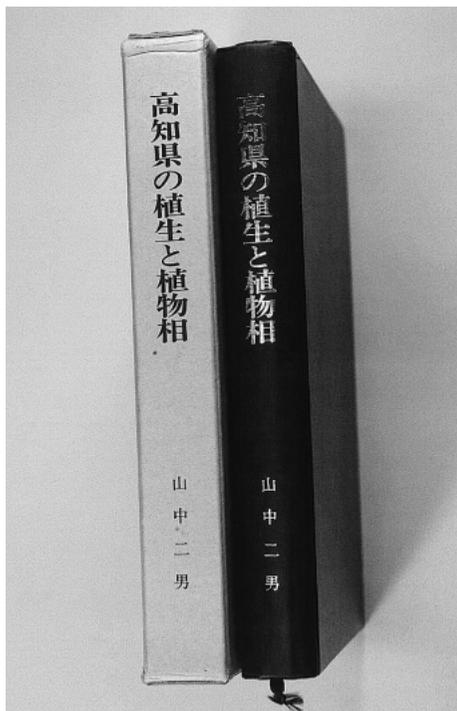


図 118. 高知県の植生と植物相

## (A) 植物誌

1978年に山中二男『高知県の植生と植物相』（林野弘済会高知支部 現在は絶版）が刊行された。B5判、461頁で、研究史、自然環境、植生と植物地理、保護（天然記念物、保護林、自然公園等）等の記述に130頁、以下330頁を高等植物目録にあて、シダ植物以上2,385種（亜種以下を別にとりあつかわず、雑種を除く）をリストアップしている。生育帯や生育環境および生育状態、花期などの記述が特徴で、標本産地の引用は代表的な市町村、山域にとどまっている。その後山中二男は「高知県の植生と植物相補遺」（1988年『高知大学教育学部研究報告第3部』第40号）により同定の訂正と新たに確認された種および産地の追加を行い、その結果高知県の自生植物はシダ植物以上2,446種に変更された。

このほか植物相に関する著作としては、古いもので上村 登『土佐の植物』（1944年）、山脇哲臣『土佐植物風土記』（1954年）、1973年には1938、1952、1954年に出版した著作を合本した和田豊洲『四国の植物分布とその生態』（高知営林局）が出版されている。

2001年からは高知県立牧野植物園が事務局となって、新たな高知県植物誌の編纂を目指して調査を開始した。調査員16名ほかボランティア約200人が参加し、県内約330メッシュを8ブロックにわけて調査を行っている。全てのメッシュ毎に全種を証拠標本として採集を行うため、年間約3万点の標

本が集積される。完成目標は2010年の予定である。

県内で出版された地域フローラはなく、黒岩和男が『吾川村史下巻』（1995年）に266頁にわたって植物編を著しているほか、山中二男が『鏡村史』（1989年）に植生と植物相を解説している。1973年に創刊された『土佐の自然』（高知県環境保全課）では、No.44（1987年3月）以降の「おらんくの自然」シリーズで県内植物研究者の執筆により、各市町村の植生や植物相が記述されている。同誌はNo.86（2001年5月）よりホームページ（<http://www.pref.kochi.jp/>）での公開となった。モノグラフとしては、2002年に山岡和興が『高知県のシダ植物』を著している。

## (B) 研究機関

高知大学理学部生物学科に「土佐生物学会」の事務局があり、毎年研究発表会が行われている。自然史系の博物館としては、越知町に1997年10月に開館した横倉山自然の森博物館があり、『博物館ニュース』は第6号まで発行されている。植物園としては、1958年に牧野富太郎を記念して開園した高知県立牧野植物園がある。同園は1999年11月にリニューアルし、植物学の博物館として、研究調査機能をはじめ、教育普及、展示、収蔵の各機能を備えた牧野富太郎記念館が建設された。不定期な研究誌として『Makinoa New Series』を発行している。アマチュアのグループとしては「土佐植物研究会」があり、野外での月例会のほか、植物に関する報告が掲載された会誌『高知県の植物』を発行し、2002年で16号になる。

## (C) 標本庫

高知県立牧野植物園標本室（MBK）に約3万点（未整理13万点）の標本があり、土佐植物研究会、山中 林、松本文夫、山岡和興らの県産植物のほか、牧野富太郎、牧野晩成、西原礼之助、伊澤一男等全国の標本や、牧野植物園ですすめているミャンマー、ポリビア、トンガ等海外調査の標本、アメリカや中国との交換標本など年間約4万点の標本が収集されている。

## (D) レッドデータブック

1999年3月に環境庁の新基準にもとづいた「高知県植物版レッドリスト」が公表され、2000年3月に『高知県レッドデータブック・植物編』が刊行された。絶滅種は40（うち2種については最近生存が確認された）、絶滅危惧種は626におよぶ。

## (E) 植物群落

1975年に『高知県現存植生図』（環境庁）、1978年に『特定植物群落報告書』（高知県）、1979年に『植生調査報告書』（高知県）が発行されているが、いずれも山中二男の手による。県内の森林植生は同氏によって研究され、河辺水辺の植生は石川慎吾によって研究されている。

（鴻上 泰：〒781-8125 高知県高知市五台山4200-6 高知県立牧野植物園 TEL：088-882-2601（代表） FAX：088-882-8635）

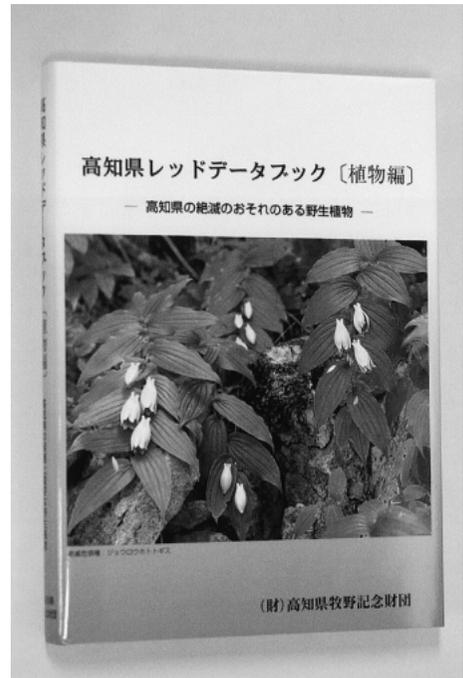


図 119. 高知県レッドデータブック [植物編]

## 40. 福岡県

矢原徹一

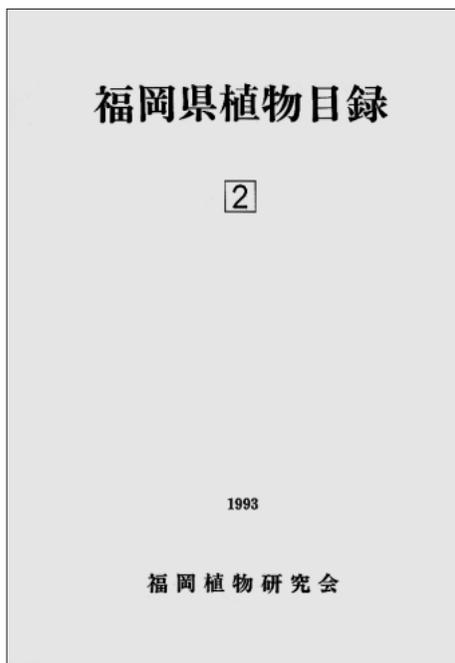


図 120. 福岡県植物目録 ②

## (A) 植物誌

筒井貞雄『福岡県植物目録 I』(福岡植物研究会 1988 年)がシダ植物を、福岡植物研究会『福岡県植物目録 II』(福岡植物研究会 1992 年)が裸子植物と、被子植物のヤマモモ科からアブラナ科までをカバーしている。目録の根拠となった標本が引用されており、信頼のおける出版物であるが、残念ながら第 III 巻以降は未完である。

福岡植物研究会発行の『福岡の植物』第 1~16 号(1974~2001 年)には、福岡県植物目録編集を目標とした、県産植物に関する標本記録や研究報告が掲載されている。

福岡県高等学校生物研究部会(編)『福岡県植物誌』(1975 年)には、維管束植物・コケ植物・地衣類・海藻の目録がまとめられているが、標本の引用はない。

## (B) 研究機関

九州大学総合研究博物館、および九州大学大学院理学研究院生物科学部門において、植物分類学・生態学の研究が、また北九州市立自然史博物館において、植物生態学の研究が行われている。

## (C) 標本庫

九州大学総合研究博物館植物部門ハーバリウム(FU)に約 10 万点の植物標本があり、中島一男、竹内 亮らの県産植物標本(オオユリワサビなどのタイプ標本を含む)が収められている。また、福岡植物研究会が収集した県産種子植物標本(『福岡県植物目録』II 巻以降の証拠標本)が寄贈されている。このほか、金平亮三、初島住彦らの熱帯植物標本(タイプ標本を含む)、朝鮮半島・台湾・樺太の植物標本が収められている。

北九州市立自然史・歴史博物館ハーバリウム(KMNH)には、隠花植物約 1 万 5 千点、顕花植物約 4 万 5 千点の植物標本があり、吉岡重男らの県産植物標本、筒井貞雄の県産シダ植物標本(『福岡県植物目録 I』の証拠標本)、城戸正幸の九州産シダ植物標本、伊藤秀三のガラパゴス諸島産植物標本などが収められている。

## (D) レッドデータブック

『福岡県の希少野生生物—福岡県レッドデータブック 2001—』(福岡県環境部自然環境課制作 福岡県総務部県民情報公開課発行)に維管束植物 580 分類群が選定されている。

## (E) 植物群落

福岡県高等学校生物研究部会(編)『福岡県植物誌』(1975 年)に、県内の植生概況と県内各地の代表的植生が記述されている。また、上記『福岡県レッドデータブック』(2001 年)には、7つの群落評価項目によって選定された保護上重要な群落に関する記述がある。

(矢原徹一：〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院理学研究院 TEL: 092-642-2622 FAX: 092-642-2645)

## 41. 佐賀県

上赤博文

## (A) 植物誌

1981年に佐賀植物友の会から馬場胤義(編)『佐賀県植物目録』(絶版)が刊行された。B5判、266頁で、2,068種(品種は除く)が掲載されている。すべて実在標本に基づいているのが特徴で、その多くは佐賀県立宇宙科学館に保管されている。それ以前でまとまったものとしては馬場胤義(編)『佐賀県生物誌 植物篇』(1964年 佐賀県理科教育振興会・佐賀県理科教育協会)がある。また、「佐賀県の生物」編集委員会(編)『佐賀県の生物』(1996年 佐賀県生物部会)には、佐賀県植物研究史、佐賀県産植物の概要、佐賀県の植物群落、コケ植物、地衣類、珪藻類、キノコ、シチメンソウが掲載されているほか、地域の植物として、脊振山、天山、檜原湿原、黒髪山、多良岳、向島、虹ノ松原、佐賀平野のクリーク、松島の植物が解説されている。

一般向けに書かれた図書では、貞松光男『佐賀の野草 上・下』(1990年 佐賀新聞社 絶版)、貞松光男『佐賀県の樹木』(1996年 佐賀新聞社)がある。変わったところでは、貞松光男(文)・金子剛(絵)の『ふるさと植物誌』(1999年 佐賀新聞社)がある。見開きで1種類の植物が示され、右頁に植物の特徴や生態、方言や利用法などの解説文が、左頁に金子画伯による植物画が描かれている。また、佐賀植物友の会は、『佐賀の植物方言と民族』(1977年 絶版)、『佐賀の自然と植物』(1987年 絶版)、『佐賀の街路樹・庭園木』(1998年 再版予定)を刊行している。

## (B) 研究機関

県内に研究機関は存在しないが、アマチュアの植物同好会として、「佐賀植物友の会」がある。1965年に設立され、会誌『佐賀の植物』は2001年12月で37号を数える。本会は会誌のほか、前述の単行本を出版しており、佐賀県の植物研究に多大な足跡を残している。ほかに、1993年に設立された「佐賀自然史研究会」の会誌『佐賀自然史研究』の中に植物に関する論文が掲載されており、2002年5月で8号を数える。新しい研究会であるが、研究会誌はレフリー制を導入しており、内容は充実している。

## (C) 標本庫

武雄市に1999年7月に開館した県立宇宙科学館があり、標本庫が設置されている。「佐賀植物友の会」が『佐賀県植物目録』を編纂する際に収集した標本の多くは、当初県立博物館に保管されていたが、宇宙科学館の完成に伴い、そちらに移管された。約2万点の標本が所蔵されている。標本の一部は、宇宙科学館のホームページ(<http://www.saga-ecf.or.jp/>)で検索(生物系収藏品検索)できる。

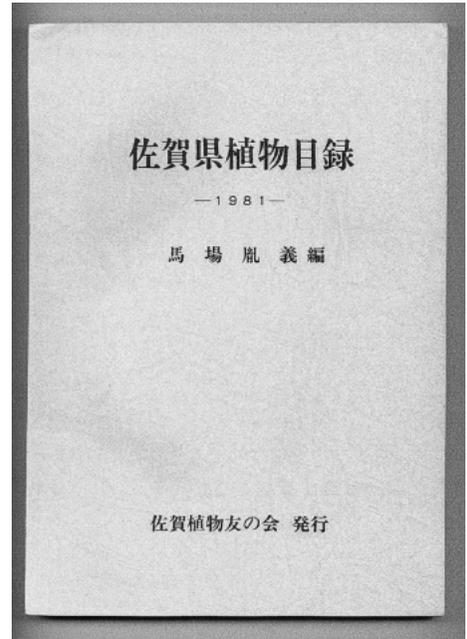


図 121. 佐賀県植物目録 1981



図 122. レッドデータブックさが

## (D) レッドデータブック

「佐賀県希少野生生物調査検討会」の調査をもとに、2000 年 12 月に『佐賀県の絶滅のおそれのある野生動物植物—レッドデータブックさがー』（佐賀県環境政策局環境企画課）が刊行され、2001 年 3 月には『佐賀県の絶滅のおそれのある野生動植物—レッドデータブックさがー 普及版』が出版された。絶滅種、絶滅危惧Ⅰ類種、絶滅危惧Ⅱ類種、準絶滅危惧種、情報不足種に区分され、それぞれ種子植物では 27 種、113 種、112 種、87 種、9 種の 348 種、シダ植物では 5 種、24 種、27 種、5 種の 61 種が選定された。

## (E) 植物群落

まとめたものとしては、1978 年に発行された『第 2 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書（佐賀県）日本の重要な植物群落（北九州版）』（環境庁）があり、その追加調査、追跡調査をしたものが 1988 年、1998 年に出版されている。これらのデータと『佐賀の植物』や『佐賀の生物』（佐賀県理科教育センター）等に報告された群落調査のデータは、「佐賀県の植物群落」（「佐賀県の生物」編集委員会（編）『佐賀県の生物』1996 年 佐賀県生物部会）にまとめられている。また、『日本植生誌 九州』（1981 年 至文堂）に佐賀県の植物群落についての記述が散見される。

（上赤博文：〒849-0303 佐賀県小城郡牛津町牛津 152-4 TEL：0952-66-3049 E-mail：edq41979@saga-ed.go.jp）

## 42. 長崎県

中西弘樹

## (A) 植物誌

1980年に外山三郎の『長崎県植物誌』（長崎県生物学会）が、1981年に松林文作『長崎県シダ植物誌』（長崎出版文化協会）が刊行されている。しかし、20年以上経過しており、新しい知見やフローラに追加される植物も多く、新しい植物誌の発行が期待されている。県新産の植物については、中西弘樹が「長崎県植物誌ノート」として、『長崎県生物学会誌』に毎回記載しており、これまで帰化植物も含めて270種以上が追加記録されている。1990年には全国植樹祭を記念して写真を中心とした『長崎県の森林と樹木』（長崎県発行）が出版されている。地域フローラとしては長崎県生物学会から『対馬の生物』（1976年）、『壱岐の生物』（1977年）、『五島の生物』（1981年）などが出版されており、その中にもフローラの解説がある。また、1996年に『生月町の自然』（生月町発行）、1987年に『対馬の自然』（長崎県発行）があるが、フローラや植生の詳しい論文が掲載されている。一方、『平戸市史 自然考古編』（1995年平戸市発行）などの各市町史の中にもフローラが紹介されているが、不十分なものが多い。1993年に長崎県が発行した『長崎県の無人島—その自然と生物』には長崎県内の108の無人島について調査時に確認された生物の目録が記載されている。

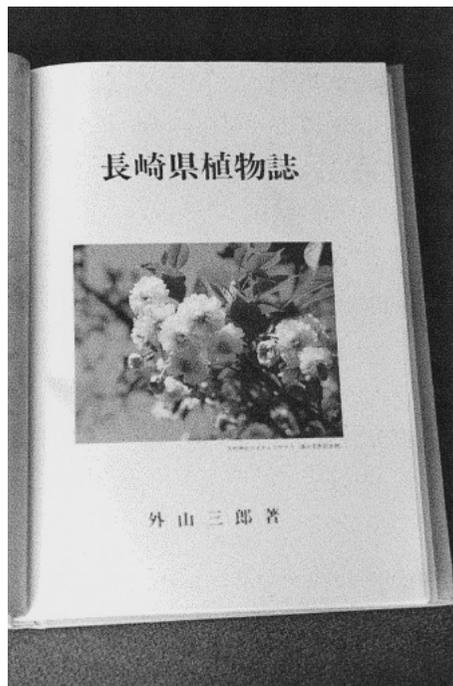


図 123. 長崎県植物誌

## (B) 研究機関

長崎大学教育学部生物学教室には「長崎県生物学会」の事務局があり、2001年に創立30周年を迎えた。年2回学会誌を発行するほか、年1回の大会、不定期に自然観察会などを開いている。また、編集・出版活動もしており、最近では『多良岳の生物』（長崎出島文庫発行）を出版している。会員は県内外に300名ほどおり、地方の研究会としては活発に活動している。長崎大学環境科学部自然環境保全講座では、海藻の分類やコケの生態を中心とした研究室がある。長崎大学薬学部付属薬用植物園は、文教キャンパスと長崎市外の野母崎町にある。野母崎町には主として亜熱帯性の薬用植物が栽培されており、高さ8m、面積180m<sup>2</sup>の温室もある。文教キャンパスのものは栽培園のほか、温室、研究棟などがある。また、シーボルトが日本からオランダに持ち帰った植物の中で、ライデン大学付属植物園に今でも生き続けているものを、日蘭交流400周年記念事業として寄贈してもらったいわゆる里帰り植物が栽培されている。このコーナーは「シーボルト記念植物園」と呼ばれ、一般公開されている。一般向けの植物園としては、野母崎町に長崎県亜熱帯植物園「サザンパーク野母崎」があり、亜熱帯植物を中心に約1,500種が栽培されている。佐世保市には市立石岳動植物園がある。

## (C) 標本庫

長崎大学環境科学部に外山三郎氏の採集した標本を中心に標本庫があり、教育学部生物学教室には中西弘樹の採集した標本約1万点があるが、いずれも一般には公開していない。

## (D) レッドデータブック

2001年に長崎県自然保護課から『ながさきの希少な野生動植物』と普及版『RED DATA BOOK 2001』が発行され、高等植物では550種が選定されている。また2000年に長崎市生活環境部環境保全課から『長崎市レッドデータブック』が発行されているし、佐世保市からも2002年度中に市のレッドデータブックが出版される予定である。

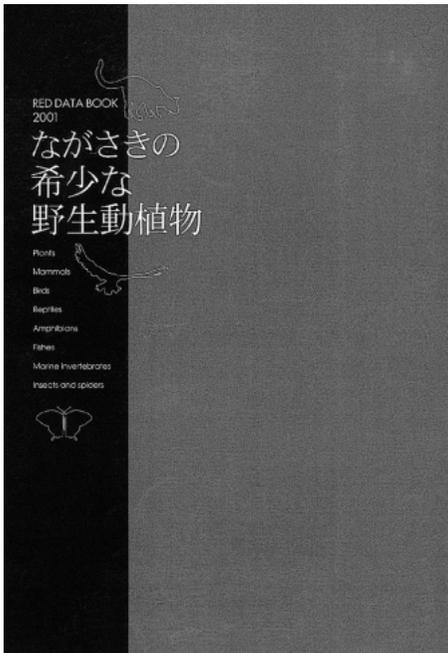


図 124. ながさきの希少な野生動植物

#### (E) 植物群落

1977年に伊藤秀三『長崎県の植生』が県自然保護課より発行されているが、詳しくは伊藤秀三氏によって『長崎大学教養部紀要』などに多くの論文が掲載されているし、最近は中西弘樹によって『長崎女子短期大学紀要』に石灰質砂岩地帯の植生や蛇紋岩地帯の植生などの論文が掲載されている。また、1981年の『日本植生誌 九州』（至文堂）の中にも伊藤氏によって長崎県の植生が解説されている。地域植生としては1970年に『長崎市の植生』（長崎市発行）、1980年に『大村市狸ノ尾イチャイガシ原始林』（大村市教育委員会発行）、1980年に『雲仙・原生沼の研究』（長崎県環境部発行）、1992年に『平戸の植物と植生』（平戸市文化協会発行）などがある。

(中西弘樹：〒852-8521 長崎市文教町 1-14 長崎大学教育学部生物学教室 TEL：095-847-1111 FAX：095-840-0537 E-mail：hiro-nak@net.nagasaki-u.ac.jp)

## 43. 熊本県

高宮正之

## (A) 植物誌

1969年に熊本記念植物採集会編集による『熊本県植物誌』(長崎書店 現在絶版)が刊行された。B5判, 436頁で, 1. 概説(熊本県の地質, 熊本県の気候, 熊本県の植物, 熊本県の天然記念物, 肥後の名花, 熊本県の植物研究略史, 熊本県内植物文献目録), 2. 熊本県産植物目録, 3. 熊本県内地名便覧の3部から構成され, シダ植物以上2,131種類が目録に挙げられている。目録の項では, 左頁に目録, 右頁に注釈の見開きとなっており利用しやすい。目録に収録したものは証拠標本があることを原則としている。発刊より30年以上が過ぎているが, 新しい植物誌編纂の具体的計画は無い。県内の地域フローラとしては, 今江正知・村岡節雄『阿蘇の植物便覧』(1982年 熊本県), 今江正知・堤周次郎『天草の植物便覧』(1980年 熊本県), 五木村総合学術調査団『五木村の植物相』(1987年 熊本県五木村), 乙益正隆『南肥後シダ植物誌』(1992年 人吉市), 八代の植物編集委員会『八代の植物』(1992年 八代植物友の会), 田代周史『五家荘の植物目録』(1993年 熊本県泉村), 高野茂樹他『蘇陽町植物目録』(1996年 熊本県蘇陽町), 新熊本市史編纂委員会『熊本市の植物・動物目録』(1999年 熊本市)などがある。その他, 熊本記念植物採集会誌『BOTANY』に県内各地域のフローラが掲載されている。

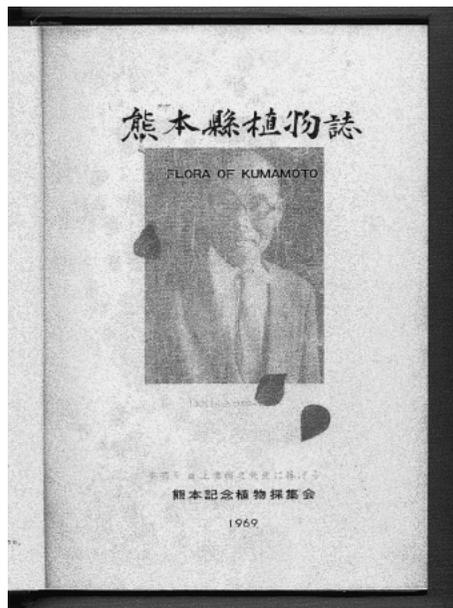


図 125. 熊本県植物誌

一般向きに書かれた熊本県の植物に関わる図書で現在入手可能なものは, 佐藤武之『阿蘇の野の花 I~III』(1987, 1988, 1991年 西日本新聞社), 吉倉 真『熊本 of 自然シリーズ 1~5』(1986, 1987, 1991, 1997, 1999年 熊本生物研究所), 今江正知『自然と生き物の賛歌 自然と文化』(阿蘇選書『阿蘇・一の宮町史(9)』2001年 熊本日日新聞社)等で, 他に写真集などがある。

## (B) 研究機関

熊本大学理学部環境理学科には, 地域植物の自然誌研究を行なっている講座がある。自然史系博物館としては熊本市立博物館があり, 現在, 県内全域をカバーする調査研究を行なっている。また, 県立博物館仮収蔵庫(正式名称: 熊本県企画振興部文化企画課収蔵庫)では, 将来の博物館開館を予定し, 標本等の資料収集を行っている。植物園には, 熊本市内では「監台樹木園森林博物館」「熊本市動植物園」, 葉草を中心とした「熊本大学薬学部附属薬用植物園」(原則非公開)があるが, 熊本市の立田自然公園に隣接する「独立行政法人森林総合研究所九州支所」の標本館や「立田山実験林」も市民の散策の場として親しまれている。立田山の植物は, <http://www.ffpri-kys.affrc.go.jp/tatuta/tatuta.htm> で公開されている。休暇村南阿蘇内の「阿蘇野草園」では, 阿蘇山一帯の多種多様な植物を観察できる。

熊本県の植物について詳細な調査, 研究および保護活動を行なっている代表的な会には「熊本記念植物採集会」がある。1931年の創設以来, 会独自の熊本県植物誌の刊行など, 熊本県の植物研究の中核を担ってきた。毎月の観察会, 月報の発行, 講演会や標本持ち寄り会など活発に活動を行い, 年刊の会誌『BOTANY』もすでに51巻が発刊されている。

## (C) 標本庫

県立博物館仮収蔵庫には現在11万7千点が収蔵されている。内容は, 山城 学, 荒尾 宏, 島田弥一のコレクションに加え, 『熊本県植物誌』(1969年)の基礎データとなった標本である。約3万点(山城コレクションが2万, その他)についてはデータベース化が完了し, 「山城コレクション」は, 『BOTANY 49, 50, 51』(1999, 2000, 2001年)に目録が発表された。資料は公開で, 閲覧可能。熊本大学理学部(KUMA)には約2万点があり, type標本を含めた研究の証拠標本が中心である。非公開だが閲覧可能。熊本市博物館には約5

千点が収録され、現在データベース化が行なわれている。公開で閲覧可能。



図 126. 熊本県の保護上重要な野生動植物

(D) レッドデータブック

『熊本県の保護上重要な野生動植物 レッドデータブックくもと』(1998年 熊本県)と『くもとの希少な野生動植物 RED DATA BOOK (普及版)』(1999年 熊本県)が刊行されている。植物の対象は藻類(ラン藻を含む)及び維管束植物で、707種が保護上重要な種として挙げられている。なお、現在改訂版を調査中で、最新のレッドリストは佐藤千芳他「熊本県植物レッドリスト 2001」(『BOTANY』 2001年)がある。

(E) 植物群落

環境庁特定群落調査(1978, 1988, 1999年)により、県内の重要な植物群落の記載と把握がなされている。また熊本県による県立自然公園調査などにより特定地域の植生が記載されている。

(高宮正之: 〒860-8555 熊本県熊本市黒髪 2-39-1 熊本大学理学部 TEL & FAX: 096-342-3428 E-mail: lycopod@aster.sci.kumamoto-u.ac.jp)

## 44. 大分県

荒金正憲

## (A) 植物誌

大分県の植物目録としてまとめられたのは、1921（大正10）年に発足した「大分県博物学会」による『大分県産植物総目録』（1923年）で、栽培種を含めて維管束植物63科1,059種類があげられている。これを基礎として、全県下で組織的な調査が始まり、郡市別に植物採集が展開され、総勢348名の多数で調査活動が進められた。それぞれの地域で目録がつけられ（「久住山植物目録」、「香々地植物誌」、「日田郡植物誌」、「大分県北海部郡産植物目録」、「耶馬溪植物目録」など）、県全域としてまとめられようとしたとき、戦争、終戦と激変の世が続き、採集した標本は焼失するなどして、その実現の機会を失ってしまったようである。戦前、戦後を通して、山本義光を中心とした人々により、栽培種を除き自生植物約2,300種をあげ、その産地を記入して「大分県自生植物目録」としてまとめている。これを基礎資料として山本義光（編）『大分県植物誌』（1953年）がプリント印刷で発刊された。この間、田代善太郎が度々来県し、多大な指導を受けている。「大分県博物学会」が組織されて30年余の歳月を経たことになる。『大分県植物誌』には、維管束植物187科2,668種が登載され、方言、学名、生育地、簡単な形態などが記載されており、固有な地名で掲げられた産地は、現在なお、生育地の貴重な分布資料となっている。

戦後、大分師範学校（後、大分大学教育学部）の野口 彰教授、鈴木時夫教授を中心とした野生植物、植物社会学の研究が進められ、「大分県生物学会」が1948年に結成され、意欲的な研究活動が展開された。さらに鈴木時夫教授による「大分生態談話会」へと変容していった。それらの研究者の中から新しい植物誌の発刊が企画されるようになり、1975年「大分県植物誌刊行会」が発足した。指導・監修に初島住彦鹿児島大学名誉教授をお迎えし、会長小野 孝、事務局長荒金正憲。事務局員4名、編集委員22名、刊行会会員56名で組織して、野外調査研究、各施設標本室の大分県関係標本の調査や撮影を行なった。これらの調査研究の内容は『大分の植物』（全8巻）としてまとめ、植物誌刊行への基礎資料とした。1980年に、これまでの成果を新植物誌編纂の基礎目録とするため『大分県産植物目録』（150頁）を刊行した。これには、高等菌類41科420種、苔類28科228種、蘚類45科336種、シダ植物24科321種、種子植物154科2,307種、総計292科3,612種をあげてある。こうした作業を通して刊行会発足後、14年の歳月を重ねた1989年に、『新版 大分県植物誌』を刊行した。その主な内容は、大分県の地域に特徴的な植物、賀来飛霞の植物写生図、標本写真などを口絵にまとめ、「大分県の地質」、「大分県の気候」、「大分県の植生」を前段におき、「大分県植物研究史」、「大分県植物文献目録」をまとめ、コケ植物（苔類）、コケ植物（蘚類）、シダ植物、種子植物の4分野構成の「大分県産植物の概要」、「植物目録」（4分野計261科3,357種類）を掲げ、生育地、確かな文献と標本に基づく産地を記載し、種を代表とする標本番号、分布量等を添えてある。分布の特徴的な植物については309種の分布図を掲載し、さらに、「大分県を Type locality とする植物」92種、タイプ標本写真32葉を取りまとめ、末尾に「大分県植物名方言」、「大分県の天然記念物等」を添えてある。B5判、806頁。

なお、『新版 大分県植物誌』発刊後、14年を経過した2003年3月に、荒金正憲個人による全頁カラーの『豊の国大分の植物誌』（A4判 約460頁）を刊行する予定である。

大分県全域及び地域の植物研究、調査報告書には下記のものがある。大分県の研究特性として、調査研究分野は、植物だけに偏らず、野生生物全般にわたることが多く、多くの場合、自然環境（地質、気候、水質など）を取り入れた総合的調査が行われてきている。（掲載は年代順）

○『耶馬溪植物目録』（1958年 山崎利秋 耶馬溪文化協会 44頁）。

○『大分県生物学会調査報告書』（1960～1965年）。『屋久島』（1960年）、『黒岳』（1961）、『釈迦・御前』（1962

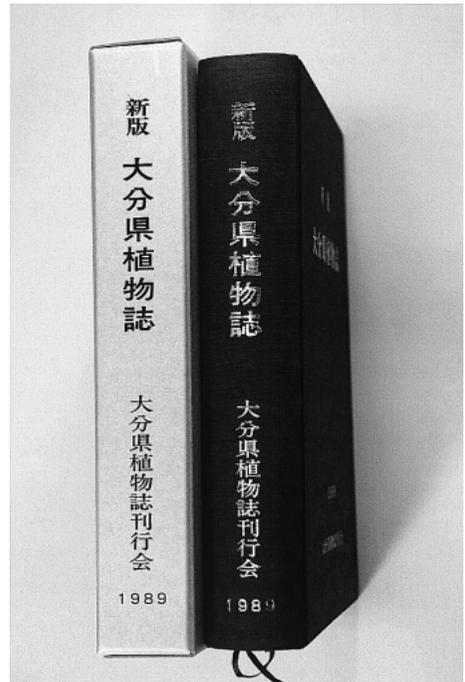


図 127. 新版 大分県植物誌

年),『傾山』(1963 年),『久住』(1964 年),『由布・塚原』(1965 年),野生生物の任意な研究者による調査研究。

○『久住山志(植物編)』(1965 年 工藤元平 205 頁),九重火山群の研究史と種子植物フローラ。

○『くじゅう総合学術調査報告書』(1958 年 大分大学教育学部),鈴木時夫他「くじゅう山群の植生と生態」81~86 頁,鈴木時夫・荒金正憲「くじゅう火山群の維管束植物フローラ」87~123 頁。

○『植物目録』(1963 年 大分県温泉熱利用農業研究所 55 頁),有用植物園を中心とした植物目録。

○『九重のスマレ』(1972 年 佐藤利明・久本幸義 81 頁),九重山のスマレ 26 種の生態写真,スケッチ及び気象資料。

○『大分県動植物文献目録』(1973 年 別府大学図書館(井手野展子) 147 頁,付;大分県内所蔵明治以前の動植物文献写真集 32 頁)。

○『大分県自然環境保全地域調査報告書』(1975~1981 年 大分県),『大分地区』(1975 年),『国東半島地区』(1975 年),『玖珠地区』(1977 年),『県南地区』(1978 年),『県北地区』(1979 年),『日田地区』(1980 年),『豊肥地区』(1981 年),いずれも,地質・地形,気候,水質,植物(植生を含む),動物の総合調査。

○『国立・国定公園学術調査報告書』(1976,1983~1988 年 大分県),『祖母傾地域』(1976 年),『耶馬日田英彦山』(1983 年),『祖母傾』(1984 年),『日豊海岸』(1985 年),『阿蘇くじゅう』(1988 年),いずれも研究分野は前項と同じ。

○『山国町植物誌』(1979 年 山国町郷土誌叢書(第 4 集)山国町誌刊行会(代表相良伸彦) 179 頁),山国町の植生と維管束植物フローラなど。

○『暖地性シダ植物の系統分類』(1979 年 高岡芳憲 71 頁),281 種の形態,生育地,分布域と写真図等。

○『大分の植物』(1981 年 荒金正憲他 大分文庫(7) 203 頁),大分県の植物群落,植物分布,植物の間等。

○『大分県の生物』(1981 年 日本生物教育会大分大会(編集委員長須股信博) 286 頁),「植生と生物相の総説」,「地域の生物」,「生物教材と生徒のクラブ研究」,「高文連科学部の活動と研究成果」。

○『大分の生物』(1981 年 大分合同新聞社 大分生物談話会(編) 265 頁)。植物編・動物編。

○『植物目録』(1988 年 大分県花卉総合指導センター 81 頁),展示温室,見本園の植物目録。

○『別府大学短期大学部紀要』(1990,1995,1998 年)大分県の植物(荒金正憲関係分),「大分県産植物の分布型について(I)」(第 9 号 1990 年),「大分県産植物の分布型について(II)」(第 14 号 1995 年),「地域に特徴的な大分県産種子植物」(第 17 号 1998 年)。

○『国定・国立公園自然環境学術調査』(1992 年~ 大分県自然環境学術調査会(編) 大分県),『小田の池』(1992 年),『猪の瀬戸』(1993 年),『蒲江町深島・屋形島・名護屋』(1994 年),『深耶馬溪』(1995 年),『夷耶馬・鷲巢岳』(1996 年),『酒吞童子山』(1997 年),『くじゅう黒岳』(1999 年),『藤河内溪谷』(2000 年),『犬ヶ岳・津民川』(2001 年),いずれも,地形・地質,気候,水質,植物(植生を含む),動物,なお,このシリーズは,2 年ほど遅れてその地域の『自然ガイドブック』(A4 判 36 頁)が出されている。

○『大分の名樹』(1994 年 大分県緑化センター(編)大分県緑化推進機構),大分県の名樹 93 樹が写真入りで紹介されている。

○『別府の自然』(1994 年『別府市自然環境学術調査報告書』別府市 491 頁,付表,調査分野一地形,地質・温泉,水系・水質,気候,維管束植物,着生コケ植物・地衣類,きのこ,水生動物,海岸動物,魚介類,陸生昆虫,野鳥,哺乳類一,付図(地質図,現存植生図,優れた自然林,木立など),(植物社会常在度・総合優占度,組成表,水生植物相など)。

○『本匠村の自然』(1994 年 真柴茂彦(写真と解説)本匠村教育委員会 108 頁),化石や埋木,動物,植物。

○『地域総合研究論文集一自然・社会・教育一』(大分大学教育学部),『宇佐・院内・安心院町地域』(1995 年)一植物一(荒金正憲・小田 毅),『別府湾岸地域』(1998 年)「種子植物」(荒金正憲),「二次林植生」(須股信博),「シダ植物」(辻 寛文)。

○『鶴見町の植物』(2001 年 鶴見町教育委員会 181 頁),真柴茂彦「鶴見町の巨木」,「自然散策」,「鶴見町の植物」。

○その他県内市町村誌の「自然:植物」の項で,各地域の植生や植物が紹介されている。

## (B) 研究機関

『新版 大分県植物誌』を発刊したあと、「大分県植物誌刊行会」は、発展的解散し、1990年2月に、新しく「大分県植物研究会」を組織した。引き続き、継続して大分県の植物に関する調査研究を行い、その成果を交換しあい、累積して郷土の自然の理解を一層深くし、野生生物の保護活動にも取り組むこととなった。研究会は、年間、10回ほどの観察会を持ち、新しい知見や資料をまとめた会誌『大分県の植物』の第1号を1991年に発行し、現在(2002年)、第12号を発刊している。会長荒金正憲、事務局長高岡芳憲、会員数は105名。『新版 大分県植物誌』の植物目録の追加や加除修正、追加文献等も記載し、新しい植物誌を基本にしてさらに累積し、発展している。1997年から始まった大分県のレッドデータブック編纂作業も、組織的、積極的に参加し、調査員も多く、研究会として多大な成果をあげたものと確信している。

大分県下では、野生植物関係の研究機関をもっている大学等はない。戦後、大分師範学校の野口 彰教授により、1948(昭和23)年3月、「大分県生物学会」が発会した。当時の会員名簿によると小・中・高校の教師が主で117名。発会直後に会誌『大分県生物学会会報』No.1が発行された。野口 彰会長が熊本大学に転出された後、鈴木時夫教授が会長となったが、1959年から会の事務局は大学から離れて地方の組織で運営されるようになり、『たより』等が発行され、『大分県生物学会会報』は、1963年、第15巻No.26で終巻となっている。鈴木時夫教授はその後、新しく「大分生態談話会」を組織し、植生研究が進められるようになった。しかし、1974年に鈴木教授が退官した後、大学等での全県的な研究組織は消滅してしまった。

しかし、大分県のフィールド研究は、これまでの組織やかかわった人々の、培われた野外研究研究者によって、それぞれ基盤となる場を創出して特徴ある会がつくられ、継続して実績を積み重ね、多くの実践や研究報告書を発行してきている。

○「大分生物談話会」1975年に発会。会員60名、会長佐藤真一。大分市を中心とした動植物の植生や生態、動植物相などの調査研究。『大分生物談話会会報』No.1(1975年)～No.7(2002年)を発行している。『七瀬川流域の生物相と水質』(1993年)、『大分市中部地域の自然』(1998年)、『大分市東部地域の自然』(2002年)などがある。

○「別府生物友の会」1960年に発会。会長荒金正憲、会員103名。年6回の会誌『TAYORI』と会員による生態写真2葉を発行。野外観察会などを実施し、近郊の自然保護運動などにも取り組んでいる。『TAYORI』No.1～250を2000年に『自然を友として』にまとめて刊行した。現在観察会を82回実施し、『TAYORI』No.261、『生物 写真』第45号を発行している。

○「郷土日田の自然調査会」1980年に発会。初代会長小野 孝、現在会長佐藤仁蔵、会員40名。継続して日田市内の生物調査を行い、下記のような調査報告書が出版されている。『大分県日田市大川内山の自然調査報告書』(1982年)、『日田市三隈川の自然調査報告書』(1985年)、『日田三丘(日隈・月隈・星隈)の自然』(1987年)、『日田花月川上流地域の自然』(1990年)、『御前・釈迦ヶ岳の自然』(1994年)、『日田市南部地域の自然』(1998)。

○「城山を調べる会」1977年に発会。代表真柴茂彦、会員40名。調査会は隔月に実施し、『草花たより』を出して調査資料をまとめている。

## (C) 標本庫

『新版 大分県植物誌』の編集作業途中、1979年、大分県の肝いりで標本収納庫(スチールロッカー)50庫を整備することができ、当初、大分県緑化センターに標本を保管した。標本数約50,000点。『新版 大分県植物誌』の基本的な標本となっている。その後保管場所が2度移転し、1982年、大分県教育センターに移設されて現在に及んでいる。標本数は約80,000点ほどとなる。施設は狭く、空調施設が無い。標本は台紙に添付されていないため、移動の際、所在不明になったものもある。大分県では、現在博物館はないが、博物館等の施設が実現された場合には、全標本を寄贈することになっている。

## (D) レッドデータブック

大分県のレッドデータブックは、1997(平成9)年に「大分県野生生物保護対策検討委員会-植物3分科会・動物10分科会」(委員長荒金正憲)が組織され、5年間の作業計画で進められた。前3カ年は、主として調査研究に当て、4年目の2001年に『レッドデータブックおおいた』(A4判 506頁)が刊行された。全選定種は13分類群1,135種、植物は、シダ植物102種、種子植物606種、コケ植物31種が掲載されている。最終年の2002年には、その『普及版』(B5判 239頁)が発行されて、この当該委員会の編纂作業は完了し

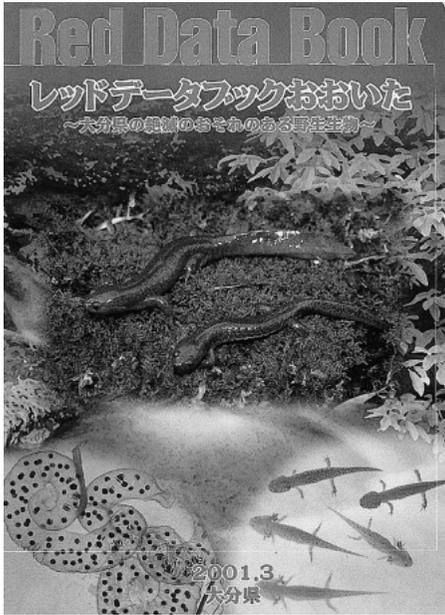


図128. レッドデータブックおおいた

ている。

#### (E) 植物群落

1955年、大分大学教育学部に植物社会学を専門とする鈴木時夫教授が来られ、その学生たちを中心として植生調査研究が行われ、県内の多くの地域の植生資料が整うようになってきた。したがって、県内での植物の野外調査では、植生と植物相（フローラ）とが常に一体となって報告されている。植生の主たる調査報告書を下記に掲げる。

○鈴木時夫「大分県天然記念物御岳原生林の研究」1954年『大分大学学芸学部紀要（自然科学）』2（4）：59-79頁。

○『阿蘇・久住の自然』（1966年 鈴木時夫（編） 六月社 190頁）、「阿蘇」「久住」「豊後水道沿岸」の植生。

○『日豊海岸自然公園候補地学術調査報告書』（1969年 大分県・宮崎県）、「日豊海岸の植物」41～58頁、付表「日豊海岸の植生図及び群集組成表」。

○『大分県の植生』（1973年 鈴木時夫（監修）・大分生態談話会 大分県 40頁）、「大分県植生図」6葉（大分県を6地区に分け、1：50,000の基図による）。

○『大分県の自然』（1974年 大分県 57頁）、「現況と保護

対策」、「付図」（大分県植生自然度など6図）、「付表」（大分県植物社会組成一覧表4表）。

○『奥別府の自然』（1974年『由布・鶴見火山群学術調査報告書』別府市 218頁）、「地形・地質、水質、気象、植生と植生図示、着生蘚苔植物社会、高等菌類の群集生態、火山灰層と植生、ほか動物、奥別府の自然保護（付図：由布・鶴見火山地域の植生図、猪の瀬戸湿原植生）。

○『植生調査報告書』（1976年 大分県 86頁）、「第2回自然環境保全基礎調査」-59調査地の植生調査資料。

○『特定植物群落調査報告書』（1978年 大分県 181頁）、「第2回自然環境保全基礎調査」-71調査地の植生調査資料。

○荒金正憲・生野喜和人「津江山地の植生とフロラ」（1980年 大分県文化財調査報告書第51号『日田郡の文化財』304-221頁）。

○『植生調査報告書』（1987年 環境庁 97頁）、「第3回自然環境保全基礎調査」-47調査地の植生資料。

○『特定群落調査報告書』（1988年 大分県 75頁）、「第3回自然環境保全基礎調査」-9調査地の植生資料。

○『別府大学短期大学部紀要』（1996、1997年）、荒金正憲関係分「大分県北部海岸の植物群落」第15号（1996年）、「九州北東部における森林植物群落の類似性」第16号（1997年）。

○『大分市の植生』（1996年 大分市 114頁）、大野啓一「緑豊かな環境の創造と郷土の永続的な発展をめざして」、植生図（3万分の1）-「大分市の現存植生図」、「大分市の潜在植生図」-。

○その他『日本生態学会誌』などに掲載された大分県の地域に関する「植物群集」の論文は数多い。〈例〉梅津幸雄・鈴木和子「九重山群山頂部の植生と土壌」（1970年『日生態会誌』20（5）：188-197頁）、鈴木時夫・荒金正憲「九重火山群の植物社会と地温」（1972年『日生態会誌』22（4）：180-189頁）。

（荒金正憲：〒874-0031 別府市照波園町10-2）

## 45. 宮崎県

南谷忠志

## (A) 植物誌

1984年に宮崎大学農学部植物病理学教授平田正一によって『宮崎県植物誌』（宮崎日日新聞社 現在は絶版）が刊行された。B5判、377頁で、宮崎県の植物調査研究沿革、文献目録、県の天然記念物、植物分布概要に続き、シダ類以上の帰化植物を含む2,397種類がリストアップされている。リストだけであるが、希少種については産地名と確認者を入れ、欄外に種によってコメントを付記している。県内各地の80名を越える標本提供者の協力を受け、1974年に『宮崎県植物仮目録』（ガリ刷り）として作成し、これを踏み台にして、平田正一が著したものである。それまでは、この病理学教室が病菌が寄生するホストの同定の必要性から、維管束植物の収集と分類を行い、伝統的にこの教室が宮崎県のフローラの研究の中心となり、県の植物分類地理の研究を引っ張ってきた。その後は、アマチュアによる個人活動が進み、多くの県新産が確認され1992年に『宮崎の生物』（宮崎県高等学校教育研究会理科・生物部会 鈺脈社市販）に室屋瀧雄、南谷忠志共著で野生種150種を追加して「宮崎の維管束植物目録」を作成した。また南谷忠志は『宮崎の生物』に「宮崎の植物分類地理」もまとめている。現在では県内産維管束植物は帰化種や雑種まで含めると、3,100種類を超えている。そのため、新植物誌発刊の声は上がっているが、具体化はしていない。

県内の地域フローラとしては、南谷忠志「えびの市の植物」（1991年『えびの市史 資料編分冊』（141頁 えびの市 市販）、南谷忠志「宮崎東諸県地域の植物」（1995年『宮崎東諸県の生物』に宮崎市周辺7市町地域のフローラをまとめたもの）、他にも各市町村の市町村史（日之影町史など）には、地域のフローラが簡潔に纏められている。また、個人発行の機関誌もあり、南谷國合郎（発行）『ふかのき』（1969～1975年 第13号まで 内容は県下各地のフローラや個人研究の分類地理に関するもの等）、坂元守雄（発行）『みやぎきの自然』（1989～2002年 20号終刊 市販 内容はフローラや自然保護、個人研究報告や植物群落調査報告など）等がある。高等学校生物部機関誌にも、専門的で充実した内容のものがあり、県立富島高校『しだのこ』（1969年～）や小林高校『やまね』（1873年～）等があり、地元を中心にフローラを調査した報告が多い。

一般向けに書かれた宮崎県の植物に関する図書では、平田正一（編）『宮崎の植物I・II』（1977、1978年 宮崎日日新聞社 絶版）、都城盆地植物愛好会（編）『都城盆地及び周辺の植物』（1995年 瀬戸山計佐儀発行）がある。

## (B) 研究機関

日南市には1946年創設のコケ類専門の国際的に有名な服部植物研究所があり、年2回の『服部植物研究所報告』を発行し、現在92号になっている。宮崎県総合博物館には自然史部門があり、調査研究にも重点を置き『宮崎県総合博物館研究紀要』が年1回発行されている。これには、日本未記録種を詳細に分類した内容等が含まれ、かなり専門的となっている。

アマチュアの植物同好会としては「宮崎植物研究会」があり、年に15回ほどの学術調査、観察会や絶滅危惧植物の保全活動等の活動を行っている。会誌は会で取り組んでいる地域の学術調査の報告、会員の研究内容や会の活動の報告が掲載されている。研究内容は宮崎県域全体に及び個人的には九州全域に関する報告も含まれている。県南部には「都城盆地植物愛好会」があり、会誌『せんぬけ』を毎年発行している。

## (C) 標本庫

公的な標本庫としては、服部植物研究所の約40万点のコケの標本がある。県産のものはごくわずかで半分



図 129. 宮崎県植物誌

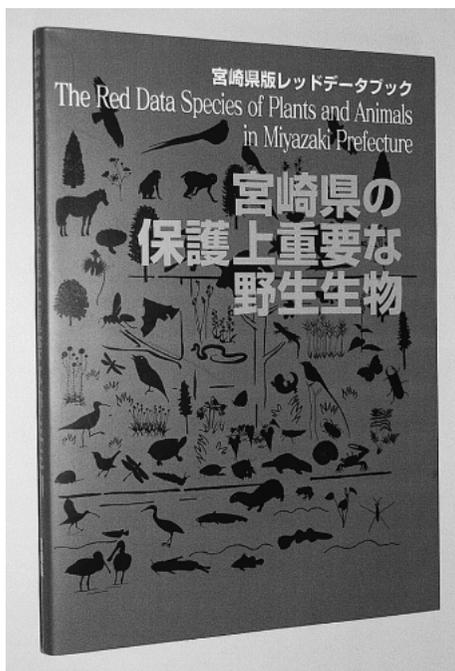


図 130. 宮崎県版レッドデータブック

以上は外国のものである。宮崎県総合博物館には、28,000 点の標本があり、『宮崎県植物誌』を編んだ「平田正一コレクション」が中心で、中には賀来飛霞の江戸時代の標本が含まれている。同定が不完全だが分類ごとに整理され、閲覧は可能である。現在インターネットでの部分的な公開に向け取り組んでいる。

個人的に標本を所有する者もあり、特に南谷忠志が自宅で保管している標本は約 10 万点に及び Isotype 標本も含まれている。殆どが未整理であるが、整理後は公的標本庫に入れる予定である。

#### (D) レッドデータブック

2000 年に宮崎県生活環境課が企画して、レッドデータブック作成検討委員会が編集して県版レッドデータブック『宮崎県の保護上重要な野生生物』（鉦脈社 市販）を出版した。動物との合本で、植物には淡水産紅藻類、担子菌類、地衣類、車軸藻類、コケ類、維管束植物までを対象にし、環境庁版に準じた「減少度」カテゴリーの他、学術的価値や生息環境、教育・社会的重要性を加味した「重要度」の 2 本の物差しで種の価値を評価している。対象植物は維管束植物では 646 種類が選定されている。また、植物群落も掲載している。かなりのカラー写真を入れ、普及も考慮した内容となっている。

#### (E) 植物群落

1978 年から行なわれた特定植物群落調査により、県内の重要な植物群落が記載され、その後も状況把握のため定期的に調査し『宮崎県特定植物群落調査報告』（宮崎県）を発行している。また群落と植生図については 1979 年から調査し、『宮崎県地域植生調査報告書』（1981～1985 年 宮崎県）が随時発行された。群落調査は河野耕三が中心となって行っており、調査結果は『宮崎の生物』（1992 年 宮崎県高等学校教育研究会理科・生物部会 鉦脈社 市販）に概論的に、『みやざきの自然』（1989～2002 年 終刊 坂元守雄（発行）市販）には特殊な山塊などを報告をしている。群落の重要度は県版レッドデータブック『宮崎県の保護上重要な野生生物』にまとめている。

（南谷忠志：〒880-0913 宮崎県宮崎市恒久 5-4-7 TEL & FAX：0985-54-3879）

## 46. 鹿児島県

堀田 満

鹿児島県は九州南部地域、屋久・種子地域、三島・トカラ地域、奄美地域に大まかには区分される南北に 600 km にも及ぶ広大で、海によって隔離された多くの島々を含む地域からなり、また亜熱帯から温帯への気候的な移行帯でもある。植物相は複雑で、維管束植物の種数は 3,000 種に及ぶ。多くの南限種や北限種を含み、固有種や固有亜種/変種も多い。また未記載分類群も多く残されている。

## (A) 植物誌

鹿児島県としてまとまった良質の植物誌はない。南西諸島地域に関しては初島住彦の『琉球植物誌 (追加訂正)』(1975 年 沖縄県生物教育研究会)があるが、これは鹿児島県に関しては奄美地域しか扱っていない。『改訂鹿児島県植物目録』(1986 年 鹿児島植物同好会)は鹿児島県全域についての今までの知見も取りまとめた最も整理された目録であるが、入手が困難であるし、分類学的な記載やノートは付せられていない。シノニムもほとんどはっていないので、問題の植物群の分類学的な理解がないと誤解を生じる恐れがある。北琉球地域と呼ばれる種子・屋久島から三島・トカラ列島地域に関しては初島住彦による『北琉球の植物』(1991 年 朝日印刷書籍出版)がある。これも植物相の解説と植物名、それに簡単な産地の記録のみである。また地方の出版社から印刷発行されているので、入手は難しい。初島住彦・天野鉄夫(1994 年)の『琉球植物目録 (増訂改正)』(沖縄生物学会)には奄美群島地域が入っている。野生植物だけでなく、熱帯系の主に栽培されている植物であるが、多くの日本名がリストされていて便利である。同様に島袋敬一『琉球列島維管束植物集覧 (改訂版)』(1997 年 九州大学出版会)も沖縄県と鹿児島県の奄美地域とを取り扱っている。シノニムなどの文献引用も多くなされ、有益な本である。修士論文で市販はされていないが、志内利明『トカラ列島の植物相』(1995 年 鹿児島大学理学研究科修士論文)はトカラ列島の現在の所は最もまとまった植物誌である。

鹿児島県の各地域の島ごとには各種の目録がまとめられていて、それは膨大な数になる。そのほとんどは簡単な植物相の紹介と植物目録である。それらに関しては金井弘夫『日本植物分類学文献総目録』(1994 年)の地域編(鹿児島)に 1993 年までの所はまとめられている。また『鹿児島県立博物館自然調査事業報告書 南薩の自然』(1994 年)、『北薩の自然』(1995 年)、『奄美の自然』(1996 年)、『霧島山系の自然』(1997 年)、『熊毛の自然』(1998 年)等には地域植物相に関する各種文献が引用されているから、それらを参照されるとよいが入手が困難である。いくつかの郷土史関係の出版物には対象地域の植物相が記述されている。しかし植物相の簡単な紹介と植物目録ではあっても、内容が植物誌のレベルには到達していないものがほとんどである。

山下 弘『奄美の野生蘭』(1991 年 自費出版)をはじめ川原勝征『霧島の花』(1998 年 南方新社)、片野田逸朗『琉球弧・野山の花 from Amami』(1999 年 南方新社)など地方の植物の写真集や写真を主体とした地域の植物についての解説書は数冊出版されているが、植物誌と言えるほどのものではない。九州南部から南西諸島地域のまとまった植物誌の編纂が要望されているが、温帯系の植物群と熱帯系の植物群が交錯し、多くの固有種群を有するこの地域の植物誌が完成にいたるには、さらなる研究の進展が必要とされている。

## (B, C) 標本館(室)や関連研究機関

鹿児島県には国際的に登録された 2 つの標本館(室)がある。鹿児島大学農学部さく葉室(KAG)と理学部植物標本室(KAGS)であるが、2001 年に鹿児島大学に総合研究博物館が設置され、現在それら標本室の整備統合作業が進行中である。旧農学部さく葉室の移転と一応の虫害除去作業はほぼ終了し、閲覧が可能な状態にまでなっている。この約 15 万点の標本は、戦前の高等農林時代に収集された川越重紀(高等農林専門学校教授)によるおもに鹿児島県や北米大陸で採集された標本、内藤 喬教授の採集によるおもに鹿児島県産の標本、それに戦前に標本交換で大量に入手したフィリピン産の標本(この中には多数の副基準標本が含まれる

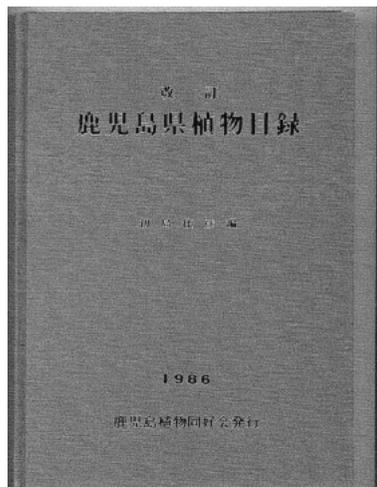


図 131. 改訂 鹿児島県植物目録

と推定されるが、実態は不明)と、戦後に初島住彦教授や迫 静男講師らによって収集された鹿児島県のみでなく九州各地から南西諸島やパターン諸島産の標本、それに交換で入手した小笠原や日本各地、ヒマラヤ産の標本等が所蔵されている。標本は初島住彦博士の見解できちんと整理されているので、博士がどのような分類学的見解であったかが良く理解できるものになっている。しかし基準標本の選定はそれほどきちんとはしていない。この農学部さく葉室を長年に渡って維持管理されてきた迫 静男先生が定年退官の直前の 1989 年春にお亡くなりになって以来、その収集整理作業の活動は停止し、博物館に移管される時点ではひどい虫害を被っていた。理学部標本室は私が 1988 年に鹿児島に赴任してから収集が始まった新しいもので、まだ標本の整理が進んでいなくて、一般利用が困難な状況であるが、鹿児島県下の標本はトカラ列島地域の約 1 万点の標本を含む、総計約 2 万点が所蔵されている。しかし私が 2001 年に停年退官して以来、鹿児島大学には博物館を除いては植物分類の研究組織はなくなり、現在の所は古典的な分類学に関しては学生の教育研究指導も行われてはいない。鹿児島大学総合研究博物館には 2 名の植物関係のスタッフ(落合雪野、福永しげ子)がいるので、植物分類学分野の標本収集と研究の今後の発展を期待したい。

鹿児島県には 70 をこえる博物館や博物館相当施設があるが、その中で植物標本を系統的に収集しているのは鹿児島県立博物館のみで、数万点の鹿児島県産標本が集積されている。しかし博物館の学芸員が中・高校教員との交流人事で 3~4 年の任期で入れ替わるので、研究の蓄積が困難で、十分な研究成果をあげるにはいたっていない。

鹿児島県には教育学部付属の野外教育研究施設(鹿児島吉野・鹿児島大学)、熱帯植物園(鹿児島与次郎・長島商事)、亜熱帯植物研究施設(指宿市・鹿児島大学)、フラワーパーク(山川町・県関係施設)や、それら以外にも各種の公立や私立の植物園があるが、残念なことに研究活動を系統的に展開しているものはないし、まとまった研究用の植物標本の集積もなされていない。また薩摩藩時代に設立された伝統ある植物研究のセンターであった「薬草園」(吉野・指宿・佐多の 3ヶ所)も、佐多にあった薬草園のみが残存し、現在までリュウガンやレイシの栽培が続けられているが、研究活動はなされていない。

#### (D) レッドデータ関係の調査

鹿児島県は植物の絶滅危惧種が日本のなかでは群を抜いて多い。絶滅したとされる種も 4 種も記録され、それらは全て奄美群島地域に生育した種である。『環境庁レッドデータブック 2000』によって絶滅危惧 I, II 類を合計すると北海道は 374 種類、沖縄が 362 種類、長野県は 292 種類であるが、鹿児島は 419 種類にのぼる(環境庁では鹿児島にはないとされても、実際は分布する種を加えてあるので、数字は少し違っている)。九州では鹿児島について危惧種の多い宮崎は 279 種類が記録されている。絶滅の危険性の著しく高い危惧 I 類だけを取り出してみると鹿児島は 266 種類、ついで沖縄の 229 種類、北海道の 214 種類と続く。日本列島の中で九州南部から南西諸島地域は絶滅種や絶滅危惧種がもっとも集中している地域なのである。その鹿児島で県レベルの絶滅危惧種の調査が開始されたのは 1999 年になってからで、これは九州沖縄地域では最も遅れて始まった危惧種の調査である。現地調査とともに昨年 6 月に 80 年以上に渡り蓄積されてきた鹿児島大学農学部さく葉室の標本調査が開始され、1 年あまりたったこの 8 月にやっとこの調査が完了した。資料を取りまとめ、本年度中に報告書が完成される予定であるが、期限内での完成は相当厳しい状況にある。しかし、ごく近い将来、分布の南限種や北限種を含めたレッドデータがまとめられる予定である。植物関係では気候温暖化で地域絶滅の可能性が高い南限種や個体群の小さい北限種を全て包含するという構想であるので、レッドデータに記録される総種数は 2,000 種近くになる予定である。

残念なことに九州では環境省からの出向職員が自然保護関係の課長に座っている県である長崎県(1998 年に開始)と鹿児島県の調査(1999 年に開始)が、九州沖縄地域では最も遅く始まったという事態になっている。また鹿児島県は種数の多さと、地域の広さと、調査期間の短さから、調査は完全なものではなく、今後に残される問題は多いと考えられている。

#### (E) 植生関係

宮脇 昭による植生関係の報告『日本植生誌』や大野照文による地方的な植物群落の記載(代表的には『鹿児島県立博物館自然調査事業報告書』)に記録されているが、それらのまとめは県レッドデータで取りまとめられる予定である。

(堀田 満: 〒890-0081 鹿児島市唐湊 4-6-18 西南日本植物情報研究所 TEL: 099-812-2005 FAX: 099-812-2005 E-mail: Mitsuru.Hotta@mb.9.seikyuo.ne.jp; hotta@k-kentan.ac.jp)

## 47. 沖縄県

横田昌嗣

## (A) 植物誌

沖縄県は、東西 1,000 km、南北 400 km の広大な海域に孤状に点在する 160 以上の島々から構成されている。沖縄県は面積的には日本全体の 1% に満たないが、気候・地史・地形・地質・地理的位置等の条件が島ごとに異なるため、多様性・固有性・遺存性の高い植物相を持つことで知られている。植物相の上からは沖縄県は、鹿児島県のトカラ列島や奄美諸島とともに琉球と呼ばれることが多い。

沖縄県あるいは琉球に関する植物誌としては、初島住彦『琉球植物誌』（1971 年 沖縄生物教育研究会 絶版）、初島住彦『琉球植物誌（追加・訂正）』（1975 年 沖縄生物教育研究会）、E. H. Walker『Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands』（1976 年 Smithsonian Institution Press 絶版）がある。

沖縄県や琉球を対象とした植物誌あるいは植物目録として、F. B. Forbes and W. B. Hemsley『An enumeration of all the plants known from China proper, Formosa, Hainan, Corea, the Luchu Archipelago, and the Island of Hongkong』（1886-1905 年 『J. Linn. Soc. Bot.』第 23, 26, 36 巻）、T. Ito and J. Matsumura『Tentamen Florae Lutchuensis』（1899 年 『J. Sci. Coll. Imp. Univ. Tokyo』第 12 巻 未完）、H. Kuroiwa『A list of phanerogams collected in the southern part of Isl. Okinawa, one of the Loochoo chain』（1900 年 『Bot. Mag. Tokyo』第 14 巻）、坂口總一郎『沖縄植物総目録』（1938 年 石塚書店 絶版）、G. Masamune『Enumeratio Tracheophytarum Ryukyu Insularum』（1951-1964 年 『Sci. Rep. Kanazawa Univ.』第 1-9 巻）、園原咲也・多和田眞淳・天野鉄夫・E. H. Walker『Flora of Okinawa 沖縄植物誌』（1952 年 United States Civil Administration of the Ryukyu Islands 絶版）、高嶺英言『八重山群島植物誌』（1952 年 琉球林業試験場集報第 1 号 絶版）、初島住彦・天野鉄夫『沖縄植物目録』（1958 年 琉球大学普及叢書第 15 号 絶版）、初島住彦・天野鉄夫『沖縄植物目録』（1959 年 沖縄生物教育研究会 絶版）、初島住彦・天野鉄夫『改訂 沖縄植物目録』（1967 年 沖縄生物教育研究会 絶版）、初島住彦・天野鉄夫『琉球植物目録』（1977 年 でいご出版社）、初島住彦・天野鉄夫『増補訂正 琉球植物目録』（1994 年 沖縄生物学会）、鳥袋敬一『琉球列島維管束植物集覧』（1990 年 ひるぎ社 絶版）、鳥袋敬一『琉球列島維管束植物集覧 改訂版』（1997 年 九州大学出版会）等がある。なお、初島住彦・天野鉄夫『増補訂正 琉球植物目録』の CD-ROM 版が沖縄生物学会から発行される予定である。

この他に図鑑あるいは植物誌としては、園原咲也『琉球有用樹木誌』（1952 年 琉球林業試験場集報第 2 号 絶版）、E. H. Walker『Important Trees of the Ryukyu Islands 琉球重要樹木誌』（1954 年 United States Civil Administration of the Ryukyu Islands 絶版）、L. A. Garay and H. R. Sweet『Orchids of Southern Ryukyu Islands』（1974 年 Botanical Museum, Harvard University 絶版）、多和田眞淳・高良拓夫『沖縄の山野の花』（1975 年 風土記社 絶版）、天野鉄夫『琉球列島植物方言集』（1979 年 新星図書 絶版）、初島住彦・中島邦雄『琉球の植物』（1979 年 講談社 絶版）、池原直樹『沖縄植物野外活用図鑑 全 10 巻』（1979-1989 年 新星図書 一部絶版）、仲真良英『沖縄教材植物図鑑 路傍の草木』（1980 年 沖縄時出版）、天野鉄夫『琉球列島有用樹木誌』（1982 年 琉球列島有用樹木誌刊行会 絶版）、澤岷安喜『木の実・木のたね』（1983 年 新星図書 絶版）、環境庁自然保護局（編）『国立、国定公園特別地域内指定植物図鑑 亜熱帯編』（1986 年 環境庁自然保護局）、宮城康一・新城和治『沖縄のみじかな帰化植物』（1987 年 沖縄県立博物館）、宇井晋介・亀崎直樹『沖縄海中生物図鑑 第 6 巻 海藻・海浜植物』（1988 年 新星図書）、天野鉄夫『図鑑 琉球列島有用樹木誌』（1989 年 沖縄出版 絶版）、いじゅの会『親子で見る沖縄の身近な植

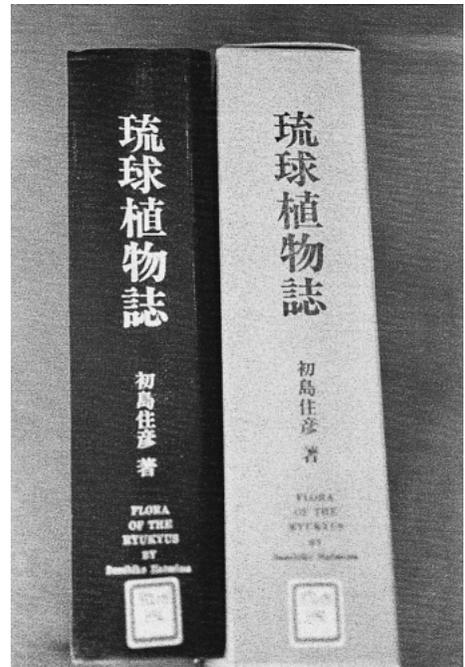


図 132. 琉球植物誌

物図鑑』(1990年 沖縄出版)、嘉弥真国男『沖縄の蜜源植物』(2002年 沖縄タイムス社)等がある。

なお、大井次三郎『日本植物誌 顕花篇 改訂増補新版』(1978年 至文堂)までは琉球と記述されていた地名が、大井次三郎、北川政夫(改訂)『新日本植物誌 顕花篇 改訂版』(1992年 至文堂)では機械的に沖縄県に置き換えられたため、鹿児島県の奄美諸島には産するが沖縄県には産しない植物(例えば、ツクシタチドコロやシマサルズベリ等)が沖縄県に産するように記載されている場合があるが、これは誤りである。また逆に沖縄県の他にトカラ列島や奄美諸島にも産するにもかかわらず、沖縄県としてまとめられている例が数多く見受けられ、分布情報を利用する際には注意が必要である。

県内各地域の植物相や植生に関する報告が掲載された文献の例としては、下記があげられる(北から南へと島嶼ごとに配列した)。沖縄県文化振興会公文書管理部(編)『沖縄県史 資料編13 硫黄島』(2002年 沖縄県教育委員会)、仲田清英(編)『伊平屋列島文化史』(1974年 私家版)、伊是名村史編集委員会(編)『伊是名村史 下巻』(1989年 伊是名村)、仲田栄二『ふるさとの草木 伊是名諸島の植物図鑑』(1995年 伊是名村教育委員会)、新里孝和・嵩原建二『伊江島の植物図鑑』(2002年 伊江村教育委員会)、『大宜味村文化財調査報告書第4集 大宜味村の自然 大宜味村動植物調査報告書』(1995年 大宜味村教育委員会)、本部町立博物館(編)『本部町動植物総合調査報告書 植物相』(1996年 本部町教育委員会)、伊波善勇『恩納村の植物』(1990年 恩納村教育委員会)、伊波善勇『与勝の植物』(1988年 沖縄県立与勝高等学校)、宮脇昭・大野啓一・鈴木伸一・仲田栄二『北谷町の植生』(1986年 北谷町)、『沖縄市の自然 身近な動植物』(1990年 沖縄市郷土博物館)、西原町史編集委員会(編)『西原町史 第4巻 資料編3 西原の民俗』(1989年 西原町)、佐敷町史編集委員会(編)『佐敷町史3 自然』(1989年 佐敷町)、南風原町史編集委員会(編)『南風原町史第2巻 自然・地理資料編』(1997年 南風原町)、仲真良英『津堅島植物目録』(1978年 私家版)、北大東村誌編集委員会(編)『北大東村誌』(1986年 北大東村)、南大東村誌編集委員会(編)『南大東村誌改訂版』(1990年 南大東村)、天野鉄夫『粟国島植物目録』(1981年 粟国村教育委員会)、渡名喜村(編)『渡名喜村史 上巻』(1983年 渡名喜村)、いらぶの自然編集委員会(編)『いらぶの自然 植物編』(1995年 伊良部町)、滝口 宏(編)『沖縄八重山』(1960年 校倉書房 絶版)、渋谷加奈子『与那国島の植物』(1995年 与那国町教育委員会)、宮脇 昭・鈴木邦雄・藤原一絵・宮城康一『観光資源調査報告6 与那国島の植生 自然資源の保全と観光利用に関する植生学的研究』(1978年 観光資源保護財団)、藤本義昭『琉球・八重山群島、与那国島の生物(1)』(1972年 甲南出版社 絶版)、琉球大学尖閣列島学術調査団(編)『尖閣列島学術調査報告』(1971年 琉球大学)。

沖縄の植物相の研究史は、初島住彦『琉球植物誌(追加・訂正)』、天野鉄夫『沖縄県史5 文化1 各論編4』の第8章(1975年 沖縄県教育委員会・国書刊行会)、高良鉄夫・天野鉄夫『沖縄動植物研究史』(1977年 沖縄動植物研究史刊行会 絶版)に詳しく解説されており、宮脇 昭(編)『日本植生誌 第10巻 沖縄・小笠原』(1989年 至文堂)にも多数の文献が紹介されている。沖縄県立図書館の天野鉄夫文庫には、天野鉄夫収集による数多くの文献・書簡・新聞切り抜き等の資料が所蔵されており、沖縄の戦前の資料の多くが戦災で消失している中で貴重である。その収蔵品は、『沖縄県立図書館特殊文庫目録 郷土資料編』(1997年 ひるぎ社)や沖縄県立図書館のホームページで検索でき、閲覧することができる。

一般向けの図書としては、沖縄生物教育研究会(編)『生態写真集 沖縄の生物』(1976年 新星図書 絶版)、木崎甲子郎(編)『琉球の自然史』(1980年 築地書館 絶版)、沖縄地学会(編)『日曜日地学14 沖縄の島じまをめぐって』(1982年 築地書館 絶版)、日本生物教育会沖縄大会沖縄の生物編集委員会(編)『全国大会記念誌 沖縄の生物』(1984年 沖縄生物教育研究会 絶版)、新納義馬『南の島の植物』(1986年 ポプラ社)、池原貞雄・加藤祐三(編)『ニライ・カナイの島じま、沖縄の自然はいま』(1988年 築地書館 絶版)、池原貞雄・諸喜田茂充(編)『琉球の清流』(1994年 沖縄出版)、日本野鳥の会やんばる支部(編)『やんばるの森、輝く沖縄の生き物たち』(1994年 東洋館出版社)、池原貞雄・加藤祐三(編)『沖縄の自然を知る』(1997年 築地書館)等があり、植物相や植生に関する解説が多数含まれている。またこれら以外に、県内の各島嶼の植物や自然を紹介した写真集やガイドブックが多数発行されている。

## (B) 研究機関

琉球大学理学部、教育学部、農学部、熱帯生物圏研究センターでは沖縄県の植物相や植生に関する研究が行われており、それらの紀要、およびその前身である農家政学部、農家政工学部、文理学部、理工学部の紀要には、植生や植物相に関する報告が掲載されている。琉球大学理学部海洋自然科学科に「沖縄生物学会」の事務局があり、琉球列島の動植物を対象とした『沖縄生物学会誌』が発行されており、2002年で40号を数える。

琉球大学理学部海洋自然科学科イリオモテヤマネコ生態実験研究室からは『沖縄島嶼研究』が発行されており、1998年までに16号が発行されている。イリオモテヤマネコ関係の研究が主体をなすが、沖縄県の植物相や植生に関する研究も掲載されている。沖縄国際大学南島文化研究所からは『南島文化』と『地域研究シリーズ報告書』が発行されており、沖縄県の島嶼を対象にした自然・人文・社会に関する報告が掲載され、植生に関する報告も見受けられる。鹿児島短期大学南日本文化研究所からは『南日本文化』が発行されており、奄美諸島の植生や植物相に関する報告を多く含むが、沖縄県に関する報告も掲載されている。

自然史の分野を対象とした博物館には、沖縄県立博物館や平良市総合博物館等があり、紀要や報告書が発行されており、植物相や植生に関する論文も掲載されている。熱帯・亜熱帯都市緑化植物園からは『熱帯植物調査研究年報』が発行され、沖縄県の絶滅危惧植物の生活史や人工増殖に関する調査結果が掲載されている。沖縄県林業試験場（1971年までは琉球林業試験場と称した）からは『沖縄県林業試験場研究報告』が発行されており、植物相や森林植生に関する報告が掲載されている。

「沖縄博物学会」からは『沖縄博物学会会報』の第1号が1935年に発行され、その中には沖縄県の植物相に関する報告が掲載されているが、この団体は現存しない。「沖縄生物教育研究会」からは『沖縄生物教育研究会誌』（1970年までは『沖生教研会誌』と称した）が発行されており、植物に関する観察記録や野外観察会の報告が掲載されている。「琉球大学生物クラブ」からは『琉球大学生物クラブ誌』が発行されていたが、1973年に第12巻第1号が発行された後は発行されていない。「鹿児島植物同好会」からは会誌『鹿児島島の植物』が発行されているが、沖縄県の植物相に関しても多数の報告が掲載されている。「奄美の自然を考える会」からは、奄美諸島の動植物を中心課題にした会誌『きよらじま』が発行されているが、沖縄県の植物に関する観察記録の報告が掲載されることがある。

### (C) 標本庫

琉球大学理学部海洋自然科学科生物系の標本庫（RYU）には、約6万5千点の標本があり、初島住彦、天野鉄夫、古瀬義、新納義馬、玉城松栄、島袋敬一、宮城康一、香村真徳らのコレクションが納められている。琉球大学教育学部生物学教室の標本庫（URO）には、約1万点の標本があり、新納義馬、新城和治、立石庸一らのコレクションが納められている。これらはいずれも琉球産を中心とした維管束植物と藻類の標本である。RYUには、初島住彦『琉球植物誌（追加・訂正）』やE. H. Walker『Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands』で用いられた証拠標本・引用標本・タイプ標本が多数含まれている。琉球大学資料館には約3千点の標本が納められている。RYUとUROの標本に関しては、事前に連絡すれば整理済みの標本に関しては閲覧や貸し出しが可能である。

### (D) レッドデータブック

1996年には沖縄県自然保護課から動植物を対象として、県版レッドデータブック『沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータおきなわ』が発行された。2003年には改訂版が発行される予定で、現在準備が進められている。沖縄県の絶滅危惧植物に関しては、1998年発行の『プランタ』第55号「特集：沖縄の植物」に解説がある。沖縄県の市町村版レッドデータブックは、現在のところ発行されていない。水産庁版レッドデータブック『日本の希少な野生水生生物に関するデータブック』（1998年 日本水産資源保護協会）には、維管束植物は含まれていないが、沖縄県の淡水産または海産の数種の藻類が掲載されている。

### (E) 植物群落

宮脇 昭（編）『日本植生誌 第10巻 沖縄・小笠原』には、県内で認められる植物群落の詳細な解説がある。1979年と1988年に発表された環境庁特定植物群落調査により、県内の重要な植物群落の記載と定期的な状況の把握がなされている。沖縄県全域を対象とした植生図は、『天然記念物緊急調査 植生図・主要動

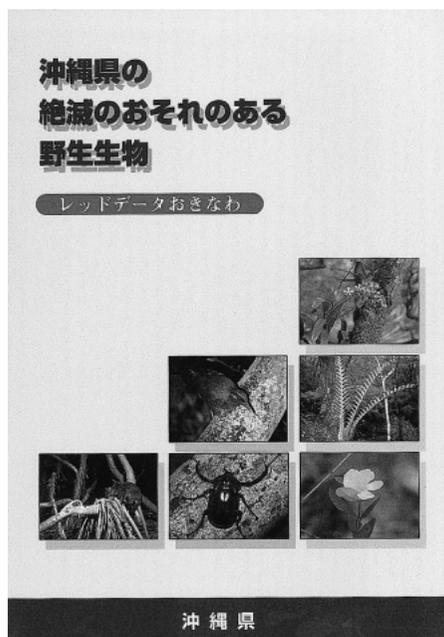


図 133. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物

植物地図 沖縄県』(1976 年 国土地理協会), 『第 3 回自然環境保全基礎調査(植生調査) 現存植生図 沖縄県』(1979-1985 年 環境庁 29 葉), 『沖縄大百科事典 全 4 巻』(1983 年 沖縄タイムス社), 宮脇昭(編) 『日本植生誌 第 10 巻 沖縄・小笠原』に掲載されている。

沖縄県教育庁からは県内の天然記念物の現状を調査した『天然記念物シリーズ』報告書がこれまで 39 号発行されている。そのうち、植生や植物相に関する報告が掲載されているものに、『塩川動態調査報告 I・II』(1975-1976 年), 『与那覇岳周辺のイタジイ林について』(1975 年), 『指定候補糸満市荒崎の岩礁海岸植物群落』(1975 年), 『慶佐次湾のヒルギ林緊急調査 I・II』(1976-1977 年), 『ケラマジカ実態調査報告書 II・III』(1977-1978 年), 『アサヒナキマダラセセリ調査報告』(1978 年), 『沖縄県洞穴実態調査報告書 I~III』(1978-1980 年), 『沖縄県社寺・御嶽林調査報告 I~IV』(1978-1981 年), 『西表島等天然記念物緊急調査 I~IV』(1983-1985 年), 『国頭郡天然記念物緊急調査 II, 沖縄島国頭地域の現存植生図』(1987 年), 『国頭郡天然記念物緊急調査 III』(1988 年), 『ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書』(1992 年), 『ケラマジカ保護対策緊急調査報告書』(1996 年) 等がある。

その他に県内の天然記念物や史跡に関しては、『名護市天然記念物調査報告 2 名護市の御嶽林』(1979 年 名護市教育委員会), 『沖縄県天然記念物万座毛石灰岩植物群落調査報告』(1985 年 恩納村教育委員会), 『国指定史跡斎場御嶽整備事業報告書(発掘調査・資料編)』(1999 年 知念村教育委員会), 『大東島天然記念物特別調査報告』(1973 年 文化庁), 『国指定天然記念物大池のオヒルギ群落 花粉分析および植生調査報告』(1993 年 南大東村教育委員会), 『天然記念物ケラマジカ調査報告書(1) 屋嘉比島のケラマジカ』(1976 年 座間味村教育委員会), 『石垣市文化財調査報告書第 11 号 荒川のカンヒザクラ保護増殖事業報告書』(1990 年 石垣市教育委員会), 『ヨナグニサン保護増殖検証事業報告書』(1989 年 ヨナグニサンを守る会) 等の報告書があり、植生や植物相に関する報告が掲載されている。

沖縄県自然保護課からは県内に生息するノグチゲラ等の特殊鳥類の現状を調査した『特殊鳥類等生息環境調査』の報告書がこれまでに 11 号発行されており、植生や植物相に関する報告も掲載されている。また、自然保護課からはこの他に、『沖縄海岸国立公園拡張候補地学術調査報告書 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島』(1974 年), 『久米島国立自然公園候補地学術調査報告』(1974 年), 『沖縄県立自然公園候補地学術調査報告 宮古群島』(1975 年), 『沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告』シリーズの『東平安名崎・狩俣御嶽』(1979 年), 『伊是名城跡・大浦川のマングロブ林・億首川のマングロブ林』(1980 年), 『於茂登岳及びその周辺地域』(1981 年), 『タナガームイとその周辺』(1982 年), 『知花グスク・斎場御嶽とその周辺地域』(1982 年) 等が発行されており、植生や植物相に関する多数の報告が掲載されている。

(横田昌嗣: 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 琉球大学理学部海洋自然科学科 TEL: 098-895-8544 FAX: 098-895-8576 E-mail: yokota@sci.u-ryukyu.ac.jp)